

インフィニット・スト  
ラトス・アライズ—  
Dominater of  
Battlefield—

天津毬

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

「——宇宙そらを見てみたいんです。いつか。」

少女——篠ノ之箒は、空を埋め尽くす小惑星帯アステロイドベルトを指差して口にした。

現実と分岐した並行世界の延長線上にある時代。？小惑星群衝突と全面核戦争による食糧・エネルギー資源の慢性的な不足。

巨大海洋プラットフォーム船《コロニア》によって外洋に退避し、厄災から逃れた権力者達は【白騎士事件】を起こし、IS《インフィニット・ストラトス》による武力を用いた世界統治を行い、荒廃した地上の再興を目指した。

しかし近視眼的な開発により無秩序に拡大する極地。止まらない放射能汚染。増え続ける餓死者。広がり続ける地上と外洋権力者達の溝。

二極化した享樂と貧困は救いようのない諦観と憎悪を醸成し、権力者達は徐々にその統治能力を失っていった。

？ 秩序の崩壊により重要度を増した軍隊は高度に機械化され、その結果として地上に残っていた有力国家機関と企業は幾つかのは官民合同機関を創設し、やがて、最も力を持った6つの国家群は遂に権力者達を見限り、歴史上最大のクーデターを起こす。

？ 【再構築戦争】—— コロニアの諸弾圧に対する報復攻撃で始まったこの戦争は、わずか半年で地上諸国の勝利に終わった。？ とりわけ国家群の大きな戦力となったのが、新物質"タキオン粒子"を使用した50機足らずの新型兵器。

【インフィニット・ストラトス・アライズ】であった。

？ ∴ 戦争終結後、地上諸国自らの手で、復興は始まっていた。

しかしかつての栄華を取り戻せば取り戻す程、地上諸国間の溝は深まり、かつての世界大戦前夜という不安定な世界情勢を産み出した。

経済競争、政治的駆け引き、民族主義、歴史問題、代理戦争—— 世界は様々な問題を内包しつつも表面上での平和を保っていた。

? 戦争終結から10年後。

6 大国家のひとつ——日本帝国。  
物語は、そこから始まる…

# 目次

Prologue	
#00 Rade on Tokyo	
(東京襲撃)	1
#00.1 Selected Gi	1
rl (選ばれた少女)	31
設定解説 (仮)	54
sl. 0: 学園編	
#01 入学式当日	76
#02 鍛錬	110
#03 一難/Powerful	148
nder the edge (縁の下の力持ち)	148
#04 決定戦当日/Dirty h	171
oly sword (穢れた聖剣)	171
#05 Parent Wolf a	206
nd Puppy (親狼と仔犬)	206
#06 クラス代表決定	239
#07 セカンド幼馴染	286
#08 Unknown Reader	335
(所属不明襲撃者)	335
#09 Engaged ora	383
waltz (交戦開始あるいは円舞曲)	383

f	#	f	#
(機械と狼)	11	(機械と狼)	10
II	Ghost	I	Ghost
	and		and
	Wol		Wol
464	1	426	1

## P r o l o g u e

## #00 R a d e o n T o k y o (東京襲撃)

——西暦2001年。

7度に渡る小惑星の衝突。

天変地異。

全面核戦争。

国連の海洋移転。

かつて世界は混迷を極めていた。

：荒れ果てた地上から運良く逃げ出せていた一部の人類は、全長7km×21kmもの巨大海洋プラットフォーム船《コロニア》に移住し、地上復興と秩序再構の為に、ある茶番を演じてみせた。

：6000発のミサイルによる、日本・アメリカ・ヨーロッパ諸国の地上人口密集地への空爆。

そしてそれをたった3機の人型兵器が全てのミサイルを撃墜し、その鹵獲を目指した

通常兵器群を悉く殲滅する。

——白騎士事件。

《『コロナ』の天才科学者が開発した新概念兵器、インフィニット・ストラトスはその圧倒的な性能差を見せつけ、それは、『コロナ主導の節度ある地上復興』という名の武力に物を言わせた独善的統治を助長するには充分だった。

そうとも知らない情弱で無垢な地上の人々はISを恐れ、あるいは崇めさえし、ただひたすらに飼われることによる安寧を享受していた。

：しかし、10年も時を経れば時代は変わる。  
進まぬ復興。

困窮する経済と生活。

拡大する放射能汚染。

ISによる弾圧。

『『コロナ』主導の節度ある地上復興』という名の、『コロナを維持する資源基地化』という醜悪な実態が白日の元に晒される。

そしてその事実が知れ渡るに比例して、コロナによる、ISを背景にした武力支配は強さを増していく。

加速する世界の破綻は、ついにはコロナすらをも存亡の危機に陥るに至り、地上諸



国の人々は決意した。

——自らの手で復興する為に、コロナを破壊しなければ……と。

そうして、地上において実質的の最高権力組織となっていた6つの国家組織が、コロナに対し全面戦争を開始した。

——再構築戦争。

のちにそう呼ばれる事となったこの戦争には、6大国家軍が投入した最新鋭兵器が主力となっていた。

——「インファイニット・ストラトス・アライズ」。

その、I Sの絶対防御を解析して発見された「タキオン粒子」技術などの最新技術を盛り込んだわずか50機にも満たない新兵器によって、1601機のI Sとコロナ軍はなすすべもなく壊滅し、勃発からわずか半年足らず程で、6大国家軍の圧倒的勝利で終結。

これにより、地上諸国による復興・統治が再開された。

国家による新たな統治が開始されてから10年、白騎士事件から21年後の現在。

世界は様々な問題を内包しつつも表面上での安定を保っていた。

——西暦2022年2月26日

日本帝国第一帝都東京都

季節外れの吹雪で白く煙る東京。

前日には交通機関の運転に支障が出るのだの、デート日和だのと話題が持ち上がり、日もまた人が溢れかえる筈だった場所に人影は一切なく、景色に不釣り合いな砲声とジェット音が木霊していた。

路上にあるのは打ち捨てられた多数の自家用車と破壊された警察車両、そしてその周辺で辺りを警戒する I S 部隊。

——白昼堂々、突如として都内に湧いた武装勢力によって、都内は混乱状態にあつた。

一般市民は商業施設や冷戦時に建てられた防空壕に退避を余儀なくされている。

混乱の始まりと同時にバスや電車などの公共交通機関は停止し、路上は吹雪で歩いて避難する事もままならない。

テロか、クーデターか、そのいずれにしろ、日本の首都である東京で戦闘が発生し、人が死んでいる——その事実には変わりはない。

∴東京は、戦場と化していた——。

総務省合同庁舎屋上ヘリポート

そこに、この戦場を支配する、翡翠色の人型兵器——デュノア製インフィニット・ストラトス《ラファールリヴァイヴ》が鎮座していた。

「ハイパーセンサーにて目標を捕捉。警視庁の打鉄よ！」  
IS部隊

武装グループを率いる女が叫ぶ。

彼女の網膜に投影された戦況ウインドウには、虎ノ門方面より桜田通りを進軍してくる警視庁のIS部隊の様子が映されていた。

——既にこちらは霞ヶ関を制圧している。市ヶ谷や皇居北方面の制圧こそ叶っていないが、頑丈さしか取り柄のない、さらには対ゲリラコマンド用の小火器しか持たない打鉄など知れている。

（恐らく奴らの狙いはこの膠着した状況を打破する為に突入し直接制圧……と見せかけて、無事制圧部隊を送り込む為の陽動……。あるいはこちらの通信網破壊……でしょうね。）  
「どちらにしろ、ここに辿り着かせる訳には行かない！正面から阻止するぞ！」

連鎖する了解の声。そして同時に響く、味方ラファールが持つアサルトライフルの砲声。

それを聞き女は両腕に構えたアサルトライフルのグリップを強く握り締める。

そこには、IS乗りの多くが陥る、『男より優れているという陶醉による女尊男卑』と

いったモノなどは無く——自ら信じる正義に燃える瞳をしていた。

「体制の下僕イヌなんか屈しない……絶対!!」

憎悪する様に——吐き捨てた。

∴武装グループは、難民の集まりだった。

国外、国内を問わず、関東に流れ着いた避難民。

彼女もその一人であり、また孤児だった。

地方の難民キャンプに押し込まれ、国家は都市の再興に注力するあまり、地方に取り残された人々の衛生環境が破滅的状态に陥つていても、見て見ぬフリをしている——

——その現状に憤り、彼女達はI Sを用いたテロを起こしたのだ。

自分達の現状を訴える手段を捨て、暴力に走ったとしても。

——彼女らには、現体制を耐え難い元凶と断じたのだから。

『敵I S、3機目を撃破。EOSにすら遅れを取るとは。∴警視庁め、この程度でよくI S乗りを名乗れたもんだ』

『油断するな。突入戦力がこれだけでも思えない。』

目下では、味方EOS部隊のリーダー格の男が次の一機を撃破しながら部下を宥め、周囲を睨みつけて警戒していた。

『おい、なんだありゃ』

「なに? どうした?」

『こちら赤坂見附。三班のジャンだ。四ツ谷駅方面から高速接近する機影を確認した。ISか? いや、これは……ッ、そんなッ、まさか——』

ジャンという男からの無線が途絶する。

直後——赤坂見附方面で爆炎が走る。

轟音——それと同時に、同地点を制圧していた味方部隊の反応がロストした。

そしてそこに——敵味方識別不明機新たにアンノウンが現れ、

「くそッ——!」

無線を切り、飛来する深緑色の機影が吹雪の向こうに——彼女にも見えた。

間違いない。

アレは——

「アライズ——!!」

絶句する。

どうやって現れたのか。

…ハイパーセンサーにも引ッ掛からなかった。

…仮にこの吹雪の中でも東京都心部の索敵程度は出来る筈。

…なのに、味方が撃破されるまで映りもしなかった。

何故、何故、何故……！

いやそもそも、アライズという核兵器の代替を成せる戦略兵器を投入して来た事に衝撃を覚えたのだ。

女の混乱する思考の中、

『変わらん……お前等も。』

—— 死神が憐れむ様に笑う、声を聴いた。



—— 3分前

迎賓館赤坂離宮直下・政府専用地下列車基地

—— 冷戦期、旧ソ連軍の本土侵攻時に皇族を東京以西に退避させる為に建造された地下鉄道の中継駅のひとつ。

今では四ツ谷駅総武線ホームに延びる廃線がその名残りとなっている場所に、"ソレ"はいた。

深緑の国防色に身を包んだ、一目で重量型機体と分かる程の肉厚な脚部。

それでいながら、格闘戦を想定した取り回しの良い上半身と無骨さを宿した三眼の頭部。

右腕には4メートルはある40mmガトリング砲。

左腕には。パイルバンカー。

背中には、折り畳まれた二連装35mm機関砲と、120mm滑腔砲。

両肩には空対空ミサイルを搭載した、重武装全身装甲機体。

——21式機動挺身装備【日方風】。

…それがこの機体の名だった。

その内部に——耐G圧力ユニットで満たされた、ブ厚いフライトスーツを着た男が乗っていた。

「全く…因果なもんだな。<sup>2, 26事件の日</sup>この日付に、とは。」

呆れているのか、悲観しているのか——失笑しながら男は言う。

2・26事件——1936年2月26日に発生した、旧大日本帝国陸軍のクーデター未遂事件。

天皇親政を目指す皇道派青年将校らによって、霞ヶ関の主要各省庁が制圧された事件であり、奇しくも今回のテロで制圧されている場所も、ほぼかつての2・26事件の場所と一致していた。

——これを因果と言わずしてなんというのか。

『……作戦を再確認します。』

プシュ、という音とともに機体内部の空気がほぼ真空状態となり、首元のバイオデバイスが機体に直結される中、ヘルメット内のイヤホン型通信機がオペレーターの声を拾う。

『霞ヶ関・永田町を占拠する武装勢力を排除して下さい。敵部隊はコンペイトやEOSで構成された混成部隊ですが、練度は相当なものであるらしく、数回に渡る警視庁機動隊のIS部隊の突入も失敗に終わっています。』

脊髄に打ち込まれた直伝操作系統装置との接続が終わると、今度は耐Gジェルの注入が始まる。

オペレーターの話を聴きながら、機体情報の確認を開始する。

——コンペイトとは、かつてのインフィニット・ストラトスの俗称あるいはアライズとの差別化の為に作られた通称名の事を指す。

語源は英語で『競技用』を意味する『コンペイション』であり、再構築戦争後、スポーツ用品としてしか価値が無くなったISにはある意味相応しいとも取れる名称だった。

——そしてEOSとは、強化外骨格(Exotic—Orbit—Skelet on)の略称であり、1960年代の宇宙開発黎明期に誕生したパワードスーツである。第4次非核大戦時の主力兵器として、またある時は飛来した小惑星破碎用の決戦兵器



として等、激動の時代を経て主力兵器の座をI Sに明け渡したが、その意匠はアライズへと継承された。

現在でも土木作業機械や歩兵装備として運用されている等、主力兵器に準じる扱いを受けており、こうしてテロに使われる事も珍しくない。

『既に首相官邸、国会議事堂、総務省、財務省、警視庁やその他民間施設にて火災も確認されており、状況は一刻を争います。』

人肌に近い三十六度の固形ジェルが男の肢体に馴染むように耐Gスーツ内を満たすと、ようやくアライズは起動する。

『また、民間人の退避は確認済みです。射撃兵装の使用を許可します。』

心臓部たるタキオンエンジンが拡張領域の海の底で火を灯し、生成されたタキオン粒子によって莫大なエネルギーが即座に産まれ出でる。

《タキオン粒子崩壊熱発生。汚染線量は許容数値内。》

《劣化粒子混留汚染物質の発生確認できず。問題ありません。》

《システム系統の伝達、全て正常——オールグリーン！》

次々と作業スタッフの無線が飛び交う。

それは忙しく、鬼気迫る気迫に満ちた声音だ。

——無理もない。

タキオン粒子——別の呼び方をするならば対消滅粒子。

アライズの要たるソレは、その実、放射性物質であるウランやプルトニウムとは比較にならない程の致死性の環境汚染を引き起こす毒性物質でもあるのだ。

そんなモノを東京都内——日本最大の人口過密地域に搬入し、剩え起動させる。

——常人の感性からすれば、正気の沙汰ではない。

：だが、アライズという切り札を切り、戦場という盤面をひっくり返す快感を得た人間達からすれば、そんなことは些細な話なのだろう。

それらを背景を他所に、タキオン粒子が機体を巡る。

アクチュエータ複雑系を通して全身に行き渡り、やがての日方風のサードアイ・センサーがカツと輝きを放つ。

《21式機動挺身装備【日方風】》

——装甲耐久——

粒子装甲：100%

複合装甲：100%

機体骨格：異常なし

——兵装——

腕部兵装右：GAU—8EIIアヴェンジャー機関砲

腕部兵装左：81式Ⅲ型対戦車装甲穿孔槍

肩部兵装右：04式空対空誘導弾／AAM-5

肩部兵装左：04式空対空誘導弾／AAM-5

背部兵装右：GDF-001 35mm連装機関砲

背部兵装左：L44対戦車120mm滑腔砲

格納兵装右：03式近接長刀Ⅱ型

格納兵装左：81式Ⅲ型対戦車装甲穿孔槍

拡張領域内：IH1-F5-1T/AWタキオンエンジン

——システム起動。

「ッ——！」

同時に、男は頸から逆流する異物感に身悶える。

：内蔵を直接握られた様な。股ぐらを撫で回される様な。皮膚を引き裂かれる様な。

機体と肉体が同調する直前の不具合ギャップが肉体を駆け巡る。

そうして——脊椎に挿入されたナノマシンを介して、男の意識はアライズとリン

クする。

『トンネル隔壁ハッチを開けます。わかっているとは思いますが、戦場は東京都心です。  
アクチュアルモード  
 実戦形態は使用出来ません。』

セーフモード  
 演習形態で対応して下さい。』

「了解。」

——早い話が、微量とはいえ市街地を汚染する訳に行かないので、弱体化した状態で殲滅してこい。

…そういう話だった。

『ああ、申し遅れました。コールサイン：ライカン01さん。私、本作戦の補佐を致します——更織楯無と言います。以後お見知り置きを！』

「…おしゃべり娘という事は覚えておこう。」

頭に響くハイテンションボイスの娘を軽くいなして、男は言う。

——隔壁が開かれ、途端に吹雪が流れ入る。

地下の列車基地にカタパルトの類はない。

男は《日方風》に思考操作でコマンドを送る。

《日方風》は膝を折りながら、跳躍とともにメインブラスターに滾らせ、

「——ライカン01、出るぞー！」

プラズマジエットの奔流を解き放つ——！

超重量の鋼鉄を押し上げるアライズスの推力が即座に機体を上昇させると、ものの数秒で深緑の巨人は白雪の空に到達する。

男はスラスターを吹かして首謀者の元へ——上智大学真田堀運動場を突つ切り  
 弁慶濠沿いに突撃する。

——同時に、ハイパーセンサーが敵を捕捉する。

赤坂見附交差点に鎮座する——デュノア製EOS D<sub>u</sub>—E<sub>O</sub>S<sub>15</sub>が。

ホバーフロートで移動するその機体は、中世の女性が来ていたドレスのような、独特  
 の形状脚部が特徴だった。

『……これは……ッ』

敵がこちらに気づく。

「ライカン01、交戦開始」  
エンゲージ

冷徹に男は告げると、背部左方に搭載されていた120mm対戦車滑腔砲が展開され  
 る。

『そんなッ、』

——照準は敵EOSを捉えたまま。

『まさか——』

「ライカン01、FOX—2——！」

引き金を、引く——！

炸裂する薬室内の火薬。

撃ち出された120mm榴弾砲はそのまま敵EOSに喰らい付き——爆ぜる…

爆散する敵 Du—E—OS15を尻目に、男は永田町方面目掛けて加速する。

「——間も無く敵本隊と接敵します。敵コンペート8機確認。EOSが28機ですが、火力は無視できません。被弾にはくれぐれも注意してください」

「了解」

男は網膜投影された《日方風》の仮想視界越しに敵部隊を目視する。

連動する様に、日方風のサードアイセンサーが絞られる。

戦況は悪く、味方部隊——警視庁IS部隊は既に数を大きく減らしている。

一方で敵部隊はそのほとんどが健在。

…それにしても、と男は呆れて失笑する。

(ISによる体制打破…ねえ、白騎士事件の焼き増しでもするつもりだったのか?)

「——変わらんな…お前等も。」

何処か自虐を込めて、男は呟いた。

『陸自のアライズだと☒』

『アライズだ…!アライズが来た…!』

『怖気付くな!同じ人間だ!私達にだって殺れる筈だ!!』

驚愕、畏怖、慟哭——拾った敵の回線から、無線内容が木霊する。

『機種特定。米国製EOS、GB—E—X—S—R—1—1—7。それからデユノア製コンペイト  
《ラファールリヴァイヴ》の混成部隊です。』

…士気はそれなりでも、退く気はサラサラない——ならばやるべきことはただひとつ。

「——始めるか」

男は意識を集中し、プラズマスラスタを蒸す。

40トンを超える巨軀が時速1800kmに加速し、敵部隊を肉薄する。

——その、軌道上にあるラファールを、

「——ふんッ!!」

——左腕の81式III型対戦車穿孔銃バイルパンカーを纏った拳をもって、正面から殴り打つ。

撃ち出されたタングステン合金の鉄塊が、10mの均質圧延鋼装甲をすら貫く侵徹力をもって、ラファールを粉砕する…!!

機体フレームから原型が失われ、操縦者が血霧となつて飛び散る——それを尻目に、男は日方風を一気に急上昇させる。

「ふッ——!」

上半身のスラスタのみを蒸し、空中に弧を描き——視界が曇天から、敵部隊の

展開する地上へと切り替わる。

男は日方風を空中でバク転させ——全武装を展開。

右腕部のGAU—8EII40mmガトリングライフルが、

右背部のGDF—001 35mm連装機関砲が、

左背部のL44対戦車120mm滑腔砲が、

両肩部の04式空対空誘導弾が、

——一斉に、火を噴いた…！

ガトリングライフルと連装機関砲が、鋼鉄の雨礫となって叩きつけ、120mm滑腔砲と空対空誘導弾が次々と爆発を連鎖させる。

それで、手近なコンペイトISの一機と機動力に乏しいEOS複数機が一瞬にして蹂躪され、一斉射のもとに無へと帰した。

『!??識別不明機…!!』

楯無が叫ぶ。

「……………ッ！」

——瞬間。

男は尋常ならざる殺気を感じ、サイドスラスターを蒸す。

直後には亜音速で砲弾が駆け抜け、一瞬前まで《日方風》のいた空間を攫っていく…



!

——思わず溢れ出た冷汗が、額を伝う。

(…狙撃砲か。この視界でよくやる。)

『機種、特定しました。イギリス製EoS、BAEs<sup>ルー</sup>—EoS<sup>ウエイ</sup>44。狙撃特化型機です。』  
 楯無の報告に男は舌打ちする。

…イギリス機は過去の歴史的事情から、機動狙撃戦を重要視した機体だ。

それはもちろん、コンペートISもEoSも、アライズも——。  
 加えてこの吹雪。

視界は精々100メートル、にも関わらずBAEs<sup>ルー</sup>—EoS<sup>ウエイ</sup>44の反応はそれより先  
 ——それも吹雪によってハイパーセンサーの感度が低下しているのか、時折点滅し  
 ている——、つまり、BAEs<sup>ルー</sup>—EoS<sup>ウエイ</sup>44の操縦者はこの悪天候でリーダーも頼  
 らず精密狙撃してきたのだ。

相当の技量と経験を兼ね備えているという事が伺える猛者——。

「…良い腕だ——」

男はガトリングと連装機関砲を、空を舞うコンペートIS目掛けて斉射する。

「——殺すには、惜し過ぎる。」

独り言のように男は呟く。

吹雪のカーテンの向こうで光るマズルフラッシュ——それに反応すると同時に日方風のサイドブラスターが唸り、強烈なGとともに機体を無理やり横方向へ回避させる。

アライズのもつ驚異的な機動力、その根幹を成すものが、この横深瞬時加速だ。  
慣性制御  
PICに加えて耐Gジェルで操縦者を保護しなければ、即座に体が挽肉になってしまうだろう圧力負荷に晒される代わりに、光速反射運動すら可能とするソレは、アライズの機動戦の要だった。

そして、横深瞬時加速によってズレたロックオンカーソルを解除し——先のマズルフラッシュ  
火点 目掛けて手動制御で120m APFSDSを叩き込む……

同時にサイドスラスターを左右逆方向に向けて反転噴射——する視界の端で、APFSDSに食い破られ、吹雪を払いながらひしゃげて爆散するBAEs—EoS44  
クイックターン  
を見届けて——男は眼前の敵に狙いを定める。

残っていたのは3機とラファールと、2機のGB—ExS—R117。

男は迷う事なくスラスターを最大噴射し——瞬時加速。

時速4000km  
マツハ3を超え、ラファールに突貫しそして——右腕副腕機構が展開し、03式近接長刀Ⅱ型の刃がラファールを写す。

『ツッ回避……』

リーダー格の女が叫び、イグニッションリスト瞬時加速で無理矢理回避を試みる……！

——ザン斬。

——その回避行動と、日方風がラファールとの距離を3メートル圏内に狭めるのと同時に。

男は、日方風の右腕副腕機構が保持した近接長刀を横薙ぎ一閃する——！

『がッ——』

『敵ラファール、全滅。』

リーダー格の女が呻き声を上げ、衝撃でひしやげた機体フレームごと地上に叩きつけられたのと。

楯無の冷静な報告と。

もう2機のラファールがパイロットごと上下に引き裂かれたのは、同時だった。

男はそれを聞き流し——右腕副腕機構の近接長刀を地上目掛けて投擲。

刃は嫌な音を響かせ、残敵——G B——E x S——R 1 1 7 2機の片割れに突き刺

さる……！

——文字通り、串刺しだった。

胸部コアフレームからコックピットブロックを穿った近接長刀は、そのまま背中を貫きアスファルトに突き刺さる。

『敵機撃破、残り一機で…』

——楯無の声が響く。

『この野郎オ!』

同時に響く、怨嗟の慟哭。

最後の1機となったGB—ExS—R117が右腕に装備していた20mm連装ガトリングガンがけたたましい砲声を鳴らし、かき消すように左腕対艦バズーカを撃ち放つ。

『殺す!殺してやる!!』

頭に血が上ったように感情を露見させた声を上げながらも、その狙いはあまりに正確だ。

——男のガトリングライフルを敵は巧みにブースト機動のみで躲してみせ、ガトリングガンによるカウンターショットを繰り返し、誘導したところに対艦バズーカを撃ち込んでくる。

∴基本に忠実かつ、堅実な戦い方。

だが——地を這う存在であるEOSの身でありながら、事実上の軍用ISであるアライズの攻撃すら全て回避してみせる身のこなし。

∴なるほど、先程のBAEs—EOS44の兵士同様——おそらく激情型であ

れ、優秀な兵士なのだろう。

『そこだ——！』

日方風目掛けて対艦バズーカを撃ち込む……！

トマホーク巡航ミサイルを流用したそれは、日方風目掛けて吸い込まれていき——

——肉眼で視認できる程、高濃度粒子の壁によって阻まれた。

……爆散し、白煙を撒き散らす。

——パーティクルアーマー  
粒子装甲。

絶対防御を解析し、その過程で発見されたタキオン粒子によって再現された——

【第一装甲板としての絶対防御】。

横深瞬時移動と共に、アライズの中核を成す装備。

——パーティクルアーマー  
煙幕を突き破るように。

日方風は瞬時加速でGB—E×S—R—1—7と距離を詰める。

鉄の指に渾身の力が込められる。

搭乗者の呪詛で満ちた慟哭を男は耳にした。

恐怖に勝る憎悪と憤怒で狂い壊れる寸前の人間が見せる、生命や精神の価値を投げ捨

て、ひたすらに『殺す』為だけに生きる瞬間。

だが、男はそれを無視した。

聞く耳はあった。だが何よりも、男にも譲れぬものがある。

人が発するものとは思えない雄叫びをあげ、男は日方風の左腕を目標めがけて叩きつけた。

間を置かず、そこに装備されていたパイルバンカーが搭乗者の命ずるままに作動を果たす。

…さながら、狼が獲物へ牙を突き立てるように。

タングステンの鉄塊が、GB<sup>タイ</sup>—EX<sup>ソ</sup>S—R117<sup>ル</sup>の機体中枢へと、問答無用に突き込まれた——!!

激しい破壊音とともに、眼前の全てが混乱の中に飲み込まれる。

破壊の音と殺戮の音を響かせ—— GB<sup>タイ</sup>—EX<sup>ソ</sup>S—R117<sup>ル</sup>は沈黙した。

…以って、それは終わりを告げた。

「……見事だったぞ。貴様。」

パイルバンカーが突き立てられたGB<sup>タイ</sup>—EX<sup>ソ</sup>S—R117<sup>ル</sup>の崩壊したコックピット  
ブロックを睨みながら、男は告げた。

『……ふッ……、あ……』

僅かな隙間から覗くコックピットの中は。

バケツでぶち撒けた様に赤く染まり。

破壊された機械と飛び散った内蔵が奇妙なオブジェを形作り。

敵EOSのパイロットは右半身がパイルバンカーによって潰れている。

さながら、正義の鉄鎚によって踏み潰された弱者という——この世の地獄を体現した有様となっていた。

『ちく……、しよお……！』

敵EOSのパイロットの男が、潰れた右半身に構わず、左手を男——日方風に伸ばす。

『……ッ、なんつ……、で……』

血を吐き、息も絶え絶えで。

どう見ても致命傷の身でありながら、捕食者の如き目で、日方風を睨み付ける。

『……っ、おまえ……、たち、が……っ、正義、なんだ……っ！』

——怨嗟に満ちた、呪いの声。

それを咭くと、パイロットはぐたりと崩れて、ひゅう、ひゅうと掠れた声を上げ、吐血し嗚咽を漏らす。

『……スコー……ル……』

——それが、敵パイロットの遺した最後の言葉だった。

それが人名なのか、それとも故郷の名前なのか。

…当人が死んだ今となつては、知る由も無い。

だがそれ以上に男の気を引いたのは、直前の言葉だった。

——何故お前たちが正義なのか。

(正義……、正義、ねえ……)

「…それは、俺から一番遠い言葉だよ。」

苦笑しながら、男は口にする。

…周囲を見渡す。

未だ火災により燃え盛る官公庁舎や周辺ビル群。

地面に転がる、放置車両やEOSとISの残骸。

祝福か鎮魂でもしているかのように、勢いを増す吹雪。

——戦場を真に統べる支配者は、業火と吹雪の中。ただひたすらに、惨劇の中心

地で佇んでいた。

「——状況終了。」

考えるのをやめようと首を振り、男は告げる。

『——お疲れ様です。凄いですねえ、戦闘開始から1分30秒。警察のIS部隊が

四苦八苦して何度も突入と失敗を繰り返してたのに、一発で成功させちゃうあたり、や

はりアライズ様々ですねえ。お姉さん感激しました。』



「ハイハイ。」

——おしゃべりにも程があるマシンガントークが発せられる。

：男の方が楯無よりも14歳年上なので、楯無が自身を『お姉さん』と呼ぶ事に抵抗を覚えつつも、ひとまず受け流す。

こういう手合いは適当にあしらわなくては延々と会話に付き合わされる——嫌という程体験した身である男は、そそくさと機体の戦闘後状況チェックを開始する。

『いやあ、途中被弾するアクシデントがありましたけど、それでもこの実力——錆びてないみたいですね、オリジナルナンバー116の実力は。』

その言葉に、男はピクリと反応する。

——オリジナルナンバー116。

それは再構築戦争で投入された最初期のアライズ乗りだった自分に与えられたナンバーだった。

「…ストーカーめ。人の個人情報にズケズケと入り込みやがって。」

俺ア32歳のオッサンだ。何も得なぞ無いぞ——と付け加えながら、男は毒づいた。

『いやあ、調べますよ。そりゃ。IS撃墜数91、その内1機は白騎士タイプ。』

——そんなイレギュラーな人材、見過ごす訳が無いじゃないですか。元ナンバー

16 ——— 八雲ナガトⅡアウグスト一等陸尉さん。』

男—— ナガトはそれにウンザリした表情を浮かべる。

「—— 出る杭は打たれる、ってか?」

『まさか。貴女は我が国にとつて貴重な人材ですから。』

「【核兵器と等価値の代替抑止力】として—— の間違いだろうか?」

これはまたウンザリしてナガトは口にする。

—— 再構築戦争後、アライズを待っていたのは、本来手を取り合うべき筈の国家を牽制する為の抑止力。

…… 噛み砕いて言うならば、「核保有国と対等に交渉する為の外交カード」としての、低俗な政治的駆け引きの為の材料という役割だった。

—— この10年間、嫌という程身をもって知ったナガトからすれば、もう聞くだけで耳にタコが出来る。

『まあそうとも言いますね—— あ、そうそう、今年の4月から本校に入学する義娘むすめさんの調子はどうで—— 』

「—— もう切るぞで。」

『アツちよつと待—— 』

「やかましい営業時間外だ。」

そう言つて、ナガトは一方的に通信を切る。

—— はあ、と息を吐く。

…まだ、生きている。

自分は帰らなければならぬ場所がある。

—— 例え、他人<sup>ヒト</sup>を殺したとしても。

「…仕事は終わった。」

そう呟くと、プラズマジエツトを蒸し——日方風は西の空へと吸い込まれていった。

—— この世界は平和なのか。

ふと、ナガトはそう思い、視線を外の景色に向ける。

…先程より吹雪は収まっており、外はそれなりに遠くまで見渡す事が出来た。

—— 首都圏既成市街地から抜けければ、一部復興が始まっているものの多数の廃墟都市が点在する大地。

—— 衛生軌道を埋め尽くす無数の小惑星<sup>アステロイドベルト</sup>群帯によつて、宇宙開発は中断され、空

は人類をこの星に閉じ込める為の檻と化した。

視界に映るだけで、それらが確認できる。

—— 確かに、10年前と比べればマシ程度なのかも知れない。

世界単位では平和かも知れない。

だが、国家単位で平和を口にするには――

「…課題山積み、だな…。」

――遠過ぎる、そうナガトは溢した。

『H. ヘッドクォーター Q. よりライカン01 ―――』

ふと、所属基地の管制塔より無線が入る。

『着陸位置指定――宮城野駐屯地に着陸せよ。』

「ライカン01、了解――」

管制塔からの所定位置に視線を向けると、巨大なカルデラ火山跡にひしめく街が見えた。

伊豆半島の根元にして神奈川県と静岡県の間境――箱根山。

ナガトはそこにある指定着陸場所へと機体を走らせた。

# #00.1 Selected Girl (選ばれた少女)

#00.1 Selected Girl

神奈川県

——第3帝都特別区新東京箱根市

視界に映るは山々の狭間に顔を覗かせる、人工物の群れ。

箱根の山奥——だった場所。

そこは現在、新東京箱根市という都市へと変貌し帝都東京の分散首都として機能していた。

市街地には地上80階建てのツインタワービルを中心に高層ビルやタワーマンションといった現代都市の象徴から、かつての古き良き営みを残す住宅地や森林、小規模ながら繁華街や電気街もある他、御殿場と小田原、延いては東京を繋ぐ弾丸高速道路が東西に街を貫いている。

街の起点も、碁盤目に区画整備された仙石原が中心になっており、そこから放射状に道が伸びている。

都心から僅かにズレた場所——仙石原地区と強羅地区の境。

——宮城野駐屯地。

僅か4機のVTOL機が着陸できるだろうスペースの駐機場に、ナガトは日方風を降ろす。

既に駐機場には化学消防車が見え、誘導灯を手にした地上作業員が目映る。

それに従いナガトは駐機場の耐爆コンクリートを踏み締めた。

——主電源を切断しタキオン粒子の生成を停止した日方風に地上作業員が駆け寄る。

分厚いパイロットスーツに身を固めたナガトは、日方風から地上に降り立つやいなや、耐NBC<sup>核・生物・化学</sup>防護服で身を固めた作業員から大量の真水を浴びせかけられた。

：当然ではあるが、任務達成を祝つての行為ではない。

スーツに付着したタキオン粒子の洗浄作業である。

乗機であり日方風も、化学消防放水車両から、その全身にホウ素中和剤を吹き付けられていた。

——微量とはいえ、機体が生成するタキオン粒子は環境汚染を引き起こす手前、アライズとタキオン粒子に晒されたであろうパイロットは、必ず洗浄が義務付けられていた。

まずは駐機場で洗淨処置を行い——次に、サイロ型掩体格納庫に機体を搬入し、本格的な整備作業が耐汚染防御専用設備と人員の下で綿密に行われるというわけだ。

サイロに直結するリフトで地下に搬入されていく愛機を視界の端に捉えながら、ナガトはパイロットスーツを私服に着替えるべく、宮城野駐屯地隊舎へと足を進めた——

：更衣室で着替えたそれは、日本帝国陸上自衛隊の正式採用BDUだった。

ただし、上半身に関しては黒いタンクトップの上から上着を肩へと羽織ったのみ。

ラフなスタイルと言うには、隊律にそぐわない、あまりに過ぎた着崩し方だ。

「さて、と——」

自身のロッカーから、ココアシガレットの箱を取り出し、それを口に啜えた。

——諸事情により禁煙してからは、これが喫煙欲を抑え込む為の、ナガトのやり方だった。

一通り満喫するとバリバリと無造作に噛み砕いて飲み込む。

一時の喫煙欲を紛らわす為なら、なんだって良いのだ。

そのまま、ナガトはマスクを付けて、更衣室を後にする。

：まあ、そもそも、禁煙など始めたその諸事情というのが——

「あ！お疲れ様です！ナガト!!」

声がして、振り返るとそこには——少女がいた。

黒髪にポニーテールをした、凛とした雰囲気のもの——だが、幼さと仔犬の様な愛いしさを醸し出すその少女は、ナガトを見るなり駆け寄り、労いの言葉と共に麦茶のペットボトルを差し出して来た。

「お、サンキュー箒…：篠ノ之三尉、業務時間中は苗字で呼べって。」

少女——篠ノ之箒に向けて、ナガトは礼を告げながら、同時に窘める。

だが、与えられたものはありがたく頂戴していた。

「作戦はどうでした？」

「2分足らずで終わらせた。…ちよいとタキオン粒子を撒いちゃったが。」

——腕鈍っちゃったなあ、とナガトは自嘲する。

「そういうお前はどうか？ さっきまで機体操縦完熟訓練だったんだろう？」

——ナガトが箒に問いかける。

箒もナガトと同じく、軍用ISアライズに乗る身分であり、現在はその訓練中だった。

「はい！ シミュレーションとはいえナガトから一本取れました!!」

その質問を待っていましたと言わんばかりに箒は嬉しそうに回答する。

「お、関心関心——頑張ったな。」

そう言ってナガトは箒の頭を撫でてやる。



——その2人の様子は、身長差と15歳以上の年齢差も相まって本物の親子の様だった。

…事実、義理の親子ではあるのだが。

「あ、そういえば——」

思い出した様に、箒は口にした。

「——地下格納庫で、ナガトをお呼びの方がいらつしやいましたよ。私にも用があつたみたいなので、ついでに呼んできてくれと。」

「ん、わかった——行つてみるかね。」

——同・第3地下格納庫

地下格納庫——と呼ぶには、あまりに深い縦穴。

…どちらかと言うと、それは放射性廃棄物処理場と言うに相応しい見た目だ。

各フロア移動用の搬送リフトと格納庫の壁伝いに周回しながら降りて行く巨大な螺旋階段があつた。

後者は通称『罰ゲーム階段』と呼ばれており、249段の段差を行き来しなくてはならない都合上、誰も使いたがらない。

利点としてはその性質上、常に順番待ちの搬送リフトより空いているという点だろう。

その為普通に歩くにはいささか疲れるが、ナガトと箒は後者を選択し、構わずおのれの両脚を使用した。

10分程度は歩いたであろうか。

巨大工場のそれを思わせる地下空間へと到着した。

通路を塞ぐように立つ、20式小銃を装備した警備の自衛官数名が視界に映る。

傍らには自動砲撃システム(M2重機関銃転用型)が銃座に取り付けられた96式装輪走行車が2台配置されており、物々しい雰囲気となっていた。

ナガトは身分証を取り出しながら、

「おつかれさんです。」

そう告げて、続くように箒も自身の身分証を取り出した。

「——ID確認出来ました、どうぞ。」

「ども。／失礼します。」

守衛の自衛官が確認を取り終え、2人は足を踏み込むと——鋼鉄の巨人が数体鎮座する広間へと到達した。

整備作業の声飛び交う喧騒が無ければ、ここが基地である事など忘れてしまう程——

——その景色はある種の荘厳さがあった。

「いつ見ても圧倒されます。コンペートと同じISなのに、全身装甲だからか…なんだか騎士や武士に囲まれているみたいで…。」

箒が半ば興奮気味に言う。

——アライズは、タキオン粒子という汚染物質を使用する特性上、コンペートISと異なり全身装甲が標準設計となっている。

その為、粒子装甲——絶対防御に相当する——を抜かれても、機体本体の耐熱耐弾耐レーザー複合装甲による直接防御が可能であるという利点がある。

デメリットとすれば、コンペートISよりも機体重量が重く、推力を生み出す為に必要なジェネレーターが必要になるという点。

現在タキオンエンジン——事実上の対消滅粒子崩壊熱発電型内燃エンジン——  
——によって推力問題は解決したが、今度は汚染問題が浮上した。

ナガトが駆る日方風は、初期型の第1世代機と比較すれば汚染は95%削減されているが、汚染ゼロとはなっていない。

その為、日方風の開発元は、あと1%でも汚染削減を実現するべく、日夜苦勞しているという。

…ふと、作業着にヘルメットを被った壮年の男性が視界に入る。

日焼けした浅黒い肌。

作業着の上からでも分かる筋肉質な肉体。

口と鼻を覆う粉塵防御マスクが雰囲気を出し。

機械油で汚れた顔はまるで野武士の如き風格で。

——ナガトは絶句した。

「——何してんスカ社長」

一瞬、礼儀などというものを忘れて素っ頓狂な声を上げてしまう。

「八雲一尉か。いやなに、デスクワークが退屈だな。」

ナガトに反応した男性——巖崎哲璽は、機械油まみれの顔を煤汚れたタオルで拭

い、ナガトに視線を向けた。

彼は、ナガトの乗機である日方風の製造元——巖崎重工業株式会社の四代目代表

取締役……つまりは、国内有数の大企業の社長である。

しかし技術屋上がりの彼は、デスクワークよりも現場で直接作業し意見を汲み取る事

を好む為、社員に扮して現場仕事をしているそうだ。

その為、会社全体の指針は営業部出身の副社長が代理で取り仕切っており、副社長を

社長と誤解している社員も少なくないのかなんとか……。

「……偶には社長としての仕事して下さいよ……。」

社長がそんな自由奔放人では会社が苦勞するでしょう、と呆れながらナガトは口にする。

「まあ、そうだがな……。だが本社は何も産み出せん。真に会社の利益を産むのは現場であり、現場の労働環境や意見を汲み取り、経営に反映出来ねば我が社に未来はない。：私はそう考えている。」

それに、縁の下の方が性に合っている——と、巖崎は口にした。

それにナガトは、嬉しい様な呆れた様な感情を抱き。

「相変わらずなんですネ、ナンバー6。」

——懐かしむ口調で告げる。

ナンバー6 ——それが眼前の男性、巖崎哲璽に与えられたオリジナルナンバー。

彼もまた、再構築戦争で官民合同有志連合軍のアライズパイロットとして参戦した身だった。

「ああ。私はそうそう変わらんよ。：君はどうかね？後輩はできたか？」

そう言われて、ナガトは一瞬渋い顔をして、目を泳がせる。

「——モノ教えるのは、下手くそなんで、篠ノ之三尉しか出来てないですねえ……。」  
恥ずかしそうに、そう応える。

「鷹月一尉の方はいいじゃないですか。後任の夜竹や吉川、永井に新庄だって育ちつつあるらしいですから、いずれはそちらが主力部隊になるでしょう。」

再構築戦争後、日本帝国は海を隔てているとはいえ、核兵器を持つ仮想敵国複数と隣接している現実には直面した。

日本は広島への原爆投下により、反核感情が官民間問わず根強く、『核に対抗するには核による抑止力が必要である』という非情な現実を受け入れがたい面があった。

その為、核抑止力は全面的に同盟国であるアメリカに依存していたが、彼の国が再構築戦争後は自国優先主義に傾倒した事により、日本は自力で『核に頼らず核に対抗する抑止力』を整えることを迫られた。

——アライズは、そんな都合の良い役割を満たす理想的な「戦略機動兵器」であり、日本がこの10年でアライズの開発とパイロット育成に注力するのは国防の観点からして、当然の帰結だった。

「八雲一尉」

「あつ…」

…ふと、澄んだ女性の声が出て、箒が釣られて声を出す。

そちらに顔を向けると——場違いな、ビジネススーツに身を包んだ女性が寄ってくるのが視界に映る。

アングロサクソン特有の長い金髪。  
それでいてアジア系の目つき。

理知的で灰色の瞳が、鏡の様にナガトを反射させる。  
惜しむらくは、不織布マスクで顔全体が分からない程度。

——藤澤マリア。

最初にアライズを開発した企業・日照ライムントヴァルト社の現社長。

——再構築戦争時からの、ナガトの顔馴染みだ。

「お疲れ様です。今日の戦闘、見事でしたよ。」

出てきたものは、ナガトの戦闘結果に対する賞賛の言葉だった。

「…どうも。」

——巖崎に対するものとは打って変わって、ナガトの対応が硬くなる。

∴別段ナガトはこの人物が苦手というわけではない。

だが、彼女の属している日照ライムントヴァルト社に手酷く『お世話になった』為苦  
手意識がどうしてもあるのだ。

藤澤が集ったところで、巖崎が整備スタッフの班長に声をかける。

「——おい、休憩だ。一旦格納庫から外してくれ。」

班長が人払いをする。

「——私は茶でも淹れよう。そのこのテーブルにでも座っていてくれ。」

「あ、お茶でしたら私が——」

「いや、藤澤氏はキミに用があるんだ。篠ノ之三尉。」

「……だから客人として座っていてくれ——」言外に、巖崎はそう告げていた。

「ごめんなさい。でも、どうしても話がしたかったの。」

「こりと藤澤が微笑む。」

「——そうして、密談が始まった。」

玄米茶の載った盆と共に、巖崎がファイルに挟まれた書類を、ナガトと、そして箒との前に差し出した。

——【NR／令和5年度新計画書】

そう書かれた書類の厚みは大したものではない。

だが、その表紙には「極秘」の印が赤く記されていた。

それを見て、ナガトはかすかに眉をしかめ、箒は少しだけその目を丸くする。

「貴方達ふたりに来てもらったのは、その計画

に協力してもらいたかったからなんです。」

そんな両者の様子を省みることなく、藤澤は彼らに告げた。

「現在我が社は、新型アライズのテストパイロットを探しているんです。……それを篠ノ



之さん、貴女にしていただきたいと考えています。今日は貴方達から忌憚なき意見を聞きかせ願えますか？」

「新型機……ですか？……私が？」

その発言があまりにも突拍子なく聞こえたのか、箒はキョトンとする。

ナガトはただ黙って書類のページをめくっていく。

「…到底、現実的な話とは思えません。」

一瞬後、箒から否定の意見が溢れ出た。

「武装などをコンパートに装備して試験するという話なら分かります。IS学園等では常態化していますから。」

…でも、アライズを丸々…それも、ROTC中等教育を済ませたばかりの人間に託すというのは…。

それに私、IS適正はCランクです。私よりもっと相応しい人材がいるかと…。

箒は軽く目を伏せ、頭を左右に振ってみせた。

いや実のところ、箒はそんなことを言いたいわけではなかった。

彼女が内心で藤澤に尋ねたかったのは、なぜ自分にそんな議題が提示されたのか、ということだった。

いま現在、箒は要人保護プログラムに基づき予備役将校訓練課程中等ROTCによる訓練を中学校に通い

ながらこなし、今月中旬に修了したばかりだ。

IS適正を有しており、シミュレーションとはいえ対人戦訓練では羅刹の如き戦いぶり以最優秀とも言える成績を納めたりもした。

…その側面だけなら、将来を担う貴重な人材とも言える。

だが実戦を経験してもいない、そんな駆け出しのペーパーが役に立つ筈が無い。ましてや新型機開発など。

…箒が言いたいことはそれだった。

箒は、ふと隣に座るナガトへと助けを求めるように視線を移す。

——彼は無言でファイルのページをめくったまま固まっていた。

その目が一際見開かれ、視線が一点に集中する。

「どうかしました？」と、尋ねる箒を無視して、ナガトは震える声でつぶやいた。

「……ヴァハフント」

「え？」

箒はその言葉に反応し、自らも手元の資料をあわてて開く。

——NR—06式ARISヴァハフント

再構築戦争において投入された最初期の第一世代アライズ。

ラファールリヴァイヴの汎用性と打鉄の堅牢さを合わせ持つ高速機動格闘戦機であ

り、ナガトが再構築戦争時に乗っていた機体——そのページには、ヴァハフントに酷似した新型アライズ機体が詳細なデータとともに載っていた。

——NR—X222式ARISと書かれた機体名。

——無骨さを残しながらも流線形フレームが機動戦特化型機であることを示すフォルム。

——デモカラーであろう、紅白迷彩塗装。

——主武装である、2振りのガンブレード。変形複合機構内蔵型近接戦装備

「機体の命名はまだ出来ていませんが、大まかなスペックは資料通りです。篠ノ之さんが受けて頂けるのであれば、3月末までにはIS学園に搬入する予定です。」  
 箒も一瞬絶句し、次いで真向かいに座る藤澤に向かって視線を投げた。

この時、彼女ははつきりと理解した。

自分が必要とされたのは経歴でも適正でもない、そのためだったのか、と。実験場を提供する為

「——なあ…箒を程の良い実験動物か何かと勘違いしていいいか？」

——ナガトが殺意を込めた瞳で藤澤を睨む。

…義理の娘でもある箒にそのような役割を押し付けてくるのだ。

義理とはいえ父親の立場にある身からすれば黙っていられるものではない。

だが——この事業を是が非でも進めたい、という思惑も理解できる。

…そもそも拒否させるつもりもないだろう。

——近年、アライズを持つ国家は増加傾向にある。

再構築戦争で主力となった6大国家——六人の勝者通称・VIC6こと、アメリカ合衆国、イ

ギリス連邦、欧州連合ユーロ、ロシア領クラスノヤルスク、オーゼン連邦、日本帝国の6ヶ国は

もちろんのこと。

現在では、フランスやスウェーデン、スペイン、インド、ブラジル、インドネシア、中華人民共和国、台湾、中華民国大韓民国など——多数の国がアライズの配備を進めている。

…当然、核保有国も、だ。

今まで通りのペースで開発しては出遅れる。

だからより、開発に適した立地で開発を行いたい——それも、実戦に程近い環境で。

だからこそ箒に目をつけたのだろう。

——今年の4月から入学する箒に。

…そんなもの当然、親の観点からすれば猛反対だ。

だがしかし、国防に携わるものの観点からすれば……——だから折り合いをつける必要があるだろう。

キツと藤澤を睨みつけて。

「条件がある。」

我ながら、らしくもなく——昔に戻ったように——感情的に、

「アグレッサーとして、俺も同行させて貰おうか。」

——そう、告げた。



——12時間後。

明朝・午前0時6分

——その街中を、くたびれた様子でナガトは帰路についていた。

「つつつつつつかれた……。」

アライズを所定の基地——陣城駐屯地第3地下掩体壕——に搬入した後、本

作戦に関する書類の山と、IS学園関連の書類を書く作業に追われてしまい、気が付け

ば日付が変わっていた。

それにより終電を逃してしまい、結局職場から2キロ離れた自宅まで歩いて帰る羽目

になったのだ。

一駅分とはいえ、坂道の多い箱根で2キロの徒歩は、中々に堪えるものだった。

——同・箱根区仙石原地区

イデアール仙石原マンション501号室

鍵を開け、ガチャリとドアを開く。

「ただいま〜…」

荷物をどかりと置いて、玄関先に用意していたアルコールスプレーで手指消毒し、上着や鞆にもそれをふりかけていく。

——見るからに潔癖症に見えるのだが、それは巷で未だに流行っている新型伝染病を、入学を控えた義娘に感染さない為のナガトなりの努力であった。

手指消毒と衣服へのアルコール噴霧が終わると、行く先は洗面所だ。

(アイツは…流石に寝てるか。)

家の中が静まり返っている様を見て、思いながらマスクをゴミ箱に捨て、手洗いうがいをする。

一昨年から家庭単位での感染対策として国が推奨していたものであり、インフルエンザが流行る時期である事もあって、ナガトはそれを徹底していた。

(…ワクチン接種者数的に、3月末には終息宣言が出ると言われているが…どうなんだ

ろうなあ、コレ。

うがいをした水を吐き出し、手を拭いたナガトはリビングへと向かう。

そして——家の中が静まり返っていた原因を理解した。

「…すう…すう……」

黒髪のストレートロングヘアの少女が、コタツに突っ伏した状態で眠っているのだ。

しかも枕代わりと言わんばかりに、来年度から入学する高校に提出する書類を下敷きにしていて——。

「…あー、…コタツ直さずにいたのが不味かったか。」

頭を抱える。

…ともかく、このままでは風邪を引いてしまうし何より学校に提出する書類もお亡くなりになってしまう。

だからナガトは、スマートフォン音楽アプリに【目覚まし用】とタグ付けして保存していたプレイリストを起動。

それを少女の耳元に設置して——

——軽快なラップの演奏が、部屋に木霊した。

「——ふあッ?!」

がばり、と。

脊髓反射で少女は目を覚ます。

「え？あ、何が…あ。」

一瞬、何が起きたか理解出来なかったが、リビングのドア前に立つナガトを見て、全てを理解する。

「おはよう箒。寝るなら布団で寝ような？」

それにニカツとナガトは笑みを浮かべて少女——篠ノ之箒に言う。

「あ、はい——アレでも、まだ夜だしこんばんはでは…」

「うるせえなあ。日い跨いでるからいーんだよ別にい。」

そう言いながら、冷蔵庫からビール瓶を取り出し、ナガトはグビグビとイツキに飲み、流し込んで行く。

「ナガト、今日は休肝日では？」

「いーんだよ。残業上がりはコレでも飲まにややつてられん。」

「ビール缶ならともかく、瓶飲みは肝臓に悪いかと…。」

「わーってるって。明日は自重するから。」

そう言つて、ナガトは更に2本目のビール瓶の蓋を開けて行く。

それを見て箒は、『明日も絶対飲みますね』と確信する。

「そうだ。学校に出すヤツ、出来たか？」



思ひ出したようにナガトは箒に問いかける。

居眠りしていた箒が学校に提出する書類を下敷きにしていたあたり、それをやっていたのだろう。

言われて箒も思ひ出す。

「あ、はい。出来てます。見てもらっても良いですか？」

「ん。」

箒が差し出して来た書類に、ナガトは目を落とす。

学校に提出する書類とは、現住所や本籍地の記載書、履歴書めいた自己紹介書、健康診断書、そして入学にあつての抱負という長文記載書類の4つで構成されていた。

3枚目までは問題なく———多少の誤字脱字に目を瞑れば、だが———読む事が出来たのだが、4枚目。

「……………あ？」

入学にあつての抱負、という書類でナガトは凍り付いた。

4枚目は長文を書かされる内容である事から、修正箇所が出てくるだろう、とナガトは思っていた。

…だが、箒はその予想を超えて来たのだ。

—————

??本校入学にあたっての抱負を記載して下さい

要人保護プログラムに基づく入学なので特にありません。

—————

「———おま……」

小学生の、出来の悪い作文課題並みの文章に、ナガトは絶句する。

いや、最近の子供というのはドライだし本音を隠さないのだというから案外こういう文章を書く子はいいるのかも知れない。

しかし、しかしである。

学校に提出する書類である。

仮にも国公立高校に提出する書類である。

それに『特にありません』である。

「……私はただ、普通に書いただけなんです……」

———箒のその言葉に更にナガトは頭痛を覚えた。

悪意があつてこんな文章にしたわけでは無いのである。

面倒くさいからとこんな文章にしたわけでは無いのである。

つまり———本当に何も無いから、何も書いてないのである。

……気持ちは分かる。

素直に書いたらこうなるのは分かる。

だが、だがしかしである。

「…ナガト…：う？あの…：ダメですか？」

箒がナガトの顔を伺うように問いかける。

それにナガトは一拍置いて――

「――ダメに決まってんだろ馬鹿野郎！書き直せエ!!!」

――近所迷惑など知った事かと言わんばかりの怒号で、箒に雷を落とした…！

この後ナガト監修の元、箒が全て書き直したのは言うまでも無い。

――箒は不貞腐れながらも、少し楽しそうに。

――ナガトは雷親父となりながらも、やはり楽しそうに。

…かつて、心と声を無くした少女。

…かつて、人間性を無くした男性。

――2人はどこか、見知らぬ新天地への期待を抱いていた。

## 設定解説（仮）

□ ■用語■ ■

## ● 白騎士事件

2001年7月に、6000発のミサイルによる日本・アメリカ・ヨーロッパ諸国の地上人口密集地への空爆をたった3機の人型兵器《白騎士》が全てのミサイルを撃墜し、その鹵獲を目指した通常兵器群を悉く殲滅した事件。

《コロニア》の天才科学者が開発した新概念兵器、インフィニット・ストラトスはその圧倒的な性能差を見せつけ、それは、『コロニア主導の節度ある地上復興』という名の武力に物を言わせた独善的統治を許すキツカケとなった。

## ● コロニア

大破壊によって崩壊した地上から脱出した人類組織の連合体。または同組織が置かれたコロニア級半永久航行型海洋プラットフォーム船の事を指す。

地上管理の為に白騎士事件を起こし、10年間ISの武力を背景に地上を管理していたが、コロシアからの亡命技術者や地上回帰者たちと六大国家によって開発されたアライズによって再構築戦争時に滅ぼされた。

2022年現在ではほとんどのコロシア艦が機能を停止し地上ないし近海に座礁しており、地上諸国から『特別自治区』に制定され事実上の『旧コロシア出身者等難民キャンプ』として扱われている。

● インファイニット・ストラトス（IS、コンペディションIS、コンペイト、CIS）  
大破壊後・再構築戦争以前の時代にEOSや通常兵器をベースにコロシアによって製造・量産されていた高機動兵器群の総称。

さまざまなパターンの機体を構築可能で、高い戦略性を持ち、パイロットは「ヴァルキユリー」と呼ばれていた。

白騎士事件直後は「XX染色体保有者（女性）にしか反応しない」という欠陥を除けば世界を統治する政治的カードとして機能する超兵器だったが、アライズ登場後はそのポテンシャルを奪われ、「実験等限定運用機材」となってしまった。

## ● 大破壊

1973年のヨハネ彗星落下から1990年の全球地殻変動までの17年間に発生した全面核戦争を含む大規模災害および世界規模戦争をまとめて指す際に用いられる単語。

この期間に発生した一連の天災・戦災により、地球人口の45%が死亡し、核戦争や非核大戦で甚大な被害を受けた地域の文明も崩壊。

更に落下阻止の為に軌道上で爆砕された彗星は地球の衛星軌道上に無数のデブリ帯を形成。衛星ネットワークを完全に破壊し、宇宙への道を閉ざした。

一連の破壊事象により世界規模で金融危機と気候変動による国家の滅亡という無数の地獄と世界の停滞を生み出し、白騎士事件までの『衰退の11年間』と呼ばれる暗黒時代を形成するに至り、それは最終的に再構築戦争を引き起こさせた。

#### ● 再構築戦争

大破壊により崩壊した地上諸国を武力によって支配していたコロナアが人口増加や食糧危機、エネルギー資源の減少により統治能力を損ない、その代替者として立ち上がった六大国家によって引き起こされた、国家群対コロナアの全面戦争のことを指す。

国家側が新兵器『インフィニットストラトス・アライズ』を投入したことにより半年で終結し、六大国家の圧勝にて終結した。

● 六大国家 (V. I. C. 6)

アメリカ合衆国、イギリス連邦王国、欧州連合、旧ユーラシア連合（現・上海協力機構）、オールドヌング・ハンザ、日本帝国の6ヶ国から成る、アライズを秘密裏に開発していた国家群。

諸所のコロナ側による攻撃に対する反撃として再構築戦争を引き起こし、アライズを実戦投入。最終的にコロナを滅ぼした。

その後は六大国家がコロナに取って代わり、2022年現在では世界の支配者として地球に君臨しているが、六大国家の軋轢により世界の平和は損なわれつつある。

● インファイニットストラトス・アライズ (アライズ、ISA)

『コンペディションIS』をベースとして、軍事転用されたタキオン粒子技術を盛り込んだ全高8〜11m程の人型汎用機動兵器。

アライズは粒子装甲による耐ビーム・耐核・耐近接信管兵器防御と複合全身装甲による高い耐実弾防御力を有し、バイオデバイスによる高い反応速度、直感的な操作性、瞬時加速による瞬発的な機動性、そして高いエネルギー効率から繰り出される高火力の武器群を結集した、戦術核兵器級のISである。

既存の I S と比べてバリエーションも豊富で、軽量二脚型、中量二脚型、重量二脚型、浮遊無脚型、固定四脚型、変形四脚型などの機種が存在する。

搭乗者は『ヘズナル(古ノルド語で"皮を被る者"の意)』と呼ばれるが、旧来の I S パイロットをヴァルキュリー(戦乙女)と呼ぶ風習から、しばしば「人狼」・「狼」などと揶揄されることもあったという。

わずか47機のアライズによって再構築戦争が制され、コロニア体制は解体された。その後、復興特需によって発展した六大国家によって世界は統治されることとなるが……。

#### ● タキオン粒子

再構築戦争以前、I S の絶対防衛を研究する過程で篠ノ之教授およびボーデヴィツヒ博士によって2003年に発見された粒子。

アライズの主機関であるタキオンエンジンを見るに発生方法も確立されているものの、国家によって秘匿されている。

アライズをアライズ足らしめている先進技術の塊であり、高いエネルギー効率を持つとされるが、その反面、放射性物質に匹敵する深刻な環境汚染を起こす物質であることも判明しており、扱いには細心の注意を払う必要がある。



再構築戦争時には、これを用いたタキオン粒子兵器ともいうべきアライズ達が投入され、世界各地に原子力発電所事故に匹敵する致命的な汚染を撒き散らし、無数のタキオン被曝者を生み出す事態となった。

それを鑑み、2022年現在ではタキオン粒子の無毒化を各国がこぞって競い合っている。

#### ● タキオン被曝

タキオン粒子を人体に浴びる事を言う。

生身の人体に浴びた場合には生命の保障は無く、直接被曝した際は対消滅現象によって皮膚が破壊され接触箇所から出血。ほとんどの場合は全身からの大量出血により被曝から10秒程度で死亡する（ISSスーツ程度なら即死）。

また微量であってもタキオン粒子を含む大気を吸引した場合には呼吸器官を中心に内部被曝を引き起こし、肺等内臓の破裂による死亡ないし呼吸器障害等後遺症を残す事となる。

放射性物質同様、防護服や洗浄、ナノマシン服用などによって人体への影響を抑制する事は可能であるが、それでも完全な克服には至っていない。

余談だが、最初期のヘズナルである『オリジナル』は被曝対策が不十分な環境下で長

時間アライズに搭乗していた為、47人全員がタキオン被曝しており、そのうち25人は重度タキオン被曝により死亡している。

タキオン被曝は粒子汚染災害という事象に分類される。

● 粒子汚染災害（パーティクル・ハザード）

タキオン粒子によって引き起こされた土壌・大気汚染、タキオン被曝の総称。再構築戦争時のアライズ運用下で発生し、世界各地に致命的な汚染を齎した。

タキオン粒子は大量の水のような密度と体積のある物質に触れると希釈される性質上、水質汚染は軽度だが砂等其他の粒子と絡まり合うと赤い灰（レッドダスト）となつて継続的汚染拡大といった事態を引き起こす。

● 赤い灰（レッドダスト、せっかい）

タキオン粒子が別の粒子と接合し、形成される結合凝固性重度汚染物質。

純正タキオン粒子の対消滅現象が失われた代わりに致命的な毒性と汚染力を有しており、再構築戦争後の世界では各地でレッドダストによる汚染地域拡大が進んでいる。

タキオン粒子特有の『水による希釈』も純正タキオン粒子と比較すると効果は少々薄いため、大規模処理施設が必要。

再構築戦争時、六大国家軍にて運用され主要コロナ艦の虐殺などに使用された。

戦後はレッドダストそのものが化学兵器に分類された為ジュネーヴ条約で兵器転用が禁止されている。

一方で再構築戦争時に飛散したレッドダストは現在進行形で汚染を拡大しており、2022年現在では日本帝国にも毎年黄砂と共にレッドダストが飛来しており、西日本を中心に汚染量増加や肺等呼吸器不全増加が報告されており、処理法確立が急がれている。

#### ● バイオデバイス・システム

脊髄にナノマシンを挿入し、脳と電気信号のやり取りを可能とする生体制御システム。主に欧州のハーメルン機関や日本帝国・国立兵器研究所で研究されていた。

アライズの統合制御体とリアルタイムで直接情報のやり取りを行うことで操縦可能となる。

当初は四肢を欠損した身体障害者への義肢の導入など、医療方面での活躍が期待されていたものの兵器転用され、IS適正を持つ人間をコアとする兵器管制システムとなった。

● I S 適正

I S を使用するために必要な適正。

この場合ヴァルキュリーとヘズナルとは定義が異なり、ヴァルキュリーの場合は『I S を起動するに足る先天的資質と制御するだけの才能』であり、ヘズナルの場合は『I S を強制起動させるバイオデバイスの負荷に耐えられる脳容量と、兵士としての戦闘技能』である。

ヘズナルの定義のみに絞るのであれば、その本質は、脳の欠陥である。

拡張した意識を義肢や兵器に接続し、自分の手足として「錯覚させる」、いわば「自己認識の低さ」が根底に存在するのでは、という説もあるが、I S 適正を持つものと持たざる者の決定的な違いは未だ説明されていない。

血縁による遺伝等も研究が進められたものの、現在では関連性はなしであるという通説が一般的とされる。

再構築戦争時の六大国家軍のヘズナル達はいずれも劣悪なI S 適正しか持ち得ておらず、強引に適正を上げるべく強化改造手術が施された者も少なくはなかったという。

● 篠ノ之教授

篠ノ之箒の実父。

日照ライムントヴァルト社にて統合制御システム（IRS）および専用制御システム（FRS）を主に研究・開発しており、同社の主力製品である最先端兵器開発部門を指揮していた。

また、アライズ開発の第一人者でもあり、プロトタイプ・アライズ「試製IV式機動挺身装備《ヴァナルガンド》」は彼とボーデヴィツヒ博士によつて設計・研究されている。並行してバイオデバイスについても研究していたものの、そちらはハーメルン機関のほうが優位に進んでいた。

2012年7月7日、再構築戦争開戦前の急襲で教授は致命傷を負い、3年ほど交流のあったナガトに箒を託した後に死亡。

彼の死後、弟子たちと同社の技術者たちによつて研究データをハーメルン機関や国立兵器研究所（のちにタルヴァアーネン機構人工進化研究所）に持ち逃げされ、日照ライムントヴァルト社は経営困難に陥った。

● ボーデヴィツヒ博士

タキオン粒子研究およびアライズ開発の第一人者。タルヴァアーネン機構人工進化研究所の所長であり、『シュヴァルツ』シリーズの開発者でもある。

また、タキオン粒子による被曝とバイオデバイスの負荷を低減させるべく人造生命体

『ホムンクルス』シリーズの開発も行なっていた。

ラウラ達シュヴァルツカニンヒエン大隊の面々もボーデヴィツヒ博士の遺伝子をベースに製造されたホムンクルスであり、「アライズに好条件のヘズナルの人造」を極初期から模索していた。

● ハーメルン機関

欧州連合のアライズ研究開発組織。

バイオデバイス・システムの開発元でもあり、それ以外に技術を持たない小規模な勢力だったが、篠ノ之博士没後の日照ライムントヴァルト社からの亡命技術者群を取り込み、アライズ製造設計技術とヘズナル製造技術を吸収し、欧州圏最大のアライズ開発組織へと急速に成長した。

2022年現在ではアイゼンライン社やユーロ・ヴァツフェ社などの開発企業を設立し、欧州製アライズの開発競争を加速させている。

● 国立兵器研究所

日照ライムントヴァルト社旧体制時に存在していた日本帝国の技術研究法人。

ヴァナルガンズの管制ユニットの製造を担っていた部署であり、????を含む生体管制ユ

ニット〔ツューゲル〕の開発を担っていた。

諸事情により2013年に解体され、以降は日本帝国内閣府帝国安全保障局により記録から抹消されている。

現在は存在すら与太話程度に扱われる組織だが、一部の元職員がタルヴァーネン機構に合流した他、製造された???は現在ナガトの監視下にある等、実在した痕跡自体はある。

●タルヴァーネン機構

旧ナチス・ドイツの《XIII号機関》を前身に持つ、グデリア連邦共和国およびドルシア共和国共同出資の官営組織。

タキオン粒子研究とホムンクルス研究を専門としている他、旧国立兵器研究所の元職員がいる点や露出度が極めて低い事、旧コロニアの人間が設立に携わっている点等から陰謀屋の巣窟であると囁かれている。

●オリジナル・ヘズナル（第1世代ヘズナル）

再構築戦争に参戦した、47名のヘズナルを指す言葉。No. 1からNo. 47までは、国家解体戦争における戦績を序列化したもの。

ヘズナルのデータはハーメルン機関スイス新事務本局（通称：グントラム）が管理し

ており、再構築戦争終結後にヘズナルに登録された場合は国籍と番号の構成で登録されている。

● ホムンクルス

人間では実施不可能な極限環境下での活動を目的に製造されたヒト型人造生命体。

旧ナチス・ドイツ第3帝国（現・グデリア連邦共和国およびドルシア共和国）に起源を持つ当技術の発想は古くからあり、1980年には実現されていたという。

その性能の高さから、反乱防止措置として人類によるメンテナンス無しには個体生命を維持できない様にプログラムされている。

IS運用に適したモデルとしては、グデリア・ドルシア共同開発の『カニンヒェン』シリーズ、旧コロシアの『オリムラ』シリーズ、日本帝国・旧国立兵器研究所の『ツェーゲル』シリーズの3種類が確認されている。

● アラスカ条約

ISの運用を規定した国際条約。主に、以下の項目が定められている。

?? 非人型軍用ISの開発・保有禁止。

?? ISの運用に関する教育機関の設置義務化。



?? 人型軍用 I S (アライズ) に関する運用規定。

?? 人型軍用 I S の運用を専門とする国際機関の設置。

これといって原作とは変わらないが、4 項目めが後年に追加され、それにより加盟国間で対立が生じている。

◎ A . T . L . A . S . (アトラス)

正式名称 (アラスカ条約および地上同盟国安全保障機構 (Alaska Treaty and Land country Alliance Security organization))。

アラスカ条約の条約改正 (『人型軍用 I S の運用を専門とする国際機関の設置』項目の追加) に基づき設立された、アメリカ大陸を中心に大西洋北部・太平洋のほぼ全域を統治する世界最大の国家連合組織。

冷戦時代の N A T O (北大西洋条約機構) を発展させた組織でもあり、アメリカ合衆国・英連邦王国・欧州連合・日本帝国など西側諸国が加盟している。

本部は当初、米国アラスカ州エルメンドルフ空軍基地に置かれていたが、上海協力機構との対立に伴いワシントン州シアトル広域都市圏フォートルイス陸軍基地に移転した。

2022年現在、上海協力機構構成国である中国とは西太平洋問題を巡って、同じくロシアとも東欧諸国への侵攻を巡って対立している。

● 上海協力機構

中国・旧ソ連諸国・インド・パキスタン等東側諸国による多国間国家連合。

広大な範囲を勢力圏とするが一枚岩ではなく、ロシア派・中国派・インド派の3派閥が存在しており、政治的事情から各陣営や組織内派閥の関係が非常に劣悪となっている。

特に2022年現在、構成国であるロシアがオルドヌング・ハンゼと戦争状態にあり、国際的にも立場が危うくなりつつある。

● オルドヌング・ハンゼ

ドイツ語で『秩序同盟』の名を意味する国家連合。

ドルシア、グデリア、フィンランド、ウクライナ、アザデイスタン、海南省、アルゼンチン、カメルーン等中央諸国(旧ナチスドイツ傘下勢力)による経済協力機構であり、経済と産業による秩序構築と紛争回避を目的として設立された。

地政学的観点から、A・T・L・A・S.とは協力関係を構築している。

2022年現在、上海協力機構構成国であるロシアと戦争状態にある。

● アライズ

インフィニット・ストラトス・アライズの略称。

● コンペート

旧世代のインフィニット・ストラトスを、アライズと混同しないように付けられた通称。

□ ■ 登場人物 ■ ■

● 八雲ナガトIIアウグスト

本編主人公で、No. 16のオリジナル・ヘズナル（第1世代ヘズナル）。

日本帝国陸上自衛隊に帰属しており、現在はIS学園警備部および日欧合同次世代機関発試験隊《ライカンス》試験監督官を務める出向駐在武官であり、箒の義父でもある。

性格は不良中年を絵にしたような人物で、辛辣・過激な発言が飛び交う。現場出身である為、後輩であり義娘である箒の苦境には理解があり、いい加減で理不尽な状況にはすぐに憤りを示す。

本人は気付いていないが、先天的な戦闘の才能があり、第六感や直感が生死を分ける分岐点において大きく働くことも。

IS適正はD―と極めて低い、戦闘経験や戦術面の高さでそれを補っており、ガトリングによる弾幕形成で敵を怯ませたところに戦車砲またはパイルバンカーを叩き込む事による一撃撃破を得意としている。

名前の元ネタは旧日本海軍の装甲艦八雲および戦艦長門、プロイセン王国陸軍元帥アウグスト・フォン・グナイゼナウから。

#### ● 篠ノ之箒

本編ヒロインで、第2世代ヘズナル。

性格は原作と比べて控えめで、直情的に動く前にまず多角的に俯瞰するタイプ（ただしそれでも納得出来ない場合は心に従って行動する）。

アライズ開発の第一人者だった父の影響か、機械いじりが得意。

またナガトには親愛以外に、恋愛的な感情を抱いている。

主に第2世代ヘズナル候補生として訓練に努めており、コミュニケーションとはいえナガトを撃破できるほどの腕に磨き上げるなど、かなり伸び代がある。

短期間とはいえ共に過ごした一夏を放っておかず、何かと気にかける事が多い。

I S 適正はC+とあまり高くは無いが、ナガトに扱われた経験でそれを補っており、多方向からの高速機動による斬撃包囲・一撃離脱戦法を得意としている。

● 織斑一夏

原作主人公にして本編主要人物の旧コロニア市民。

基本的には原作通りで、I S 適正はDとあまり高くは無いが（むしろナガトに毛が生えた程度のスペック）、ナガトや箒に叩き込まれた訓練と白式の機体性能によって国家代表候補生に優らずとも劣らない実力を持つ。

● 高木道生

オリジナルキャラクター。一夏の義理兄。

I S 学園警備部警備本部長。

何処か抜けた性格をしており、掴みどころが無い。

…時折、楯無に従っているような描写が度々見られるが…？

● 織斑千冬

我らが千冬姐。

本作では教員権限で一夏の部屋を自室にさせる暴挙に出た（実行済み）が、それ以外はマトモ。

● 更織楯無

IS学園生徒会長にして、日本国内閣府帝国安全保障局第2部別班"暗部"班長。原作通りの性格で、ナガトからは『お喋り娘』と煙たがられている。

高木を子飼いの部下としている描写が少々あるが…。

彼女は現在、紛失ないし流出した旧国立兵器研究所の〔試作品〕の行方を追っており、そのひとつを保有している可能性があるナガト周辺を調査中である。

□ ■ 機体

● 21式日方風

ヒガタチ

本編の主人公機。

陸上自衛隊の装備らしく深緑色のカラーリングで統一されている重量二脚型アライズ。

本編開始の1年前から陸上自衛隊に配備が開始された最新鋭の第3世代機であり、フレームパーツは再構築戦争時に開発された重量二脚型第2、5世代アライズ・10式

岳嵐改をベースにしている為高い防御力を誇る。<sup>ガクラン</sup>

ナガトの日方風はパイルバンカーや実体刀剣運用に特化した近接機動格闘戦仕様仕上がりであり、関節強度に加えて肘部兵装担架の副腕機能<sup>サブアーム</sup>のアクチュエーターおよび間接強度が強化されている。

肘部副腕には打鉄の主武装である03式近接長刀Ⅱ型を懸架保持し、マニピュレーターにパイルバンカーを装備するなどする事で、一時的に四本の腕を利用可能。

また、重量機特有の積載量を活かした大量のエンジンと複数のサイドブースター搭載により、マツハ1〜マツハ3・5という高機動格闘型機にも匹敵する巡航速度と機動力、格闘性能の高さを確保している。

主兵装は40mmガトリングライフル、レーザーバズーカ、日本刀型近接実体剣、パイルバンカー、大剣(グレートソード)、120mm滑腔砲。

：整備士からは『フィジカル鉄塊』、『音速喧嘩番長』等と揶揄されている。

● 試製22式雷火<sup>ライカ</sup>

箒の(実質的な)専用機。

帝国自衛隊の次世代主力候補機選定の一環として開発された中量二脚型第3世代アライズ。

フレームパーツは再構築戦争時に開発した中量二脚型アライズ・VI式ヴァハフントをベースにしており、高い機動力とそれを活かした格闘戦能力を誇る。

当機はパルスキャノンとイオンブレードを合体させた複合兵装ガンソード叢雲による中・近距離での強襲格闘戦に特化している。

反面、試験機である事も影響し、EN兵器を多用するにも関わらずジェネレーター出力が不足している等改善点も多い。

主兵装はガンソード、レーザーターレット、空対空ミサイル。

#### ● 試製IV式機動挺進装備《ヴァナルガンド》

箒の父親である篠ノ之誠率いる開発研究チームが設計したインフィニット・ストラトス・アライズのプロトタイプ・モデルで、第1世代アライズに区分される。

日照ライムントヴァルト製であり、全てのアライズの祖に当たる機体。

通常のアライズを遥かに超える高い瞬時加速推力と通常のアライズが各部位につきメイン2基サブ4基の合計6基である点と比べてヴァナルガンドの場合はメイン4基、サイド8基の合計12基のスラスタータを持つ巨体を誇り、6連装ガトリング、タキオンカノンソード、ハイレーザー・ターレット、多連装ミサイルオービット、大口径レーザーガン(核砲弾採用型)といった強力な武装を持つが、致命的なタキオン粒子汚染と搭乗



者への負荷が高すぎるといふ欠陥を抱えていた。？ また、パーティクルアーマーを攻撃に転用したタキオン爆発を起こす粒子爆発相殺装甲（ブロッケン・フレア）の展開も可能とする他、パーティクルアーマーの通常展開だけで都市ひとつを壊滅させる対消滅を引き起こす。？ 後にこの機体に使いられた技術をデチューンする形でISに搭載したのがISアライズであり、A-CIS（エイシス）シリーズでの技術試験という前段階を経てVIC6の戦力となったが、ヴァナルガンドは前述の欠陥から再構築戦争中盤で全機が廃棄となったとされている。

# S 1 . 0 : 学園編

## # 0 1 入学式当日

—— 4月1日

日本帝国長崎県五島市浜町

男女群島・国連直轄領トキオ自治区セントラル区

メガフロートと旧コロシア艦の集合体で成り立つ洋上都市——そこに、I S 学園は置かれていた。

### 【I S 学園】

コンペートの操縦者育成、またI S（アライズ含む）に関する技術、発展、研究を目的とした教育機関。

その運営、資金は基本的には日本政府、また協定参加国や参画企業がそれに協力する。しかし、当機関で得られた技術は公開義務があり、また当機関の内部における問題は

協定参加国の理解できる解決をすることを義務付ける。

なお、I S 学園在役中の生徒は日本政府および各国からの義援金により生活の保護を受ける事が出来るものとする。

ただしアライズ関連技術は同機の拡散を防止する為に技術公開は義務ではなく努力義務とする。

(――アラスカ条約・第7条コンペイト操縦者教育機関に関する規定条項第2項より抜粋)

――I S 学園1年1組教室

女子で賑わう中、1人だけ男子という環境。

そこに箒はいた。

(一夏――あの報道、本当だったららしいな。)

箒は幼馴染でもある男子織班一夏を見て、内心眩く。

1ヶ月前、突如男性でありながらコンペイトを起動させたという人物――としてテレビに載った瞬間には思わず驚愕したのは記憶に新しい。

周囲の女子も箒と同じで、唯一の男子に視線を向け、雑談に興じている。

(…出る杭は打たれる――と、ならなければ良いが…)

コンペートを運用する業界は、ISが女性にしか動かせないが故に女は男より優れているという女尊男卑思想——言い換えれば、再構築戦争以前の古い発想——が未だ色濃く残る界限だ。

…自らの立場を脅かしかねないとありもしない脅威と見做し、排除に動く可能性もある。

(——だから出来れば、嘘であつて欲しかった。)

そう内心箒が眩くと、ふと——自身を見る、嫉妬や憤怒に近い視線を感じた。

…恐らくは、要人保護プログラムに従つて試験をフリーパスして入学した私が許せないのだろう。

(——まあ、その感情が当然か。)

ふと——翠色のショートヘアの小柄な女性が視界に映る。

メガネをかけておられたれ目も相まってインドア派の印象を受ける。

緑色の髪はよくそんな奇抜な色に染めたなど関心すら思ってしまう。

だがその目を見て——ハツとする。

…冷静に、大人しく見えて——殺意を封じ込めた瞳をしている。

——血に濡れた事のある人間の目付きだ。

(——ナガトと、同じ…)

思わず箒は内心独りごちる。

今まで“そうした環境”で生きてきたからこそ、箒もそういう人間の見分けはでき  
る。

…他にもそんな人間がいる可能性があった。

「それじゃ、SHRはじめますよー」

「は、はい」

視線が向いている事に緊張してしまい箒は思わず声を上げてしまった。が

「……………」

言った瞬間視線が無関心から何かに変化した。

やつちまったなと言う視線や憐れみみたいな視線。

盛大に滑ったよと声に聞こえてきそうな視線。

(……言わなきやよかった)

思わず赤面し、机に顔を伏せた。

「それでは皆さん、1年間よろしくお願ひしますね」

「よろしくお願ひしますー!」

思わず箒は再び声を上げた。

——そして失敗したと自覚する。

皆は一人の男子が気になるらしく誰も声を上げなかったのだ。

—— 気まずい。

(皆教官には挨拶はするものではないのか?!? 仮にも教えを乞う者だろうに……!)

「ふふ、篠ノ之さんは真面目なんですなあ…。授業態度に反映しときますね!」

—— その一言に全員が弾かれたように視線を教員に向ける。

…分かりやすいな—— 誰が話を聞いていなかったのか。

「遅くなりましたが、私は1組副担任を務めます。山田真耶と言います。

では—— 皆さんも自己紹介をお願いします。えっと、出席番号順で」

「はい、相川清香。中学時代はハンドボール部に所属していました。IS適性はBですがこの学園で学び能力的に人格的に向上していきたいと思えます。皆さん1年間よろしくお願いたします。」

自己紹介を終え席に座った相川。

しかし自己紹介中も席に座り終えた後も視線は前の席の男子に向いている。そう言った感じで順に自己紹介をしていくのだが誰もが視線は男子に向けられたままだ。

「織斑君。……織斑君? 織斑一夏君?!」

「は、はい!?!」

何やら考え事をしていたらしく声が裏声であった。

「あ、大声出してごめんなさい。でも今自己紹介をしてる最中で次が「お」何だけど自己紹介をしてくれるかな？　だ、駄目かな？」

「いえ、ちよつと考え事してただけなので……つていうか自己紹介くらいしますから先生落ち着いてください。」

「ほ、本当ですか？」

「はい。ええつと」

そう言つて立ちあがり後ろを向くが多数の視線をまともに見てしまい、汗が出ているのが分かる。

（———そういえば、昔の私もあんな感じだったなあ……。）

ふと、ROTCに行かされた当初の自分に重ね合わせながら、織斑を見やる。

落ち着くために小さな深呼吸をし気持ちを落ち着かせようとした。

「織斑一夏です。よろしくお願いします。」

「……………」

拍手もなく、よろしくお願ひしますと返事もなく———あるのは期待の視線と沈黙だ。

「以上です！」

強引に締めくくる。

一昔前のコントよろしくずっこける女子が多数、苦笑する女子数人、頭を抱えた私が一人。

(せめて未熟者ですが力を尽くす所存ですとか言うべきだろう——上辺だけでもいいから)

そう思っていたらいつの間に教室に入ったのか、ビジネススーツを着込み、織斑にズンズンと近づく女性が——ガツンツと出席簿で頭を殴った。

「げえっ！ 関羽!!」

(——なにを…言っている?)

ネタで言っているにしても教室の中では誰も笑っていないかった。

箒はそもそも眼前で展開された体罰沙汰に始まり織斑の珍妙な反応に至るまで——

——脳が理解出来ず思考が停止した。

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者」

そう言つて教卓に立ち、改めて姿を確認する。

目が俺よりも釣り目できつい印象を与える瞳。

しかし、畏怖よりも憧れの印象を与える。

黒髪を後ろで一つに束ね降ろしているが野暮ったさはなく、綺麗にまとめられている印象を受けた。



——そしてその瞳も、やはり血に濡れた経験者の目付きをしていた。

「諸君、私が織斑千冬だ。なにはともあれ入学おめでとう。君たちはかなりの倍率があるＩＳ学園に入つて来るために努力した事だろう」

そこでいったん会話を止め織斑と、私を見る。

おそらく臨時的措置で入つてきた織斑と要人保護プログラムに基づき入つた私達に思う事はあるのだろう。

しかし私にもどうしようもない。

どうする事も出来ない。

出来るなら、あのまま新東京箱根の、平凡な公立高校に行きたかった。

だが叶わないのだ。

——無意識に、私は教卓を見つめる瞳を鋭くしていた。

「君たち新人を一年で使いものになるまで育て上げるのが私の仕事であり義務だ。ＩＳは本来競技用を取っているが兵器としての側面もある。その危険性、扱い方を私はスパルタ式で教えていくので覚悟していくように。出来ない奴にはできるまで指導してやる。逆らつてもいいが私の言う事は聞け。いいな」

——理不尽ではない。横暴ではあるが目標はある。

…なら、少しはマシか、箒がそう思った。

## ——瞬間

「キエエエアアアアア——！千冬様よ！最強のヴァルキリー『ブリュンヒルデ』」

「国家代表生時代からファンです！」

「私は代表選手権争奪戦で一目惚れしました！」

「私、御姉様に憧れて猛勉強してきました！新大阪から！」

「私はロストツクから！」

「不束者でございますが私に夜の勉強会を開いてください！」

「私、御姉様のためなら死ねます！調教して！」

黄色い悲鳴の濁流

——頭を攪拌されるような衝撃に、一瞬平均感覚が失われる。

…人気アイドルがある日突然教室に転校してきたらこんな感じになるのだろうか。

いや、だとしても——

「うるさい、頭が割れる。」

苛立ちから、箒は小さく零す。

風邪をひいて苦しい時に耳元で騒がれて抱く感情

——それに近いものがあつた。

「……はあ、なぜ毎年こうも騒がしいのだ？」

よくもこれだけの馬鹿者どもが集まる。

それに感心させられそうになるのだがこれは新手の洗脳か何かか？もしや私のクラスだけ馬鹿者を集中させているのか？」

そしてうつとうしそうに溜息を吐き愚痴をつぶやく先生。

——それには同意する。

そう感じた瞬間、再び——

「キヤアアアアアアアアアア！御姉様！もつと叱つて！罵つて！貶して！そして冷めた目で私を見てえ！」

「でも時には優しく耳元で甘い言葉をささやいて！」

「そしてつけ上がらないよう調教をして——!!」

限度と言う物を知らないような、品性を疑う絶叫が上がる。

——なんだココは、新手の宗教団体か何かか？

（ああ、ナガト……なんでこんな時に居ないんですか……？）

思わず、義理の父親を頭の中で思い浮かべ、箒はダメージを抑えようとする。

「静かにしろ！」

「……………」

ただ一言で悲鳴は鎮圧された。

……さすがというか、教職員は伊達ではないようだ。

IS代表選手を蹴散らし世界最強の座を手に入れたというのも伊達ではない。

「で、挨拶もまともにもできないのかお前は？」

「いや、千冬姉、俺は——」

バツコン！

「学校では織斑先生と呼べ」

再び出席簿で叩きつけられる織斑——

「え……？ 織斑君って千冬様の血縁の弟？」

「それじゃあ、ISを動かせるって言うのも納得かも」

「え、じゃあもう1人の試験をパスしたって子は——？」

口々に紡がれる雑談の矛先が箒に向く。

同時に、

「篠ノ之、次はお前だ。このままでは他の生徒が気になって授業が身に入らん」

「は。」

確かに未だ織斑の方に視線を送っている者、

箒に視線を向け、だが興味を無くす者、

それでも視線を向ける者様々な女子が居る。

「——御殿場東予備役将校訓練学校中等部から来ました、篠ノ之箒です。IS適正

はCと未熟者ですが、本校で学を積み、社会に貢献できるような人材になれるよう、精進致するつもりです。」

そう言つて席に座る。

それで許してくれたのかこちらに視線を向けていた女子が前に向き直り織斑の次の人が自己紹介を始める。

そして、いろいろと時間がとられたせいか全員が紹介を終わるまでにSHRは終わつてしまつた。

「さて、SHRは終わりだ。諸君にはこれからISの基礎知識を半月で覚えてもらおう。その後実習だが、できれば基本動作は半月で体に染み込ませろ。いいか、いいなら返事をしろ！よくなくても返事はしろ！」

「は、い！」

全員に合わせて私も声を合わせる。

「で、なんでお前は返事をしない織斑」

(……馬鹿……)

なぜ学習しないんだ、と箒が頭を抱えたのと、

「判断が遅い——ッ!!」

今度こそ出席簿が折れる程の一撃が叩き込まれたのは同時だった。



—— 5分後

SHR後、1限目まで10分間の準備期間が与えられ、その間に箒はノートや筆記用具、必要になるだろう教本を机の上に出していく。

—— 女子からは、ROTCにいたという事で余計に距離を取られているが、箒からすれば、知った事ではなかった。

ふと——

「あ、よお……。」

傍らに一夏が立ち、箒に声をかけてきた。

「箒……だろ?」

少し恥ずかしそうに、思春期相応の反応をして、一夏は話しかける。

…それに箒は—— どうして良いのか分からなくなつた。

…何しろ、自分の知る一夏とは見違えていたからだ。

「…ああ。」

だが—— 先程の馬鹿さ加減を思い出し、そういえば昔から抜けてる所があつたな  
と思ひ出す。

「久しぶり…だな。」

たどたどしく、一夏は問い掛ける。

「…そうだな、10年来か。相変わらず抜けてる様子は変わってないな。…打った箇所、大丈夫なのか？」

対照的に箒は、努めて冷静に現状の印象と出席簿を叩きつけられた頭部について問い掛ける。

「え？あ、あ…いや正直痛いけど…」

たはは、と一夏は笑って誤魔化そうとするので、箒は立ち上がって——  
「見せてみる」

一夏の打撲痕を覗き込む。

「イ——ッ！」

「——ここだな。たんこぶが出来ている。…頭痛や目眩、吐き気などといった症状はあるか？」

「え？いや、無いけど、なんで…」

「そうか——では、脳挫傷になってる可能性は無さそうだな。」

——脳挫傷とは、頭部に強い外力が加わることで脳そのものに傷が出来た状態の事を指す。

挫傷した脳には、脳の腫れや出血が出現し、数時間から数日間の経過で浮腫や出血が伝播。開頭減圧術や血腫除去術などの外科的治療がなければ対応出来ないという高次脳機能障害や運動麻痺、失語症などに繋がる病である。

症状としては、意識障害をはじめとして、頭痛、めまい、吐き気や嘔吐など生じるといふもの。

——一夏はこのどれも該当しなかったので、恐らくは大丈夫だろう。

：上記のような病を起こしかねない為、現在では頭部への打撲は教育現場では禁じられている。

「念の為、後で保健室へ行っておけ。何かしらの症状が出ても厄介だ。——今は時間もないし、とりあえずソレで冷やしておけ。」

そう言つて箒は自身が持っていた金属製の水筒を一夏に渡す。

中には冷えたポカリスエットが入っている上、4月はまだ外が冷える時期。保冷剤代わりには最適だろう。

「お、おう。サンキュー……」

箒の診察違いの行為——それに一夏は一瞬気圧されてしまう。

「あ、そうだ！家族さん元気か？」

話題を変えようと、織斑は口にする。



——だがそれが地雷であると、一瞬後に知らされる。  
「死んだ。」

「…え？」

「再構築戦争で皆死んだ。」

——冷たく言い放たれた事実。

箒の、触れられなくなかったであろうプライバシー的な部分に触れた事を悟り、一夏は慌てて謝罪の言葉を脳内で陳列する。

「ツツツ…わ、わりい！俺…」

「別に気にすることは無いだろう。——こんな時代だ。大切なものを失っていない人間など、もう誰も居ないだろう。」

そんな一夏を面白そうに箒は笑う。

——その瞳は、達観を形にしたような雰囲気を纏っていた。

「なんか…変わっちゃまったな、箒」

「…10年も経てば、人は変わりもする。むしろお前の変わらなさに驚かされる。」

「はは…よく言われる…」

痛い所を突かれた——そう言わんばかりに苦笑いする。

「…それで？お前はその調子で大丈夫なのか？」

「ジトリと見る筈に、思い出したように一夏は飛び跳ねた。

「そうだった！どうなるんだ俺？ここで何かしらの成果出さなきゃ卒業と同時にとある研究所の施設にぶち込まれ一生モルモット生活とか嫌だぞ筈！」

「∴成果をだしてどこかの国の代表候補制でもなればいいんじゃないか？」

——あるいは、自衛隊<sup>ウツチヂ</sup>に来てアライズ乗りにも転職するか。」

——多分成り手不足に喘いでいるから盛大に歓迎してくれると思うぞ、と付け足しながら筈は選択肢を提示する。

∴確かに、アライズは男でも動かせる事実上の軍用 I S だ。

そこに紛れ込めれば、一夏の希少性はかき消せる。

——だが、コンペートを起動させたという結果は消せない。

「いや、そう簡単じゃないだろう？それになつたとしても不慮の事故で消えました。しかし現場には不可解な事があり俺の遺体がありませんでしたとかがありそうじゃなか。」

貴重なコンペートを動かせる男性をそれに携わる企業、政府、国家を放置しておくはずがない。

中にはなんとしてでも細胞、遺伝子、ナノ単位まで調べたい、調べて利益に繋げなければならぬと思う輩もいるだろう。

だが——

「さすがにそこまでするか？」

「……まあ、俺の考えすぎって面もあるかもな。けどコンパート動かしてから政府にホテルに保護と言う名の監禁くらった日には一般人の意見なんて聞き入れてもらえねえよ」

ホテルに監禁されていた時さすがに高級ベットで1日寝続けてるわけにもいかず、見れる物がTVだけで、出ようとするものなら「部屋から出るな」の一言だけで入り口から出ていこうとすれば数名のSPが俺を床に伏せスタンガンを当てられ気絶、目覚めればさつきまで寝ころんでいた高級ベットの上。

——そんな生活をさせられていたのだという。

それを聞いて箸はため息を付き、

「やりたい放題だな……総務省の奴ら……」

呆れたような、同情するような——そんな声を発した。

「ちよつとよろしくくて？」

「え？」

「何？」

唐突に2人に声を掛ける人影が。

——腰に手を当てモデルの様な姿勢。

——目はブルーでキリツとまっすぐにこちらを向いている。

——腰まで届いている金髪はかなり手入れにケアをしているのか乱れがなく、綺麗に縦ロールになっている。

「聞いてます？御返事は？」

「あーはい、聞いてますけど？」

「なんですそのその間抜けな返事は！ わたくしに声を掛けられただけでも光栄なので、それから、それ相應の態度があるのではなくて？」

「——誰だ、貴様。」

思わず箒は心の声が出てしまった。

「な！わたくしを知らないですって!？」

「∴地球の裏側の、赤の他人が知っているとと思うか？それに——」

甲高く吠える女に対して、箒は努めて静かに——

「初対面の相手に話を振ったんだ。ならせめて——自己紹介くらいはするべきではないか？」

——ドスの効いた低い声音で、女に喰らい付いた。

それに面食らったのか、一瞬女は怯む。

だがすぐに勢いを取り戻す。

「くつ良いでしょう、私はセシリア・オルコット。イギリス代表候補生にして、入試首席ですわ！」

オルコットが歯切りをして悔しがっているのが分かる。

だがそれで、箒の印象は少し変わる。

——なるほど、相手はエリートか。

そうした人種であればある程、自尊心が強い。

「ほう、イギリスの代表候補生か。それに加えて入試主席とは…感服するよ。」

——故に、適当に御立てしておく。

「フンそうでしょう？そう、エリートなのですわ！」

そうすればだいたいの相手は落ち着いて行く。

この手合いは、自分より人気があるものに対する嫉妬深さや思い通りにならない事に

苛つき易い。

…踏み込んでみれば、他人の目が気になって尻込みしてしまったりする性格の者もある。

だが、どちらにせよ面倒臭い人間であることに変わりはない。

そこで予鈴がなつてしまい遠巻きに三人のやりとりを見ていたギャラリーも席に着いたり自分の席に戻っていった。



ROTC時代に学んだ単語がチラホラと出てきたりして、仄かに懐かしい。  
ふと――

「織斑君、何か解からないところありますか？」

「あ、えつと……」

「解らないところがあつたら訊いてくださいね。何せ私は先生なのですから」

自信を持つて胸を張る山田先生。ISに関しては余程の自信があるらしい。

一夏は一度教科書に目を落とし自分に聞き落としや間違いが無いか調べているらしい。

すこし時間がかかり、よくわかっていない所を見つけたらしい。

「先生！」

「はい、織斑君！」

「ほとんど全部わかりません」

「は……」

瞬間、箒は思考回路がショートした。

混乱と困惑と形状がたい感情が込み上げる――

「……え。ぜ、全部ですか……？」

山田先生も同じらしい。

さすがに質問とか、用語とかではなく、「全部」だ。あり得ない。

（一夏）——貴様中学を卒業してから今日の入学までの間何をしていた？  
口には出さない。

だが——思わず疑念の視線を向けてしまう。

「え、えつと……織斑君以外で、今の段階で解らないって言う人はどのくらいいますか？」

拳手を促す山田。

箒とて、アライズという畑違いの場所から来た為に質問はあるのだが、さすがに理解できないと言うわけではない。

「……えと、織斑君、どのようなところが解らないのか教えてくれませんか。」

「いえ、だから、その……ほとんど全部わからないんです」

「な——」

——絶句した。

有り得ない。

一体全体お前はどうかつとるんだ。

「……えつと、刑法的な事がですが？」

「それもです」



「……機械的な事も?」

「はっ」

「……I S条約や規定の事も?」

「はっ」

「……」

泣きそうになる山田。

まるで自分はダメ教師なんだと自己嫌悪してなければいいのだが——

「……織斑、入学前の参考書は読んだのか?」

ふと箒は春休み期間に読んでいた本を思い出す。

特に機械的なことについては、ROTCで習った範囲やアライズにも用いられている技術が多かったのでスラスラと理解できた。

??アクティブセンサー（自ら電磁波や赤外線を派生させその反射したそれらを読み取り物体の検出する装置）

??パッシブセンサー（物体は熱量に応じた赤外線をだすためそれを読み取る装置）

??ハイパーセンサー（目視できない距離の捕捉、視野外のカバーをする装置）

それらを見て、興奮を覚えたのはやはりナガトの影響だろうなど箒は思う。

なので、一夏の次の発言で箒更なる衝撃を受けた。

「古い電話帳と違って捨てました」

バアアン！

——響く炸裂音と共に箒の懐かしい思い出も霧散する。

「必読と書いてあっただろうが馬鹿者。後で再発行してやるから一週間以内に覚えろ。いいな？」

「い、いや、一週間であの厚さはちよつと……」

「やれと言っている」

「……はい。やります」

——なぜ捨てた？

箒は思わず口をあんぐりと開けて一夏を見た。

ドジとかうっかりとかのレベルなどではない。

やる気がなくて読んでなかったなどの方がまだマシだ。

「ISはその機動性、攻撃力、制圧力と未だに通常兵器を凌ぐ性能を有している。

そう言った兵器を深く知らずに取り扱えばからならずしも事故が起こる。

未だ自動車でも事故が無くならないのと同じ様なものだ。そうしないための基礎知識と訓練だ。

理解できなくても覚えろ。そして守れ。規則を覚える、守るまではISに乗せたくない

いと私は思う。」

—— 正論だ。

だがしかし——宇宙開発用のパワードスーツが軍事関連に加わるのは仕方のない事だとしても、なぜそれを本来の運用法に戻さないのか謎だ。

ISが宇宙で活動した事は1度も記録になく、精々が大気圏にアステロイドベルトから落下してきたデブリ破砕程度。

…ロケットを打ち上げるよりずっと、容易いはずなのに。

「……貴様は『自分で望んでここに在るわけではない』と思っているのか?」

一瞬一夏と箒の身体が跳ねた。

「望む望まざるにかかわらず、人は集団の中で生きている。それを放棄したいならまず人間であることをやめるべきだと思うがな」

もしくは本当に1人で生きていくか。

—— いいや、無理だ。今の世界は群れで生き抜く事すら難しい。ましてや1人など……!

箒は知っている。

よく知っている。

—— 呆気なく消滅する巨大都市。

—— 街から放り出された難民。

—— 行き倒れ、干からびた死体の群れ。

……再構築戦争でそれを目の当たりにしたからこそ、よく知っている。

だからこそ、秩序と規範が今の世界では何よりも重要であるということも。

「さて、授業再開と行きたいが、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めておかないとな」

（クラス対抗戦？コンペートを使った実技競技なのだろうか？）

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会の出席……まあ、クラス長だな。ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点では大した差ではないが、競争は向上心を生む。一度決まると1年間変わる事がない。自薦他薦は問わない、誰かいないか？」

—— とりあえず、一夏はない。申し訳ないが。

—— 箒は内心断言した。

確かに唯一の男子を据えれば特色は出るだろう。

……しかしこの分だと各クラスとの競争に耐えられない。

（—— いつそ皆で戦えば良いのでは無いだろうか。）

やる気のある者ならそこで力を発揮しようとするから、全体の向上に繋がって、いい

事づくめではないかと箒は思った。

「はい。織斑君を推薦します」

「私もそれがいいと思います」

「お、俺?!」

——しかし残念ながら、箒の期待は裏切られる。

やはりというか、一夏を推薦する女子が続出したのだ。

「織斑。席につけ、邪魔だ。さて他にはいないのか? いないなら無投票当選だぞ」

「ちよつ、ちよつと待った! 俺は——」

「納得がいきませんわ!」

机に手を叩いて立ちあがったオルコットは険しい目をこちらと織斑に向け声を荒上げる。

「その様な選出は認められません!」

——それについては箒も同意する。

「右も左も分からない様な男がクラス代表だなんて良い恥さらしですわ! わたくし達に、その様な屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか!?!」

——ドが付いても足りない素人が飛び込めばどうなるかなど、火を見るより明らかだった。

「実力から言えばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で推薦されては困ります！知識がなく素人同然なサルなど推薦しないでください！わたくしはＩＳ技術の修練に来ているのであって、動物園に来たわけでも、サーカスに所属する気も毛頭ございませんわ！」

——なるほど、これはぐうの音も出ない正論だなと箒は思う。

知識が無いサル——幼馴染を馬鹿にされている上に過激な発言だが、内容自体は何も間違いでは無い。

「いいですか!?クラス代表は実力トップがなるべきもの。そしてそれはわたくしですわ！」

凄まじい自信だ。

大体人って言うのは心のどこかで不安を抱え尻込みするものなのにオルコットは、そんな不安などださずに堂々と宣言している。

貴様らは弱い。

だからわたくしが導いてやる——と、ここにいる全生徒に向けて言い放っている。

——ノブリスオブリージュ、と言うやつだろうか。

箒の勘違いかもしれないが、頼もしい奴と思った。

——なら、決まっている。

「セシリア・オルコツトを推薦します。」

「む。」

「え。」

箒がセシリアの推薦を言い放つ。

それに千冬は身構え。

セシリアは意外なところからの推薦に、一夏はまさかの幼馴染がセシリアの肩を持つた事に驚きの声を上げた。

「——過激な発言が目立ちますが、他クラスとの競争も考えるのであれば、彼女の主張にも一理あるかと。」

それが箒の考えだった。

全てを容認するわけではないが、セシリアの主張は筋が通ってはいる——と。  
「…じゃあ、私も…セシリアさんに…。」

「織斑くんも捨てがたいけど…ごめん！クラス同士で競い合うなら実力のあるオルコツトさんを推すわ！」

箒の推薦を皮切り、一夏を推薦しなかった女子達の票がセシリアへと流れて行く。

そうして——セシリアの票と一夏の票が拮抗した。

「…さて、全員推薦対象はまとまったか？…それでは2人は一週間後の放課後、クラス代表の座をかけて第三アリーナにて試合をしてみよう。オルコット、織斑は準備しておけ。特に後者は恥をかかないようみっちり勉強しとけ——。」



—— 同時刻

IS学園・多目的防災署

IS学園の一角にポツンと建つ、3階建の合同庁舎。

そこがナガトに割り当てられた施設だった。

—— IS学園警備部への異動辞令。

箒に追従する代わりにここへの異動が決まったのだ。

先に搬入された機体は見当たらない—— おそらくは、地下に格納庫があるのだろう。

「—— まあ、とりあえずは挨拶か。」

そう思い、入り口のドアノブに触れて—— 扉は、開かなかった。

「…アレ？」

ごく普通の、手動スライド型のドアだ。



しかし、ビクともしない——鍵がかかっている。

「…おつかしいな…。」

——電気は付いてるから開いてるはずなんだが、と独りごちる。

…とりあえず、中の人間を呼ぶとしよう——そう思い至り、インターホンを押す。  
カチ、カチ。

——しかし、乾いたクリツク音を響かせるだけで、ベルの音は全く鳴らない。

カチカチ、カチカチカチツ！

…何度押しても変わらない——。

(壊れてんじやねーか…！)

はあー、とため息を吐き、ふと——視線を左に向けると、テンキーが目映る。

それにハツとして、ここに来て渡された身分証明書に乱雑に突っ込まれていたメモ帳を取り出した。

——20090125。

メモ帳には、8桁の数字が刻まれていた。

それで全てを察し——テンキーのタッチパネルを操作する。

(…つたく、最初から言えってえの…！)

内心毒付きながらナガトは扉を開けて中に入る。

—— フロントはがらんとしていて、誰もいない。

(…ホントにここで合ってるか?)

思わず、事前に渡された書類に目を通す。

—— 間違いない。

I S 学園多目的防災署…とまでは書かれているがそれ以降がない。

—— 雑過ぎないか、仕事…。

はあ…と、再び深いため息を吐く。

「お、アンタかい?新しく来たのは。」

ふと——いつから居たのか、廊下の隅の自販機に硬貨を入れて飲料水を買って

る男が目映る。

前髪は先端が目には掛かる程で。

後髪はうなじまで伸びていて。

上唇と顎に無精髭を生やしている。

それに反応して、ナガトは反射的に敬礼する。

「——は、陸上自衛隊第3帝都防衛局直轄第305機動隊から来ました、八雲ナガト

Ⅱアウグスト一尉であります。」

「よせやい。アンタ俺とだいたい同年代だろう?敬語なんて固っ苦しいのは抜きにしよ

うぜ。」

「は、はあ…。」

——その、想定外の反応にナガトは呆気に取られた。

上下関係が徹底される組織柄、そんな事を言われるのは初めてだったからだ。

「俺は高木道生——よろしくな、八雲さん。」

男——高木道生はそう告げた。

——どこにでもいそうな、自分と同年代の男。

ただひとつ——どことなく、織斑千冬に似た顔つきであるという事を除いて。

## #02 鍛錬

日本帝国長崎県五島市浜町

男女群島・国連直轄領トキオ自治区セントラル区

—— I S 学園・食堂

スペイン様式のインテリアデザインが施された食堂は、多くの生徒や職員で賑わっていた。

…その一角に箒と一夏は対面で座っており、箒は手作りらしい弁当を。一夏はトルコライス定食を食していた。

「スマン箒ッ！俺に I S の操縦を教えてください!!」

このとーり！と一夏は手を合わせ、眼前にて弁当を食す箒に頼み込む。

それは箒はジトリと見つめながら、問いかける。

「…一夏。」

「…ハイ。」

「今朝再度渡された参考書を読んで、コンペートの機能について、どこまで頭に入った？」

「え、えーと…」

——あの一件の後、再度渡された参考書を一夏は必死に見ていた。

だが、本来1ヶ月程かけて見るようなモノ。

休み時間を含めても10分〜20分しか無い中で読んだ中で頭に入る量など知れている。

「PICつてやつで飛行出来て、絶対防御つてバリアで守られてて…思考操作が主流だけと言語操作も出来て…あとは…スラスターを急噴射することで加速する瞬時加速つて技量が必要になるとか…くらい、かなあ…」

「…ふむ。」

たどたどしく、一夏は応える。

箒はそれに短時間で最低限のことは頭に入れたのだなと理解する。

「アリーナで運用する分にはその程度の知識で良からう。…しかし何故私なんだ。それだけあれば山田先生とかに頼めば良からう。」

「いや、うん…その…、全部分からんとか言つてあんな顔させちまったから…」

…などと口にしながらかし訳無さそうな顔をして視線を下げる。

「なるほど、合わせる顔が無いと。」

「…ハイ。」

「はあ……」

—— 本当ならば了承したいのが、箒の本音だった。

…しかし、そう簡単には行かない。

一夏はこの様子だとマトモにコンペート運用が出来るまでに時間がかかる。クラス代表決定戦まで、あと一週間。

—— とてもじゃないが、間に合わせられる自信が箒には無かった。

…そしてそれは一夏も同じだ。

自業自得とはいえ、知識面で遅れている分を参考書で取り戻さなくてはならない上に、これから始まる授業にも付いて行かなくてはならない。

そこにクラス代表決定戦が加わって来たのだ。

ハードスケジュール、という一言では済ませない重圧がのしかかっている。

—— とてもじゃないが、今からセシリアに追いつけるとは思えなかった。

袋小路—— それが、2人の現状を表すに相応しい言葉だった。

(…困ったな…。私だけでは、どうにも——)

頭を抱え、内心呟く。

「おつ、ここに居たか一坊。」

ふと—— 知らない男の声がして、

「道生兄！」

一夏が反応する。

続いて――

「よお。随分と困っているようだな、箒。」

「…ナガト…！」

道生と呼ばれた男について来たであろうナガトを見て、箒は安堵の笑みを浮かべた。

――5分後。

「なるほどねえ、来週までに腕磨かにならんワケか。」

事情を聞いた高木は、随分と面倒な事に巻き込まれたなあ――と笑う。

「他人事だと思つて言うなよお…いやまあ、参考書間違えて捨てた俺も悪いんだけどおおお…」

それに一夏は凹みながら嘆きを叫ぶ。

「…知り合いだったのか、2人とも。」

そんな高木と一夏を見てナガトは口にする。

「ああ、道生兄は俺の親戚なんだ。父親代わりみたいなのモンさ。」

――なるほど言われてみればと箒は、外見が似ているなど思い納得する。

——一方、ナガトは互いに敬語を一切使わない辺り、同じ血だなと内心思う。

「そういうお前さんはどうなんだい、八雲。」

「——だいたいお前らと同じだ。箒の里親をやつとる。…で、要するに来週までに技量を磨かにならんのだろう？」

——ズレた話の方向性を、ナガトは修正する。

「…はい。私個人としては請け負いたいのですが…何から教えたなら良いか…。」

「ふむ…なら、まずは織斑くんの戦闘スタイルがどんなものかを考えてみることからだな。」

ナガトは提案するように口にする。

「戦闘スタイル…ですか？…一夏、お前は得意とするものはあるか？…その、例えば剣術とか。」

「…強いて言えば…うん…剣術、か、なあ…。」

箒の問いに、一夏は歯切れ悪く回答する。

それを高木がチャンポンを食しながら、笑う。

「それらしいのが剣道くらいだもんなあ、銃とかは触れた事ないもんな、一坊は。」

「——ふむ。つまりは箒と同じブレード使いの適正がある訳か。」

それらを聴いていたナガトもまた、頭を抱え出した。



「——参ったな…そうになると、益々相手との相性が悪い。」  
 「はい。刀で鉄砲隊に挑む様なものです。」

ナガトの言葉に筈が続き、そして高木も無言でそれに頷いた。

——セシリア・オルコットの駆る専用ISブルー・テイアーズは、ラファール系列の派生機『サイレントゼフィルス』とEOSBAEs<sup>ブルー</sup>—EoS44<sup>ウェー</sup>の合いの子である武装試験用ハイエンドコンペイトだった。

イギリス兵器特有の狙撃戦を想定した装備構成であり、弾速で右に並ぶモノがないレーザー兵器や支援用ドローンたるオービット兵器を搭載した、遠・中距離戦特化型機となっている。

…つまりは、近距離戦しか取り柄の無いブレード機体とは、あまりに相性が悪い——  
 ——という事だった。

「…け、けど、懐に入り込めれば——」

ふと、それをふんわりとしか理解出来ない一夏は反論する。

「確かにな。…だが、その前にレーザーの雨で叩き落とされちまうぜ、一坊。」

そこに高木が現実を叩きつけ、一夏もついに黙ってしまふ。

——前途多難。

重い空気がテーブルを覆い尽くす。

「…高木さん。」

ふと、ナガトが口を開く。

「だから高木で良いって。で、なんなんだい?」

「MBDS社製のアローズミサイルランチャーとゼネラルボーニング社製のMINI-CIWS。警備課に配備されているか?」

「…アローズミサイルにMINI-CIWS?…なんでまた…。」

ナガトの思惑が分からず、高木は困惑気味に問いかける。

「…上手く行けば、当人の射撃能力に関係なく遠距離攻撃に対応出来るかもしれん。」

ナガトがそう言つて——高木は理解する。

——アローズミサイル。

ドイツのMBDS社が開発した空対空／携行地対空ミサイルであり、アライズやコンペイト用に手持ち型モデルも開発されている。

こちらは視線ロックオンにより目標を設定・射撃可能である為、使用者の射撃精度に関係なく視界に捉えている限り目標を自動追尾し攻撃することが可能である。

——MINI-CIWS。

アメリカのゼネラルボーニング社が開発した近接防衛火器システムであり、早い話が対空ガトリング砲である。

こちらはアライズやコンペイトに肩武装としてのバリエーションモデルがあり、視線ロックオンやハイパーセンサー併用探知による目標の指定が可能となっている。

こちらに至っては自動で射撃を行い目標を追尾射撃してくれる。

…つまり、どちらも使用者の射撃の腕に依存しない、勝手に遠距離攻撃を成してくれる武装という話だ。

——近接格闘しか取り柄がないであろう一夏にとっては、これ以上にならない程強力な対抗手段だった。

「しかしナガト…、それは警備課の装備なんですよね？生徒に使わせるのは職権濫用では？」

——箒が御尤もなツツコミを入れる。

確かに、これでは確実にアウトだ。

「…残念ながら、装備の定期使用点検が警備課では遅れているらしい。

それに協力してもらおう形にするさ——それに、プロに挑ませる全くの素人に多少のサポートを課したところで、文句は出まいよ。そうでなければあまりにアンフェアだからな。」

「…まあ、対策も何も無いよりはマシか…確かどちらも配備されてはいた筈だから、今から行って手配しておく。」

ごっそーさんと、ちょうど食べ終わったチャンポンの盆を持ち、高木は先に席を立った。

「——さて、織斑くん。」

ナガトに声をかけられ、一夏は弾かれたようにそちらを見る。

そこには、イイ笑顔を浮かべたナガトがいた。

「…幸い今日は入学式当日だから午後から一年生は自由時間だ。」

「え、えーと？」

「善は急げ。とりあえず——俺と模擬戦してみようか。」



——1時間後

IS学園・職員室

「織斑に協力、だと…？」

そこには、『<sup>か</sup>彼の新生<sup>生</sup>』に警備部へ相談が持ち込まれ、こちらの問題の解消に付き合う代わりに短期教練を課すことになった』という旨の報告書を千冬に提出している高木がいた。

「貴様…警備課がそんな事をしては越権行為だろう…」

ギロリと千冬が高木を睨む。

——一触即発の危機。

傍らで山田先生がはわはわと慌てている。

「しかし織斑センセ。織斑くん、随分と面倒なプロに挑まないといけない状況じゃないか。」

その言葉に、千冬は一瞬押し黙る。

「プロ相手に挑む割に、織斑くんが現状の中途半端な状態で挑む事の方が、織斑くんはともかく、プロにも失礼じゃないかね？」

——コチラが一夏にテコ入れて、ようやく最低限フェアになる。

「それに、仮に織斑くんが勝ち上がった場合、今後更に実力を付けなくてはならない——その先行投資と考えれば、安いものではないかい？」

——努めて冷静に告げる。

確かに、現状の一夏では勝ち筋が見えない。

だが勝ってしまった場合、織斑に発展の余地が現状のままでは見えない——事実だった。

…もし後者になれば、どうなる？

織斑の発展性の無さは間違いなくクラス全体を引っ張りかねない。

そうした場合、どうなる——？

…それを考えて、千冬は諦めた。

「…今度は無いぞ。」

「それは承知したがねえ…もちつとアイツの事も考えて設定してやれよ。織斑センセ。」  
アイツとオレたちの頃とは違うんだから、今から厳しくする必要などないだろう——  
——と高木は付け加えながら告げる。

それに千冬は一瞬冷水をかけられた様な反応を示し、また山田先生もその真意を察した。

「——喧しい。…それより、織斑のバカはどこにいる？」

「ん？ああ、アイツなら——」



—— 同時刻

IS 学園第2地下区画VR訓練室

STAGE: 3rd Arena

MODE: Induction

LANGUAGES: English

◆UNIT DATA◆

UNIT 01: Type 03EII | UCHI GANE | SECOND

PILOT: Nagato August yagumo

WEAPON: RA) ROD | LB1 | Canopus

LA) |

RS) |

LS) Type | 11 SHELL | SHELLD

RB) ROD | OBT | 2 | Switchshot

LB) ROD | OBT | 2 | Switchshot

UNIT 02: Type 03EII | UCHI GANE | SECOND

PILOT: Ichikora orimura

WEAPON: RA) MBDS | ALOWS | MISSILE / M

LA) |

RS) MINI | C I W S

LS) Type 11 SHELL-SHELLD

RB) Type 03 BLADE

LB) 1

BS) Type 03 BLADE

——電子の海の中に構成された、学園のアリーナを模した地形。

そこを2機のコンペイトが駆けていた。

…否、駆けていたというよりそれは——蹂躪、としか形容出来ない有様だった。

——大気がプラズマ化する轟音と共に青い閃光が走り、炸裂する。

『うっきやああああ——っ!!』

織斑の悲鳴が上がる。

衝撃で吹き飛び、シールドエネルギーが削られる。

『どうした！こっちはレザバズしか使つとらんぞ?!』

そう言つてナガトは右手に持つ武装——ロイヤルディフェンス社製レーザーバ

ズーカ、RカoDノ—LブBス—1の砲口を再び一夏に向ける。

…モーターが甲高い音を立てて、砲身にエネルギーが充填される。

次の瞬間——轟音が響き、蒼条の閃光が再び一夏のいた箇所を吹き飛ばす…!



『ぬおわア——ッ!!』

——それを一夏は間一髪で躲す。

…そもそも何故ナガトがコンペートを操作できるのか——とは、誰も口にしなかつた。

それはEOSの訓練ユニットをベースに開発されたVR仮想訓練機ユニットであり、ISコアの反応・同調を必要としない為である。

登録されたデータ上であれば、男がコンペートを動かすことも、コンペートがアライズイレギュラーの武装を積むというあり得ない事を実現することも可能だった。

だからナガトも一夏同様に、コンペートを動かすことが叶っていた。

『いやいやいやいや！死ぬ！死ぬじゃうって！そんなの死ぬってエ!!』

——その言葉を遮るように、無慈悲に放たれるレーザーバズーカ。

——それを、管制室で見ている筈は見かねてしまった。

「ナガト、私から言い出してなんですが、やはりいきなりレーザーは酷なのでは？」

…セシリアの機体データはない為、ナガトが可能な限りイギリス製装備で固めて再現し、一夏の相手をしているのが現状だ。

…当然ながら、手加減はしている。というかしなければフェアではない。

片やこの道10年の現役職業軍人。片や中卒したての現役高校生——という肩

書きの素人。

全力でぶつかり合ってはあまりにアンフェアだ。

…とはいえ…、いくらレーザー攻撃を回避することを叩き込ませる為とはいえ…これは。

——そう筈が苦言を呈し、

『相手さんは、これほど容赦してはくれんぞ?』

——そう返される。

…それは、確かにそうだ。

レーザー兵器に加えてオービット兵器の使い手でもあるセシリアの攻撃は、きつとナガトの今のものよりずっと熾烈を極めるだろう。

現にナガトは、セシリア機の再現として搭載したオービット兵器、ROスITイOBツTチ2シを使用せずにレーザーバズーカによる攻撃だけを繰り返している。

『——貴様のその装備は飾りかア?!』

ナガトの罵倒。

続くように放たれるレーザーバズーカ。

『そんな事言つ…ぎやあああああああつ!!』

——そして一夏の悲鳴。

…なんというか、箒は自身の感覚が麻痺していたのだなと思う。

レーザー回避訓練を推奨したのは、他でもない箒だった。

レーザーなど、躲せるだけの反射神経をつければどうとでもなるからだ。

だがそれは——アライズ乗り特有の感性であり、一般人がそんな事ができる筈が無いという事を完全に失念していた。

「すまん一夏…今度何かの形で詫びるから…。」

誰に聞かせるわけでもなく、ただ箒は呟いた。

その背景では、教育隊に配属された新米隊員が教官に扱かれているかの様な惨状が繰り広げられていた。

——蒼の閃光を躲し続けて、どれくらい経つだろうか。

…もう1時間は繰り返しているように感じる、終わらない地獄。

「はあつ、はあつ…、はあつ…！」

打鉄の足が止まる。

閃光が走り——一夏はそれをスラストターを蒸して躲す。

そのまま一夏は打鉄のスラストを蒸し、グラインドブリスト 地面噴進と噴進ジャンプブリストジャンプを繰り返して動き回  
り続けていた。

「止まるな……止まったたら撃たれる……止まったたら、撃たれる……!」

自らに言い聞かせながら、一夏は恐怖から来る涙を目尻に溜めながら必死で機体を操  
作する。

既に感情は麻痺し、ただひたすらに機体の動かし方を身体が嫌でも覚えていく。

とにかく、躲して躲して躲して躲して——!

「はあっ、はあっ……!」

——息が苦しい。

無理に回避を続け過ぎたせいで、体力が限界に近づきつつあった。

……しかし、レーザーの被弾ないし衝撃波によるシールドエネルギー損耗量も、先程よ  
りは明らかに減少している。

……回避のタイミングは身体が覚えつつある。

この先は多分限界だ。

ただこのままやられっぱなしはもつと嫌だ!

だけど今なら——まだ、やれる……!!

「……ッ!喰らっ、ええええッ!!」

意を決すると、一夏は右腕に保持したM B D S製A L O W S—M I S S I L E／Mを  
ナガト目掛けて穿つ……!

——ナガトはそれをレーザーバズーカで容易く迎撃する。

…問題ない。

一撃で無理ならば、何度でも撃ち続けるだけ——!

一夏は続け様にアローズミサイルを発射する。

——呼応するように。

ナガトはB T 《スイツチショット》を射出——ドローンを彷彿とさせる浮遊砲台  
が展開され、

搭載されていた20 m mプラズマパルスガンが火を噴き——次々と放たれたア  
ローズミサイルが撃ち落とされ爆煙を形成する……!

更にダメ出しと言わんばかりに、爆煙を貫きレーザーが右腕のアローズミサイルラン  
チャーを貫いた。

「ッ——!」

すかさずパージ——直後、慣性に従って後ろへ流れ落ちたランチャーが爆散す  
る。

しかし一夏はそれに構わずスラストを蒸し、突貫。

ランダム軌道による回避ステップを駆使し、敵機体——ナガトの懐目掛けて切り込む……！

『ランダム回避が短時間で出来る様になった事は、褒めてやろう——』

再び、レーザーが奔る。

反射的に飛び——蒼の閃光が、シールドバリア越しに左肩を舐めとっていく……！

『だが、この距離じゃ躲すだけでは生き残れんぞ!!』

再び奔る閃光——右肩にレーザーが直撃する。

——衝撃が装甲を介して身体に響く。

——シールドエネルギーを大量に持つていかれる。

(クソ……ダメだ、近づいた分、当たりやすくて……!!もつと、大きく飛んで——)

直後、シールドエネルギー危険値突入を知らせる警報が鳴り、一夏は足が止まってしま

まう——

『——だ阿呆ッ！自分の武器をよく見ろ!!』

そう返され——網膜に投影されていた機体情報を再度見る。

UNIT02:Type03EII | UCHIGANE—SECOND  
PILOT:Ichhika orimura

WEAPON:RA(【LOST】)

LA) |

RS) MINI-CIWS

LS) Type-11 SHELL-SHELD

RB) Type-03 BLADE

LB) |

BS) Type-03 BLADE

——ソレに目を落とした次の瞬間、レーザーが叩き込まれた……!

「——ッ、シールド展開ッ!」

言語操作で一夏は叫ぶ。

——瞬間、打鉄の左肩後方に折り畳まれていた展開式多目的追加装甲が展開。

レーザーを真つ向から受け止める……!

「ッ……!」

僅かに稼いだ時間——右背部に担いでいた03式近接長刀を展開し、右腕で抜刀。

スラスターを蒸す。

レーザーを左肩に受けながら、

「いっつっつけええええええ——ッ!!」

近接刀で、ナガトを横一閃に薙いだ——!

…筈だった。

「——アレ…?」

一夏は思わず目をぱちくりとする。

ナガトは健在だ。

打鉄のフレームに刃が触れた感触も音もない。

ただ刃が空気を切った音がしただけで——。

…それで、自身がナガトではなく、ナガトの一步前にあつた空間を薙いだ——つ  
まり空振りしたという事を理解して。

『織斑ア…』

声の元をギギギと錆びたブリキ人形の様に見上げた。

そこには——再装填され、蒼の光を砲口奥に宿したレーザーバズーカと、ビット  
のパルスガンをこちらに向ける、ナガトがいた。



ヒュツ、と驚愕と共に浅い息をして、あ、やばいちびりそう。怖い…!

『…詰めは甘いけどまあ、初見にしては上出来かな。』

——ふと、急に褒められた。

口調も訓練前の穏やかなもので、先程までの鬼教官めいたものではない。

…それに、上出来——と褒められて、内心嬉しさが生まれた。

(…アレ? だつたらなんで、レーザーバズーカをまだこつちに向けて——)

——その疑問に答えるより早く、

『次は間合いもうちと——詰めような。』

ゼロ距離から、ナガトはレーザーバズーカを一夏に撃ち込んだ——!

「いや無理だろアレ! 無理だろ!!」

V R 訓練室に、一夏の絶叫が木霊した。

あの直後、訓練プログラムは終了し——そうして今に繋がっていた。

「でもなんとなく回避操作のコツは掴めたらう?」

それにナガトはUCCコーヒの缶を開けながら、コーヒをぐいと流し込む。

「…まあ。うん、なんとなく。」

「うし、なら次回から俺も動いて撃つわ。」

「——は？」

…一瞬、一夏はナガトが何を言ってるか分からなかった。

しかし5秒の時間を要して——ハツとする。

よくよく思い返してみれば、ナガトは今回一切動いていなかった。

それどころか一夏はレーザーを躲す事で頭がいっぱいで、ナガトが動いていない事などつゆ程も気づかなかった。

「え、つまり手加減してた…？」

「あつたばーよ。今回は途中までレザバズしか使つてなかったんだぞ。」

「嘘だろ…？アレより、上が…」

だいが今回のでもキツかったのに——と、一夏はクラツと軽い眩暈を覚える。

「ま、即席の訓練だからな。慣れるにはもうちと時間が要るだろう。」

ナガトが言う。

——即席教育。

…確かに、あと1週間しか猶予は無い。いや今日を除けばあと6日。

慣れようと馴れまいと、とにかくまずは無理をしても身体に感覚を馴染ませていく

しかないのだ。

「明日明後日は土日——それが実質的には自由に訓練できる最後の時間だろう。」

ナガトが言う。

「…確かに、部活動だつて放課後にやる分より土日練習でやる方が長くミツチリとやれる。」

「——正念場だな。」

ふと、予定表に内容を書き込んでいた箒も呟いた。

「…一夏、明日から対仮想敵訓練は今日同様ナガトが、近接戦訓練は私が受け持つ。…よろしくな。」

「お、おう。よろしく…。」

——ピロリロリ。

ふと、ナガトの業務用ケータイが鳴る。

「——と、失礼。」

そう言つて、ナガトは席を外す。

…なので箒はドカッと椅子に腰掛ける。

「…すまん…私が対仮想敵訓練なんて言い出さなければ…。」

「…良いつて。それにどうせ、他に対抗策無いんだろ？」

「まあな。私に出来るのは近接格闘技訓練くらいだからな。」

——それに相変わらず教えるのは不得意だ。と。

少し申し訳なく、箒は笑う。

「——とはいえ、明日明後日は対仮想敵訓練がやはりメインだろうな……。狙撃型のオルコットに対抗するには、まず立ち振る舞いのイメージが固まらねば……」

——それを遮るように。

「——はア?!遅れるう?!」

ナガトの怒鳴る声が響いた。——。

……後に分かった事ではあるが、どうも箒に与えられた新型アライズと共同試験予定の機体があるらしく——それを保有するオーストリア合衆国領ドイツ連邦共和国の学園到着が2週間ほど遅れると、そういう話だった。

「はあ、じゃあ仕方ない……ったく——」

（——いやまあ、コッチも1カ月前の東京同時多発テロで内閣総理大臣と外務大臣、財務大臣他数名の閣僚を殺られてるから、人の事は言えねえ……しかし……）

「——第3次ブリテン島上陸戦に第4次マジノ線越境戦とは……。どうなつとるんだ今年の欧州は……。」



—— 欧州大陸フランス圏

—— 現在フランスは、混乱の情勢と化していた。

第2次世界大戦以降、ナチスドイツに占領統治されていたフランスは、小惑星群衝突と第4次非核大戦を経て荒廃——。

再構築戦争後、VIC6であるオーストリア合衆国主導でEUが結成され、フランス

欧州連合

もEU・イギリス連邦資本による復興支援が為されていた。

—— しかし、当時の政権はそれを拒絶した。

イギリスとの度重なる歴史上の武力衝突。

ナチスドイツに支配されていたという実情。

それらの歴史的・民族的悔恨により、フランスは復興に出遅れ、世界から取り残される事となった。

貧富格差の拡大。

破綻したインフラ。

物流輸送網の停滞。

上がり続ける物価。

本土と植民地の逆転。

デモにより閉塞する経済活動。

軍と警察による弾圧の常態化。

壊死し続ける国内情勢。

——あまりに多くの負債を抱えたフランスは時代遅れの巨人であり、だからこそ現政権は復興支援を改めて受け入れようとした。

：そしてそれを快く思わない旧政権派は、現政権に牙を剥き——花の都と謳われた国家は、内戦状態となっていた。

——同時刻

フランス旧首都パリ市

煤汚れた煙が充満し、黒煙が至る箇所から上がっている。

焼け焦げた自動車や装甲戦闘車両が路上に放置されており、建物にはヘリが突っ込むようにして墜落している。

至る所から銃声と砲声と爆発音が木霊する——。

現在。パリは、市街中央を横断するセーヌ川・マルヌ川を境に北部を大統領派、南部を旧政権派によって二分されていた。

——例外として。

エツフェル塔やアンヴァリッド廃兵院といったフランスを象徴する建築物が多数所在する第7区は大統領派がセーヌ川南岸でも優勢。

一方リヨン駅などの主要ターミナルやヴァンセンヌの森などが所在する第12区では、旧政権派がセーヌ川を越えて優勢だった。

セーヌ川を越えてアクセスする為の橋の爆破に失敗した第12区は、旧政権派が大挙し——街区の大半を制圧。

リヨン駅を中心に、隣接するヴァルドマルヌ県シャラントンルポン郡から鉄道網による兵站輸送を確立し、隣接する第11区の制圧を開始していた。

——旧体制派フランス軍第12空中機械化歩兵連隊第2中隊はコンペデイションIS・ラファールリヴァイヴ6機を用いて、隠密性を高めるために速度を落としてリヨン通りを北へ飛行していた。

「敵はバステューユ広場を放棄。レピュブリック広場に後退している。好機だ。このまま敵司令部が置かれているパリ駅を強襲する。」

中隊を率いる女が言う。

確かにリヨン駅を出て通りへ入ってからと言うもの、抵抗らしい抵抗はまるで見られない。

そのまま中隊はバスターミナルへ侵入する。

——瞬間、ハイパーセンサーの索敵画面がノイズで埋め尽くされた。

「ちよつと何よこれ！ハイパーセンサーがめちやくちやだわ!!」

女の1人が叫ぶ。

ハイパーセンサー、レーダーサイトよりは劣るが広大な索敵範囲をもつシステム……とされているそのセンサーは、今はノイズだらけで何も映していなかった。

「故障でもしたんじゃない？だって下等な男が整備したんでしょ？」

もう1人の女がそういう。

だが、その女の機体のハイパーセンサーも調子が悪かった。

というより全員のハイパーセンサーが不調を訴えていた。

原因は整備不良——と彼女らは結論づけた。

「悔るな。ECMを展開された可能性もある。敵は先行した第1中隊によればEOSのみ——やつらの機動力ならばコチラには付いてこれないが、油断はするなよ。」

隊長の女が言う。

確かに、第2世代機のラファールなら、旧式のEOSや戦車を圧倒するくらいは容易



いだろう。

—— 相手が、それだけなら。

『へえ、調子に乗って殺されに来たのね。』

—— ねつとりとしながらも、支配者然とした声がオープンチャンネルで響く。

……女の声だった。

響く高熱源警報と—— 指揮官の僚機が、蒼条の光に貫かれたのは同時だった。

—— 同時刻

パリ東駅屋上

《BAES—4 [TEMPEST / Type—FS]》

—— ARMOR ENDURANCE ——

PARTICLE ARMOR : 100%

COMPOSITE ARMOR : 100%

UNIT FLAME : NORMAL

—— WEAPON ——

RA) ROD—LR1—Starlight Mk. II

LA) ROD—LB2—Interceptor

RS) ROD—ECM07

LS) ROD—LO—2

RB) ROD—OBT—2—Switchshot

LB) ROD—OBT—2—Switchshot

BS) MBD S A L O W S—M I S S I L E / M

— Main system activate combat mode.

騎士甲冑でありながら無機質な複眼と、腰部にアンカーボルトの役割を果たす補助脚を搭載した——イギリス連邦軍BAES—4《テンペストFS型》が鎮座していた。  
「まずー機——さあて私は何処かしら？」

歌う様に眩き、

『戯れるなッ!!』

敵中隊からの応答と反撃——。

パイロットの女は即座に陣地転換——駅舎の屋根から隣接するサン・マルタン運

河へと飛び込み、スラストで機体を水上に走らせる……!

サン・マルタン運河はラ・ヴィレット貯水池とアルスナル港とを繋ぐ古い水運網だ。

その過半は地下水路化されており、テンペストFSは、そこを滑る様に駆け抜けて――。

再び地上に抜けるアルスナル港へ出た瞬間空へ飛び――フランス軍第12空中機械化歩兵連隊第2中隊を眼下に捕らえた。

女は地下水路化されたサン・マルタン運河を駆け抜けたことで、アルスナル港に隣接する地上区画――敵部隊が展開するバステューユ広場後方に躍り出たのだ。

そのまま右腕に装備したR o D - L R - 2スターライトMk. IIレーザーライフルでさらにラファールを狙撃――爆散すると同時に、全機がテンペストFSに気付く。

「んー、やっと気付いたのね。」

全機が振り向く、あるいは飛び上がる直前に――

「――良い的よ、貴女達。」

――更に狙撃。

…一瞬にして、2機のラファールが墮とされる。

――残り3機。

『なんで…なんで、アライズが…！』

『全機散開！固まるな――！』

恐怖に震える者、果敢にも抗おうとする者。

それを見下しながら女——チエルシー・ブランケットは、

「ゆつくり痛めてあげる…。」

——加虐に満ちた寝蘭な声で囁いた…！

——同時刻

レンヌ＝ブルターニュ空港

パリ西南部に位置するそこには、3機のアライズが展開していた。

《EW—2013 [Wei・Wolf]》

ll Haltbarkeit der R・stungll

Parti kelpanzerung: 100%

Komposit-R・stung: 100%

Zelle der skellette: normal

ll Heerll

RA) EIR—MMG—II XI

LA) EW|B/Harmberde III  
 RS) EW|ZT/R|2  
 RW) WtS|Gewehr|XVI (C. Q. B. model)  
 LS) EW|ZT/R|2  
 LW) Type|03 II Blade  
 RB) EIR|IKp|5  
 LB) Rheinmetall 120 mm L/44  
 BS) WtS|Gewehr|XVI  
 ROD|LRL|Starlight Mk. 1/Dp  
 《EiR|Type|XVI [Weimraner]》  
 llHaltbarkeit der R·stungll  
 Partikelpanzerung: 100%  
 Komposit|R·stung: 100%  
 Zelle der skellette: normal  
 llHeerll  
 RA) II X gro·e Laserklinge

GE—RB M l H a l i a e e t u s  
 LA) Type—X M M G

GE—RB M l H a l i a e e t u s

RS) MBDS W a s p S. G. B.

RW) WtS—G e w e h r—XVI (C. Q. B. m o d e l)

LS) MBDS W a s p S. G. B.

LW) WtS—G e w e h r—XVI (C. Q. B. m o d e l)

RB) IX 57—m m—P l a s m a k a n o n e

LB) Type V I I I 120 m m R a i l g u n

BS) WtS—G e w e h r—XVI (C. Q. B. m o d e l)

— Main system a c t a v a t e c o m b a t m o d e .

《EiR—Type—II X II [W a c h h u n d—Z w e i t e]

llHaltbarkheit der R·stungll

Partikelplanung: 100%

Komposit-R·stung: 100%

Zelle der skellette: normal

—H e e r l i

R A) W t S | G e w e h r | X V I

R S A) E i R | T y p e | X V I M · u s e f · n g e r

L A) E i R | T y p e | I I X H i t e n

L S A) E i R | T y p e | X V I M · u s e f · n g e r

R S) M B D S W E S P E | M I S S I L E

L S) M B D S W E S P E | M I S S I L E

R B) E i R | T y p e | X I X D o p p e l h o r n

L B) E i R | T y p e | X I X D o p p e l h o r n

B S) W t S | G e w e h r | X V I

—M a i n s y s t e m a c t a v a t e c o m b a t m o d e .

ピツケルハウベと狼の顎を組み合わせた様な頭部パーツに、戦車を思わせる重装甲フレームを身に纏った——オーストリア合衆国軍のユーロヴァツヒエ製〔ヴァイスヴォルフ〕。

古代ローマのレギオン、あるいは翼人を思わせる鋭利なフォルムに銃砲火器で翼を象った——ドイツ連邦州軍のアイゼンライン社製〔ヴァイムランナー〕。

これらはドイツ・イギリス合同旅団第1戦略機動隊に所属する機体であり、今パリで

交戦を開始したテンペストFS型も同様だった。

『総員、傾注!』

ヴァイスヴォルフの操縦者——部隊指揮官からの号令が達する。

——男の声だった。

腹の底から響く様な荒々しい声音だが、育ちは良いのか、丁寧な口調だ。

『——ビーレフェルト独英合同旅団司令部から命令が下った。これより我が隊は抽  
出戦力としてパリ市街に突入。敵勢力殲滅に当たる。』

少女——ヴァイムランナーのパイロット——は、緊張からか、動悸を覚えた。

『——シャル、大丈夫か? バイタルが上がってるぞ。』

僚機——ヴァイムランナーのパイロットの男——が少女に心配そうに声を  
かける。

それに弾かれた様に、少女は顔を上げ、

「だ、大丈夫です!」

笑顔を作りながらそう告げる。

『ウソだな。』

——だがそれは、僚機にばつさり看破されてしまう。

「え、な…:…なんでバレたの!?!」



『顔に書いてある。…まあ——』

僚機は一瞬言い淀み——だが一拍置いて、告げた。

『——いざとなれば俺が盾になってやろう。お前の機体よりは、早く動けるからな。』

——普通逆じゃ無いの？と思わず内心呟く。

だが、それでも。

少しそれが——少女の緊張をほぐすには充分だった。

『おしゃべりは終わりだ。無線封止、以降は秘匿回線でのみの通信に切り替える。』

——全機、滑走路へ行くぞ。』

——連鎖する了解の応答。

「了解！」

少女もそれに応える。

少女——シャルロット・ヴィークマンは、僚機に追隨するように、灰色の煤汚れた世界へと機体の歩みを進めた…！

# #03 一難/Powerful under the edge (縁の下の力持ち)

日本帝国長崎県五島市浜町

男女群島・国連直轄領トキオ自治区セントラル区

—— I S 学園・第3アリーナ

ここでは箒と一夏が、互いに打鉄を着込み、近接戦の鍛錬をしていた。

—— 箒が左腕に保持した50口径アサルトライフルの12.7mm弾を撒き散らし、一夏に対して制圧射撃をかける。

しかし一夏はそれを、打鉄の肩部展開型シールドを用いて防ぎ—— 瞬時加速。

強引に12.7mm弾を振じ伏せ、肩部展開型シールドをタツクルの要領で箒に叩きつける……!

それでアサルトライフルが弾け飛び、箒の体勢が一瞬崩れる……!

(—— 取った!)

そう一夏は確信すると、展開型シールドの陰から右腕の03式近接刀で牙突を放つ——

…だが、

「遅い……！」

その眩きと共に、箒は同じく右腕に保持した03式近接刀で一夏の牙突を受け流す…

！

——それだけで終わらない。

箒はスラスターを点火。

一夏が突き出した近接刀をレールのように滑り——そのまま頭部装甲に一撃を叩き込む……！

「がっ——」

一夏の苦悶の声。

だが箒は気にする事もなく、頭部装甲に叩きつけた反動で跳躍——ガラ空きになった一夏の背後に、拡張領域から取り出したアサルトライフルを放つ……！

「くっ——！」

だがそれは、一夏が反射的に背後へ回した肩部展開型シールドにより阻まれる。

「まだまだあ——っ！」

一夏は右肩に装備したMINI-CIWS20mmガトリング砲と左腕に持ち替えた携行型アローズミサイルによる射撃を再開した——。

——同時刻

### 第3アリーナ管制室

「…化けたな。」

それを、管制室から眺める高木は口にした。

「ああ。織斑くん、想像以上に素養があるらしい。」

業務用ノートPCのキーボードを叩きながら、ナガトは言う。

——訓練開始からはや5日。

3日間に渡るナガトのスパルタ教導を経て、一夏は3次元対応スキルを身につけ、また自動照準オートAIMとはいえ射撃兵装と近接兵装の併用も出来るようになった。

箒の近接戦指導はまだ2日目だが、それでも実力はご覧の通り。

——多少強引かつ粗いところが見えるものの、本来の得意分野である近接戦はさすがにでも伸び代が見え出した。

「…どーよ八雲。勝率どんくらしい？」

「——ざっと4割。」

——ここまで鍛えりや大丈夫っしょ、と問うた高木に、ナガトは無情な回答を告げる。

「ひっく！なんでだよ!？」

「まずオルコット嬢の機体を完全再現したわけではない点がひとつ。」

セシリアの機体は、企業の新型装備試験運用という側面もある。

つまりは、企業機密漏洩を阻止する為に公開できる情報も限られているという事だ。

：現に、ブルーティアーズ関連で公開されている情報は、機体名と運用用途、そして狙撃特化型ということだけ。

武装については秘密裏にされていた為、当然VR訓練に使うデータ等なく、ナガトは『こんなものが積まれているだろう』という想定の下、訓練を実施したのだ。

「次にオルコット嬢の軌道特性を再現したわけではない点がふたつ目。」

セシリアの軌道はあくまで狙撃メインであるという事は、ある教員を介して聞いていた。

だが代表候補生という位にまで上り詰めた身である以上、馬鹿正直にひとつの戦闘パターンのみで戦っているとは到底思えない。

つまり、奥の手を見せられたら勝率は低くなる。

ナガトも定点狙撃戦と機動狙撃戦の2種類に対抗する手段は一夏に叩き込んだが、当

のセシリアがそれ以外に戦闘パターンを持つていた場合は詰みだ。

「次に、織斑くんは近接主体であり、やはり相性が最悪であるという点。」

これも何度も口にした問題。

以前筈が『刀で鉄砲隊に挑むようなもの』と口にしていたが、正にその通りだ。

例で挙げるとすれば、歴史の授業でなら必ず出るであろう、かの有名な戦国時代における「長篠の戦い」が当てはまる。

武田軍騎馬隊と織田軍鉄砲隊の戦いであり、高い機動力を持つ武田軍騎馬隊が、織田軍を蹂躪ないし拮抗するとされていたが、織田軍は最新鋭兵器である鉄砲を戦線に投入——織田軍陣地に突撃する武田軍騎馬隊を鉄砲で悉く撃ち倒したという話だ。

最新の歴史解釈はどうか知らないが、それが鉄砲の優位性を示した戦いであることは変わらない。

だから一夏とセシリアを当てはめるならば、一夏が武田騎馬隊、セシリアが織田軍鉄砲隊といったところか。

—— 故に、相性が最悪なのだ。

「最後に、単純に両者の経験時間数。これが根本的な問題であり、両者の差が中々埋まらない原因だ。」

—— つまりはこれに尽きる。

片やISを動かして僅か26時間の即席訓練を積んだだけの素人。

片やISを動かしてから恐らくは1000時間はくだらないであろう完全訓練を積んだプロ。

…圧倒的に経験値が足りないのだ。

どれだけ背伸びしようが天と地がひっくり返ろうが、この溝は埋まらない。

「…まあ、そんなわけで素人を『最低限戦える粗製レベル』にするのが、今んとこの限界だ。」

ただ事実を告げる。

だが、歯痒いものを感じる。

もう少し、早く始められれば——所詮それはたられればの後出し論でしかないが、そう考えずには居られなかった。

出来れば勝たせてやりたい。しかし、どうあがいても勝てるのは奇跡でしかない——。

そう分かつては、いるのだが。

「——あん？」

ふと、業務用PCにメールの着信を告げる新規ウインドウが開く。

差出人は——篝火ヒカルノ。

とにかく開いてみる。

おっと極秘メールかな？と言いながら、高木がナガトから再びアリーナの方を向く。

「はア?!専用機イ!?!」

後ろから叩きつけられた素っ頓狂な声に、高木は恨めしそうに振り返る。

「そこには、明らかに不味いという顔をしたナガトがいた。」



—— 20分後

「え?!専用機?！」

訓練が終わった一夏が思わず素っ頓狂な声を上げた。

「…倉持技研から一夏にブレード運用特化軽量型の専用機を提供すると…。」

言いながらゲンナリした顔で、ナガトは業務用PCの画面を一夏と箒に見せる。

—————  
2022/04/06 | 16:32

題名：【極秘】新型機納入について

差出人：篝火ヒカルノ

宛先名：八雲ナガト||アウグスト



八雲さんへ。

お疲れ様です。

倉持技研第2研究所所長篝火です。

織斑一夏くんを対象とした次世代主力機開発として新型試験機を専用機として提供することが本日、弊社の代表会議で決定されました。

本日18時頃にはそちらに納入されます。

ですのでそのあたりの監督をお願いします。

では、よろびく！

—————

———仕事増やしやがって…という顔をしたナガトと。

———「ご愁傷様あ…と同情しつつも自身にも仕事降り掛かるからか顔を引き攣

らせた高木と。

———「そんな…と顔を真つ青にして、絶望している筈と。

「わあ…！マジかよ…！夢じゃないんだよな…！やったぜ！！」

———新しい玩具を与えられる事が決まった子供の様に歓喜する一夏と。

———四人の反応は多種多様だが、一夏以外の三人の反応は似た様なものだった。

———そんな、ただ一人事態を把握出来ていない一夏を見て、筈は口を開く。

「一夏…あの、分かってはいると思うが…」

「え、なんだよ？」

「一夏がここ5日間扱っていたのは打鉄だぞ？」

「それがどうし——…あ。」

そこまで箒に言われて、一夏は箒が言わんとしている事を理解した。

「——仮に、だが…もし、この専用機が打鉄と操縦挙動の違う機体だったとしたら…。5日かけた訓練が水の泡となるのだぞ。」

打鉄をそれなりの新米並みに乗りこなすまでに5日を要した。

…一方でこの新型機が届いてから挙動や機動特性を把握する為に使える時間は——

——たったの1日。

…否。授業時間なども加味すればもっと少なくなる。

…よく持つて——4時間。

たったの4時間で新型機の挙動および特性、適した戦術運用——その全てを把握しなくてはならない。

——それはつまり、今まで積んだ訓練が意義を喪失し、悪戯に勝利のハードルが跳ね上がった事を意味していた。

事の深刻さを理解したのか——一夏もまた顔から血の気が失せていく。

「…ど、どうすれば——」

一夏が継るようにナガトを見る。

箒と高木も同様——この中で最も戦闘経験が豊富な人間はナガトだ。それは当然の行動と言える。

だがナガトは——

「——どうにもならん。」

——無慈悲に、そう告げた。

突き放された様な感覚を覚えて、一夏と箒は目を見開く。  
「俺も貴様らも、今は出来る限りの事をやるしかあるまい。」

…ふと、新たに表示されるメール着信を意味する新規ウィンドウ——

—————  
2022/04/06 16:58

題名：【極秘】新型機納入について②

差出人：巖崎哲璽

宛先名：八雲ナガト||アウグスト

八雲くんへ。

疲れているところ済まない。巖崎だ。



「りよーかい。企業が送って来た新製品を早速弄り倒すんだな。」

高木はそう笑う。

「ハッ——こつちの事情を考えなしに送りつけてくる向こうが悪いんだ。」

そしてナガトもまた、鼻で笑いながら返す。

——一夏と箒は2人が何をしようとしているのか理解出来ず、ポカンとするしか出来ずにいた。



——18時45分

IS学園第3格納庫

『白式の搬入作業実施中。機体本体は88番ガントリーへ。』

『装備は順次搬入中。現在、打鉄用装備を兵装ターミナルに移送中。』

『一部パーツの輸送トラックが長崎市街で交通渋滞に巻き込まれた為スケジュールが僅かに遅延。それ以外に支障なし。』

——無線が飛び交う地下の大広間。

90機近いコンペートを収容可能な巨大地下空間に搬入された白い甲冑——新

型機を眼前に、整備科22人、巖崎重工技術整備スタッフ12人、倉持技研技術スタッフ8人、整備士資格保有職員5人——総勢47人の整備士が集結していた。

その前に並べられた組み立て式テーブルに模造紙5枚に印刷され、そこに改修部分を赤ペンで書き込まれた設計図面。

そして各自に配られた、具体的な改修内容が記載されたホツチキス留のA4コピー用紙。

——〔X02白式の現地改修に関する計画要綱〕と記載されたその紙をペラペラと捲りながら、皆が一様に内容を見る。

#### ◆機体データ◆

機体名：X—02 白式

装備：RA—1

LA) コンバットシールド

BS) 試作ブレード

——それが、今回の新型機のスペックであった。

…装備は試作型ブレードと左腕に取り付けられたコンバットシールドのみ。

…拡張領域も試作型ブレードのみで容量を圧迫される程の低容量。

——産廃。

ここまでそれ以外の言葉が出てこない機体はそうそう無い。これを見た瞬間、ナガトは卒倒しそうになったのを覚えている。

——とてもではないがこんな機体で一夏を戦わせるなど無理だ、無茶苦茶だ。

だからこそ、ナガトと巖崎重工の整備スタッフは整備図面を殴りつけるかの如く、赤ペンで改修案を書き込んだ。

#### ◆機体改修案◆

機体名：X—02 白式

装備：RA) ー

LA) コンバットシールド

BS) 試作ブレード

←

装備：RA) 03式近接長刀

LA) MBDS | Allow Missle

RS) MINI—CIWS (↓肩部装甲取り外し後、打鉄肩部ジョイントパーツを移植し搭載)

LS) 11式展開型追加装甲 (↓肩部装甲取り外し後、打鉄肩部ジョイントパーツと共に移植)

## B S) 試作ブレード

書き込まれた内容は即ち上記のものだった。

肩部パーツは完全に打鉄のものに換装し、防御力と迎撃能力を向上させた。

次いで射撃兵装と近接実体刀の装備。これにより火力投射力と近接攻撃力能力を確保。

上記の射撃兵装と本機のリーダー・FCSとを統合データリンク化し、射撃可能とする事。

——残念ながら、試作ブレードは本機のキモという事で取り外しは叶わなかった。

見たところ03式近接長刀のような刃の鋭さもなく、何か特殊機構が備わっているようにも見えないナマクラ刀がどう役に立つのかは不明だが、ここは開発元に従うとしよう。

∴重量制限カツカツだろうが、可能な限り打鉄に寄せ、必要な装備を搭載する。

——これが現状、思いつく中で最善の改修案だった。

「それで、その改修案がこれなんだな。全く無茶苦茶を言う。」

警① と書かれたラベルの貼られたヘルメットの下で高木が思わず愚痴をこぼす。

それに対して、警③とマジックで書かれたヘルメットを被ったナガトは、高木を見や



る。

「無茶とは失礼だな。残された22時間で実現可能な変更点を書いたただけだ。あとはどこまで精度を上げられるか——だろう。」

『遅延していたパーツ輸送トラック到着——これより積み下ろし作業に入ります。』

——最後のトラックが格納庫に到着した事を知らせる無線が響く。

「よし——では、各自作業を始めてください。」

そうナガトは言い放った。



——IS学園・教員寮101号室

高級ホテルかと見間違える内装の部屋。

2LDKとそれなりの広さではあるが、IHヒーターに冷蔵庫、エアコンなどの家電製品は最上級のグレードを揃えており、今横になつているベッドも高反発性の布団であり、トランポリンかと見間違える程。

思わず、多分月々の家賃、20万は下らないだろうなあ——と邪推してしまう。

「…ああは言ったけど——大丈夫なのか…?」

リビングに置かれた机に腰掛けながら一夏は呟く。

同居人は現在シャワーを浴びており、向いには――

「問題ない……と、信じたい……な。」

――一夏同様、不安を抱きながらも机にあの分厚い参考書を広げている、別居人の箒がいた。

……だがソレはソレ。コレはコレ。と言わんばかりに、

「だが今は参考書の内容を勉強中の筈だが？」

そう告げる。

「うー……分かつてるけどさあ……いや心配で……。」

「心配なのは分かる。だが今はナガトを信じるしかあるまい。――それに、1週間でケリを付けねばならないのは対セシリアだけでなく、コレもなのだろう？」

トントんと机を指で鳴らし――そこに置かれた参考書とそこから書き出した大学ノートに一夏の視線を向けさせる。

――千冬に再び渡された参考書の内容学習。

クラス代表決定戦に向けた訓練と並行して、そちらも行われていたのだ。

1週間で覚えろ――1週間後に小テストをするからな。勿論、ちゃんと勉強していれば全問正解出来る内容だがな――と、先日言われた時に一夏は白目を剥いていた。

無理もない、コンペートの実習に勉強に——やる事が多過ぎて、脳がパンクしてしまうのも分かる。

…とはいえ現実には非情であり、こちらの事情などお構い無しに試練を与えて来るのが常だ。

一夏もショート寸前の頭を使って端から端までを勉強しようとした。

しかしそれでは間に合わないことは明白だ。

——なので箒は手を貸した。

おそらく次の小テストはI S運用において最低限の知識の再確認が目的だ。だから、まずは「I S乗りにとって必要最低限の常識」を覚えれば良い——と。

…そして今に至る。

「では次、I Sの基本的な運用には現時点で国家の承認が必要であり、枠内を逸脱したI Sの運用をした場合は法律によって罰せられる。この刑法の名前は？」

「えーと——あ、機動機械運用死傷処罰法！」

「正解。中々頭に入って来たんじゃないか？」

箒は微笑みながら返す。

——ちなみに機動機械とは、コンペートやEOSの法律上での名称となっている。

基本的に軍事運用はされないコンペートやEOSは機動性に優れた機械である――

――よつて、機動機械という名称が与えられた。

「……ところで全然関係ねえんだけどさ……」

「む?」

……また雑談か?と言わんばかりの顔を浮かべるが――

「――箒つて、好きな人とかいんのか?」

――想定外の爆弾を叩きつけられ、クラツと、一瞬視界が暗転する。

「な、なななななな、なにを言つとるんだお前は!!」

思わず箒は素つ頓狂な、悲鳴めいた声を上げて慌てふためく。

「いや確かにいるけども、いるけども……だがそれは今関係な――」

必死で言葉をついでいって――固まった。

視線は一夏の後ろに向けられている。

「――ほう、恋バナか?思春期特有の反応で結構だが、貴様は篠ノ之に本来一人でやる筈の勉強を手伝ってもらっている身だったな……一夏。」

地獄の底から響いてくる様な声。

それにギギギ、と一夏は振り返る。

そこには、オレンジと白のラインが引かれた黒いタオルを身体に巻いた千冬――

一夏の同居人が、仁王立ちしていた…！

「げえ！ゼットン——」

「誰が恒星間天体制圧用最終兵器か——！！」

スパーン！と——ただのチョップが出てきて良いものではない音が、炸裂する…！  
(…そこは宇宙恐竜の方じゃないんだ…)

——それを聞いていた箒は、そんな場違いな事を内心呟いた。



——19時15分

IS学園・第3格納庫

作業開始から30分。

搬入されたパーツ群の搬入は着々と進み、終わりつつあった。

一方、白式の改修作業も大量の人員と機材が投入され、格納庫内は異様な熱気に包まれていた。

「エネルギーシステムの組み直しは？」

溶接加工処理の手を止め、ナガトは無線機で作業の進捗状況を確認するべく問いかける。

明日の午後16時までには、少なくとも稼働部およびスラスト周りのテストもしなくてはならず、加えて作業に携わっている人間の休憩・睡眠時間や日中業務への従事を考えれば、組み立て作業が出来るのは今日の23時までだった。

——それまでに、組み立てを終わらせる必要があった。

『電力系統は、機体各所に超々小型大容量コンデンサーを搭載し、直接配電させます』  
『現在、電圧系統調節操作用導線を装甲内部に敷設中、本日20時50分には、全て完了の予定です』

——機体のアクチュエータや電圧系統を担当していた技術スタッフが無線で告げる。

「装備類および増設用ウエポンラックの進捗状況は？」

『組み立ておよびハイパーセンサーとの同調作業に問題なし。IFF周りの再プログラミングも22時30分までには、なんとかかします。』

「肩部・パーツ群の状況は？」

『現在、右腕・左腕を共に打鉄の肩部パーツに換装中。あと2時間で形に出来ます。』

——ナガトはそれらの報告を基に、チェックシートに進捗を書き込んでいく。

「中々進んでるじゃん？」

覗き込みながら、高木が口にする。

「高木、スラスタ―周りは？」

「機体重量が増えたせいで既存のやつじゃ少々推力が足りない。なんで、オプションパーツにあつた、より強力なやつに換装中だ。」

高木が告げる。

：確かに、試作型ブレードとコンバットシールドだけを搭載した軽量型機に、近接長刀だのミサイルランチャーだのミニガンだの展開型シールドだの：中量型機クラスの装備を外付けして行けばそうした問題は自ずと生まれてくる。

「そのスラスタ―、重量は大丈夫なのか？武装の重量に耐えられる推進力を得る為のスラスタ―がかえって足枷になっては意味がないぞ。」

だから、この作業は単純に予定された項目を終わらせるだけではなく、その過程で発生した問題を潰すのも作業の一環だった。

「拡張領域系統に搬入されたラファール系統の拡張領域増量パーツを組み込んだから、スラスタ―の内部系統は量子化させてそこに流し込む。そうすりやある程度は問題ない。」

「了解——、間に合わせるぞ……！」

開始した——！  
そういうとチェックシートを手放し、再びナガトは装甲パーツの溶接加工処理作業を





PILOT: 織斑一夏

WEAPON: RA) 03式近接長刀

LA) MBDS アロースミサイクル

RS) MINI-CIWS

LS) 11式展開型追加装甲

BS) 試作ブレード

眼前に投影された情報を見て、少し、昨日を思い返す。

前日の放課後——改修をやり遂げたナガト達によって託された専用機・〔X—0  
2 白式〕の挙動を確かめ、僅かに打鉄とズレがある程度だが運用に支障がない事は確認している。

…しかし、それとこれとは話が別だ。

——初陣への期待、怯え、その全てが混ざり合い、一夏の身体を震えさせる。

手の震え、足の震え、酷く弱った子猫のように全身が小刻みに震えていた。

どくどくと脈打つ心臓に無駄だと分かっている手も手を当て、なんとか鎮めようとした。

——これは、武者震いだ。と必死に自分に言い聞かせて、拭いようのない震えを

止めようとする。

『恐れるな、フォーマットとフィッティングは昨日済ませたろ。挙動確認も問題無い筈だ。』

通信を介してナガトの声が聞こえた。

普段とは違う——低音の声音には、触れた者をすべて焼き尽くしてしまいそうな威厳が感じられた。

『いつも通り、訓練通りにやればいいだけだ』

「簡単に言ってくれるなよ。そういうナガトはどうだったんだ？昔、戦ったんだろ？再構築戦争…だったっけ？その戦争で。」

今の気持ちを理解してくれていない、そんな発言に苛立ちを覚え、強張った表情で無線越しの教官ナガトに嘯みつく。

『俺か？そうだな……』

通信の向こうでナガトが昔を懐かしむように逡巡している姿が脳裏に浮かんだ。

『——正直、あまり覚えてねえな。』

「はは——素直じゃないんだな。」

『いや……本当に覚えてないんだよ。あの時はたんまりと——』

ナガトは一拍開けて、

『——クスリを盛られたからな』

凍てつく口調で呟いた。

「えっ……」

予想外の内容に、一夏の口から情けない声が漏れた。

ナガトもオリジナルナンバー——初期ロットのアライズ乗り——であり、ア

ライズを駆って再構築戦争に参戦していた。

VIC6の最新鋭兵器だったアライズはその当時——2000年代後期では技術

的に成熟していない部分もあり、様々な臨床実験という名目の人体実験の被害者が存在していたという噂を聞いたことがある。

(……もしかして、ナガトもその中の一人…!?)

『——てえのは嘘だ』

「は？あ…、はあ、なんだよ……」

彼は肩を竦め大きな嘆息を漏らし、ナガトは鼻で笑った。

『どうした、同情でもしてくれたのか？』

「こんなときに冗談はやめてくれ。ただでさえ吐きそうなんだ……」

『だから和んだろ？』

酷い冗談にもう一度大きなため息を吐いた。

(けれども、ナガトの言うとおり気持ちは少し楽になった……：のような気がする。)

『当時のオリジナルナンバーはVIC6にとつて貴重品だ。適正のある者を見つけないのも一苦勞。だからそんな薄氷を踏むようなことはしない——だが、覚えていないのは本当だ。出撃と同時に、ISスーツ内に仕込まれてた圧力注射機構で興奮剤を打たれたからな。』

「…勝手に、そんな事を…?」

『ああ。事が全て終わった時にそれを知つて、仕込んだ奴に同じ事をしてやったよ。三倍の量にして、血管に注射器で——な。』

ついでに大事なところも思いっきり蹴飛ばしてやったよ——とナガトは笑う。

——痙攣しながらビチビチと床を跳ねて、ズボンのテントから汚え汁をプチ撒けている様は、中々に滑稽だった。とも付け加えて。

それを聞いて一夏はうわあ…と相手に心底同情する。いや、それをされた側は自業自得、因果応報なのだが。

なんとなく、ナガトは普段温厚だがこういう時は気性が荒いんだろうな——と最初の3日間で感じていたが、本当だったらしい。

——曰く、部下を無碍にする上官を部下の目の前でぶん殴つて上官の顎を粉碎骨折させ、懲罰房にぶち込まれた。

——曰く、ISの絶対防御を打ち抜く必殺兵器として、パイルバンカーを愛用し、次々とIS乗りを血霧に変えた為に、『杭打ちの鬼』と呼ばれている。

——曰く、白兵戦にて壁を素手でぶち抜きそこにいた敵兵を殴打、気絶させた事がある。

…箒から聞いた彼の武勇伝は、どこから広まったのか整備科の一部で語り草となつて  
いる。

一夏は、ナガトだけは決して敵に回してはいけなさと改めて心に刻んだ。

「一応聞いておきたいんだけど、俺のスーツには……」

『もちろん、そんなものは仕込んで無い。クスリなんぞに頼るか。お前の扱うそれは競  
技用。即ちお前は選手であつて、戦士では無いのだからな。』

ナガトは父親が子供を叱るような口調で咎めた。

『お前はお前が培った力で当たれ。ドーピングなどもつての外、言語道断だ。いいな。』

「分かつてる。ナガトから教わったことはちゃんと守つてる」

『よろしい。では、死力を尽くせ——俺からは以上だ。』

そう言つて、ナガトは通信を切る。

——直後。

『——織斑。』

千冬から通信が入る。

『試合後の予定の都合上、アリーナの使用できる時間は限られている。試合前の慣らし運転をさせておきたいところだがぶっつけ本番になる。』

(試合後の予定——…?なんか、あつたっけ?)

そう思うが、直ぐに片隅に捨てる。

——今、目の前の試合には関係ないからだ。

『ISのハイパーセンサーは間違いない動いているな。機体の不具合もこちらでは確認できないがどうだ一夏、気分は悪くないか?』

「大丈夫、千冬姐。いけるさ」

『——そうか』

——その言葉には、柔らかさがあった。

教師や指導者としてではなく、一人の家族を気遣う声音。

『——一夏』

続く様に、ピット内で仁王立ちしながら箒の声を、集音センサーが拾う。

その顔には、普段の凜とした雰囲気にも僅かな愛いさが混じったような様子はなく、ただ冷静に眼前の事象を見据える冷徹な——だが熱を秘めた瞳だけがあった。

『——勝とうと負けようと、構わない。だが死力を尽くし、全力で当たれ。…私から

は以上だ。』

——死力を尽くせ。

ナガトと同じフリーズを口にした。

口ぶりも、わずかにナガトに似ている。

それに一夏はクスリとする。そしてそれに振り返り——

「——箒」

『…なんだ?』

「俺は負けねえよ!」

そう言つて、格納庫にいる箒に向けて——白式のマニピュレーターでサムズアツ

プを浮かべた。

ソレに一瞬箒は面喰らう。

その自信は一体どこから湧いてくるのか——だが、今は、それでいい。

『ああ——行つてこい!!』

そう言うのと同時に、白式の乗った電磁カタパルトに込められた電磁力が臨海に達し

——白式はピッドから打ち出された…!





—— 同・第3アリーナ

所定の位置まで一夏は白式のスラストを蒸して移動する。

—— 直後、青の全身装甲機がBピットから飛び出したと同時に網膜に機体データが投影される。

—————

UNIT: B A E s | A | C I S | 3 ブルーティアーズ

P I L O T : セシリア・オルコツト

W E P O N : R A ) スターライト Mk. III R O D | L R 3 レーザーライフル

L A ) インターセプター R O D | L B L 2 レーザーブレード

R S ) カデュケ R O D | L O B T | 1 レーザーオービット

L S ) カデュケ R O D | L O B T | 1 レーザーオービット

R W ) M B D S ミーティアミサイル

L W ) M B D S ミーティアミサイル

B S ) 不明

—————

「…あれがオルコツトの…!」

—— 深海色の、聖堂騎士甲冑を思わせる機体フレームに、天使の翼を連想するユ

ニットが背中と肩部に取り付けられている。

ハイエンド・コンペディションIS【BAEs<sup>ル</sup> | A<sup>テイ</sup> | C I S<sup>アー</sup> | 3】が現れた…!

そして手に持たされている大型のレーザーライフル【R o D<sup>スター</sup> | L R<sup>ライ</sup> | 3】がこちらを向く。

『——よく、逃げずに参りましたね。』

ふと、セシリアが告げる。

そこにはある種の驚きと感心が込められている。

「…ああ。」

『ひとつ、お聴きしてもよろしいでしょうか？何故——貴方は其処にいるのです。』

「え——」

一夏はその質問に驚愕する。

——あれだけ自分をサルだなんだと言っておきながら、そう問うてくるのだ。

不思議に思わざるを得ない。

『貴方は確かに祭り上げられ、そして本来ならば代表になる意志もそれに伴う実力もなかった——棄権も出来た筈なのに、何故、此処にいるのですか？』

——なるほどこれはつまり、面接のようなものだ。

最初なるつもりが無かったものが、何故ここに居る、どういった心境の変化があつ

たのだ——と。

…そう聞かれているのだ。

一夏は一瞬瞑想し、目を開けて、口を開く。

「……支えられたから——かな。」

——思つたままの事を口にする。

「確かに俺は、代表になるべき器じゃないのかも知れない。だけど——今日この日まで、色々な人に支えられて、助けられて、ここまで来た。」

——だから、逃げられない。

自分の腕がかすかに震えているのが分かる。

心臓が何時もより大きく鳴っているのが分かる。頭がクラクラしてきそうな錯覚。

——けれど、逃げない。

知識と剣の腕をくれた筈。

最初は怖い人だと思つたけど戦い方を叩き込んでくれたナガト。

なんだかんだ協力してくれた道生兄。

そして白式を改修してくれた整備スタッフの皆。

——いろいろな人に手助けしてもらった。

それをここで恐怖に負けて逃げ出すことなんて俺ではなく、その人達に泥を塗るのと

同じだ。

——そんな事は、死んでもしたくない。

「だから——絶対に逃げたりしない。」

迷い、怯え、その全てを振り切り——吹っ切れた様で、一夏は言い放つ。

それにセシリアはなるほど、と。その回答も悪く無い——という声で納得する。

『そう……では、始めましょう!!』

その宣告と共に、砲口より蒼の光——レーザーが、放たれる……!

「ッ——!」

引き金の指に注意を向け何とか放たれるタイミングをつかみ、サイドスラストアーで一夏は回避する。

肩をレーザーが擦め、装甲表面が加熱し赤く変色するが気にならず一夏はMINI-CIWSを起動。

牽制射撃をかけながら、そのまま左肩部の11式展開型追加装甲を展開——機体の左半身を覆う、武士甲冑の大袖を連想させる3枚の耐熱耐弾耐レーザー複合装甲板でレーザーを弾きながら一夏は突貫する。

『——カデュケウス1-4、<sup>アクティヴ</sup>行動開始!』

セシリアが告げる——同時に、両肩部に束ねられた合計8基のうち、4基のオービットが射出される。

オービット——慣性制御 P I C 技術によって自律機動する浮遊砲台——が、ライフフルと共に一夏に牙を剥く……！

「くっ……！」

——3次元全方位から乱れ飛ぶ蒼<sup>レイ</sup>の閃光<sup>ザ</sup>。

一夏は高く方向からの攻撃を潜り抜けようとするが行動を先読みされている——  
——なかなか前に進めない——レーザーが篠突く雨の如く叩き込まれる……！

（くそっ、止まるな……止まるな止まるな止まるな!!）

——自身を鼓舞する様に言い聞かせる。

ナガトとの訓練で死ぬ程やらされたレーザーの回避機動訓練を思い出し、必死にスラストを蒸し続ける。

縦、横、斜め、後ろ、前、すべての方向からレーザーが降り注ぐ。

その中に止まるという愚行はせず、全方向に意識をいきわたらせ敵を見据える。

——さもなくば、四方から一方的な蹂躪<sup>リンチ</sup>が始まる。

小刻みにスラストを吹かしながら、されどできるだけ前に出るように右斜め前に、左下前に、上下左右に動いて射線から機体を逃がしながらも前進する——。

だが――

『私をお忘れでした?』

――セシリアの声。

同時に、スターライトMk. IIIのレーザーがシールドを直撃する…!

「ぐうッ――!」

走る衝撃。

左肩をバットで殴打されたような痛みが駆け、意識が一瞬白む。

機体が失速しかける。

だから必死に――

「ッ、止まるなア!!」

――叫び、自らと機体に楯を飛ばした…!

瞬間、ところ構わずブーストを全力で蒸し、直進――その、一瞬前までいた空間

を、4条の閃光が焼いた。

『なっ――』

――セシリアは、自身のタイミングを外された事に衝撃を受ける。

オービットの回避に手一杯となっているところにレーザーライフルの一撃で機体を

硬直させ――オービットのレーザーで滅多撃ちにする。

そのタイミングの為の一撃に耐えた。  
それは良い。

しかしその後の斉射を切り抜けた。

これは想定外だった。

そして更に————白式右肩部のMINI-CIWSガトリングガンがブルーティ  
アーズを滅多撃ちにする。

思わずセシリアは反射的に目を瞑ってしまう。

一瞬。

その——刹那、白式は急加速する。

——瞬時加速。

近接戦を主体とするコンペイトやアライズの全機種に標準搭載されている機能。

ソレを持って、白式は時速400kmから時速3800kmに加速し——ブルー  
ティアーズとの距離を詰める瞬間。

「対レーザーモーク!!?」

一夏が言うと、左腕に装備されていた発射基からロケットアシスト付きの擲弾が放た  
れ——ブルーティアーズと接触し、空中で炸裂。

同時に、弾頭内に詰められていた高濃度の重金属粉塵が展開————煙幕を形成す

る。

その展開時間は短く、わずか45秒で掻き消される程度――。

だが、ソレで十分。

距離は詰めた。

敵の動きは止めた。

レーザーは封殺した。

あとは、眼前にいる敵に――右腕に装備した近接刀を叩き込む…!!

「はア――!!」

一ノ太刀でブルーティアーズの左肩部装甲を右から左に逆袈裟で斬り裂き、返す刀で

二ノ太刀を放ち、胸部装甲を薙ぐ…!

「まだまだ――!」

そして更に返す刀で三ノ太刀を放ち――それをセシリアは、左腕上腕部より展開

したレーザーブレード《インターセプター》で受け止めた…!

『おやりになりますわね…私に、剣を抜かせるなんて…!』

――信じられない、という驚愕と。

――素晴らしい、という歓喜が入り混じった声。

…シールドエネルギーの残量は50%を切った。



対して一夏はまだ85%は残されている。

状況だけで言えば一夏の方が有利——だが、形状しがたい悪寒が一夏をかける。

『認めましょう——貴方の実力を。』

ゾクリと。

冷たく言い放たれた言葉。

普段の高飛車な彼女はそこには居ない。

まるで別人のように冷徹な瞳が罅迫り合うブレード越しの一夏を見据えていた。

直後——肩部に搭載されていた残り4基のオービットが射出され、拡張領域から

更に8基のオービットが射出される。

鳴り響くレーザー照射警報。

——合計16基のレーザーオービット全てが一夏を捉えて。

全ての砲口に、蒼の光が宿り——

『故に、全力で倒します——貴方を。』

——死の宣告。そして光の雨が、アリーナを埋め尽くす……!

先程の4倍の密度に増したレーザーは流星群の如く白式をつるべ打ち、光の檻を形成する。

退き場所を見失い、一夏は思わず混乱する。

だが——そんな事をセシリアは感知しない。

『ブレード・サブレッツション』

そうセシリアが口頭命令を下す。

直後、16基のうちの4基が2基ずつ合体し、2基の連結型オービットへと姿を変えたかと思うと——それは、射程2kmはあろうかというレーザーブレードとなつて、猛威を振るう……！

12基のオービットによるレーザーの雨が豪雨の如く叩きつけ、アリーナの土台を、観客席を守るシールドバリアを蹂躪していく。

土砂を巻き上げ、地面に大穴を開ける光の嵐がアリーナ全域に荒れ狂う。

そして2基の連結型オービットが放つロングレンジレーザーブレードが、アリーナの隅々を焼却する……！

——先程までの攻撃が単なる攻撃だったとするならば。

——これはもはや、蹂躪や殲滅の領域。

それを避けて行こうか——ブルーティアアーズの腰部に搭載された無数のミサイルと、レーザーライフルによる正確無比な狙撃が、的確に一夏のシールドエネルギーを削っていく……！

——シールドエネルギー残量77%。

「ぐあああつ!!」

右肩部のMINI-CIWSがレーザーに貫かれ、機体から脱落する。

——シールドエネルギー残量68%。

一夏はただ、さながら湖に落ちた虫のように、足掻き続けるしか選択肢が残されていない。

——シールドエネルギー残量60%。

だがそれでも、諦めるつもりはない。

——シールドエネルギー残量55%。

今諦めるなどという選択肢は、一夏の中に無い…!

(だから、せめて——)

一矢報いようと——だが、左腕にミサイルランチャーも右からレーザーに撃ち抜かれ、爆散する。

——シールドエネルギー残量49%。

形成が逆転する。

そこにセシリアはダメ押しと言わんばかりに——オービットのレーザー射撃をもつて一夏を閉じ込めた光の檻に自らも飛び込んで。

レーザーブレードを一夏に叩きつける…!

一夏はそれを反射的に、逆手に持った近接刀で受け止め——再び鏢迫り合う。

『貴方が負けられない様に…私にも、負けられぬ理由がございます。』

セシリアが言った瞬間、近接刀の刃目掛けてオービットレーザーが3発叩き込まれる。

…刀身の耐熱耐弾耐レーザー塗膜が剥離する。

——セシリアのレーザーブレードが近接刀を両断する。

…一夏の機体から、全ての装備が失われる。

——セシリアはそのまま、レーザーブレードをレイピアの様に突き立てようとして。

(頼む、もう——お前しか、居ないんだ…！)

一夏は拡張領域から試作型ブレードを取り出し、ソレを防ぐ——！

…直後。

⌞ Object updated. ⌟

◆ 試製20式タキオンブレード【雪片式型】 ◆

・刃渡りXXM

・特殊技能「零落白夜」

## ※注意

当該装備は周辺環境汚染の危険がある為、使用に90秒の制限時間がかけられています。

そのアナウンスが鳴り、新規ウィンドウが一夏の視界に投影される。

「雪片、式型……」

（千冬姐と同じ——世界を制した、一振りの刀…!!）

直後——試作型ブレードが変形し、緋色の粒子によって構成されたビームブレードを展開した……!

《警告：タキオン粒子汚染濃度が上昇しています。自然希釈汚染許容数値を超過する前に、速やかに使用を停止して下さい。》

（——つまり、90秒以内にカタをつけろって事か…ッ!!）

度重なる怒涛の展開——一夏は未だ、事態を全て把握は出来ていない。

…だがやるべき事はただひとつ。

——立ち塞がる眼前敵を倒すのみ……!

——ピット直下・資材搬入用1番ゲート前

『ナガト……!』

箒の焦燥に満ちた声が無線越しに響く。

それは、一夏の展開した試作型ブレード——雪片式型を見ての事だった。

「……それが——!」

思わずナガトも悪態を吐く。

倉持技研が指定したブレード——それに対消滅粒子であるタキオン粒子技術を搭載していたのだ。

本来ならば放射性廃棄物同様、一級汚染物質として扱われるべき代物を、「仕様を伏せたブラックボックス化」という形で潜り込ませていたのだ。

「なんてもんを積ませてやがったんだ……!」

奥歯を噛み砕かんばかりの怒号。

だが、今ここで介入するわけにもいかない——、

「山田先生！アリーナのタキオン粒子モニタリングポストは?!」

——だからこそ、今は周りを調整するしかない。

『はい！現在のところは自然消滅する程度です！ですが徐々に上昇中——100秒後には大規模除染作業が必要な汚染量に達ます!!』

『一夏！聞こえるか！必ず90秒以内にカタをつける!!』

無線の向こうで山田の悲鳴じみた報告と、千冬の狼狽えた怒号が飛ぶ。

（——奴ら、織斑たちをどうするつもりだ……）

### ——第3アリーナ

セシリアの攻撃は際限なく続く。

むしろ激しさを増したそれは雨などではなく嵐の領域だった。

降り注ぐレーザーは爆撃と何が違おう。

その一撃一撃がTNT爆弾に匹敵する破壊力を伴って、矢継ぎ早に、正確無比に繰り

出され、アリーナの地表に無数のクレーターを生み出していく…!

——それを。

「はあ——ッ!」

——閃。

雪片式型が振るわれる。

対消滅粒子で形作られた刃は、青の自由電子レーザーを接触と同時に侵食し、自らの刃諸共消滅させる…!

「…タキオン粒子汚染だか、なんだか知らねえけど——」

ここまで来て、負けるなんか御免だ。

気持ちの整理はしたし、身体も皮一枚で繋がったし。

——《零落白夜強制停止まであと45秒》

時間も無えし、いい加減。

「——行くぞ!!」

——ケリを付ける……!!

スラストターを点火。

同時に、瞬時加速を爆発させて空を駆ける。

狙いは一点、敵機への一閃のみ——!!



『いのおッー！』

——迎え撃つは、レーザーの大嵐。たいらん

収束機が焼き千切れる事を恐れない最大出力の破壊的弾頭の雨が降り注ぐ……！

——シールドエネルギー残量41%

——《零落白夜強制停止まで39秒》

「——っ、ぐッ——！！」

それを視認すると同時に、一夏は全力で再びスラストを蒸す。

軋む身体に鞭打つように喝を入れながら、白式は真横に躍り出る。

「っ、く——」

無理矢理な横移動で崩れ落ちそうになる身体を、残された左腕の一振りを持ち直す。

——直後、右肩に衝撃が奔る。

「っ……！！」

金属の軋む音を立てながら、ハイレーザーが右肩部の装甲ブロックを抉り飛ばす。

——シールドエネルギー残量39%

——《零落白夜強制停止まで35秒》

夾叉した右肩が白熱し、骨に亀裂の入る音を錯覚する。

（——構わない。どんな不利な体勢でも、アレの直撃だけは回避する——！！？）

——その意思を試さんとばかりに、再びハイレーザーが放たれる。

応えるように、一夏は再度瞬時加速し、螺旋を描きながら敵機と距離を詰める…！

——しかし、軌道を逸らすことは叶わず、そのままハイレーザーが一夏の眉間目掛けて飛翔する。

——それを、

「どりやあッ——！」

——痛みとバランスの乱れから、立ち直るのに0.3秒。

眼前に迫る凶器を右腕に保持した雪片式型で斬り打ち消す…！

「まだ——、だあッ!!？」

——セシリアは思わず目を見張った。

驚嘆すべきは。

その一連の動作をしながらも、疾駆する足を止めない意思の強さだった。

「…ぐ、うッ!!？」

五月蠅いハエを叩き落とさんとばかりに、再び四方八方からレーザーの雨と、ロングレンジハイレーザーによる断頭の光が降り注ぐ。

前方からは、レーザーライフルによる精密狙撃がシールドエネルギーを攫っていく…

！

それはもはや雨などという生緩いものではなく、海と形容するに相応しい高密度で――

——シールドエネルギー残量27%

——《零落白夜強制停止まで29秒》

このまま行けば、一夏は袋叩きされる。それは覆りようのない事実。

——このままの、速さなら。

「——おおッ!!」

——直後、一夏は正面目掛けて瞬時加速。

レーザーの海を潜りながら、コンマ数秒の世界を駆けていく……!

加速した際のGにより、直撃コースのレーザーを雪片式型では完全には弾ききれず、僅かに軌道を逸らし、背部スラスターをえぐり攫って行く。

——推進力87%に低下。

——シールドエネルギー残量20%。

——《零落白夜強制停止まで27秒》

——様々な警報が鳴り響く。

だがその一切合切を無視して一夏は駆け抜ける。

狙いは一点。

ただ眼前敵に一撃を加えるのみ……!

「……っ、この……!!?」

最期の足掻きに、セシリアはレーザーライフル、オービット、ロングレンジブレードビット、ミサイルを一斉射する。

狙いは定まっていない——だが完全な停止とは行かずとも、動きを鈍らせることは可能だ。

瞬時加速中のダメージは、運動エネルギーと摩擦力の加算によって通常時より大きくなる。

事実、一夏は次々と被弾して行つて——白式の疾駆は、衰えなかつた。

——シールドエネルギー残量2%

——《零落白夜強制停止まで20秒》

「ハ——」

こぼれたのは今の瞬間を切り抜けた驚きか、それとも蓄積された疲労か。

思っていたよりも数次元強大な防衛機能を有していた眼前敵に、神経や筋肉が断裂してしまう程の負荷をかけながら突破し——

「っ、うおおおおお—— ツッ!!」

(切り裂け………!!)

今まで蓄積したエネルギーを込めた渾身の刃が、振るわれる。

一ノ太刀。

二ノ太刀。

三ノ太刀。

四ノ太刀。

——雪片を振るい、次々と斬撃を叩き込む。雪片を振るい、次々と斬撃を叩き込む。

——ブルーティアーズ、シールドエネルギー残量15%。

「もう一丁——ッ!!」

そして五ノ太刀を、縦一文字の体勢を描きながら、ブルーティアーズの頭部装甲目掛けて叩き込む——!!

「うああああ——ッッ!!」

だが、負けるものかと、代表候補生の意地を見せるようにセシリアは、白式の腹部装甲目掛けて左腕のレーザーブレードを横薙ぐ……!

雪片式型は、一瞬遅れてブルーティアーズの頭部装甲を叩き付けた……!

——《零落白夜強制停止》。

——白式、シールドエネルギー残量0%。

——ブルーティアーズ、シールドエネルギー残量4%。

…一瞬。

ほんの一瞬の差——勝利の女神が微笑んだのは、セシリア・オルコットだった。

——以って、ここに勝敗は決した。



——第3アリーナ管制室

「ああ…織斑くん、頑張りましたね…。」

「ああ。まあ、愚弟にしては、よくやりました。」

半ば結末を予見していた様に、山田は言う。

それに千冬も同様の感想を浮かべる。

相手は代表候補生という名のプロ。

此方は駆け出し未満のド素人。

勝負には敗北するのは、半ば必然と言えた。

——だが、代表候補生に紙一重の戦いをしてみせたのだ。

この敗北の意味は大きい。

「負けからこそ、学ぶべきものがあります。今回は良い薬になった事でしょう。……さて、山田先生。」

「——はい。次の予定、ですね。」

「うむ——織斑、オルコット。先の戦いで微量のタキオン粒子が発生した。安全確認の為に検査チームを闘技場脇のサブピットに待機させている。そこへ行け。」

そう2人に告げて——

「アリーナ、観客席および天井隔壁展開。」

そう、命じた。

第3アリーナ・観客席

「織斑くん負けちゃったねー」

「割と終盤は接戦だったんだけどねー」

「やっぱり経験差は埋められ無かったよ……」

などなど、口々に観客席にいた生徒たちは口にする。

その中の一人が、隣に座っていた少女に声をかける。

「ねね、更織さんはどう？」

—— 蒼の髪。

—— 赤の瞳。

—— 琥珀色の下斑メガネ。

1年4組クラス代表にして、日本国家代表候補生——更織簪に向けて。

「…別に。あのワンオフアビリティを使うまでは、セシリアに勝率が傾いていたけど、その後はどうかが勝ってもおかしく無かった。」

—— だからこの結末は、必然。と、簪は告げる。

—— ふと、鳴り響くサイレン。

『隔壁閉鎖——繰り返します、隔壁閉鎖——アリーナ闘技場の全隔壁を閉鎖。以降は、

モニタリング観戦に切り替えます！』

アナウンスと共に、観客席を守るシールドバリア発生装置の支柱たる耐爆強化ガラスを守る様に、耐核耐熱耐爆耐レーザー複合装甲から成る隔壁がアリーナを覆う様にせり

上がる——。



「え？まだなんかすんの？」

「試合ってこれだけじゃ…？」

困惑の声が伝播する。

——当然、簪も困惑を隠せずにいた。

そして、隔壁が閉まり切ると、隔壁に設置された複合カメラが捉える映像が耐爆強化ガラスに、プロジェクションマッピングの如く投影される。

その中で——ピット直下の資材搬入用の1番、2番ゲートが開放される。

普段コンペート射出に用いられるピットの隔壁ほ閉じたままで、その下にある資材搬入ゲートが開く事に簪は違和感を覚えた。

そして——その数秒後、1番ゲートから現れた機体を見て、違和感の正体を理解する。

深緑の国防色に身を包んだ、一目で重量型機体と分かる程の肉厚な脚部。

対照的に、格闘戦を想定した取り回しの良い上半身と無骨さを宿した三眼の頭部。

右腕には4メートルはある40mmガトリング砲。

左腕にはブレード機構。

背中には、折り畳まれた二連装35mm機関砲と、120mm滑腔砲。

両肩には大型スタビライザーらしき装備を搭載した、重量型全身装甲機体。

日本帝国陸上自衛隊正式採用型第3世代A R I S —— 21式機動挺身装備

【日方風】。

「あ、アライズ——!?」

「なんで…?!」

女子の誰かが叫ぶ。

続く様に——2番ゲートから、新たな機体が現れる。

紅白とグレーのデジタル迷彩が施された、中量型機と思われる機体。

近接戦を前提とした事が一眼で分かるブレードエッジ装甲が多用された流線形のフォルム。

両腕に、銃剣と思しきブレード機構を備えたライフル。

両肩には、追加ブースターとも射撃兵装とも取れる、鏃型の駆動ユニット。

腰部には砲身を後方に折り畳んだレーザークャノン。

背中には、垂直ミサイルランチャーと思しきミサイルコンテナ。

…それは、見た事の無い機体だった。

——深緑と紅が対峙する。

『双方配置に着いたな——』

ふと、千冬の声のアナウンスを介して響く。

『——ではこれより、【試製22式アライズ《雷火》<sup>ライカ</sup>】の模擬戦を開始する！』  
その声と共に。

日方風と、紅の機体——雷火が激突した…!!

# #05 Parent Wolf and Puppy

## (親狼と仔犬)

### 第3アリーナ

#### ——サブピット

ピットの脇に設けられた、野球スタジアムのベンチを連想させられるブース。

防護服で完全防備し、タキオン粒子濃度測定器と化学消化器を手にした整備科職員数名が待機する中、ブルーティアーズと白式は降り立った。

『——完敗ですわ。』

サブピットに一夏と共に降り立ったセシリアが開口一番に告げた内容はそれだった。

タキオン粒子濃度測定器を持った職員が機体の汚染線量を測定する中、その言葉に一夏はキョトンとする。

「…勝ったのはそつちじゃないか。途中まではまあ…頑張ったけどそつちにゴコゴコにされて、最後は機体性能に助けられただけだ。」

思わず呟き返す。

『素人にシールドエネルギーを96%も削られては、負けたも同然ですわ。』

それを聞いて、ああなるほどな。と一夏は理解する。

経験値で圧倒的に劣る相手に僅差という状態にまで追い込まれた——それが、プロとしての観点からは、敗北という認識となったのだろう。

——試合に勝って、勝負に負けた。というヤツだ。

…タキオン粒子の測定が終わり、除染用の化学消化水が機体に吹きかけられる。

『まあ、私も自分自身の甘い点も分かったことですし——今一度、鍛え直すと致しましょう。』

それを全身装甲越しに見ていると、再びセシリアは呟いた。

『…良い好敵手ライバル関係になれそうですね——貴方とは。』

少し柔らかな口調で、一夏にセシリアは告げる。

——ふと、鳴り響くサイレン。

『隔壁閉鎖——繰り返します、隔壁閉鎖！アリーナ闘技場の全隔壁を閉鎖。以降は、モニタリング観戦に切り替えます！』

アナウンスと共に、シールドバリア発生装置の支柱たる耐爆強化ガラスを守る様に、耐核耐熱耐爆耐レーザー複合装甲から成る隔壁がサブピットを覆う様にせり上がる——

「え？！え？！」

思わず、何が起きているか理解出来ない一夏は困惑し、周囲を見渡す。

—— 背後の隔壁が閉まり切ると、隔壁に設置された複合カメラが捉える映像が耐爆強化ガラスに、プロジェクションマッピングの如く投影される。

その先に——

「——アライズ?!」

視界に映る深緑と紅の全身装甲機体を見て、一夏は驚愕——それと同時に、網膜に機体データが投影される。

《21式機動挺身装備【日方風】》

——装甲耐久——

粒子装甲：100%

複合装甲：100%

機体骨格：異常なし

操縦者：八雲ナガトIIアウグスト

製造元：巖崎重工業株式会社

——兵装——

腕部兵装右：GAU—8EIIガトリングライフル

アウェンジャー

81式Ⅲ型対戦車装甲穿孔槍<sup>パイク</sup>

腕部兵装左：105mmライフル砲

81式Ⅲ型対戦車装甲穿孔槍<sup>パイク</sup>

格納兵装右：16式斬艦刀

格納兵装左：16式斬艦刀

肩部兵装右：MINI-CIWSガトリングガン

肩部兵装左：MINI-CIWSガトリングガン

背部兵装右：GDF-001 35mm連装機関砲

背部兵装左：10式120mm戦車砲

拡張領域内：IHIF5-1T/AWタキオンエンジン

GBE-PPFD-1<sup>プラズマファイナル</sup>発生器

《試製22式機動挺身装備〔雷火〕》<sup>ライカ</sup>

11装甲耐久11

粒子装甲：100%

複合装甲：100%

機体骨格：異常なし

操縦者：篠ノ之箒

製造元：日照ライムントヴァルト社

―――兵装―――

腕部兵装右：NR―ⅡX式複合斬機刀 《ムラクモ叢雲》

腕部兵装左：NR―ⅡX式複合斬機刀 《ムラクモ叢雲》

肩部兵装右：NR―Ⅷ式レーザー発射基

肩部兵装左：NR―Ⅷ式レーザー発射基

背部兵装右：04式改空対空誘導弾／AAM―5Ⅱ

背部兵装左：04式改空対空誘導弾／AAM―5Ⅱ

拡張領域内：NR―F1―7Tタキオンエンジン

―――

「な、ナガトに、箒も乗ってるのか?! どういう事だよ千冬姉!!」

思わず一夏は管制室へ通信を入れて叫ぶ。

『どうも何も、予定があると言っていただろうか? ……今回の模擬戦は先程まで極秘扱いだったからな。』

千冬がそう告げる。



『…なるほど——新装備の営マーケティング業の為に機体を派遣したのは、私達だけではなかったのですね。』

それで——一夏と対照的にセシリアは、全てを察した様に口にした。

——甲冑武士と戦闘機を融合させた様な印象を受ける、紅の機体。

アライズライカ【雷火】のコックピット内。

操縦者——箒の視線の先には。

——戦車に人の形を与えたという印象を受ける、重装備群を山の様に積載したナ

ガトのアライズヒガタチ【日方風】が仁王立ちしている。

——何度目か分からない深呼吸をする。

シミュレーションでは、何度か勝つ事が出来た。

しかし所詮は機械が再現したワンパターンな戦闘機動でしかなく、人間が扱う、血の通った機体と対峙するのは初めてだった。

「——はあ……」

——また深呼吸。

心臓が大きく跳ね、緊張している事が自分でも分かる。

だが何故か、気持ちは昂り続けている。

ナガトはどんな軌道で戦うのだろうか。

やはり最初はガトリングだろうか。

あるいはいきなりパイルで殴りに来るだろうか。

それとも、120mm砲で来るのだろうか。

—— 答えのない思考を巡らせる。

それは、恐れからでも、勝ちたいという欲求から生じたものでもない。

—— 楽しいから、である。

緊張した時、好きなこと事を考えるといい。

そうナガトに教わった通り、箒は行動しただけである。

『——ではルールを確認する』

—— ふと、千冬の声がイヤホン型通信機を介して鼓膜を震わせる。

『パルティクルアーマー粒子装甲を先に削り切った方が勝ち——コンペディションISと同じ勝敗判定

だ。いいな。』

『そういう事だ。』

—— 続いて、ナガトの声も無線越しに響く。

戦闘直前だというのに、何処か優しい声。

『今回はあくまで模擬戦——気楽に行こうや。』

そう告げるのと同時に。

『双方配置に着いたな——』

千冬の声アナウンスを介して響く。

『——ではこれより、【試製22式アライズ《ライカ雷火】の模擬戦を開始する！』

千冬の声と共に——日方風と雷火が激突した…!!

雷火の両肩部ユニット——NR—Ⅷ式レーザー発射基が火を吹く。

瞬時に世界を駆けるレーザーは、大気をプラズマ化し、蒼の閃光を形成する。

二条の光が大気を切り裂きながら——日方風を直撃した…!

だが箒は攻撃の手を緩めない。

すかさず両背部のウェポンコンテナが開き——04式改空対空誘導弾/A A

M—5Ⅱが撃ち出される…!

その総火力は、ブルーティアーズに勝らずとも劣らない。

それを見た日方風は、両肩のMINI-CIWSガトリングガンを起動し——迎撃しながら回避行動を取ろうと、空に上がる。

だが、箒はそこにレーザーを叩き込み——衝撃で、日方風が一瞬停滞する。

その隙を逃がさないと、発射された32発のAAM-5IIミサイルが日方風に食らいつく……！

連鎖する爆発。

アリーナを埋め尽くす爆煙。

通常のコンペートならば一瞬でシールドエネルギーを蒸発させられる火力。

それを経て——日方風は、健在だった。

——日方風、パライクルアーマー粒子装甲残量92%

——日方風、タキオン粒子再充填中

——日方風、パライクルアーマー粒子装甲残量96%

(敵機体やはり腐つても重量型機……硬い！)

日方風と共有している粒子装甲のデータウィンドウを見て、箒は息を呑む。

無論、分かっていたことだ。

近接信管や着弾と同時に炸裂するミサイルは粒子装甲とすこぶる相性が悪い。

実質、完全無力化されると言っても良い。

更に粒子装甲のタチの悪いところは、シールドエネルギーと違い、生成したタキオン粒子を充填することで回復する点だ。

—— ジェネレーターが動く限り無限に再利用可能な絶対防御、とも言えるそのシステムは、アライズの根幹であり、複合装甲との組み合わせによって、最強の盾とすら言える代物だった。

特に、日方風のような重装甲型機に至っては積載できるジェネレーターが強力なぶん、粒子装甲の防御力も回復力も雷火よりは上だ。

コンペートのシールドエネルギーに当てはめ、その上で数値化するならば。

—— 平均的なコンペートが5000程度。

—— 雷火が4万2000。

—— 日方風は恐らく6万は下らない。

正面から火力頼みに当たっても、これでは罅が開かない。

（—— ならー！）

日方風と距離を詰め、両腕に保持したNR—II X式複合斬機刀《叢雲》を、ライフルモードで構える。

応える様に、日方風も右腕に保持したGAU—8EIIガトリングライフルで箒を捕捉

する。

正面からの攻撃は意味がない。

ならば、雷火の得意とする戦い方を実践するのみ……!

眼前で、ガトリングライフルが唸り声を上げて、銃身の回転が始まる。

スラスタアの推力を最大限まで引き上げる。

ガトリングの砲口が閃光を放ち——マズルフラッシュユとけたたましい砲声と共に

に40m徹甲弾が飛び出して——ダブルイグニッション 弾はそれを、二段瞬時加速で躲してみせた……!

、  
、  
、

「マルチステージ・イグニッション 多段瞬時加速?!」

管制室から試合の光景を見ていた山田は、二段瞬時加速でガトリングライフルの一斉射を躲してみせた筈の姿に驚愕する。

——マルチステージ・イグニッション 多段瞬時加速。

内容自体はシンプルであり、瞬時加速を複数回重ねる事で、多段加速するというもの。

事実筈の駆る雷火は時速4500km——マツハ3.5という驚異的な加速を

して、日方風の砲弾を躲してみせたのだ。

だが、多段<sup>マルチステージ・イグニッション</sup>瞬時加速は本来、操縦者への肉体的負荷や機体への負荷が強く、アライズ乗りでもそう容易く習得することは出来ない高難易度技術でもある。

それを——新入生である箒はあっさりと使つてのけた。

それに山田は驚愕したのだ。

箒に負荷を耐えるだけの素養があつたのか、それとも機体が負荷に耐えられる、高機動格闘戦に特化した仕様なのか。

あるいはその両方——。

『なるほど、速いな。』

——それを間近で見ている、ナガトの声が管制室に響いた。

「——なるほど、速いな。」

——瞬時加速と横深瞬時加速による目まぐるしい軌道を描きながら、日方風に数珠玉の様に連なつた黄白色のビームが叩きつけられる。

雷火が両腕に持つブレード機構搭載型複合ライフル《叢雲》——そのライフルモードが放つ、高速<sup>パルス</sup>イオン<sup>スキャノン</sup>速射砲の一斉射によるものだ。

———  
パーティクルアーマー  
 粒子装甲残量87%。

高速イオン速射砲ノの光弾が嵐の様に粒子装甲を叩き、粒子装甲を構成するタキオン粒子を攫っていく。

そして———減衰箇所に、レーザーキャノンを正確に撃ち込んで来る……!

(この速さで……よく当てる!)

日方風の両肩に装備された迎撃兵装《MINI-CIWS》の自動照準射撃オートAIMは雷火を捉え切れずに虚しく空を切り———雷火は日方風の死角を取った。

そして———

『これで———!!』

無線越しの筈の声。

それと同時に———フルバースト  
 全兵装一斉射……!!

高速イオン速射砲ノの煌めく光弾が雨の如く。

レーザーキャノンの自由電子レーザーが雷の如く。

04式空対空誘導弾の放たれたミサイルは嵐の如く。

———日方風の粒子装甲を叩き割る……!!

『はあああ———ッ!!』

更に雷火は突貫———叢雲のブレード機構を起動し、斬りかかる……!



（当然か。俺が見込んだのだからな。）

—— パーティクルアーマー  
粒子装甲残量 62%

眼前より迫る幼犬の攻撃を喰らいながら、ナガトは笑みを浮かべていた。

…それはまるで、子の成長を喜ぶ親か、狼の様に。

、  
、  
、

縦、横、斜め、後ろ、前、すべての方向から高速イオン砲とレーザーキャノンを通つ。

「これです——！！」

目まぐるしい空 ドックファイト 戦の末に死角を取る。

狙うは一点。

人体の死角たる頸——そこに、ありつただけの光弾とレーザーと誘導弾を叩き込む

…！！

—— 高速イオン砲、エネルギー残量ゼロ

—— レーザーキャノン、エネルギー残量ゼロ

—— ミサイル、残弾ゼロ

それで、雷火が持つ全ての射撃兵装が使い果たされた。

本来ならば、このまま高速イオン砲とレーザーキャノンに電力供給用ラインを直結し、エネルギーを再装填する必要がある。

だが、叩き込んだ一撃が日方風の粒子装甲を大幅に減衰させた光景を見て――

（……いける！）

――内心で箒は確信した。

勝機は今しかない――と。

――叢雲のブレード機構を展開。

刀身が90度回転し、グリップがストックと一体化――刀の柄となり、刃からイオンブレードが放出される。

イオンブレード――従来の静電気除去器のように針先からの面放電で高密度イオンを発生させるブレード機構。

誘電体実体刀とその表面に形成した無数の鋸状微細電極によって構成されており、プラズマ発生ポイントを高密度に有することから、高濃度のイオンを素子全面にわたって効率よく均一に発生させることが可能な次世代EN兵器。

大気をプラズマ化させながら、箒はそれを手に、

「はあああ――ッ!!」

――突貫する。

—— 迎え撃つは、ガトリングから放たれる40m鉄鋼弾。  
絶対防御を食い破る事に長けた砲弾での一撃。

「ぐっ、う——！」

—— 僅かに被弾する。

叩きつけられた衝撃が高速機動する機体の体勢が揺らぐ。

しかし箒はそれを、立て直し、

躲した40m砲弾が左肩の粒子装甲を掠める。

—— パーティクルアーマー  
粒子装甲残量79%

スラスターを最大で蒸し、前へ前へと機体を飛ばす。

そこに再び放たれる、MINICIWSガトリングガンの17.5mm砲弾を交えた砲撃。

箒は、それを——

「ふッ、う——っ!!」

—— ダブル・イグニッション  
二段瞬時加速で躲し、距離を詰める…!

前へ、前へ、前へ——とにかく前へ!!

雷火は一瞬にして再びマツハ3.5にまで加速し、更に瞬時加速。  
肉体の軋む音と機体負荷上昇警告が鳴り響く。

箒は歯を食い縛り、眼前を睨む。

箒は、40mm砲弾を放つガトリング目掛けて突撃する。

「まだ、」

ガトリングの砲口が迫る。

距離にして50センチメートル。

しかし、箒はそれを。

「だ——ッ！」

スライド・イグニッション  
横深瞬時加速で躲す。

サイドブースターにより、日方風を中心に円を描きながら箒は、日方風の背後を取り

、

「取った…!!」

—— 箒は叢雲を振るう。

—— 黒鉄の直刀が光を放つ。

黒曜石じみた色であつた刀身は淡い黄白色に輝き、激しい稲妻を発し。

「はああああ——ッ!!」

—— 黄白の刀が一閃される。

刀剣はその軌跡通りにイオンプラズマを放ち、日方風の粒子装甲を吹き飛ばす…!!

そればかりか、小ハイレーザー砲と言うべき電子と熱の塊は炸裂と同時にアリーナを震動させる。

それは粒子装甲に叩きつけられた瞬間——爆煙と共に、文字通り日方風を吹き飛ばした。

アイカメラを下に向けると、放物線を描くようにして堕ちゆく深緑が見えた。

致命傷は避けているだろうしすぐ再生するだろうが、地上への墜落は避けられない軌道。どう足掻いても、地表に叩きつけられた衝撃で粒子装甲パーティクルアーマーは限界を迎える筈。

「——墮とした……」  
箒は息を荒くして笑みを浮かべた。

勝った、と確信した。

だから——日方風が落下しながら、ギロリと此方を睨み。

『——詰めが甘エ。』

ナガトのその声と共に、日方風が左腕に保持していた105mmライフル砲が叩き込まれた瞬間、その喜びは驚愕に塗り替えられた。

——衝撃が機体に走る。

内臓が攪拌されるような感覚。

機体フレームが激しく軋む。

—— パーティクルアーマー  
粒子装甲残量61%

「なッ、あ——!?」

あり得ない。

機体は動いているから反撃は予想していた。

だが—— レーダーアラートが鳴らなかつたのだ。

通常、ISの武器は全てFCSを介したレーダーロック方式による攻撃が前提として構成されている。

それはアライズである雷火や日方風だけでなく、コンペイトである白式やブルーティアーズに至るまで——。

……だというのに、眼前の日方風——今のナガトの砲撃には、レーダーアラートが鳴らなかつたのだ。

故障? いや、あるいは——まさか。

……ナガトの口から聞いたことがある。

—— 【非電探連動射撃】。

レーダー照準に一切頼らず、肉眼のみで砲弾を命中させる離れ業。

実用的ではないだの、教え方が難しいだのとぶつくさ言って教えてくれなかつた技——

——それだけに、箒に与えた衝撃は凄まじかつた。

：射撃の反動で姿勢を立て直し、ブルーティアースの空爆でクレーターだらけとなった地表に容易く着地して見せたこと等、眼中に無いほどに。

「ッ——！」

怯えるな。

まだ戦闘は終わっていない。

箒は自らを鼓舞し、射撃兵装に切り替える。

ミサイルは底を付き、レーザーキャノンはコンデンサを充電中。

だが——高速イオン砲はまだ、2000発程残弾がある。

——日方風・パルティクルアーマー粒子装甲残量59%

——雷火・パルティクルアーマー粒子装甲残量61%

：両者の粒子装甲残存耐久量に差はない。

むしろ雷火が僅差で上回っている。

だが——ふと、ナガトは何を思ったか、

「——え？」

日方風の装備をパージし始めたのだ。

——左腕105mmライフル砲、パージ

——肩部MINI-CIWS、パージ

『ふむ——ま、多少は軽くなったか。』

肩の荷が降りた——と言わんばかりの口調でナガトは言う。

『お前とやるには、どうも少し、重過ぎるんでな——』

ガトリングライフルの砲口を雷火に向けて——ナガトが口にする。

それはまるで、狩人か、狼のような声音で。

『——続きだ、行くぞ。』

お前には、まだまだ仕込むべき事がある——そう、言外に告げる。

「——はい！」

宣告と共に、日方風がガトリングライフルの引き金を引き——雷火が超疾した。

渦巻く突風。

叢雲を手に、あか紅い機体閃光が黄白の光弾を放ちながら疾走する。

——迎え撃つは黒鉄のGAU—8EIIアヴェンジャーガトリングライフル。

砲口がけたたましい轟音を立て、緋色の弾道を描きながら40mm徹甲弾を撃ち出していく。

奔る砲弾。

流す一撃。

秒速1200mの速さで駆ける40mm弾を筈はすんでのところで、イオンブレード



を展開した叢雲で受け流す。

「ッ！」

雷火の動きが止まる。

日方風は、雷火の疾走を許さなかった。

標的まで40メートル。

嵐のように攻め来るガトリングライフルは、先程の様に間合いに詰める事すら許さなかった。

射程2000mを誇る武装であるそれは、射程圏内に侵入してくる敵を撃墜すれば良いだけ。

対して、それに挑まざるを得ない箒は明らかに劣勢だった。

——その相手が、火力投射に優れ、更に機動力を増した状態ならば、尚の事。

——だから、超機動力をもって、その穴を埋めるしかない。

箒は。再び多段瞬時加速を掛ける……！

「——ッ！」

雷火が三段瞬時加速で飛ぶ。

時速4900km —— マッハ4.1の速度域にまで加速して、イオンブレード

を振るう……！

先程とは違う。

瞬時加速を常時行い、超音速で地面を駆け、地表上空、前後左右から目まぐるしく日方風に喰らいつく。

展開したイオンブレードの光を引きながら駆け抜ける様は、美しい流星の様ですらある。

だが、悠然と構える日方風は、ガトリングライフルから砲弾を撃ち、雷火を迎撃する……！

箒がいかに超音速で近付こうにも、ガトリングライフルの一斉射によつて全てが阻まれる。

——しかしそれは、ガトリングライフルの砲弾が続く限りの話。

『——』

カラカラカラ、とガトリングライフルが空回りする音を立てる。

砲弾が尽きたのだ。

すかさずナガトは右腕のガトリングライフルをパージし、装備を持ち替える。

——その一瞬。

(そこだ——！)

箒は、ナガトの死角——脳天直上から、急降下斬撃を叩き込む……！！

：しかし、それは。

——ガイン轟という、重金属音が爆せて、阻まれる。

その音源は、日方風が持ち替えた装備だった。

巨大で無骨な鉄塊の剣。

凄まじく重く、その大質量を持つてして敵を薙ぎ払う事が見ただけで分かる近接武装。

およそ通常の I S に扱える代物ではなく、また I S に対して扱う代物でもない。

それは——ジャイアント・キリング巨大兵器撃破に特化した武装。日本帝国の空対艦迎撃ドクトリンが

産んだ魔剣。

——名を、【16式衝撃斬艦刀】。

ただひたすらに、純粋な大質量の刃で戦艦を叩き斬る為に創造された武装だった。

：故に、その大質量——盾として、箒の叢雲を受け止めることなど造作もない：

！  
「くっ——！」

——迂闊。

その二文字が頭に浮かんだ瞬間、斬艦刀が振るわれ雷火は吹き飛ばされる。

——パルティクルアーマー粒子装甲残量 55%

(まだだ——！)

しかし箒はすぐさま横深瞬時加速。次いで三段瞬時加速——直ぐに超音速に回帰し、再び日方風の死角に斬撃と高速イオン砲を叩き込む……！

だが——いかに箒が目まぐるしく飛び回り死角を突こうとも、日方風は斬艦刀のただ一振りですべてを弾き返し、返す刀で雷火の粒子装甲パーティクルアーマーを削っていく。

——粒子装甲残量51%

「はっ——、あ——！」

——奇襲を弾かれる。

超音速という速度域を駆ける箒は、近接戦によつて叩き込まれたイオンブレードの剣戟は確かに日方風の装甲を攫っていく。

だがそれ以上に、日方風の防御が堅牢なだけという話だ。

——超音速機動による強襲に長けた雷火。

——堅実な防御型近接戦に長けた日方風。

一見雷火が有利に見えるそれは、長引けば長引く程、持久力のある日方風が有利になつていく。

日方風には未だ斬艦刀の他に、腕部固定兵装のパイルバンカーや背部兵装の120mm対戦車砲といった大火力兵装を保持している。

故に日方風に勝機が傾いた瞬間、一気に逆転されてしまう。

事実、雷火は持ち前の超機動力と近接格闘能力をもって攻め続けることで、日方風の攻撃を封じていた。

もし攻撃に転じることを許せば、その瞬間終わりだ。

「ふっ、ッ——！」

——だから箒は泥沼だと知りながらも、体力に限界を感じながらも必死に攻撃を繰り返す。

『——』

——対して、日方風は無傷とイカないが未だナガトの体力に衰えは見えない。

雷火の斬撃は二度目の攻防が始まって以来、一撃たりとも日方風に届かず、不動のままナガトは迎撃する。

その様は、さながら城塞だ。

技量、体力、戦力——その三点において、ナガトと日方風は、箒と雷火を圧倒している。

故に、唯一雷火が日方風を上回っている超音速機動力が失われた瞬間、あるいは箒の機動パターンを見切った瞬間、ナガトは地を蹴り反撃に転じるだろう。

「くっ、う——！」

「箒の体力は既に下り坂だった。

ナガトが箒の軌道を見切るのは、時間の問題だ。

もってあと数秒——全力を出せなくなった瞬間、雷火は日方風に噛み砕かれる。

『ふむ——罅が開かんな。』

そしてその時は、

『——では罅を開けるとしよう。』

ナガトのその言葉と共に、迎える事となった。

——日方風が飛ぶ。

斬艦刀を雷火の予測軌道上に放り投げ、時速4000kmに達する瞬時加速で、箒の前に躍り出る。

日方風では雷火の速度に追い付く事は叶わない。

ならば予測軌道に出れば良いだけのこと。

投擲した斬艦刀に追いつき、空中で掴み取るなりナガトは雷火を薙ぎ払う。

箒はそれを、反射的にふた振りの叢雲で防ぐ。

——轟音。

大気を裂かんばかりの鋼と鋼の激突は雷火の敗北で終わった。

衝撃で地表に投げ出され、ざざざ、という音と共に雷火は地上に押し戻される。

そこに、120mm戦車砲が叩き込まれた……!

「ぐう……！」

装弾筒付翼安定徹甲弾

パルティクルアーマー

APFSDSが雷火の粒子装甲を食い破り、姿勢が崩れる。

パルティクルアーマー  
粒子装甲残量39%

その瞬間を追撃する国防色のアライズ。

再び、斬艦刀を叩きつけてくる軌道——それを箒は受け流し、防ぎ切る。

だが関係ない。

受け流されたのなら、また引き寄せて斬れば良い。

そう言わんばかりにナガトは即死級の斬撃を繰り出して来る。

パルティクルアーマー  
粒子装甲残量32%

斬艦刀が嵐のように振るわれる。

重装甲型機に非ざる速さと重装甲型機ならではのアクチュエータ出力をもつてして、

日方風の速度は近接格闘型機である雷火を上回っている。

圧倒的なまでの力と速さ、そこに扱う人間の技すらも組み込まれる。

……そうなれば、逆立ちしても箒に勝ち筋が無い事など明白だった。

箒も、そんな事は分かりきっている。

だから——最後に一矢報いようと、今は死力を尽くす。





—— 迷うな。どうせ結果は同じなんだ。だったらもう最後までやるしかないだろウツ…！

箒は覚悟を決め—— 叢雲を振るう。

火薬の炸裂と共に、撃ち出される穿孔槍。

ゼロ距離から叩き出された装甲を穿つ射突ブレードはそのまま雷火目掛けて迫る。

(—— 構うな！)

「はああああああああ—— ツツ!!」

悉く討ち払う、雷霆の斬撃。

最大出力で放たれたプラズマイオンが、アリーナ世界を、眩いばかりの雷の嵐で照らし上げ、ブレードと余波のプラズマが、日方風の粒子装甲を削り切る…!!

—— その嵐が鳴るコンマ数秒前。

ズン、という衝撃と共に。

穿孔槍が雷火の粒子装甲を貫き削り切ったのは、その時だった…！

—————

《21式機動挺身裝備【日方風】》ヒガタチ

――装甲耐久――

粒子装甲：0%（回復作業開始中）

複合装甲：100%

機体骨格：異常なし

操縦者：八雲ナガトⅡアウグスト

製造元：巖崎重工業株式会社

――兵装――

腕部兵装右：16式斬艦刀

81式Ⅲ型対戦車装甲穿孔槍パ  
イ  
ル  
パ  
ン  
カ  
1

腕部兵装左：81式Ⅲ型対戦車装甲穿孔槍パ  
イ  
ル  
パ  
ン  
カ  
1

格納兵装右：

格納兵装左：16式斬艦刀

肩部兵装右：

肩部兵装左：

背部兵装右：GDF-001 35mm連装機関砲

背部兵装左：10式120mm戦車砲

拡張領域内：I H I—F 5—1 T / A W タキオンエンジン  
 G B E—P F D D—1 発生器  
ブラズマファイールド

《試製22式機動挺身装備【雷火】》  
ライカ

—装甲耐久—

粒子装甲：0%（回復作業開始中）

複合装甲：100%

機体骨格：異常なし

操縦者：篠ノ之箒

製造元：日照ライムントヴァルト社

—兵装—

腕部兵装右：N R—II X 式複合斬機刀 《ムラクモ叢雲》

腕部兵装左：N R—II X 式複合斬機刀 《ムラクモ叢雲》

肩部兵装右：N R—VIII 式レーザー発射基

肩部兵装左：N R—VIII 式レーザー発射基

背部兵装右：

背部兵装左：

拡張領域内：NR—F1—7Tタキオンエンジン

「はあっ…、はあっ…、はあっ…！」

箒は荒く息をする。

心臓が未だ激しく脈打ち、神経が研ぎ澄まされたまま。

観客席からモニター越しに見ている生徒らは皆一同に、戦闘経過に圧倒されている。

一夏やセシリアも同様だ。

『ふむ——まあ…こんなもんだろう。』

無線越しにナガトが呟く声と同時に、

《——模擬戦闘終了》

試合終了を告げるアナウンスが鳴った——。

## #06 クラス代表決定

日本帝国長崎県五島市浜町

男女群島・国連直轄領トキオ自治区セントラル区

IS学園1年1組

「というところで、一年一組代表は織斑一夏くんに決定です——1繋がりで良い感じですね。」

翌日のホームルーム——山田先生はそう告げた。

…その結果に女子達は歓喜し、一夏はポカンとする。

「先生質問です。俺は昨日の試合に負けたんですが…」

——なんでクラス代表になっているんですか。そう、言外に問いかける。

「それは——」

言いかけて、山田が目配せする。

…応えるように、

「——わたくしが辞退したからですわ！」

——セシリアが立ち上がり、そう告げた。

「確かに貴方は、わたくしとの勝負には負けました。ですが、昨日も申しした通り——  
わたくしにあそこまで切り込む事が出来た。：それだけで、貴方をクラス代表に据えて  
も問題ないだろうと判断した。だから辞退したのです。」

口にする様は優雅そのもの。

だが、内容は一夏の努力に対する称賛と自身をギリギリまで追い詰めて見せた事から  
の実力に対する信頼なのだろう。

意思があり、実力も伴っている。

——ならば、クラスを率いるに相応しい。

少なくともセシリアはそう判断したのだ。

「え…で、でも俺…適正ランクDだぞ？オルコットの方が上のAランクじゃないか。

適正が上で、経験があるオルコットの方が相応しいんじゃないか？」

一夏が思わず問い返す。

「た、確かに…」

「クラス代表がランクDって言うのは…」

続く様に女子達も口にする。

IS適正ランクによる優劣関係の偏見。

ヴァルキュリー——コンペイト乗りに対する別称——によく見られる風習

だ。

旧コロニア時代から適正ランク至上主義だったコンペートは、適正ランクに応じて生活の質を約束されていたという。

今はその様なものは無いが、高い適正ランクであればあるほど偉い、優遇されるべき——という風潮は健在だった。

——その流れを断つように。

「現段階のランクなど、アテになるまい。」

——箒が口を開く。

ヴァルキュリー達の適正ランク視感はどうに破綻している。

ヘズナル——アライズ乗りに対する別称——として、アライズに携わつてきた身としては、オリジナルナンバー達によって『IS適正が塵コミでも戦闘の専門家たる実力者であれば、適正ランク等あつて無いに等しいモノ』である事実が打ち立てられた話は身に染みて感じていた。

——周囲から向けられる、非難の視線。

それに抗うように、箒は立ち上がり、

「所詮今の私達は未だ乳歯も抜けないヒヨッコだ。なら、実際に結果を残した者を優先するのは道理に適っている——少なくとも、私もそう考える。」

——そう言い放つ。

…どれほど適正が高かろうと、扱う力が未熟では話にならない。

そしておそらく、一夏が努力だけで自身を肉薄した事で、セシリアもその事実を受け入れたのだろう。

彼女は箒を見て、強く頷いて見せた。

「ふむ、言っている事は最もだが——」

ふと、教室の支配者が声を漏らし、

——スパーン！スパーン！

出席簿が、箒とセシリアの頭蓋に直撃する。

「——今は私の管轄時間だ。座れ。」

そう言い放ちながら教卓横に立ち——

「二年一組のクラス代表は織斑一夏——異存はないな？」

——問いかける。

それに向けられた返答は、様々な思惑はあれど、満場一致の賛成だった。

「参ったな…強制かよ…。」

ガクリ、と一夏は項垂れる。

そこに、クラス代表として挨拶くらいせんか——と追撃の出席簿が入る。



ぐう……とどう言おうか、一夏は喉が詰まる。

だが箒は一夏を慰める様に、褒め称える様に。

「悲観する事はない——苦難があれば、また支えてやる。だからこの瞬間くらいは素直に誇ると良い。」

——そう告げる。

そこには、ただ気の強いだけの幼馴染の影は無く、母性を孕んだ少女の姿だけがあった。

……そうだ、それに。

一夏は思い出す。今日まで支えてくれた人達。

その人達の為にも、裏切れない。

退路は無いが、同時に背中を押して支えてくれるヒトがいる——その事実を認知して。

「……、一年一組クラス代表として、頑張つて行きます。……ので、よろしく願います。」

単調でテンプレートな挨拶。

だがそこには、入学当初の優柔不断な様はなく、少し成長した、芯のある声をした一夏がいた。

—— 応える様に、拍手が教室に充満した……!



IS 学園・グラウンド

—— 1 限目・実機演習

それはそれとして  
閑話休題。

そこには IS スーツ—— 見た目は全身のボディラインを強調する紺色のフライトスーツ—— を着た 1 組の少女たちと一夏。

そこに千冬が、号令をかける。

「これより 1 組の実習を行う—— おい織斑。今は " やすめ " の姿勢だ。前を隠すな。」

「ッ、は、はい——……!」

一夏は全身にピッチリ吸い付くフィット感のせい、全身が IS スーツで締め付けられているが、同時に男性器と尻がやたらと締め付けられてそれぞれ強調されてしまっているらしく、凄まじく赤面している。

「きやー織斑くんったらオトコノコー♡」

「あらやだ、結構可愛いちんちんじゃない?」

「ふへへ…お尻のラインも綺麗…撫でて揉みしだきたいデカ尻だワ…♡」

（———この変態共め。）

そんなISSスーツとは対照的な、耐G機能を備えた作業着ツナギのような外見の、カーキ色の軍用ISSスーツ—— 16式航空服（帝国陸上自衛隊仕様）を着込んだ箒は内心毒付いた。

「騒ぐな馬鹿者———これによりISSによる基本的な飛行操縦を実践してもらおう。織斑、オルコット、篠ノ之、ためしに飛んでみる。」

「え?!わ、私もですか?!」

千冬の発現に箒は驚愕する。

———それは他の生徒も同様だ。

「そうだ、形はどうあれ、一応は専用機持ちだからな。」

さも当然———と千冬は言うが、箒は困惑を隠せない。

箒は確かに専用機を持っている。

だが———それはアライズだ。

前日の模擬戦に隔壁でアリーナの闘技場を密閉してタキオン被曝対策まで行っていた辺り、汚染問題を考えれば、千冬の発言は正気の沙汰ではなかった。

『——まあ、問題無かろうよ。粒子装甲を出さん限り、基本的にはエンジン内のフィルターがタキオン粒子の毒性を中和してくれるからな。』

ふと、外部スピーカーを通して響いたであろう声。

その音源に、生徒全員が振り返る。

一同の視線の先には——  
 巖崎重工製 A—C I S—E O S O 3 式強化外装甲機【打

鉄壱型丙】が展開していた。

打鉄壱型丙——コンベクション・インフィニット・ストラトス【打鉄】をベース

に開発された次世代型 E O S であり、大まかな性能としては、男女問わず、凡人でもコントロール可能なアライズのダウングレード・モデルと言ったところだった。

…現状、コンペートは搭乗者を女性に限定するという問題から。アライズはその運用に汚染を撒き散らすという問題から。

——主力機動兵器は、E O S のままだった。

だからこそ、E O S もアライズやコンペート同様、進化するというもの。

——そのうちの1機が学園に配備されたのだろう。筈はそう判断した。

…というかそれ以上に。

「えッ…?! ナガト!?!」

ナガトが打鉄壱型丙に乗っている事に驚いた。

いやまあ、警備課にいるし、エイシズ・イオスは男も乗れるから不思議は無いのだが。

『おう、俺だ。というわけで雷火をトレーラーで搬入して来た——行つてこい。』

「そういう事だ。ボサつとするな。」

「——ッ、はいっ!!」

ナガトと千冬に促され——箒はトラックの方に駆けて行つた。

「……で、八雲。今は私の管轄時間なのだが?」

『失礼——グラウンドの警備業務に戻る。』

ナガトはそそくさと、照準をグラウンド外縁へと向けた。

同時に、トレーラーの荷台が垂直にせり上がり、ガントリーロックに固定された雷火

が顕現する。

慣れた手つきで雷火のコックピットブロックに箒は飛び込むと——

「——システム起動。対Gジェル注入開始。」

——バイオメトリクス生体認証スキャンと口頭操作で、システムを起動させる。

彼女の視界——アライズと接続することによって網膜上に展開された仮想視界

の先に、グラウンドの風景が映る。

『——箒。何度も言うが、粒子装甲は使用禁止だ。』

プライベート秘匿回線通信でナガトが箒に告げる。

「はい、分かっています。」

『うむ。あと、生徒からは僅かに距離を取るよう心掛ける。汚染が極めて低いとはいえ  
——それはアライズだ。』

何事に対しても、慎重にあたれ。』

事故を起こした場合、この場にいる全員がタキオン被曝で死ぬ——そう、ナガト  
は言外に告げていた。

「——肝に、銘じます。」

その意図を汲み取った箒は、強張った声でそう返す。

ふと、視界にて、蒼のコンペート——ブルーティアーズが起動する。

流石の起動処理速度。

流石は天才か。それは箒も惚れ惚れする速さだった。

——負けていられないなど、無意識に対抗心を箒を燃やした。

心臓部のタキオンエンジンを火を灯し、生成されたタキオン粒子によって莫大なエネ  
ルギーが即座に大量生産される。

それらはアクチュエータ複雑系（ACS）を通して全身に行き渡り、やがて雷火のバ  
イザーアイセンサーが爛々と輝き出す。

ずくんつ、と——自分の内側から、異なる何か快感となつて産まれたような錯

覚。

——その一瞬を経て、雷火は起動する。

「雷火——起動、完了。」

脳に流れ込む、フィードバックデータの嵐に喘ぎながら箒は告げる。

——この程度で煩惱を感じる程度ではまだまだ下つ端だと、自らを叱咤する。

：厳密には、違う。

それはコンペートの起動方法とアライズの起動方法の違いだ。

コンペートは、ただISスーツと脳波計測装置を機体と同調させるだけ。

対して、アライズはまずスーツ内を耐Gジェルで満たし、次にISスーツの生体デバ

イス装置に神経伝達信号測定針が脊髄に打ち込まれ、機体と脳髄を直結する。

そうした複雑な工程を経て、ようやく鋼の巨躯に命が吹き込まれる。

それだけ起動までに行程があれば、差が出るのは当然だ。

だが——機体のせいにするのは、納得いかない箒はやはり対抗心を燃やしてしま

う。

それは人のサガというものだろう。

『——で、いつまで貴様はかかつとるんだ貴様は。もうオルコットも篠ノ之も起動

したぞ。』

呆れ顔で千冬が一夏の方を向いて言う。

…確かに、未だ白式は起動していない。

『集中して起動できんなら、口でやれ。』

『——動け、白式。』

一夏がそう呟くと、白式は2秒足らずで起動する。

それに安堵する様な息遣いが通信越しに聞こえる。

「遅い。熟練のI S乗りなら1秒とかからず起動できる…まあ、例外はあるがな。」

だが千冬がその、少し調子に乗っているような織斑に切り込むように言い、次いで箒

アライズ  
——雷火を見る。

『よし、飛べ』

そう言われ、3機は足を曲げ勢いよい良くその場でジャンプするような形で垂直に飛

び上がる。

——速度はざっと、時速400キロ。

しかし、やはりというべきか。

代表候補生たるセシリアが2人よりも頭上に飛び、ある一定の高さに静止する。

箒も胸部に内臓されたJ—f Aシステムを点火。ジェット補助推進

…少し強引に機体を停止させ——反重力力翼を展開。



そうしているうちにオルコットは空中巡航を開始しグラウンドの周りを旋回し始めた。

『篠ノ之、オルコットに追いつくように飛んでみる。』

そうインカムを手を持った織斑先生が言ってくるのでオルコットの後を追う。

喰らいつくことは簡単だが、できるだけタキオン粒子の中和限界域を超えない様に意識しながら、機体を前に出す。

『あら？ 私のお尻にくぎ付けにされたのかしら篠ノ之さん？』

「…追い越して、そんなバカなことを考えていない奴だと証明してみせます。」

あの試合以降オルコットは強張っていた表情が柔らかくなり、高慢な態度が緩和されていた。

時には今のように冗談を交えるくらいだ。

——だが今は、追い抜く事が最優先だった。

「ふっ——！」

スラスターを点滅させるように高出力で瞬間的に吹かして一気に加速。

続け様に、その流れに乗りもう一度点滅させるように高出力で瞬間的に吹かす…！

二段瞬時加速———箒の十八番<sup>オハコ</sup>だった。

それはセシリアを悠々と抜き、前後を逆転させる。

しかし粒子装甲によって空気抵抗を相殺していない状況下で時速4000キロ——  
——マツハ3にまで加速したせいも、機体が軋む。

…非粒子装甲展開状況下では、多用出来んなと、箒は内心思う。

更に言えば、そのまま減速し——セシリアと並列してしまう。

『まだまだでしてよ』

「…むう。」

——セシリアに言われ、箒はバツが悪そうに口を尖らせる。

…確かに、持久力の無さは前回のナガトとの模擬戦で露呈した自分と雷火の課題点。  
だと言うのに、また同じ過ちを踏んでいる。

——迂闊だった。

『なんでお前らそんなに速いんだよ。どういうイメージしてるんだ？』

ふと、ずっと最後尾を駆けている一夏が聞いてくる。

『一夏さん。所詮はイメージ。自分がしやすい方法を模索するのが賢明でしてよ』

——セシリアが言う。

確かにその通りだが、それよりもう一步踏み込んだ説明が必要だろう。

「…私としては、他の何かに例えるのがいいのかもしれない。例えば…飛行機とか。」

『いや、ソレとかと同じに考えたら飛ばないぞ、これ。』

「飛行機と同じ理屈で考えるのではなく、パツと見た同じ感想を思い浮かべるんだ。例えば飛行機を見て速いって感想を抱いたのなら、そのことを思い出し続ける——そうすれば、自分に反映していく筈だ。」

『んー、ポイントはわかったんだけどさ……なんで飛んでいるのか気にならないのか？』

「こっちは空を飛んでいること自体あやふやだっていうのに……」

——まるで、空に堕ちてるみたいだ。と一夏は言う。

なるほどその錯覚は、初心者陥り易い感覚だ。

それなりに練度を積んだ筈とセシリアからすれば当たり前だが、初心者である一夏に、先程のアドバイスは不正確だったかも知れない。

まずはそう——『水の中を泳ぐつもりで空に浮かぶ事に慣れる』とでも言うべきだったかもしれない。

『説明しても構いませんが長いですわよ？反重力力翼と流動波干渉の話になりますもの。』

セシリアが言った瞬間、一夏の頭は理解を拒絶した。

否。理解する意思はあった。

だからこれはそう——脳の処理速度が追いつかなくなったという話。

『すまん。また後で頼む、もう頭がいつぱいだ』

プスンプスン、と頭がショートした様な顔で一夏は告げる。

「——では、また放課後の自習時間で整理するでしょう。だがくれぐれも、アリーナの使用許可申請を忘れるなよ？」

…ふと眼下を見下ろせば、グラウンドは遥か彼方に見える。

——高度900メートル。

生徒の集団は胡麻粒の様に小さく、ここがどれだけの高さがあるのかを物語っている。

『…っ、チビリそうな高さだ……。』

「粗相しても構わないが、寝小便癆まで付けないでくれよ？」

『いやしねえよ!!』

——まあ、実際の所。

ISスーツはコンペイト、アライズを問わず長期運用に耐える為に生理的非常用ユニットが複数備え付けられている。

一夏に貸与された男性用コンペイジョンISスーツも股間部の内側は皮膚密着型おむつになっていたりする。

だが、そんなものに頼るなどごめんだ——と言わんばかりに一夏は赤面しながら箒に怒鳴り返す。

それをセシリアはクスクスと笑っていた。

『3人とも急降下と完全停止をやって見せろ。目標は地上から10cm以下だ』  
ふと、その場に千冬の無線が振じ込まれる。

『了解です。ではお先に』

そう言つてセシリアは急降下をし始めた。

そのさまは鷹が一気に地表のネズミを狩りに行くよう。

しかし地表すれすれのところで機体を反転させ地面に足をつける。

——見事。

あそこまで、自分は綺麗に決めることは出来ないだろう。

だが次は筈の番だ。

「では、先に行く。」

『ああ』

スラストを蒸し、時速3600kmに加速する。

——0.00002秒。

一気に下に向けて加速しどんどん近くなる地表。ジェットコースターなんて目ではない。もはや墜落寸前の航空機が近いだろう。

——0.00018秒。

モニターに地表何メートルと表示されそれが30mを切ったところで機体を反転させJASラスターを全開。

：しかし、少し遅かったのか、無理なブレーキは機体のバランスを崩して。

——0.00025秒。

どすん、と。セシリアから30メートルズレた位置に、地面を踏み抜く様に着地する。

：当然、目標は大幅にオーバーだ。

——急降下だからと速くし過ぎた：)

失敗した。と筈は思ったが、後の祭りだ。

『篠ノ之、地面を凹ませてどうする。急減速と姿勢制御のタイミングを考えろ。あんな超スピードでは失敗して当然だ。：あとで凹ませた箇所を補修しておけ。』

千冬がそう言う前に何人がかくすくと笑っていた。

まあ、失敗を笑うのは普通なのだがせめてこらえる努力くらいはしてくれと思う。

しかし、今回の失敗は私が原因だ。笑われて当然か。

無理矢理そう言い聞かせ、はい。つと、言おうとし——ハイパーセンサーがけたたましい警報を鳴らす。

——空の方を見上げる。

「ちよ、どいてくれええええ!!?」

情けない声を出しながら降下——あろうことか減速せずに加速しながら、白式を纏った織斑が落下してくる。

瞬間、

「皆さん伏せて!!?」

山田が生徒に向けて叫ぶ。

「ッ、あの馬鹿——!!」

瞬間、箒は雷火のスラスタを全力で吹かし、横深瞬時加速で地面を滑る。

生徒と真耶の前方に立ち、一夏の直撃を防ごうとする。

——刹那。

銃弾並みの速度で飛んで来た打鉄壱型丙が、箒の眼前に立ち塞がり、追加装甲を展開

——直後、凄まじい爆音と共に織斑は地面に激突し、地面が抉れ、衝撃で地面から

幾つかの破片が曲線を描きながら飛び散る。

ソレを、打鉄壱型丙のシールドが、受け止める…!!

がんつ、という音が連鎖し——シールドで砕けた細かな破片が雷火の表面装甲を

叩く、乾いた音が響く。

「ナガト……!」

一瞬箒は、飛び出したナガトに驚きを隠せずだが酷く安堵する。

だが――

『真耶！負傷者確認!!』

命令系統を無視したナガトの叫びでハツとする。

『はい！皆さん名前順に点呼します！――相川さん!』

『はっ、はい!』

『イエアードさん!』

『はい!』

山田も、負傷者確認――主に意識不明者かどうかの選別――の為に点呼を開始する。

「ツ！そうだ、一夏――一夏!!」

『いつつ…』

当の織斑はというと、地面に深さ3メートルの大穴を開けながらも、無傷だ。

コンペートの絶対防御ささまさま、といったところか。

それに、ほんの少し安堵する。

『総員点呼完了！負傷者なし!!』

山田が宣言する。

生徒達の側に破片が落ちなかった訳ではない。



だが生徒の方に堕ちた破片は、大半が当たってもほぼ無害なサイズや、千冬が打鉄の刀で撃墜していた事から、被害は軽微だった。

——それに胸を撫で下ろす。

『ヒヤヒヤさせる…。ありや、また指導が要るかな…』

ナガトから漏れた通信。

それに箒は全力で同意する。

今回はどうにか被害がほぼゼロだった。

——しかしコレでは、いつか人を殺す。

『織斑くん大丈夫？』

そんな事は知る由もなく、女子たちは気軽な声で大穴を開けた織斑に話しかける。

『誰が大穴を開けると言った、馬鹿者…っ！』

千冬は周りの女子がいるからか抑えているが、顔には明らかな怒気を孕んでいた。

『お前の耳が悪いのか？それとも目が悪くて地面が見えなかったのか？一歩間違えば死亡事故に発展していたんだぞ！』

続け様に千冬から放たれる罵倒。

——だが、事実だ。

もし、千冬が破片を防ぎ切れなかったら。

もし、ナガトと箒が防ぎに来なければ。

もし、山田の反応が遅れば。

全員がギリギリで対応したが故に、死亡事故を回避できた——逆を言えば、そのうちのどれかが欠ければ死亡者が出ていた可能性があるのだ。

その事実は一夏に深く突き刺さる。

『…すみません。』

ことの重大さを理解したのか、クレーターの中心にいる織斑は項垂れまた背が一回り小さくなったような反省をしている。

『…後でヒヤリハット報告書の提出。それとこの大穴を埋め直せ。』

——分かれば良い。

そんな顔を浮かべて千冬は言う。

「——」

箒が言うべき事はない。

そも、言う資格もない。

元々、対セシリア戦のアリーナ内での運用に特化した機動スキルを叩き込むあまり、急降下からの完全停止、などといった機動訓練を叩き込んではいなかったからだ。

そういう意味では、今回の事故の一端は箒にもある。

「あの、織斑教官」

その事を告げようとして。

『思いつけるなよ、篠ノ之。これくらいは出来て当然の話だ。そもそも、参考書を捨てるなどという愚行で完全停止のやり方を理解していなかった織斑が何よりの問題だからな。』

思考を読まれているのか、言おうとしていたことに対してカウンターを言われてしまった。

『——それに授業はまだ終わりでは無い。∴織斑、武装展開ぐらいはできるようになっただろう。やってみせろ。』

『はあ』

『教師にはハイ・イイエで答えろ。』

『はいっ』

『よろしい——ではとつとはじめろ』

そういつて白式の手に光の粒子が集まり、強大な白い野太刀が光の粒子から現れる。

白式が装備しているタキオンブレード——雪片式型だった。

——当然の如く、タキオン粒子刃『零落白夜』は発動していない。

『遅い、0.5秒台で展開できるようになれ。』

やはり辛辣な評価が下る。

『篠ノ之、今ある武装をすべて展開してみろ』

「はいッ——…あ」

次は箒に振られる。

箒は応答したものの、一拍開けてハツとする。

「——あの、今ある武装が全てなのですが…」

『…なんだと?』

箒の声に千冬も訝しむ声で応え、手元の端末で確認する。

—————

《試製22式機動挺身装備【ライカ雷火】》

——装甲耐久——

粒子装甲：100%

複合装甲：100%

機体骨格：異常なし

操縦者：篠ノ之箒

製造元：日照ライムントヴァルト社

―――兵装―――

腕部兵装右：NR―ⅡX式複合斬機刀《ムラクモ叢雲》

腕部兵装左：NR―ⅡX式複合斬機刀《ムラクモ叢雲》

肩部兵装右：NR―Ⅷ式レーザー発射基

肩部兵装左：NR―Ⅷ式レーザー発射基

背部兵装右：04式改空対空誘導弾/AAM―5Ⅱ

背部兵装左：04式改空対空誘導弾/AAM―5Ⅱ

拡張領域内：NR―F1―7Tタキオンエンジン

高速イオン速射砲予備弾倉

AAM―5Ⅱ予備弾頭

『…なぜ武装が拡張領域に無いんだ？』

まだ近接ブレード程度のスペースはあるだろう？』

「これ以上積むと重量過多になりますし、EN供給が追いつかなくなりますから。」  
 なので、最低限リロードする時しか拡張領域からの展開はしない――と。

つまりはそういう事だった。

『ならば、リロードだけでも良い。やってみろ。』

「了解。」

∴ 叢雲、弾倉パージ。

— 0. 00000001秒。

叢雲の高速イオン速射砲から弾倉が弾け飛ぶ。

— 0. 00000250秒。

そして箒はソレを。

— 0. 00000581秒。

(指定展開……)

告げる思考命令。

— 0. 00001652秒。

定められた座標。

— 0. 00005874秒。

叢雲の弾倉にエネルギーコンデンサが拡張領域から投影され、

— 0. 00006012秒。

入れ替わる様に弾けた弾倉が量子化され、拡張領域に取り込まれる……!

— 0. 00009982秒。

そしてガチャンと音が鳴る。

—— 0. 00100002秒。

「装弾完了——撃てます。」

箒は告げる。

一夏とセシリアも——それどころか、生徒達全員が、その早業に驚愕していた。

総合計時間、約0. 001秒。

そんな早業——否、もはや神業と評するべきか。

ただ3人、千冬と山田とナガトだけが平然としていた。

『ふむ、まあアライズに求められる高速戦闘戦を考えれば、出来て当然のスキルだろうが

……どう思う、山田くん、八雲警備官。』

『うーん……箒さんの機体相性的には、もう少し早く出来た方が良いでしょうねえ……。』

『悪くは無いが、右に同じだ。まあ、お前の場合は近接戦しつつ装弾とかもアリじゃないか?。』

一応言っていることはおかしくはない。

ただオブラートに包んでいるが厳しく辛辣というだけだ。

——ところで何故山田先生にまで聞いたのか、と。箒は疑問に思った。

『では次。オルコット、武装を展開してみろ』

『はい』

そう言われた右手を右斜め下に掲げる。

直後に光が弾けブルーティアーズの目玉である「カデケウス」レーザーオービットが現れ、左腕からは「インターセプター」レーザーブレードが展開。

そして右腕に、「スターライト Mk. III」が握られ――

『あがあ?!』

『えっ』

『あ…』

『うわあ…』

――横にいた白式の股間部に鈍い音を響かせる。

一夏は突然過ぎる不意打ちに間抜けな悲鳴をあげる。

セシリアは一瞬理解が及んでいない顔。

箒は全てを察した上で思わず声が漏れてしまい。

ナガトは不意打ちを受けた一夏へと、武装を破損させたであろうセシリアに同情する様に顔を顰めた。

本来銃の砲身で殴るのはいろいろと問題がある。曲がったり、破損したり。

殴るのは主に銃床である。砲身で殴るのはお勧めしない。



『あが…しえ、セシリア…なん、れ…』

どうやら衝撃で股間部を打つたらしく、一夏は悶々とした呂律の回らない声で恨めしく声を出す。

『す、すいませんっ…!』

それに思わず焦りながらセシリアは謝罪する。

『オルコット、そのポーズはやめろ。当たったのが白式ごしの織斑だからいいようなものの、一般人に当たりでもしたらどうする。正面に展開できるように心がけろ』

『……はい』

オルコットはがっくりと肩を下し今にもため息がつきそうな顔になる。

「む…さて、時間だな。今日の授業はここまでだ。織斑はグラウンドを埋めとけ。篠ノ之は凹んだ地面を均しておけよ。」

そう言われ、箒は思わず体育倉庫にト地面を均す丁字道具ンボはあつただろうか…と思う。

『——箒』

「はいっ。」

そこにナガトが——

『コレ、使うか?』

——打鉄壱型丙の装備していた、ドーザーブレードを差し出した。

ドーザーブレードとは、重量のある鉄塊で打撃を加えることで対象を破壊するという、非常に単純かつ分かりやすい装備だ。

その性質上、空戦などに適していないが、接近戦での使用は可能であり、与える衝撃も大きいということから、パイルバンカーの代わりに扱う猛者もいるという。

：まあ、本来の用途である土木工事機械として使われる事がもつぱら———なので、

「ありがたく使わせて頂きます！」

喜んで、箒はソレを拝借した。



### IS学園多目的防災署

——— 同・地下2階詰所

リノリウム製の床が貼られ、壁は塗装した剥き出しのコンクリート。

タバコの臭いが充満し、ボロボロの換気扇が必死に副流煙を吸い込んでいる、昭和レトロな雰囲気の一室。

「二坊と箒ちゃん、今頃パーティーですかねえ…。」

臭いと煙の元凶——高木がパイプ椅子に腰掛けながら、吸い終わったタバコを灰皿に突き刺して口にした。

その問いかけた先は、長机を3つ繋げた簡易大型テーブルの向かいで同じくパイプ椅子に腰掛け、ラガービールを一升瓶ごと喉に流し込みながら、白式の設計図を睨みつけているナガトに宛ててだ。

「だろうよ。まあ楽しめてれば、それでいい。」

どうせ俺たちは残業だ。と口にしながらナガトは手に持っていた赤鉛筆を耳に乗せ、つまみとして買ったビーフジャーキーの袋を開け、噛み千切り咀嚼する。

…眼下には。

??試製22式機動挺身装備【雷火】第一次現地改修型最新再調整第壹甲番拡張領域増設仕様への改修計画に関する要綱

??X—02【白式】第二次現地改修型最新再調整第壹乙番零落白夜運用試行仕様への改修計画に関する要綱

——その、ふたつのペーパープランが存在していた。

「…ところで高木。」

「おん?」

「この数日間、顔を見なかったが——何をしていた？」

「有——給——」。

ナガトの問いに高木はそう答える。

「ほう、どう過ごしたんだ？」

「ん——台湾行つて台湾料理満喫——」

「ふ——ん。」

——そんな掛け合いをしながら。

ナガトはバルト海の爆発事故に関する記事に目を落とした。

具体的内容としては、ロシア領と、欧州連合領を繋ぐローベルマイヤートンネルにタ

キオン兵器を搭載した第一世代ISが侵入。

無差別破壊をした挙句、最後はトンネルの中継基地である換気塔・ギアタワーで未確

認アライズと罅迫り合い、最後は大規模タキオン爆発を引き起こしたという話だ。

……色々ときな臭い。

人型に移行する以前の第一世代ISは大半がアラスカ条約違反の代物であり、初期型アライズと共に廃棄されたとされている。

それを手に入れる事は、まあコネクション次第で可能とはいえ、タキオン兵器を入手する事は容易では無い。

ましてや第一世代 I S を、タキオン兵器運用を可能にするよう改造する事など。

：何より、その第一世代 I S を撃破したと思しき未確認アライズ。

アライズを製造・管理するには極めて高い技術を求められる。

そしてその技術を持つのは V I C 6 や常任理事国などの限られた列強国。

：おそらくは、誰かが糸を引いている——：物騒になつてきたなど、ナガトは憂

鬱な溜息を漏らした。



### I S 学園・食堂

「織斑君クラス代表おめでどう！」

「「おめでとー！」」

寮の食堂であちらこちらでクラッカーが鳴り、紙吹雪や色があるテープが舞う。

一年一組の何人かがこの数日準備していたらしく、織斑の後ろの壁には『織斑一夏クラス代表就任パーティー』と書かれた紙がある。

食堂には女子があふれかえりそうなほどおり、一組だけではなく先輩や他のクラスの

生徒も混じっている。

主役でもある一夏は女子達の行動力に驚きながらもなんやかんやで楽しみつ——  
——だがやはり、当惑している様子だ。

「楽しんでるようじゃないか。」

箒が言う。

「いやなんつーか……うん……こういうの慣れてねえから……」

「楽しめるときに楽しんでおけ。——きつと、大切な思い出になる。」

——箒はフライドポテトを小皿にとりジュースを手に持ちそれらを口の中に入  
れながらそう告げる。

他の生徒は思い思いにテーブルにあるものをつまんだり、会話したりと思い思いには  
しゃいでいる。

「はいはい。新聞部の黛薫子です。話題の新生入生、織斑一夏君に突撃インタビュー  
をしに来ました！あとオルコットさんの方も記事にしちゃうよ」

そこに、新聞部を称する生徒が乱入する。

「では織斑君、クラス代表になった感想をどうぞ！」

そう言つて差し出されるマイクとそこからコードがつながっているポケットにある  
膨らみ。

——十中八九ボイスレコーダーだろう。

下手な発言は控えた方がいいらしい。

「えーと……なんつーか、その、頑張ります」

それを察した一夏は無難なコメントを告げる。

「ええ……。もつといいコメントちょうだいよく。俺はハーレム王になる……みたいな。」

「自分不器用ですから」

「うわっ、前時代的すぎる……んー、ああ、セシリアちゃんもコメントいいかな？」

「わたくしこういったコメントはあまり好きではないので、ノーコメントという事で。」

「えく……くそう、これじゃ記事にならない……。よし、じゃあ最後に——」

なんだまだあるのか、と箒が素知らぬ顔をしていると。

「現時点で1年生唯一のヘズナルアライズ乗りの篠ノ之さん。」

——声音が変わる。

先程までが猫をかぶっていただけなのか。

あるいは最初から箒を狙っていたのか。

「——一夏に関する記事ではなかったのか？」

「書ける量が少ないから、急遽変更。ヴァルキリーコンバート乗りである私達とは違う立場にいる人間

だから、昨日から記事にしたいなって思ってたの。」

——「どうやら後者のようだ。」

「貴女に聴きたいことは簡単な話——ズバリ、アライズについて。」

「機密事項が多いから絞りカス程度しか話せんぞ。」

ピシヤリと言う。

しかし、それで食い下がる黛では無い。

「いやいや、篠ノ之さんの機体については聴けないなんて百も承知——だからそうね、ココを出たらどうしたいか、って聞きたいの。」

——その質問に箸は目を見開く。

入学して1週間程度の人間にソレを聞くかという呆れと。

将来を明確にしているか、試されている事実。

「…私は。」

一瞬言葉が詰まる。

——「民間人に戻る、という選択肢もある。」

むしろナガトもそれを望んでいる。

だが、

「私は、今の仕事を続ける。」



「えっと——なんで？」

「——こんな時間を、遺して行きたいから。」

ちらりと、パーティーではしゃぐ女子達を見て言う。

一瞬、薫子は発言の意図を理解出来なかった。

「今は、いつこんな馬鹿騒ぎが出来なくなるとも分からない時勢だ。——だから馬鹿騒ぎができる程度には平穩で、当たり前の日常を、私達の子や孫の代まで遺して行けるように、私は国防に従事しようと考えている。」

その顔は迷いのない、純粋な心で言い放った。

隣に座っていた一夏とセシリアも、箒の言葉に心打たれた様で、目を見開きつつも感心した様な声をしている。

「……家族さんは反対しない？」

「……幸い、私の家族は再構築戦争でみな死んでる。ただ、育ててくれた自衛官の義父は、猛反対するだろう。『真つ当なサラリーマンとかと結婚して一般人に戻ってくれ』とでも言う顔が目には浮かぶ。」

「ふむ……でも、理由はそれだけ？」

それに苦笑しながら箒は応えるが、薫子の質問にすぐに神妙な顔になり——

「——まあ、そうだな。私的な意志も、多少はあるかも知れん。義理の父親を放つて

置けないからな…。」

「——ひよつとして篠ノ之さんファザコン?」

「父親想いと言ってくれ。」

思わず、ムツとする。

——だが、確かに。それは確信を突いたかも知れない。

箒は少なくともナガトを半分は父親として。

もう半分は——異性として、見ているから。

だからコレはある種、不建前と糾弾されても仕方ない話だ。

だが、それでも——

「義父には再構築戦争で救われて、育ててくれて、支えてくれた恩がある。」

—— 『死なないで、帰って来て』

—— 『お願い負けないで、生きて』

ふと、10年前の自分の声が脳裏に浮かぶ。

ただ出撃するナガトの背中を見る事しか出来なかつた自分。

ただナガトの生還を祈り続けるしか出来なかつた無力な自分。

帰投する度にポロポロになり、血を吐いたり骨を折つたり腹に風穴を開けられたりし

たナガトに泣きながら抱きついていて、弱い自分。

そんな自分でも、必ず恩を返せるようになりたい。

「…だから、そんな義父に恩を返せるよう、強くなりたい所存だ。…以上。」

再び迷いのない顔で告げる。

フムフムと相槌を打ちながら薫子はメモを取る。

「ねえ篠ノ之さん、また話聞いても？」

「——気が向いたらな。」

…それでインタビューは終わりだった。

「ん。お話ありがと。じゃ3人とも並んでね。写真撮るから。」

「「え？」」

思わず箒のほかに、一夏とセシリアも驚きの声を上げた。

「注目の専用機持ちだからねー。3人の手でクロス握手とかしてるといいかもしれない

から、やってもらえるかな？」

「私は別に良かろう…」

「そうですか……あの、撮った写真は当然いただけますよね？」

面倒くさい……と箒はブックサ言い、セシリアは半ば嬉しそうに問いかける。

「そりやもちろん」

「でしたら一夏さん、箒さん。早くやりましましょう。ほら」

「お、おう」

「やらねば駄目か？」

「せっかくですから」

「そう言われてオルコツトと握手をし、互いの片手を織斑が手を繋ぐ。

幼馴染。

好敵手。

憧憬対象。

そんな関係の3人はカメラに視線を移し――

「それじゃあ撮るよー。155×96÷7440は？」

「2イ――」

そして、気が付いた瞬間には写真を撮る前に食堂にいた全員がフレームに入ってくる。

「なぜ全員はいつてますの!？」

「まあまあ、セシリアだけ抜け駆けはしないでしょ？」

わいのわいのと宴の盛り上がりは衰える事を知らない。

この後もカラオケ大会、ビンゴゲームなどのイベントが続く、夜10時まで続いたのだった…。



IS学園職員用団地2号棟201号室

「——で、楽しかったか？」

病的なまでに火照った顔——間違ひなく酔っている——のナガトが箒に問いかける。

隣には、ビール瓶6本とYEBISUビール缶が18本、加えてアカヒビール缶が10本。

完全に酒盛りをしていた後だった。

「はい……そして疲れました……」

——ナガトも私が居ないからと言ってお楽しみだったようで。と言外に言い放とうとするが、もはや疲労困憊。

そのまま箒は布団に身を沈める。

「おい馬鹿、制服にシワつくだろうが。寝巻きに着替えてから寝ろ。」

「う……」

「う……じゃねエ。着替えろ、デコピンすつぞ。」

中指と薬指を親指で弓を引くように力を込めて箒に向ける。

…ナガトのデコピンは強烈だ。

以前食らった経験から、箒は渋々寝巻きのあるタンスを開き、着替えに入る。

「あと仕切りくらい閉めろ。」

「良いじゃないですか、家族なんだし。」

「イヤ年頃の女子がんな破廉恥なのは良くねエンだわ。」

「はいはい——」

ナガトの説教が始まる前に箒は障子を閉めて——

「——え？」

驚く声でした。

箒が寝巻きを入れているタンスを引くと、中には紫陽花柄の藍色の着物と魚鱗柄の赤い帯が入っていた。

確かずっと前、箒が欲しいなあと言っていて、そして値段を見て諦めたものだ。

…この、荒廃した世界で着物を調達しようなど、中々難しい話だ。

仮に通販サイトで販売されていても、平均的な国民年収ではとても手が届かない——

「つ、ナガト…これ…」

思わず、障子越しに声をかける。

箒が購入した覚えはない、なら、これを買ったのは——

「——知らん。」

否定の声。

だがこの場においてその返答は、シラを切るというもの。

障子の角から、ナガトの方を伺う。

「俺は何も……知らん——。」

箒に背を向け、頸から耳まで真っ赤にしたナガトが視界に映り——答え合わせ  
だった。

私はまだ、ナガトに甘えさせて貰っている…。

嬉しいような、恥ずかしいような。

16歳にもなる身だ。そろそろ金銭面くらい、自立しなくては。

だけど、今は素直に——

「ナガト——ありがとう。」

…そう、呟いた。

——その日の夢は、何故だか昔の事を思い出した——

ごうごうと、燃えている。

街の中、爆音と共にビルが燃え上がり、火の手が至る所から上がる。

死体の海の中で、父親の残骸を抱いて、箒はそれを呆然と見上げていた。

破壊を撒き散らす I S と、それに蹂躪される E O S 達。

I S が圧倒的に優勢であり、勝利は確定していただろう。

だが——砲声と共に、イレギュラーが舞い降りる。

全身装甲の I S ——アライズ「ヴァハフント」が。

自分達の手札から駆り出された切り札は、次々と I S を叩き潰し、押し潰し、血霧に

変えていく。

——箒はその光景に、高揚した。

その切り札の一人になれるならと、箒は口車に乗せられ人体実験に身体を差し出した。

ソレを見た彼は激怒した。

子供に何をしてやがると、怒り狂い、研究員を半殺しにした。

彼と初めて一夜を過ごしたあの日。

もうお前はここにいろ。纯粹無垢な子があんなのに関わったら腐っちまう。



彼は宥めるように抱きしめて言う。

そうではない。

私は純真でも無垢でもない。

幼稚な篠ノ之箒は、あの戦いで死んだ。

私は最低な女なのだ。

家族である事を願ひソレを押し付けて、彼を戦場に奮い立たせるための女になってしまったのだ。

私はその日、両親が死んでも流さなかつた涙を流して泣いた。

自己嫌悪——あるいはそれは、第二の産声であつたのかもしれない。



翌日。

「ねえねえ織斑くん。今日2組に転入生が入ってきたんだって」

パーティー明けの朝。

未だ疲労の取れない一夏に女子が話しかけてきた。

その内容に一夏は眉を顰める。

「転入生？この季節にか？」

「うん。何でも中国大陸の方の代表候補生らしいよ」

「それより一夏さん！代表戦の方、だいじょうぶですよ!?」

「勝つてね！織斑君！」

「デザートのフリーパスが待ってるから！」

「それなりに出来てるから。だから本番でへましない様にするさ」

こんな風に女子が詰め寄るため、一夏はアハハと笑つて場をごまかす。

「————慢心はするな。今日も放課後の特訓をするぞ。」

そこに、箒が釘を刺す。

わざわざ代表候補生を送りつけて来たのだ。

ならば専用機の1機、与えられていてもおかしくはない。

「でも専用機持つてるのは1組だけだし、余裕だね！」

そう言つて盛り上がる女子達だが、この時開いた扉に音に反応してほぼ全員がそつちの方を見る。

「その情報、もう古いよ」

そこにいたのは身長が150ぐらいでツインテールにした髪の毛を持つてる女子であつた。

「嵐鈴音——イギリス連邦香港国家代表候補生よ。」

## # 0 7 セカンド幼馴染

東ヨーロッパ

オーゼンⅡグデリア連邦共和国

———オーゼンⅡラトビア行政区

ヤーカプピルス東方10キロ・森林地帯

林業地区として栄えたそこに人影はなく、ただ遠方からこだまする砲声だけが木霊している。

その、林業用植林場に乗り入れた一台の特大型トレーラー。

分厚い特<sup>タキ</sup>一<sup>オン</sup>級<sup>シル</sup>汚<sup>ド</sup>染<sup>シ</sup>物質<sup>エル</sup>防<sup>シ</sup>御<sup>エ</sup>装<sup>ル</sup>甲<sup>ト</sup>に<sup>シ</sup>囲<sup>エ</sup>ま<sup>ル</sup>れた荷台。

そこには、鴉<sup>カラス</sup>を連想させる二足歩行の翼人———アライズが鎮座していた。

———まるで胎の中にいるようだ。

コックピットブロック内に突き刺さった六角柱の容器———そこに収められた男

は思う。

：否。厳密には、男だった、と言うべきか。

男に人としての形は既に無く、脳髓だけの存在になり、コードを介して機体に直接繋がれている。

：この感覚は、脳が辛うじて人だった頃の記憶が、そうした錯覚を引き出しているのだろうと男は半ば強引に結論づける。

《——ホウキ、新しい機体カラダの調子はどうかな?》

女の声がする。

懐かしい、電子化されて久しく聴いていなかった盟友の声。

だが機械によって作られた合成音声だ。

機械特有のノイズ混じりの声に問われ、男は機体を操作する。

マニピュレーター——問題なし。

スラスト調整ノズル——問題なし。

腕部・脚部関節機構——問題なし。

センサー機構——問題なし。

『——良好だ。』

——ホウキと呼ばれた男は無感動に応える。

《結構——早速で悪いけど、試験運用と行こう。前の機体はローベルマイヤートンネルで君が自爆させたからね。》

自我データ転送が間に合わなかったら死んでたよ？という声と共に、戦域図が表示される。

場所は我らがグデリア——正式名称：オーゼンIIグデリア連邦共和国。

旧バルト三国、東プロイセンから成る——ナチス・ドイツ第3帝国の残りカスとしか形容出来ない国家であり、VIC6の一角。

現在この国家はロシア連邦——旧ソ連の系譜を色濃く継ぐ新興国家——による侵攻を受けていた。

2月末からロシアはウクライナ共和国という東欧国家への侵攻を開始。

そのウクライナと技術・経済関連で交流のあったグデリアも「非ナチス化」という名目の下、侵攻が開始された。

現状は、首都エルガヴァ——かつて存在した旧ラトビアの都市エルガワの成れの果て——に向け、ロシア軍が大挙しているという有様だ。

理由は首都制圧による迅速な戦争終結と、グデリアに振り分けた戦力をウクライナに回す為……というのが、専門家の分析。

そしてエストニア方面と、ケーニヒスベルク方面にグデリアを分断——どちらか

を傀儡政権化または完全併合、どちらかを「今後更に殴る為の口実」にでも残しておく魂胆なのだろう。

…まあ、知ったことでは無い。それは、政治家の仕事だ。

《作戦を説明するよ——首都イエルガヴァ東方300キロ、ここから東に60キロの都市レゼクネの奪還作戦。これを支援する。》

レゼクネは現在ロシア軍の占領下にあり、グデリア国防軍も奪還に躍起になっている戦区だ。

都市の北部5キロ地点の丘陵地帯には、ロシア軍の長距離要塞砲も敷設されており、この丘陵地帯要塞砲陣地の破壊が無ければグデリア軍地上部隊は奪還はおろか、戦線を50キロ後退しなくてはならない。丘陵地帯から周囲は丸見えだし、長距離砲の射撃範囲内に入れば…ね。

その為にホウキ、キミにはロシア軍要塞砲陣地の破壊をもらう事になる。

…何か質問は?》

『——都市の南部にも丘陵地帯がある。そこにも要塞砲は配備されているのでは無いか?』

ホウキの言う通り、レゼクネ市街の南南東50キロ地点にはラズナ自然保護区が所在しており、そこにも要塞砲を配置するには格好の丘陵地帯が点在していた。

《——そこは国防軍のアライズ2機が担当するそうだよ。だから君は心配しなくても構わない。…そつちが上手いかなかったとしても、こちらの責任では無いからね。》  
『なるほど、理解した。』

そう告げると——トレーラーの上部ハッチが開く。

仰向けに固定されていたアライズの巨大な体躯が、それらを支えるフレームごと直立に立ち上がる。

大気に晒された機体から、ジエネレーターの冷却を行っていた冷気が逃げてゆくのが見て取れた。

《あ、そうそう——人口密集地とさほど離れていないから、タキオン兵器は使用禁止ね。冬ならまだしも、この時期に使ってしまったえば深刻な土壤汚染を引き起こしかねない。》

冬明けのこの時期、北ヨーロッパ平原ならびに東ヨーロッパ平原は雪解けにより地面が泥濘化する。

その為タキオン兵器など使おうものなら、周囲一帯に致命的な環境汚染を引き起こしかねない。

いくらタキオン粒子が水に溶かすと希釈分解されるとはいえ、それには相当数の水量を要する。



海洋放出ならいざ知らず、多少水が混じった泥程度では完全に分解しきれずにかえつて泥に含まれる水を汚染し、その汚染水と共に土壤に浸透———そうなれば、待つてゐるのは土中の微生物を殺し、地上の動植物をも生息困難な地に変え、最終的には何も無い砂漠に変えるという結末。

そして土壤に浸透したタキオン粒子は劣化汚染粒子物質レットダストとなつて、風に乗つて広範囲に飛散し———更なる汚染を拡大させる。

だからこそ、タキオン技術に自信を持つグデリアも自国領内でのタキオン兵器の使用は原則認めていない。

《あと、一応キミのその機体カラダはまだ機密扱いだから、該当地区に展開している敵部隊はくれぐれも———皆殺しにするようにね?》

『———分かつてゐる。：俺は貴様は裏切らん。そう、誓つた筈だぞ。』  
女の無理難題———だがそれを、ホウキはさも当然と承諾した。

《———うん、そうだね。しかし……あの日から、もう70年経つんだねえ……》

ホウキと通信先の女——— 2人がまだ、人の身にあつた頃を思い返しているのか、女は少し懐かしむ様な口調で話す。

———敗戦国に生まれながら、宇宙ソッラを目指した2人。

その果てが———この現状だ。

『…そうだ。現状がどうであれ、お前との約束は反故にはせん。』

《うん——死なないでよ？私の友達、もう貴方しか居ないんだから。》

『ただ犬死する程、俺は安い男ではないぞ——タバネ。』

—————

《TARVANEN／WS—X05〔Kr・he〕》

——Halbtbarkeit der R・stung——

Partikelplanung:100%

Komposit—R・stung:100%

Zelle der sklette:normal

Betreiber:?????

Hersteller:?????WiltSchmit

—————Heer—————

RA)WA/LK|2020

LA)Gustloff/S|2

RS)Ho/R|4

LS)Ho/R|4

RB)OLK/K|6

LB) WA/Gat-2008  
 BS) KASL/SSB-11

Main system activate combat mode.

『WS-X05<sup>レ</sup>、出るぞ。』

跳躍。

トレーラーが軋み、タイヤを支えるスプリングとアンカーボルトが限界まで沈む。

「クレーエ」——黒のアライズが持つ病的に細い脚部からは考えられない高さを一気に稼ぐ。

トレーラーの上部ハッチが閉じると同時にメインブースターがプラズマジェットを吐き出すと、「クレーエ」の体躯は登る太陽に重なるほど高く上昇し、絞られたメインブースターによって一瞬だけ空中でピタリと一瞬静止する。

そして——紅のアイセンサーを細め、瞬時加速で現場に向け機体を走らせた……！

『——』  
 感じるはずの無い加速度負荷が掛かる感覚を覚えながら、機体は時速4700kmに加速。

——60kmの距離を、42秒で駆け抜ける……！

クレーエが目を細める。

眼前には——丘陵地帯から覗く、要塞砲群。

『目標空域隣接空域に到達——ステルスシステム展開装甲、パージ。』

《目標はもう目前。アライズを見るなり彼らはすぐに攻撃してくるよ。キミに被害が出る前に無力化してね。》

そう女——タバネが言う間に、既に何発ものミサイルが飛翔する。

そして、クレーエの遙か前方で、直径100メートルはあろうかという火球が炸裂する。

《地对空核爆雷——?!》

タバネが驚愕する。

地对空核爆雷——冷戦期に旧ソ連が開発した、西側陣営ないし中央陣営の爆撃機や戦闘機を殲滅する為に開発された核兵器。

深刻な放射能汚染が発生するという欠点があったが、ソ連崩壊後のロシアはそれを核保有国としての面子を保つ為に保有し続けていた。

——あくまで、虚飾の為の兵器。

だというのに、そんな兵器を投入してくるなどタバネにとつても予想外だったからだ。

その火球より後方。

白煙の尾を引きながら、さらに迫る、10を超える地对空核爆雷の群れ——。

——急速な放射線量上昇をガイガーカウンターが告げる。

数値にして92シーベルト——人体が壊死する基準値を超える、致死的高濃度放射線量——を叩き出す。

……これでは、5キロしか離れていないレゼクネ市も全滅だろう。

それを証明する様に、戦況マップの端に表示されたレゼクネ市は、毎時76シーベルトという致死的高濃度放射線量を測定していて——

《粒子装甲展開、アクチユアルモード実戦形態への移行を許可！キミの安全が最優先だ！》

——もはや行儀良くタキオン汚染対策をしてもコレでは意味がないと唾棄しながら、タバネが叫ぶ。

『了解。』

ホウキは応答と共に粒子装甲を展開——そして<sup>アクチユアルモード</sup>実戦形態に切り替えた事でタキオンエンジンが激しい唸り声と共に膨大な量の粒子を撒き散らす。

一瞬後——クレールエが纏う光の壁に、核爆発による爆風が叩きつけられた……！

ロシア軍占領地域駐屯基地

——レゼクネ北方砲撃陣地

「いくらISといえど、この火力の前では……!」

一人のロシア兵が勝利を確信する。

爆煙が立ち込める。

だが撃破したと思しきISの反応はレーダーから消失してこない。

誰もが「まさか」と絶望がよぎる。

——今相手になっている敵が、次元からして違う存在であることに。

そんな存在に対し、少しでも敵うのではないかと考えた愚かさに。

《彼の反応、未だ健在……!我の攻撃、効いていません!》

その絶望と愚かさの答え合わせをするかのように観測手からの通信音声はその場にいる者全員の耳朶を叩いた。

やがて爆煙が風に流され晴れてゆくと、その存在が姿を現した。

「……なんだ、アレは——」

緋色に輝く光の奔流。  
タキオンエフェクト

光の翼としか形容しがたい姿に制御されたソレは、十字架か、翼を広げた悪魔のよう。

否。その中央にある、黒い、カラスを彷彿とさせるシルエットのアライズは——  
死神そのものだった。

「——悪魔……」

誰かが呟いた。

創作物でしか見た事の無かったような代物が、今現実として立ちふさがっているこの  
現実には、誰もが膝から崩れ落ち、へたり込む。

：無理もない。彼らは——再構築戦争を知らない時代の人間だから。

だから眼前の死神を目の当たりにして、ただ、次元が違うバケモノだったのだという、  
理解を超えた絶望が理性を焼き切った。

砲兵は自らが被曝する事すら顧みず、再び地对空核爆雷の引き金を引く。  
それしか、抗う術がないからだ。

——そして鴉は彼らの砲火を嘲笑うように掻い潜る。  
しかしそれ以上は何もしない。

ただ飛ぶだけ。

ただ飛ぶだけなのだ。

右腕に持つローレンス砲ガスも。

左腕に持つプラズマブレードも。

肩部に持つミサイルも使わない。

飛ぶだけ

——タキオン粒子

生身の兵士相手には、それだけで充分なのだから。

鴉はただ緋色の光の尾を引き、敵の頭上を飛ぶだけで

——死を、撒き散らす。

直後に地上が阿鼻叫喚の地獄絵図に塗り替えられる。

——対消滅性の粒子

タキオン粒子に触れた皮膚が爆ぜる。

——爆ぜた傷口から致命的な大量出血が始まる。

——傷口から浸透したタキオン粒子が無尽蔵に血管や神経、筋肉組織を破壊して

いく。

——それは一部位ではなく全身で。

まるで、肉食魚の群れに貪り喰われているかのように、辺りからは絶叫と血飛沫が狂い散る。

「装甲車だ！装甲車の中に——！」

誰かが叫ぶ。

それに釣られて無数の兵士が駐車されていた装甲車両に群がり出す。

だが、無慈悲にタキオン粒子の奔流が迫る。

だから今飛び乗ろうとしている兵士を蹴落として——装甲車に乗り込んだ兵士

達は、車両と外界を隔てるドアを閉じた。



…直前。

タキオン粒子に貪り食われる兵士の絶叫が木霊していた。

それを閉ざした兵士達は、僅かな罪悪感に苛まれながらも、自分達の番ではなくて良かったと感じていた。

それはそうだ。誰も人は死にたくない。

生存とは人間の根源的な欲求であり本能。

いかに美辞麗句を並べ立てても覆せぬ事柄だ。

だから兵士達を責めるものは、誰もいない。

だがソレは同時に――

「えっ？」

――許す者もないということだった。

…チリチリと、木が燻り焼けるような音がする。

それは、無理矢理閉じたドアの装甲板から。

――外にはタキオン粒子の奔流。

そしてタキオン粒子には、対消滅効果という特性がある。

…それは即ち、どのような物体であれ、例外なく劣化食させるといふ事散らかすで。

一瞬後、眩い光と音が響く。

装甲板を侵食し食い破ったタキオン粒子が一斉に兵士達に襲い掛かり——再び、惨劇が始まった。

『——生体反応、ゼロ。』<sup>N u i</sup>

ホウキは静かに告げる。

眼下にはタキオン粒子に身体を食い破られ絶命した兵士らの死体が転がっていた。

そして同時にここは半永久的なタキオン汚染地域となった。

既に展開していた敵兵は哀れな肉片に成り果てた。

次は周辺に住む人間や動物が吸い込んだタキオン粒子により呼吸器官が破壊され死に至る。

次は土壌を蝕み植物や土中の微生物がタキオン粒子により死滅していく。

そして何も無い枯れた死の大地へと緩やかに生まれ変わっていくのだ。

あるのは、担い手達なき要塞砲のみ。

憂う事はない。

どちらにしる、要塞砲陣地から放たれた地対空核爆雷の弾数からしてここには致死量

を遥かに超える放射線が撒き散らされた筈だ。

だから、タキオン被曝で死ぬか、放射線被曝で死ぬかのどちらかを選ぶ自由がある程度の話だ。

《ご苦労様。南の要塞砲も片付いたみたい。……ここに来る命知らずがいるとも思えないけど、一応要塞砲の破壊もお願い》

『了解した』

そう言われてホウキは右腕に持つワルター・ローレンスカーノーンWA/LK-2020の砲口を要塞砲群に向けて

《——待って》

——タバネの静止の声。

それと同時にハイパーセンサーに生まれ出でる敵反応。

《前言撤回。敵、新手だよ。》

『了解』

——流れるように反転。

直後、視界に映る機影。

《機種特定——デュノア製アライズ「ブーラスク」とロシア製EOS「イグゾブイエークト——」の混成部隊だ。》

映し出される望遠の新規ウインドウ——そこには、多連装CIWSとロケットランチャーで武装したホバー型EOSが15機。

——そして。

フランス製機体特有のスカートアーマー状のホバーフロート脚部。兎の耳にも見える頭部パーツのスタビライザー。

全体的に丸みを帯びたフォルム。

両腕に装備された2A38 | 30mm四連装機関砲。

両肩に装備されたモスキート対艦ミサイル。

——火力投射に特化した、ロシア軍仕様のアライズ「ブラスク」が2機。

そのアライズを見て、クレイエのアイセンサーが目を細めた。

機体の装備や製造元ではなく——市場に流通していない、ウサミミ型のスタビライザーを見て。

『——【天災】か。よくよく好きと見える。』

ホウキは、敵が誰の刺客であるのかを理解する。

同時に——チャージしていた右腕のローレンス砲を、アライズの後方目掛けて穿

つ……!

程走る稲妻。

亜光速で打ち出される砲弾。

それは空気を摩擦熱でプラズマ化させて——敵E O S部隊の中心に着弾する……！

噴火のような衝撃と共に、土が大量にめくれ上がり、200メートルは下らない砂柱がそそり立つ。

一条の砲弾をもろに受けたE O S部隊は、直撃時の爆砕流によって粉碎された……！  
《敵E O S全滅。残り、アライズ2機。》

タバネの報告。

ホウキは自由落下も併せた三次元機動でエネルギーを節約しつつ、炎の尾を出しながら、高速中量機が右に左に飛び回る。

クレーエは前、右、前と連続する多段瞬時加速。

それに一手遅れて、爆音が大気を揺らす。

音速を超えて発生したソニック・ブームが大地を蹂躪し——刹那、光の刃が迸った。

〈な——〉

左腕のプラズマブレードがするりとブラスクの脇腹を通り、赤熱したフレームの断面を露出しながら切り捨てられる。

冗談のように真つ二つにされた機体が炎をあげ、ようやく鴉の存在に気付いた。

「あ、アライズだど!? クソッ、ナチの亡霊め……!」

撃破された僚機と、白のプラズマブレードを引つ提げたクレーエを目の当たりにして、もう1機のブラスクの軌道が乱れ始めた。

30mm四連装機関砲の、駄々をこねる子供めいた乱雑な射撃が展開される。

まずは距離を取り、センサーでロックオン。

その後、射撃誤差修正を行い当てるといふ算段なのだろう。

単純だが、教本通りの堅実な戦い方。

だが、それが実戦でも通用するのは相手が格下である場合の話。

同格の敵に求められるものは——一部例外を除いて、柔軟性に富み、予測を困難にする型の無い戦い方だ。

それができないというのなら、ただ死ぬだけ。

『——拙<sup>つたな</sup>すぎる、それでは。』

漆黒の機体は稲妻のように瞬時加速で鋭角に曲がりながら地に足をつけて旋回し華麗にドリフト・ターンを決めた。

地面がひとたまりもなく砕け散り、砂塵と土塊がカーテンを作り上げる。

その勢いを殺さぬまま、二段瞬時加速によって超音速に到達した鴉は最後の敵機に殺

到する……!

へは、早——>

ブラスクのパイロットが反応する暇もなく。

『貴様は——墮ちろ。』

すれ違う瞬間、プラズマブレードで居合い斬る……!

——野太い白が一閃し、一瞬の後にアライズの腰が崩れ落ちた。

——会敵から僅か40秒。

8機のEOSとアライズ2機が破壊され——残るは担い手無き要塞砲のみだった。



日本帝国長崎県五島市浜町

男女群島・国連直轄領トキオ自治区セントラル区

IS学園・食堂

そこには、SECURITYと背中に刻まれた深緑の警備課戦闘服を身につけたナガ

トと、白を基調にしながらも赤のラインが刻まれた学園生徒指定制服を身につけた箒が

座っていた。

「ほーん、つまり2組代表は織斑くんのセカンド幼馴染と。」

「——はい。」

ナガトはレモンステーキ定食、箸は雲仙ハヤシオムライスを食しながら鈴について話をしていた。

食している料理はどちらも学園が所在する長崎県の郷土料理だ。

——レモンステーキは長崎県佐世保市発祥であり、戦後から駐留しているアメリカ海軍の影響でステーキが流行し、その後日本人の口に合うよう改良されたものだという。

食べやすく薄切りにし、レモン風味の醤油をかけて食べるのが、もっぱらレモンステーキのスタイルだ。

肉とさつぱりとしたソースは、なんといっても白米との相性が抜群で、中々美味しい。

——一方の雲仙ハヤシオムライスは雲仙市名物であり、ふわふわトロトロの卵の周りには、こだわりの自家製ハヤシソースがたっぷりと満たされている。

チキンライスの肉には長崎和牛を使用しており、ホロホロと口の中でほどける食感がする。

更には卵の下にはチーズも入っており、トロトロ具合が病みつきになる料理だ。



…この時代、食材の大半は合成食料だの培養肉だのだが、味付けと保管環境の調整で限りなく本物に近い味と食感を再現しており、中々どうして美味しいものだ。

それはそれとして  
閑話休題。

「別にそれは良いんです、私より長い期間、一夏と一緒にご一緒していたそうなので。

…ただ——、」

「——少し、妬いたか？」

戯ける様な問い。

一瞬筈はどきりとし——視線を泳がせ、スプーンでハヤシソースの海を撫でる様に小さく攪拌する。

「率直に言う……はい。」

「ふむ……」

「あとは——一番困るのは、このまま嵐と仲良くなるあまり、訓練を疎かにする可能性です。流石に無いと思いたいですが……無い、と言い切れないのも……」

——クラス別トーナメントまで、あと一週間しかないのに、と筈はため息をついた。

「んー…、男つてのは仲の良い女が居ると鼻の下伸ばしてそっち行っちゃまうもんだからな。」

まあ、それはそれで年相応、青春めいてて良いんだが、どうしたもんかね——と、ナガトもため息をつく。

悪い話ではない。

むしろ思春期の青少年としては真つ当な反応ですらある。

…が、それを望まれない環境というのも存在する。

——それがI S学園だ。

「まあ——決めるのは当人だ。俺達じゃない。」

お前はこれまで通り、頼まれたら付き合つてやればいい——定食のステーキを頼張りながら、ナガトはそう告げる。

「他人の事を気にかけるのは良いが、あまり思い詰めるなよ。」

その表情には、箒に対する労いの色が見られた。

「——はい！」

それを汲み取り、箒も柔らかく笑みを返した。

「おー、お二人さんここにいたかあ」

ふと、そんな二人の間に高木が入つて来る。

そこに、手に皿うどん定食の御盆と何やら書類を持った高木がいた。

その後ろには、離れたところで一夏と鈴が座つて仲良く食べており、遠巻きに女子達

がそれを見守っている。

あるものは羨望の眼差し。

あるものは揶揄う眼差し。

あるものは嫉妬の眼差し。

——ともかく女に囲まれている。

「や——坊またモテモテじゃーん？青春だねえー。」

——で、ハイこれ。お土産。」

そういうなり、高木はホツチキス留めされた書類の束を渡す。

そこには——

—————

◆香港代表候補生機体◆

機体名：C I S — 0 2 甲龍

操縦者：凰鈴音

所属：英台合同試験団《ナイトメア隊》

製造元：B A E s ホンコン・ミリタリー社

漢翔公社



中距離での撃ち合いには非常に強く、高いジャンプ力を活かして障害物を登る立体的な陣地転換の他、近接戦で敵の頭上を取ったあとの撃ち下ろしも得意とする機種だった。

また重量型機ということで積載量も多く、大量の装備を一度に運用可能となっている。

高低差が激しい峻険な山岳地帯や超高層ビルが林立する香港に於いては強大な戦術的アドバンテージを発揮する存在であることから、香港では特にこの機種が採用されていた。

現にアライズ分野においても、重量逆関節型機は香港の十八番だった。

だがそんな事より、箒はこの情報を集めてきた事の方が気になったようで、素っ頓狂な声を上げた。

「これ——2組の?! どうやって:?!」

「んー? 山ちゃんに頼んだらくれた。」

あつけらかんと、高木は告げる。

それに声を聳めながら、箒が問いかける。

「良いんですか? 職権濫用では? これ。」

「ま良いんじゃない? どうせ教員には通達されてる内容だし。」

学園の警備を担当するオレ達知っておく権利くらい、あると思うがね——そう付け加えて高木は言う。

現状、高木は警備課主任、ナガトは警備課監察官兼駐在武官——即ち、学園の防衛に携わる身分だ。

護衛対象の詳細な情報くらい理解しておく必要は当然あるだろう。

そして箒は、たまたま居合わせてしまった。

そうすれば、丸く収まるというものだ。

最も、バレたら機密保持を怠ったとして学園運営部から警備課は責任追求されるだろうが。

だがそれと同時に、2ページ目を見たナガトは顔を顰める。

「…おい、聴いていないぞ。3組のは。」

—————

◆フランス代表候補生機体◆

機体名：D u | 0 3 E ラファールリヴァイヴカスタム

操縦者：アントワーヌ・デュノア

所属：デユノア社技術部《シャンゼリゼ試験隊》  
 製造元：デユノア社

アエロアルジェール社

機種：浮遊無脚型機

装備：RA)ブローミングM2三連装マシンガン

LA)KSI/PK-03プラズマキャノン

BW)エグゾゼAM39対艦ミサイル

BS)シールドピアス

M71/30mm連装ガトリングガン

ブローミングM2三連装マシンガン

TUFAN-1レールガン

84mmグレネードランチャー

57mm狙撃砲

◆日本代表候補生機体◆

機体名：03式打鉄式型

操縦者：更織簪

所属：日欧合同実験団《ライカンズ試験隊》  
製造元：巖崎重工

日照ライムントヴァルト社

倉持技研

機種：中量二脚型機

装備：RA) 03式近接長刀II型

LA) M71/30mm連装ガトリングガン

RS) 試製20式荷電粒子砲《春嵐》

LS) 11式展開型追加装甲

BW) 試製21式64連装誘導弾《山嵐》

BS) 超振動加速薙刀《夢現》

試製21式64連装誘導弾《山嵐》

そこには、2組のみならず3組と4組の専用機データまで書き込まれていたのだ。

4組の機体はナガトと箒が属する試験隊に所属となっている。



クラス代表決定戦当日に連絡が降り、2人は知っていたが——3組の機体については初耳だった。

「機体と生徒はまだ来てないみたいなんだが、クラス別トーナメントまでには来るからってデータだけ寄越したらしい。」

高木が言う。

後から来るのに、クラス代表の席だけは確保してある。

随分と不公平な話だ。

——「どうやら、まともなクラス代表選抜が成されたのは1組と4組だけらしい。

「こちらは多数決にクラス代表決定戦までしたというのに……馬鹿みたいでは無いか。」

思わず筈が愚痴る。

「……ま、今学園が維持出来てるのは企業や国家の支援有つての事だから。それらの息がかかった生徒を優遇して忬度するのは、当然といえは当然の流れでしょ。」

忬度するだけ、支援を落としてくれるんだからサ——と、高木はドライに言い放つ。

……確かに。

コンペディション・I・Sは、アライズの台頭とそれに合わせたA—C I S / E O Sのよ  
うな既存E O Sの強化・充足化により既にその地位を失いつつある。

現在残されているのは、競技用と実験用という限定的な立場のみ。

それら兵器の手綱を握る国家や企業からすれば、乱暴な言い方ではあるが、それ以外に利用価値など存在しない。

——そう認識する国家や企業が増加傾向にある。

現に、日本帝国も今年派遣した配備機種のうち、コンペートは1機種：白式のみ。

他はアライズ3機種、エイシスEOS4機種。

本来コンペーションISを学ぶべき場所で、逆転現象が起きてしまっているのだ。

他国にも目を向けると——

イギリス連邦：コンペート2機種、アライズ2機種、エイシスEOS1機種、EOS2機種。

オーストリア合衆国：コンペート0機種、アライズ2機種（予定）、エイシスEOS1機種、EOS1機種。

フランス植民地帝国：コンペート1機種（予定）、アライズ0機種。

アメリカ合衆国：コンペート1機種、アライズ2機種、エイシスEOS1機種、EOS3機種。

オーゼングデリア連邦共和国：コンペート0機種、アライズ2機種（予定）。

——やはり一部例外を除いて、その大多数はコンペートではなくアライズやEO

S系列の派遣というのが実情だ。

それだけ、企業や国家のコンペト離れが加速している以上、企業や国家の支援無くして運営出来ない学園としては、生徒の公平性をかなぐり捨ててでも忖度することを迫られる。

——出来なければ、廃校だ。

公平性と本来の目的を投げ捨て、企業や国家の兵器実験場となる事を黙認する代わりに援助を受ける——それが学園首脳部が選んだ道であり、現状のIS学園の実態だった。

「学園として破綻してんだから、今更糾弾したって手遅れだし、余計悪化するしねえ……で、どうよ？3組のは。」

ふと思いつ出した様に、高木はナガトの方に向き直る。

「——いや、ひっでえなコレ……」

うわあ……と言わんばかりの顔で、ナガトが言う。

手にしているのは2枚目、3組代表の機体ことラファールリヴアイヴカスタムの資料だ。

「フロに加えて武装全部他社製品で……ええ……？」

フロ——浮遊無脚型機は、P I Cによる慣性制御と反重力翼、流動波干渉に特化

した機種であり、常に地面から浮遊してホバー移動することに長けている。

二脚、四脚、逆脚とある中で最も地上巡航速度が速く、さらに瞬時加速も合わされば優れた機動性を発揮する。

…ここまですべて聞けば長所は良い。だが短所は積載量と耐久性の極端な不足、そしてISにとって致命的な、低い空戦能力である。

武装は拡張領域を広げる事で対応した様だが、それは同時に、武装を高速で切り替える事が求められる事となる。

あらゆる面で操縦者への負荷が強い——そんな機体となっていた。

加えて、武装はラファール系列が運用を想定されていない他社製品ばかり。

「…やる気が無いのか、技術が頭打ちなのか——どっちだよ…。」

こんな変態仕様、使える奴居るのか——とナガトは頭を抱えながら言う。

正直な話。

ふざけているのか大真面目なのか分からない。

前者ならまあ中指を立てるだけで済む。

だが後者なら、操縦者が哀れでしか無い。

「日欧合同次世代機開発計画に参加できず、単独で開発を続けた結果だなあ…。随分とまあ、ガラパゴス進化してやがる。」

高木が皿うどんを頬張り笑いながら口にし、それに箒が苦言を呈す。

「食べながら笑わないで下さい。みつともないですよ……大人なのに。」

「え？何？何？箒ちゃん俺のオフクロにでもなつてくれんの？」

しかし当の高木は巫山戯れてそんな事を言う始末なので、

「黙れロリコン。」

「気持ち悪い事言わないで下さい。」

「ひでえ……おじさん泣いちゃう」

ナガトが釘を刺す。

続いて、箒も冷たく拒絶する様にそう告げる。

2人から冷たい視線——箒は生理的に気持ち悪い汚物を見る様な瞳、ナガトは不埒者に無言の圧をかける情無きの瞳——を投げかけられた高木はしよぼんと項垂れる。

「……まあ、このスケベ野郎は置いとくとして、警備課としては織斑くんとこの3機を護衛対象とせにやならん訳だな……。」

閑話休題、と言わんばかりにナガトが話題を切り替える。

「そうですね……そして、一夏はこの3機——セシリアと全く違うタイプの3人を相手しなくてはならない……前途多難です。」

箒もそちらに話題を切り替え、現状にため息を吐く。  
おさらいすると。

—— 1組の代表機体は軽量二脚型機。

機体重量の軽さと持ち前の機動力と、ミサイルなどの火力投射力とブレードで高速機動格闘戦を展開する格闘型。

—— 2組の代表機体は重量逆関節型機。

耐荷重量にものを言わせた多数の武装を積載可能な上に立体機動戦とその間のカウンター攻撃を得意とする強襲型。

—— 3組の代表機体は浮遊無脚型機。

高い巡航速度を誇り、拡張領域の武装も併せた弾幕射撃並びに持久力に長け、高速移動砲台として運用する砲撃型。

—— 4組の代表機体は中量二脚型機。

無数の誘導弾による制圧と荷電粒子砲の合わせ技、近接でもリーチの長い薙刀で堅実な戦いを展開できる万能型。

……どれもこれも、異なる対応策が求められる。

しかも1週間かけて身につけた対セシリア戦の対応パターンは通用しない輩ばかり。

3組はともかく、2組も4組も近接格闘戦を想定した武装がある為、白式の十八番<sup>オハコ</sup>で

ある近接格闘戦を独壇場に持つていく事が叶わない。

更に言うならば、4組の打鉄式型が持つ近接格闘装備は薙刀タイプ。

雪片よりもリーチが長く、近接格闘戦においては打鉄式型の方が白式より有利ですらある。

——再び、箒はため息を吐く。

「——面倒な事になりました…。」

「何が面倒なのよ?」

箒の呟き——それに、聞き慣れぬ声が返される。

ふと、声の音源へと振り返る。

そこには——一夏とセシリアを両脇に携えた香港代表候補生・鳳鈴音が仁王立ちでいた。

「一夏のファースト幼馴染だつて言うから見に来てやったのよ。それにしても何? 昼からオッサンとのパパ活に勤しんでるの?」

「パ…——?!」

いきなり放たれた傍若無人な振る舞いと、この状況をパパ活と評した事に箒は絶句する。

…確かに、今箒のテーブルに座っているのは箒の他に、ナガトと高木——どちら

も30代前半の男——のみである。

そう言われても仕方ない、何しろこちらの事情など知る筈もないのだ。現にこちらも、鈴の事情などこれっぽっちも知らない。

「ウツソ、篠ノ之さん。パパ活してんの？」

「やっぱりあの新型も身体で手に入れたんじや……」

しかしありもしない風評被害を撒き散らされるのも困る。

だから——

「——この方々は義父とその同僚さんだ。そんなものでは断じて無い。」

初対面で失礼な奴だ——と、牙を剥き出しにして唸り声を上げる犬めいた声音で

箒はそう告げる。

「申し訳ありませんわ、篠ノ之さん。彼女、思った事をすぐ口にする癖がありました……。」

「——なるほど……」

隣にいたセシリアが申し訳無さそうに謝罪する。

彼女が鈴と関係を持っていてる事を意外に思ったが、おそらくは同じイギリス連邦加盟国の代表候補生であるために、面識があるのだろう——と箒は思った。

視線をセシリアから鈴に向けると、苦々しそうに口を動かしている彼女がいた。



「…初対面で言ったことは取り消すわよ。けどこれだけは言つとくわ。一夏の事を良く知つてるのは私だから!」

——そう、言い放つ。

(…私より長く一夏と共に居たのだから当たり前だろう。)

何を言つているのだ貴様は——そう言外に訴えながら、ジトリと鈴を見る。

(…もしや私は恋敵の類と勘違いされているのか?)

箒は内心思う。

…いずれにせよ、これ以上話をややこしくさせないのが吉だ。

とはいえこの手の輩は適当にあしらつたり無視すると逆上する。

…どうしたものか…。

「…ん? <sup>フオン</sup>フオン…、フオン…、フオン||ブラウン…。もしや貴様、ブラウンと劉の娘か。」

ふとそこに、ナガトが言葉を発する。

予想外の場所からの渡り船に箒は内心胸を撫で下ろす。

その言葉に鈴は驚き目を見開く。

「ママとパパを知ってんの?!…あ、です。」

予想外の人物からの声に、素っ頓狂な聞き声で返してしまい——思い出したように敬語を付け足す。

——劉楽音

——カレン・フォン・ブラウン

どちらもナガトの顔馴染み…とまでは行かないが。

「10年前の同僚だ。」

10年前の同僚——その言葉で、この場にいた鈴以外の人間が、彼女の両親が何者であるかを悟る。

おそらく、鈴の両親はヘズナル——それも、ナガトと同じオリジナルだと、全員が理解する。

しかし当の鈴が何も反応しない辺り、両親は仕事内容を明かしていないらしい。

まあ、《有人核兵器》になって国を守っている——なんて、誇らしげに言える話でもないだろう。その判断は、当然の話だった。

「二人は仲良くやってるか?」

ナガトはそう問いかける。

——数回話した程度だが、仮にも同じヘズナルでありオリジナル。

気にかけるのは当然と言えば当然だ。

…長時間急性タキオン被曝に曝されていたオリジナルは、10年後の生存確率が50%と言われている。

現にオリジナル47人中、現在生存しているのはそのうちの23人だけ。大半は急性タキオン被曝による内臓壊死や白血病により命を落としている。

…嘆く事はない。

——戦場で無敵無敗を誇った狼達も、所詮はヒトの子だった。

…それだけの話なのだから。

ふと——鈴は心なしか落ち込んだ顔を浮かべる。

「…別れたわ。」

その言葉に、ナガトは狐に口を摘まれた様な顔を浮かべた。

「——意外だな。お似合いだったのに。」

「男と女の関係なんて、どうなるか予測不可能よ。…ママも詳しくは教えてくれないけど、多分パパは古巣の台湾にでも帰ったんじゃない？」

そう言い放つ。

…本当に、そうか？

ナガトはそう疑問を抱いた。

近年急速な軍拡によりアジア諸国の脅威になりつつある中華人民共和国と、台湾——  
—— 中華民国とイギリス連邦領香港は国境を接している。

そして鈴の両親—— 西側サイドのヘズナルは鈴にその素性を明かしていない。

…これがアライズの分散配備ないし台湾に於ける新規ヘズナル教導の為だとすれば  
？

アライズはその一機一機が核兵器に匹敵する戦略兵器だ。

ならば近年重要視されている対中包囲網を、アライズの分散配備および各地のヘズナル育成という形でより強固にするという方針に傾くのは当然と言える。

…ならば、鈴への言い分は？

ヘズナル育成と現状の軍備体制は中国の脅威度が上がる度に、長期的に実行される。  
とても単身赴任というレベルでは済まないだろう。

…つまりは、偽装結婚ならぬ偽装離婚—— その可能性が、無いとは言い切れなかった。

「—— それより一夏！ 私との約束、覚えているでしょうね？」

…ふと、唐突に鈴が一夏を振り返って問いかける。

なんだなんだ、ひよつとしてもう婚約とかしてたのか。

おやおや—— ともでも言いたそうに口角を歪めて、ナガトは笑みを浮かべる。

箒も箒で察したらしく、「では赤飯を炊かなくてはな。」と微笑みながら言う。それに一夏は「ああ、覚えてるぞ」と言いながら口を開き――

「アレだろ？これから毎日酢豚奢ってくれるって言うやつ――」

「――え？」

（――ん？）

一瞬、鈴の思考が停止した。

ナガトや箒、高木も同様だ。

「スプタ…？ああ、『スウィートアンド・サワーポーク』のことですね？中華料理の。」  
 酢豚って英語ではそう言うのか、ありがとうセシリア。

それはともかく――何か、一夏は盛大に勘違いしている予感がする…。

「…???――え、だから毎日奢ってくれるんだろ？…違うのか？」

絶妙に噛み合わない会話。

聞いているナガト<sup>第</sup>達<sup>者</sup>も双方の意図を読みかねる。

「『奢る』じゃなくて『食べてくれる』って言ったのよ！」

鈴は、酢豚を毎日食べてねと言った。

一夏は、酢豚を毎日奢ってくれと把握した。

――しかし両者の理解はすれ違っている。

そも、鈴の意図も意味不明だ。

一体どういう事だ——と、ナガトが頭を抱える。

ふと、箒が、

「ナガト。もしやこれ、『毎日私の味噌汁飲んでね』という殺し文句に準えて言ってるの  
では…?」

ヒソヒソと、そう告げる。

なるほど、それで合点がいく。

そうすれば、一夏が誤解し、また鈴の意図が第三者からも理解出来ないのも話がつく。

（——いや分かるかあッ!!）

内心、絶叫した。

だいたい味噌汁じゃなくて酢豚に言い換えなきやこの問題起きないだろうが！

というか今の時代にそんな古い殺し文句伝わるかア！

「そんな訳ないでしょが！」

「どういう訳なんだよ、ちゃんとやってくれないと…わかんないだろ!」

「何でよ!? 考えればわかることですよ!」

「だから…何をどう考えればいいんだよ!」

それを証明する様に、どんどん話はおかしな方向に捻じ曲がっていく。

売り言葉に買い言葉。

二人とも当初の目的を見失っているらしく、なぜ解らないのか、何故考えろと言われているのかに怒っている様に見える。

そして2人は互いの怒りを相手にぶつけることだけが目的になってしまっていた。

「何よ。この朴念仁！難聴！鈍感！KY！」

「なんでそこまで言われなきゃいけないんだよ！貧乳！」

…一瞬、時が止まる。

…鈴の怒りが最高潮に達し、そして――

「最っ底！馬に蹴られて死ぬエエエツ!!」

「あがあああああー……ツ?!」

…鈴の罵声。

それと共に見事な旋風脚ハイキックが一夏の頬を蹴り上げ――、

一夏の絶叫が食堂にこだました。

空中でグルンと一回転し、一夏は床に倒れ伏す。

鈴は怒り心頭――と言った具合で、踵を返して食堂から出て行く。

怒涛の展開から1秒後――

「…オーイ、一坊ー、生きてるー?」

まず動いたのは高木だった。

「な……なん、とか……。」

幸い無事な様だ。

それにナガトと箒も安堵の息を吐くが、

「一夏……アレは無い……。アレは酷いぞ……。」

床に平伏した一夏に箒が失望したとでも言いたそうな口調で告げる。

まあ、うん。

途中までは一夏の肩を持てる。

しかし最後の一言で擁護不可能となってしまうのだ。

「やはり、一夏さんは乙女心を学び直すところからですね。」

続く様にセシリアもため息を吐きながら言う。

「おじちゃん、情けなくて涙出てくらあー。坊はそういうことをワカラナイカ」

高木も同様だ。

……それはそれとして。

こんな調子で間に合うのだろうか——クラス別トーナメント……。

訓練もそうだが、警備体制も……やる事は山積みだった。





——南極大陸・ビクトリアランド上空

高高度航空プラットフォーム〔ポラリス〕

歪な空に浮かぶ人工の大陸。

そうとしか形容しきれぬ、全幅8 km、全長2 km、全高180メートルの全翼機5機が編隊を組み、凍てついた空に浮遊していた。

…飛ぶ、とは違う。

飛ぶという動作は本来、離陸と滑空、そして着陸まで含めてセットの言葉。

しかしこの航空プラットフォーム——ポラリスは、着陸する事を前提に造られていない。

ただひたすらに、半永久的に空を飛び続ける居住型の超巨大航空機。

それ故に、その様は浮遊としか形容出来なかった。

同・国際連合本部

—— 常任理事国議会

コロナ体制崩壊後、国際連合本部はこの空飛ぶ大陸に移転された。

小惑星の落下による世界規模の天変地異と経済崩壊、国家の滅亡、そして再構築戦争

—— 自らが維持・管理を務めた世界は破壊された。

Variable International Confederation of Six country

V. I. C. 6 なる勢力が新たに統治する形となっており、そこに国際連合旧コロナ派の場所はど

こにも無い。

設立当初の、世界平和を邁進する為の理念も信頼も発言力も無い。

—— ただ、存在しているだけ。

言ってしまえば、国際連合とは、名ばかりの空虚な戯言に変わり果ててしまったのだ。

その現実から逃れる為に、当時の一部高官達は現実世界から自らを切り離れた。

∴ その、常任理事国議会議室。

そう広くは無い。

その部屋に、6つの脳髓を収めた箱が円卓を囲む様に並んでいた。

『 天才は、未だ沈黙したままか。』

—— ソヴィエト代表と刻まれた箱が言葉を発する。

『 織斑シリーズの全個体処分と、IS学園の内部粛正。多少の兵力を用意すれば可能だ

ろうに。』

——アメリカ代表と刻まれた箱が笑う。

『——然り。「アルテミス」を使う訳でないのだ。この程度の事で腰を重くされては、管理者として些か信用できぬ。』

——イギリス代表と刻まれた箱が不信任を露わにする。

『左様——強硬ロジックモデルは既に解を出している。』

——中国代表と刻まれた箱が同調する。

『いずれ解は出る——だがこのままでは遅過ぎる。この際、融和ロジックモデルの意見は切り捨てるべきだろう。』

——ドイツ代表と刻まれた箱が総括する。

『それで、東さんの役割になる訳かなあ?』

場違いに、はしゃぐ様に笑う声。

円卓の最奥——タバネ・シノノノニレプリカと刻まれた箱が笑う。

『ふふん、まっかせてえ…常任理事国の皆様にはちゃあんと——』

…一拍開けて。

『——VIC6今を生が管理きるする世界人類に、可能性なんか存在しないって、証明してあげるか

』。

反転した様に、低く、おぞましい声音で、  
——天災・篠ノ之束の"成れの果て"はそう告げた。

## #08 Unknown Reader (所属不明襲撃者)

—— 1週間後。

4月15日

日本国長崎県五島市浜町

男女群島・国連直轄領トキオ自治区・セントラル区

IS学園・第2アリーナ

—— クラス別トーナメント当日。

アリーナの観客席にいる1年1組の面々。

他クラスの人もアリーナを囲むように対戦表や試合が始まるのが今か今かと待っている。

人がいるだけで熱気に包まれ少し熱く、盛り上がりを見せている。

「どの人が優勝するか賭けた？」

「やっぱ織斑君でしょ。専用機持ち出し」

「私は大穴で3組のクラス代表に賭けた」

そういった話が持ち上がっている。

どうやらレートでは一夏と鈴が上位らしい。

そうこうしているうちに、その主役が登場する。

一夏と鈴がピットから飛び上がり、それと同時に歓喜の音がアリーナを包み込んだ。

、  
、  
、

白式を静止させて深呼吸——一夏は、眼前のあずき色の重量逆関節型ハイエンド・コンペディションIS〔BASE—HK—3《甲龍》〕を見据えていた。

『フーン。大人気じゃない、一夏。』

面白く無さそうに鈴は言う。

「……………」

一夏に、応える余裕は無い。

1週間で叩き込まれた3人分の軌道パターン——それを忘れない様にするためだけに必死で。

…だから眼前の鈴の声など届いていなかった。

——それが、鈴は気に入らなかったらしい。

『へえ…、謝りに来なかつた上に無視するんだ。あたしを。』

良い度胸してんじやない——と、鈴の怒りのボルテージが上がって行く。

一夏の名誉の為に注釈すると、彼自身は謝りに行っている。

それも何度も——しかし鈴がその都度面会謝絶と言わんばかりに部屋の鍵を閉めて拒絶していたのだ。

——よもや、扉をこじ開けて謝りに来て欲しい等、誰が思うだろうか。

当然一夏はその度に引き下がっている。

だから、鈴にとっては謝っていない扱いなのだ。

「いいわ——」

第一試合 織斑一夏VS嵐鈴音

空中に投影。パネルによるマツチが映る。

そして耳障りなブザーが鳴り——

「——血祭りに上げてやる。」

——醒めた、冷徹な声で言うと同時に、一夏に鈴が突貫した…！



—— 同時刻

IS 学園・多目的防災署

同・地下6階第21格納庫

10機分のアライズが横一列に駐機可能な、それなりに広い格納庫。

機体の前方には自治区外縁に続いているであろうトンネル型滑走路が。

後方には、学園敷地内の地上に続いているであろうリニアエレベーターが設置されている。

本来は再構築戦争時にコロニア軍のIS用カタパルトとして建造された区画であり、おそらく10年前まではここからラファールリヴァイヴや打鉄が飛び上がったのだろう。

…だが、現在となってはもうその面影はない。

そこには、3機のアライズが駐機されており、うち2機は、ナガトと箒の機体——  
—日方風と雷火だった。

「ふむ——やはりというか、押されてるな。織斑くん。」

『…ですね。』

機体のコックピットブロック内でナガトと箒が呟く。

中継映像には、一夏と鈴の対峙風景が映されていた。



一夏はセシリア戦同様にアローズミサイルによる遠距離戦から攻め入る。だが、あつさりとの瞬間的に展開された刃物で防がれる。

青竜刀のように曲線があるが、巨大な幅。

——まるで鯨包丁だ。

「BAEsホンコン・ディフェンス社のB-3 双天牙月か。」

ナガトが咄くと同時に、それを片手に軽々と手に、重量エンジンに物を言わせた加速——一夏も瞬時に近接長刀に切り替える。

——太刀と鯨包丁の鏝迫り合う。

だがそれも一瞬。

さらにもう一振りの鯨包丁——双天牙月を展開し右横に切り払う。

一夏はそれで吹き飛ばされる。

何とか体勢を立て直そうとするが、鈴は瞬時に右腕装備を銃火器に換装——直後、その銃身が折れ曲がり、砲口が一夏を向く。

同時に、棘付きの砲身めいたユニットがスライド——中にプラズマを帯びた球体が光るのが見えて、そこから撃ち出された見えない砲撃が放たれ、更に右腕の銃火器からもグレネード弾が発射される。

砲撃をモロにくらった一夏は、後ろに吹き飛びアリーナの壁に後ろから叩きつけられ

る。

『今のはイスラエル製のカウンターキャノンでしょうか?』

カウンターのキャノン——コーナリーショットという、射撃手の体を完全に敵から隠

しながら撃つという目的に特化した銃を起源とする兵器だ。

本来のコーナリーショットの用途である、壁際から銃身前方を折り曲げて射撃する——

——その運用を落とし込み、敵に予測外の方角から砲撃する事に特化した兵器。

——それがカウンターのキャノンである。

「ああ。そんでもって、不可視の砲弾は空間兵器——」

空間兵器。

空間自体に圧力をかけ、そこに砲身を生み出し溜まった衝撃を打ち出すというもの。

即ち、超巨大空気砲ともいべき兵器である。

その源流は、風力砲というドイツ軍が試作した対空兵器まで遡る。

「——コンセプト自体は第2次世界大戦時からあったヤツだな。全部技術的観点から失敗しているが。」

当時は酸素と水素を混合した気体へ爆発により高圧を掛け、高圧の空気と水蒸気の塊をパイプを通して噴出させ、目標航空機に向けて吹き付けて撃墜しようとしたのだ。

しかし当然と言えば当然ながら何の成果も残せず失敗。

——だが、これはどうか。

PICによる空間圧縮を用いた空対空兵器としての運用。

不可視の砲弾として、敵に物理的衝撃やダメージを与えるにまで成長している。

：技術の進歩つてすげえんだなとナガトは半ば感心する。

しかし中継映像内の一夏はそうもいかない。

立て続けに打ち出される衝撃砲に一夏は我武者羅に回避行動をとるしか出来ない。

何しろセシリアのレーザーと違って見えないのだ。死に物狂いで躲すしか出来ない。

狙いは少し外れているらしく、衝撃砲が観客席のシールドバリアまで振動させる。

『弾速はレーザーの比では無い。あとはパターンさえ掴めれば……』

箒が通信越しに、祈るように呟く。

——箒の言う通り、救いがあるとすれば、弾速はセシリアのレーザーに比べるま

でもなく遅い事。

だからこそ、パターンさえ掴めば対応できる筈だ。

だがそれを——鈴は許さないとばかりに、手に持っていた双天牙月を連結させ

デュアルソードとしてそれを投擲する。

ブーメランの如き回り一夏に向かって翔び、一夏はそれを回避し——そこをまた

衝撃砲に撃たれてしまう。

誰であれ、目に見えないものより目に見えるものに意識が行くのは当然だ。

一夏は飛んでくる刃物に目が行ってしまい見えない砲台に気が回らなかったのだから。

——そこを襲われた。

さらに衝撃で固まっていたところを後ろから返ってきた双天牙月に強襲される。

一夏は完全にペースを崩され、鈴が試合の主導権を掌握する。

故に試合は、一方的な展開となっていた。

——瞬間、中継映像が暗転する。

【CH01】

— SIGNAL LOST —

中継チャンネルを断線した事を意味する白文字が、黒の中に浮かんでいる。

『……故障……、でしょうか？』

箸が問いかける。

そしてナガトは中継チャンネルを切り替えてみる。

【CH02】

— SIGNAL LOST —

【CH03】

— SIGNAL LOST —

【CH04】

— SIGNAL LOST —

【CH05】

— SIGNAL LOST —

.  
. .  
. . .

：しかしどの中継チャンネルも繋がらない。

——まさか、と。ナガトの中で疑念が浮かぶ。

だから無線機を手にとって、

「——高木！」

——呼びかけた。

「——高木、聞こえるか?!」

『八雲か！システムエラーが多発してる！おそらく電子攻撃だ！』

それで疑念は確信に変わり、同時に格納庫内のサイレンが鳴り響く。

《——システムエラー多発、システムエラー多発。安全の為地下滑走路を封鎖しま

す。》

機械音声と共に地下滑走路のゲートが閉じて行く。

本来タキオン粒子事故が発生した際に作動するべき緊急システムが、システムエラーにより誤作動している。

《学園だけじゃない、自治区内各所でも——》

高木の後ろからは、増大している警備課の無線交信内容が聴こえてくる。

それはつまり——

『——ナガト!』

同じ結論に至った筈が叫び、ナガトは歯を噛み潰す。

「ああ——始まりやがった……!」

——それはつまり、敵襲を意味するものだった。



同区内・マストタワー

——同・トキオ区役所広域対応室

——灰色を基調とした部屋。

中央をU字型の木製長テーブルが穿っており、そこには理事会のメンバーが座している。

——その前面。

正面スクリーンに投影される——トキオ区の地図。

IS学園に隣接した、旧コロナ艦のマスト構造物だったタワーに置かれたそこも、混乱を極めていた。

「侵入者は!?企業のサーバーか?!」

「いえ、少なくとも国連管理SPC10!インド、中国、ロシア、アルジェ||フランス、中央アフリカからの侵入が確認できます!」

「ファイアウォール攻性防壁第2層、処理能力限界値超過!第3層に侵入されました!!」

「逆探に成功、国連管理SPC13、企業SPC108、その他467件未特定——  
!」

——それは即ち、121基のスーパーコンピューターとそれに相当する467基  
によって学園と自治区がサイバー攻撃を受けているということだった。

「未特定とは何だ、再度確認しろ!」

「やっています——?!」

その混乱の中に千冬も居た。

大規模な催しがある際、自治区にオブザーバーとして招かれるというものであり、通例に従って来た——その矢先に、この騒動に飲み込まれたのだ。

「——逆探に再度成功! 467件の発信源は……ッ?!」

オペレーターの息を呑む声が響く。

その顔面は、あり得ないという表情で凍りついている。

「どうした?!」

指揮系統を無視して、千冬が問いかけた。

それで我に帰ったオペレーターは、震える声音で——

「ISコアネットワークからです……!!」

——最悪の事実を告げた。

ISコアネットワークとは、ISコアが形成するネットワーク網。

つまり——世界中のコア搭載型ISから同時多発的にハッキングされた事になる。

…否。

コアネットワークは全てのISを繋いでいる。



そして不測の事態にならないよう、コンペディションＩＳは全て区役所と学園側で  
モニタリング接続監視している。

そして学園側は今回の催しを市街地に中継映像としてオンラインで流している。

つまりは、コアネットワーク内で自己増殖したウイルスプログラムが、学園内のＩＳ  
 を介して一齐に自治区内全域に拡散した事になる。

——そして恐らくアリーナにいる生徒らも、一夏も鈴もこの事態に気付いていな  
 い……！

千冬は冷や汗が頬を伝うのを感じた。

次の瞬間——ブツと、鈍く速い音を立てて、室内の証明とモニターが暗ブラックアウト転す  
 る。

突然のことに職員が悲鳴を上げる。

「停電?!」

「こんな時に……!」

誰かの驚愕の声と、忌々しく叫ぶ声が連鎖する。

直後——低圧ナトリウムランプの非常灯が点灯し、室内は薄暗い緋色に染まる。

——モニターと通信機は死んだままだ。

手にしていたケータイも圏外——おそらくは携帯電話中継基地局の電波塔も機

能を停止したのだろう――。

直後、ジリリと床下から音が鳴り、職員が驚き飛び跳ねる。

千冬は、音源を辿り、床に貼られたタイルカーペットを剥がす。

そこには――《WARNING ―EMERGENCY TELLPHONE

――》と書かれた錆びが出始めたチタン製の蓋があつた。

――音は、そこから鳴っていた。

それにマスターキーを振じ込み、解錠するなり乱暴に開く。

――中には、1980年代ものと思われるダイヤル式の古びた非常電話が内蔵されていた。

「コロナ時代の電話線が生きていたのか……」

トキオ自治区はそもそも男女群島に座礁したコロナ艦の集合体である以上、非常用電話が壁や床下に埋め込まれていても何もおかしくは無い。

だが、10年以上も放置されているながら未だ使えるという事に驚きを隠せず一瞬目を見開き、千冬は受話器を手に取った。

「……もしもし。」

電話に出る。こんな時、この回線を知っている人間はおそらく、

『俺だ。千冬。』

やはり高木だった。

その声で、ひとまず学園そちらは無事なのだと言堵する。

だが、相手の声は硬いものだった。

『——国連本部からA—616が出た。』

「616?」

聞きなれない言葉に疑問を浮かべる。

『IS学園およびトキオ自治区の特例による法的自治権の制限、及び行政指揮権の国連

本部への分割委託——いわゆる恫喝さ。』

それは、本来平和維持の為に存在していた国連による侵略を意味していた。

…否。

IS学園およびトキオ自治区は現状国連の直轄領。

つまりこれは——国連内の内部粛正だ。

『——現在区内全域の通信交通管制システムや校内警備システム、ISコアネットワークがハッキングを受けている。一部区画は意図的な停電を引き起こしてハッキングを阻止。アナログで対応中だが…このままでは、乗っ取られるのも時間の問題だ。』

「…日本帝国政府への救援要請は?」

『やっつてる。だがIS学園ここは一番近い自衛隊基地から150km離れている。』

IS 学園、延いてはトキオ自治区の所在する男女群島は東シナ海に浮かぶ群島だ。

本来は無人数島であり、コロナ時代に築かれた五島列島を貫き九州本土に直結する西海大橋という超長距離巨大連絡橋が掛かっており、陸路でもアクセスは出来る。

しかし、仮にそこを時速80kmで飛ばしたとして、到着まで2時間は掛かる。

海路は九州本土との連絡船を担う高速艇があるが、こちらも片道3時間はかかる。

それはつまり、陸路や海路の部隊派遣は間に合わない——ということの意味していた。

「なんでもいい。とにかく無防備となった区内の安全を確保できる戦力を頼む。」

…今まで自力防衛に固執したツケか——と千冬は内心独りごちる。

トキオ自治区は再構築戦争で行き場を失ったコロナ艦の集合体であるという特性上、そこに住まう住民の反VIC6感情は根強い。

——故にトキオ自治区はISによる自主防衛を徹底していた。

…それに綻びが生まれたのは、VIC6以外にもアライズ保有国が生まれ、VIC6が事実上の新国連となり、学園や自治区のバックボーンたる国際連合が形骸化した事で財政難に陥ってから。

それでも防衛だけでも——と、VIC6の装備や人材を雇い、可能な限り自力防衛に努めていた。

——そこを、国際連合本部に突かれる形となった。

…そして恐らく、今回の電子戦攻撃<sup>ハッキング</sup>は、近年VIC6に傾倒しつつある自治区に対する示威行為なのだろう。

「……………ッ」

（——まだ、あの戦争の亡霊が居るとはな…！）

高木の電話を切りながら、千冬はギリ、と。

奥歯を噛み締めた。



——同時刻

IS学園・多目的防災署

同・地下3階臨時仮設指揮所

合同庁舎地下に設けられた仮設指揮所——そこも現在、喧騒に満ちていた。

「現時刻より無線LAN一切封止。以降は有線でのみ区内通信を可能とする！」

千冬と電話していた非常用電話の受話器を置くなり、高木はフロア全体に響き渡る程の声で告げる。

眼前には警備部・教師部・事務部・整備科の各スタッフ——それらが、高木の怒

号ひとつで事前の打ち合わせ通り、行動を開始した。

「無線LANは全部線抜いとけ！最悪叩き割っても構わん!!」

「デスクトップはウイルスで全部ダメ！ノートパソコンか予備端末を使って!!」

『こちら警備課第1戦術中隊、学園各所の警備を継続する。』

外部からのコンピュータウイルスを用いたサイバー攻撃。

それに抗う為の作業が、実施される。

結論から言えば——既存オンラインの通信網の完全廃棄を行いつつ、新規通信網アナログを構築する

という話だった。

『こちら事務課IT対策部！第1から第31通信回路の切断処理完了!』

『こちら整備科保守点検部第1班！主発電機に繋がる電源ケーブルは全て切断済み！独

立補助発電機、稼働開始!』

『こちら整備科保守点検部第2班！現在、旧コロシア艦内配線トンネルを中心にLAN

ケーブルおよび中継機コンセント群を敷設中。現在進捗率2%!』

『LANケーブルがまるで足りない!誰でも良い!予備のやつを持って来てくれ!!』

——そして傍らでは、今回の騒動の片棒を担いってしまったISコア搭載型コンベ

ンションISへの作業が実施される。

「整備科機体整備部第2班はコンベートのコアを取り出しとくぞー!」

『作業アーム、電力不足で作動しません!』

「馬鹿野郎人力でやるんだよ! 何のために工具持ってたんだ!!」

「整備科機体整備部第1班はアライズの維持を最優先だ! この際コンペートは構うな!!」

飛び交う怒号と連絡の声——

『こちら整備科保守点検部第2班! 当該管区の通信網仮設完了! 現在進捗率5%!』

——作業は着実に進んでいた。

しかし、敵はそれを嘲笑う様に攻撃の手を更に強めていく……!

「帝国防衛省から入電——!」

ふと——相川という、日本帝国政府と状況のやりとりをしていた高木子飼いの警備部職員が叫んだ。

「大気圏外から突入してくる物体を観測! 数は12! あと20秒でここに着弾します…!!」

それは、襲撃が次の段階に移行したことを意味していて——

「総員耐シヨック——!」

高木が叫ぶと同時に、凄まじい衝撃がフロア全域を揺らした……!



——同時刻

IS学園・第2アリーナ

アリーナに衝撃が走った。

一夏は思わず振り向いて音の発生源を見る。

そこには見た事無い深い灰色をしたISが腕を上げながら立っ——瞬間、ハイパーセンサーにロックオン警告が表示されたのだった。

「はっ！」

一瞬、一夏はロックオンされた事の意味が分からなかったが、謎のISの腕部から放たれたビームがこちらに向かってきた事でハツとなり、その場から急降下して回避する。

『なんなのよ！コイツ——！』

想定外の乱入者に狼狽えたのか、鈴も叫ぶ。

両腕合わせて計四発のビーム——おそらくは箒の雷火と同じ高速パルスイオン砲——

——が雨霰と一夏目掛けて発射される。

外壁に着弾した際の威力からアライズ並みの高出力だと分かった。

冷や汗が頬を伝う。



着弾点には小さなクレーターが出来ている。

しかしあのチャージ速度は競技用のリミッターなんてのは掛けてない。

アライズの粒子装甲と違い、コンペートの絶対防御は完璧ではない。

あんな物を下手に直撃なんてしたら——！

ふつつつと湧き上がる恐怖に思わず震えそうになるが、そんな弱気の虫が顔を見せようとした瞬間に管制室の山田先生からの放送が入って来た。

『皆さん今すぐアリーナから脱出してください！先生達がISで制圧に行きます！』

「そうしたいのは山々なんですけどツツ!!誰に恨まれてるのか鬼みたいなロックオンで振り切れそうに無いです!!」

一夏が半ばヤケクソ気味に叫ぶ。

この全身が装甲に包まれたISは少しでもピットに近付くと、それを阻止する様な砲撃を行う。

それに、アリーナに展開していた遮断シールドを突破してきた機体だから下手に逃げれば余計に被害が拡大する。

かと言って、満身創痍の機体を使って敵機を撃破できる程の腕前は無い。

だから教師部隊が来るまで被弾しない様、逃げ回る事しか出来ない。

——ナガト仕込みのレーザー回避術、それが素人を脱却できていない身でありな

がら逃げ回る事を可能としていた。

…だが、それでも限界がある。

「くそつ、罅が開かない！鈴、何か良いアイディアとか無いか?!回避に専念してる所為で全く頭が回らないんだ!!」

素人の浅知恵で何とか出来るとは思えなかった。

何よりそんな余裕が無い。

だからこの際鈴との間にあつたことは彼方に放り投げて手を貸してくれと叫ぶ。

——しかし、返事はない。

「——鈴?」

回避しながら、不審に思つて再度声をかける。

『…何——これ…』

返つてきたのは震える声音だった。

思考が現実には追いついていないのか、鈴はアリーナ上空で唾然と滞空したままだ。

——何を、見ているんだ。

回避しながら、鈴とアイセンサーの視界を共有し——黒煙を上げる市街地が、新規ウインドウに投影された。

「な——」

言葉が詰まる。

——なんだよ、コレ。

「一体何が——起こってるんだ…?!」

そして絶句して——直後、敵I Sのパルスキャノンが白式を薙ぎ払った。



——同時刻

トキオ自治区セントラル区

そこもまた、学園と同様に混乱に満ちていた。

唐突に始まった非常事態に市民は皆、商業施設や地下鉄駅への避難を余儀なくされている。

——セントラル区の《シーサイドポート》モノレール駅もそれらの影響を受け、人集りの巢窟と化していた。

バスや列車などの公共交通機関も路線寸断による運転取り止めや道路の混乱により、完全に沈黙。

…そんな中で人々が3000人以上、駅構内に溢れていた。

何か起きてても所詮は対岸の火事だし自分とは関係ないと考える人々。

自分とは無縁の話で、自分には平和な日常が約束されていると信じて疑わない人々。

…その、幻想を叩き割るように。

——耳を劈くような爆音が急速に迫り来ることを認知する。

見ると、灰色のISが自分達の直上に展開し、両腕に内蔵されたパルスキャノンが、群衆に向けられて——一瞬後、群衆を薙ぎ払った…！

…攻撃目標を潰した機体は、すぐさま次の目標へと向かう。

その眼下には——地獄と化した駅構内が在った。

…改札口はパルスキャノンにより根こそぎ蒸発し。

…改札口の向こうはホームが落盤した事で完全に押し潰されていて。

…墜落の衝撃で飛散したガラスが無数の市民だった肉塊に突き刺さり赤い海が形成され。

…崩落したコンクリートの下からは、赤い水溜りと、肌色のナニカが覗いて居て。

惨劇の跡だけが、残されていた——。

—— 同時刻

トキオ自治区アッパーウインディ区

—— オフィス街区。

IS 関連や旧コロナ系の企業が進出することで経済的発展を遂げた街区。

高層ビルが軒を連ねるそこは、やはり混乱に満たされていた。

逃げようと対向車に激突する車両。

その事故車に追突する運送トラック。

急ぎ自転車を動かそうと横転する者。

その現実離れした騒動を傍観する者。

咄嗟に背を向けて走り出す歩行者。

悲鳴を上げて、走り逃げる者。

恐怖より好奇心が勝り、スマートフォンで撮影を試みる者。

そこに「撮つてないで早く逃げて」と怒声を飛ばし、逃げるよう促す者。

その背後で、路上に打ち捨てられた無数の乗用車を、落雷の如き轟音と共に IS が踏み潰す。

地鳴りと共に踏み潰された乗用車は爆発し、四散した破片が周囲の建築物群を豪雨のように叩きつける。

つい数分前まで平穩に満ちていた都市にはあまりに不釣り合いで、異界とさえ錯覚してしまう光景。

その中で—— I S は、両腕に搭載された 208 m 自由電子レーザー砲を穿つ：

！

高熱の光はアスファルトを溶解し、極太のレーザーがビルを貫く。

瞬時にしてコンクリート内の水分が蒸発し、ビルが水蒸気爆発によつて内側から破裂する。

そしてビルの破片が、次々と民間人を押し潰していく……！

それでも尚、I S は攻撃をやめない。

新たな標的として定めたビルに向けて、再びレーザー砲を放った——！

マストタワー内部・トキオ区役所

—— 同・広域対応室

「学園および市街各地にて不明 I S が攻撃を開始……ッ、こんな……酷い……！」

意図した停電でブラックアウトした室内では、有線で繋がっている街頭カメラによる

中継映像が予備端末に映し出されていた。

そしてそのあまりに惨たらしい映像にオペレーターが嗚咽する。

「何だコレは……無差別攻撃、だと……?!」

思わず千冬も絶句する。

こんな光景は——10年前の再構築戦争以来だった。

そして、防衛用無人兵器を管制していた部署からは、

「都市外縁に未確認巨大兵器確認——!」

その一方が入り、復旧した主モニターに映し出される。

——甲殻類と虫を足した様な流線形のフォルム。

——上部甲板にVLSを、艦首に眼球を連想させる大口径砲を備えている。

——全長100メートルは下らない、武装水中翼船。

「改イワナミ級無人フリゲート艦、接敵します!」

区役所都市防衛局が所有する、無人フリゲート艦6隻で構成された邀撃艦隊が76m連装速射砲と対艦ミサイルを発射する。

しかし直後の光景に皆が目を見開いた。

「な、何だ……あれ!?!」

眼球の様なユニットの装甲板が開いたかと思うと、そこからハイレーザー砲を放つ。

そのエネルギーによって無人フリゲート艦たちは次々と溶断され、破壊されていく。

「改イワナミ級、全滅——」

「…あれは——」

…その機体を、千冬は知っていた。

第1世代型 I S B A E s / I S — I ——— 白騎士と同時期にコロニアが開発し

ていた水上戦闘艦型 I S だった。

「I S の軍事転用を禁じたアラスカ条約違反の代物——老害共め、やってくれたな。」

モニターを忌々しく睨みつけ、千冬は毒付いた。

… I S が人型として確立された第2世代以前の機種——第1世代 I S は、白騎士シリーズを除いて、I S 適正を必要としない、無数の凡人によって制御される兵器だった。

それ故に、更なる戦火拡大に繋がるとして、V I C 6 と旧コロニア派の停戦条約であるアラスカ条約締結の折に、汚染問題を引き起こした初期型アライズ共々、全て廃棄された筈だった。

…にも関わらず、こうして稼働し同時にこれだけの機能を維持する——そんな事が可能なのは、条約に批准していない国際連合こと、旧コロニア派上層部達くらいしか



いない。

しかし今この状況で、それがなんだというのか——そう言わんばかりにレヴィアタンは上部甲板上の垂直ミサイル発射機構から対地攻撃用のミサイルを放つ。

「……ッ、敵巨大兵器、港湾設備に攻撃開始！」

その言葉と同時に、港湾区のコンテナ群と停泊していた貨物船やタンカーが次々とミサイルの直撃によって爆発する。

その爆発は周辺的一般市民を飲み込み——そこには、命だったモノだけが遺された。

(これが恫喝だと……? どう見ても制圧じゃないか……!!)

新たに生み出された惨状に千冬はギリ、と歯を噛み締める。

それと同時に——

『——こちら警備部隷下日欧合同試験隊。マストタワー、聞こえるか?』

——ナガトの声がした。

「八雲か! 今どこにいる?!」

驚き、千冬は思わず問いかける。

『<sup>アライズ</sup>日方風ン中だ。時間が無いんで要件だけ伝えるぞ。区役所理事会にアライズの出撃を

要請させてくれ。』

法令上、コッチから勝手に動くワケにはいかんのでな——と。たたみかける様にナガトは告げる。

自衛隊に帰属するナガトと日方風は、国または自治体から出動要請が無ければ動けない。

それは警備部に移った今も同様だ。

——つまり今は出撃準備が整っていて、ゴーサイン待ちという事だ。

おそらく、箒も同様だろう。

だから——千冬は広域対応室にいた理事会の面々に首を振った。

「——ダメだ。」

しかし、出たのは否定の言葉だった。

千冬は思わず目を見開く。

「何故です…?!」

「…今回の攻撃はおそらく、我々がVIC6に傾倒し過ぎたが故の内部粛正だ。だから

…頼む、何もするな…!」

驚愕は怒りを通り越し、呆れや失望の域に至る。

…理事会のメンバーは、未だこの状況で自分達の利権と保身に走るといふのだ。

「…民間人に犠牲者が出ていますが。」

「仕方の無い犠牲だ。分かってくれ。」

——掛ける言葉も無い。

千冬は周りのオペレーターに視線を向ける。

全員、俯き、現実から目を背けていた。

それで、ああ此処に居る者もか——と千冬は落胆する。

皆、国連本部からの本格的な粛正を恐れ、今回の虐殺を黙認しようとしている——

——自分達が殺されぬ様にと、保身に必死になっている。

（——これでは……）

モニターに映る、新たな爆発の映像。

その爆炎の中で人が燃えている。

——何も出来ないのか、という諦観が千冬を支配する。

ふと——

「ツ、学園第21格納庫より、アライズ2機が発進体制に入っています！」

オペレーターが叫び、凍っていた場の雰囲気動き出す。

「な、なんですって!?!警備部のアライズ!聞いていなかったの?!勝手な真似はするなど

言った筈よ!!」

思わず理事会のメンバーがヒステリックに叫ぶ。

『…全く——さつきから聴いてればグチグチグチグチと……!』

それにナガトは、明らかに苛立った口調で無線を開く。

…僅かに一拍開けて——

『安全な場所から——デカイクチを聞くな!!金ばかりせびつて満足に働けない無能共がツ!!』

——罵声が室内を震わせる。

それは有無を言わせない、憤怒に満ちた声だった。

「な——」

思わずその無礼ぶりに理事会のメンバーは唾然とする。

そこに——

『失礼。私の上官がご無礼を。上官殿は気が短いので。』

——箒が割って入る。

彼女なりに一触即発の雰囲気回避しようとしたのだろう。

だが、直後——

『ただ私からも言わせて頂くとすれば——何もしないのなら、黙って見て下さい。』

——凍てつく様な声音で、釘を刺す。

『それに、A. T. L. A. S. から T A S K - 04 が発令された。』  
 A. T. L. A. S. ——— アラスカ条約締結と V I C 6 による国際秩序再生に伴い

その実働部隊として組織された多国籍軍。

早い話が、国連軍のようなものである。

違いがあるとすれば、V I C 6 加盟国が『致命的な脅威』と判断した事象において超法規的措置を発動する権限を持つ、強権組織として有名だった。

そしてナガトが告げると同時に、T A S K 04 のデータが映される。

—————

— Task 04 executed by A. T. L. A. S. JPN (アラ

スカ条約機構軍日本事務局より実行されたタスク04) —

?? From: A. T. L. A. S. JPN Commander Ulrich

Signer (差出人: アラスカ条約機構軍日本事務局ウルリッヒ・ジグナー司令官)

?? Mission by Arise with the goal of annihilating the attackers (襲撃者殲滅を目的としたアライズによる任務)

?? Use of the Siegfried-class air cruisers when entering the area of operation

s from high altitude (高高度から作戦エリアに進入する際の  
ジークフリート級航空巡航戦艦の使用)

?? Requisition of local Airise troops. (現地

アライズ部隊の徴発)

?? Freedom to use weapons (武器使用自由)

?? No administrative authority in the a  
rea of operations has the right to vet  
o this order in practice. (作戦地域の行政機関が本指令  
を拒否する権利は実行中には無い)

||||||||||||||||||||||||||||||||

—— 有無を言わさぬ命令の数々。

本来、帝国陸上自衛隊から警備部に出向しているナガトや箒はアラスカ条約機構軍に  
参加しておらず、従う義務は無い。

しかし—— 《現地アライズ部隊の徴発》という項目が、アラスカ条約機構軍の指  
揮下に加わり、直ちに攻撃する正当性を持たせてしまっている。

当然、国連からの更なる制裁とタキオン汚染を恐れる区役所理事会からすれば御免被

るが——《作戦地域の行政機関が本指令を拒否する権利は実行中には無い》という項目が、区役所にノーと言わせない。

それは、区役所理事会の有耶無耶にして終わらせたいという逃げ道を真つ向から潰す内容だった。

それに理事会のメンバーは血の気が失せていく。

だが、貴様らの事情なぞ知るものか、手前のケツは自分で拭け——そう言わんばかりに、

『ライカン01、ライカン03——出るぞ……！』

ナガトの裂帛の号令——それと同時に、国防色のアライズと、紅白迷彩のアライズが舞い上がった……！



——同時刻

五島列島・中通島沖30km

広域災害対応輸送船《たちばな》





機体骨格：異常なし

ローアーカイブロー

所属元：日本帝国内閣国家安全保障局

操縦者：更織楯無

製造元：巖崎重工業株式会社

ジャパンフリーストユナイテッド社

機種：重量二脚型機

ローアー兵装ローアー

腕部兵装右：試製22式ガトリングメイス《蒼流旋》

35mmチエインガン

腕部兵装左：127mmプラズマ砲

35mmチエインガン

格納兵装右：試製21式空間魚雷

格納兵装左：試製21式空間魚雷

肩部兵装右：三連装対艦・対戦車ミサイル

肩部兵装左：三連装対艦・対戦車ミサイル

背部兵装：試製重合水装甲制御基2型

拡張領域：I H I—F 5—1 T タキオンエンジン

「ああ、高木くん。状況はどう？」

お姉さん会いたかったー！心配したのよ——！

…と、キャピキャピしながら少女——更織楯無は言う。

『——A. T. L. A. S. から T A S K—0 4 が発令されました。現地アライズ

部隊徴発を含む内容の、です。』

それを聴いて、楯無は雰囲気ガラリと変える。

「そう——事は深刻ね。」

努めて冷静に、楯無は口を開く。

「…先程、日本帝国政府も九州・沖縄地方を中心とした西日本全域に、〔有事特別例外措置対策法〕を適用——事実上の“戦時体制”に移行したわ。」

『そりやまた…10年前に逆戻りですね。』

「ええ——長引けば、経済的損失も発生する…そんなワケで私も出るわ。”現地アライズ部隊”は全て参加を迫られているんでしょう？」

『——助かります。では。』

そうやって、高木は通信を切る。

直後、ガコンという音と共に、楯無の機体

——カイゲツ海月の固定が解除される。

《後部ハッチ解放——》

アナウンスと共に警報が鳴り、たちばなの後部に備えられた揚陸艇発艦着艦用のハッチが開く。

「——さて、お仕事お仕事——！」

そういうと、楯無はハッチから海月諸共水中へと身投げする。

——海水吸水。

——ポリウオーターナノマシン結合。

——重合水装甲、形成。

情報が網膜に投影されて——機体を水圧から守る、水の壁が形成される。

それを確認するなり、楯無は空間流動スラスターを全開。

時速50ノットで、IS学園目掛けて水中を駆けだした——！



——同時刻

男女群島沖南東20km

—— 高度1万メートル

黒煙をたなびかせ、霞んだ戦闘音が連鎖的に木霊するトキオ自治区沖合い20キロ。

高度1万メートルの—— 澄んだ空が広がる雲海を割きながら進撃する。

—— 鋼鉄の牙城が2つ。

欧州連合オーストリア合衆国ドイツ連邦海軍ジークフリート級航空巡航戦艦、

FS—110〔ジークフリート〕

欧州連合オーストリア合衆国オーストリア海軍ライン級航空巡洋艦

FK—83〔ザルツアハ〕

—— から成る、第1空中機動艦隊外洋派遣戦隊であった。

ISの技術を基に、反重力力場制御器と空間流動スラストを搭載した本艦は、文字通りの空中戦艦と化していた。

—— 再構築戦争においてアライズ開発で遅れた欧州連合の当時の切り札であり、それは今アライズを運ぶ為の足として活躍していた。

ひとつ不運があったとすれば—— これから行く先が、戦場になってしまった事だろうか。

同・航空巡航戦艦ジークフリート

——後部甲板アライズ用デッキ

古代ローマのレギオン、あるいは翼人を思わせる鋭利なフォルムに銃砲火器で翼を象った巨人——E i R—T y p e—II X I [ヴァイムランナー]と、E i R / T y p e—X I X [ヴァハフントE]が鎮座していた。

——ヴァイムランナーのコックピットブロック内は静寂と興奮が同居していた。

—————

《E i R—T y p e—X V I [ヴァイムランナー]》

——装甲耐久——

粒子装甲：100%

複合装甲：100%

機体骨格：異常なし

——アーカイブ——

所属：日欧合同実験団《ライカンズ試験隊》

帰属元：オーストリア合衆国ドイツ連邦軍

操縦者：ゲラルト・ヴォルテンガー

製造元：アイゼンライン社

機種：中量二脚型機

―――兵装―――

腕部兵装右：II X式S6大型レーザーブレード

G<sup>ヘ</sup>E<sup>リ</sup>―<sup>ア</sup>L<sup>エ</sup>B<sup>エ</sup>M<sup>テ</sup>I<sup>ス</sup>レーザーブレード

腕部兵装左：X式40mm機関砲

G<sup>ヘ</sup>E<sup>リ</sup>―<sup>ア</sup>L<sup>エ</sup>B<sup>エ</sup>M<sup>テ</sup>I<sup>ス</sup>レーザーブレード

腰部兵装右：W t S | X VI号突撃砲（近接格闘戦仕様）

腰部兵装左：W t S | X VI号突撃砲（近接格闘戦仕様）

背部兵装右：IX式57mmプラズマ砲

背部兵装左：VIII式120mm超電磁砲

拡張領域：E i R | T 6六連結タキオンエンジン

―――

網膜投影に現れる機体情報を見ながら、ゲラルト・ヴォルテンガー中尉は、ストレッツチしながら出撃を待ち詫びていた。

耐GジェルがISスーツ内を満たし、起動工程が全て終わってから即出撃——とはいかない。

情報収集と——その上で射出角度の調整などが必要になってくる。

だから仕方ないのだが、暇だ。

なので、暇潰しに身体を動かす。それくらいしかできる事もない。

フランス内戦も、パリに於ける戦いでひと段落し——代償として、パリの南半分が更地になってしまったが——漸く本来の仕事に取り掛かれると思った途端にこれだ。

「……日本はそれなりに平和だと聞いていたんだがな……。」

思わず愚痴をこぼす。

『仕方ないですよ。今の時代、平和なんて簡単に壊れちゃうんですし。』

ふと、機付きの整備士が無線越しに言う。

自分より若い、20歳になるかならないかくらい歳の男だ。

……確かに、彼の言う通りだ。

かつての第4次非核大戦以前の時代——冷戦と呼ばれていた頃、核兵器で脅し合

い、核兵器開発で競い合う、少しでも間違えれば人類種を7度絶滅させられる核の雨が世界中に降り注ぐときさえ言われていた時代ですら、核兵器の存在が国家の安全に寄与してすらいいた。

しかし7度に渡り飛来した小惑星の迎撃と第3次世界大戦で核兵器——特に  
大陸間弾道ミサイル  
 ICBMの類は全て失われた。

その代替となっているのがアライズだ。

しかしそのアライズの配備が核保有国と非核保有国とのパワーバランスを破壊したとも言える。

核兵器とは違い、再利用が可能な個人運用すらも可能とする核に匹敵する戦略兵器。

そんなものが溢れ出した結果がこの世界規模の情勢不安定化というわけだ。

恐らく、これからはヘズナルの数を多数有している国であればあるほど有利な時代になっっていく。

そしてV・I・C・6の一角である日本帝国は比較的情勢が安定しており、順調にヘズナルの人数を増やしていた筈だが——この有様だ。

「確かに——世の中は分かんものだな。」

ゲラルトは思わず苦笑する——次の瞬間。

《射出角度調整完了——ライカン02、発進準備！》



足元の昇降機エレベーターが駆動。

機体が甲板上にリフトアップされ、一瞬で視界が広がる。

艦が持つ耐気圧防護シールドによって減衰しているとはいえ、高高度特有のジェット気流が機体を振動させる。

…ああ、これだ。

この感覚が、やはりたまらない。

—— 戦場に身を投じる直前、中毒的なまでに血の騒ぐ、感覚が。

《ライカン02 —— 射出機カタパルトへ！》

ゲラルトは艦側面に突き出したカタパルトへ向かわせる。

正規空母のように甲板に埋設されたものとは違い、第2次世界大戦時の弾着観測水上機の離艦に使われていた棒状の半旋回式射出台。

そこに足を乗せると、離床台が艦の向きと同調—— 正面に向け旋回する。

《—— カタパルト、艦首方向に同調完了》

『発進準備完了です！…あの、ホントにシャルロットは寝かせたままで良いんですか？』

機体昇降機の床に安全ベルトで身体を繋いだ機付き整備士が無線で問いかける。

「構わん。長旅で疲れているのだ。…それにあの程度、俺一人でどうにかできねばならんだろうよ。」

そうでもしなければ先輩としての示しがつかん——言外に告げると、機付き整備士も『確かに』と笑ってみせた。

酸素マスクをしているから口元は見えないが、瞼の下が盛り上がっていたが故に、ゲラルトはそう思ったのだ。

そして眼前——戦場に向き直る。

《こちらCP、ライカン02発進せよ——》

『——武運を！』

——CPからの号令。そして機付き整備士の声援。

それと共に蒼電を奔らせ、機体がかたパルトから射出される……！

全身にかかる衝撃負荷。

身体が後ろに持つていかれる様な感覚と共にゲラルト——ヴァイムランナーは、

空に飛び出した……！

直後に鳴り響くミサイルアラート。

それと同時に新規ウインドウが網膜に投影される。

そこには、洋上から自治区を攻撃しながら、こちらに向けてミサイルを穿つ第1世代型IS《レヴィアタン》の姿。

「ク——」

漏れたのは、笑い声だった。

…条約違反モノを持ち出すとは—— 飢えた獣めいた壮絶な笑みを浮かべ、ゲラルトは突貫する。

眼前からは際限なく、穀物に群がるイナゴの如くミサイルが殺到する。それは通常兵器であれば、まごう事なき過剰<sup>オーバーキル</sup>投射だったであろう。

…相手が、通常兵器であつたのならば。

命中—— 次々とミサイルはヴァイムランナーに喰らいつく。

—— だが、その全てが緋色の粒子装<sup>パーティクルアーマー</sup>甲に阻まれ無意味に霧散する。

…そう、今レヴィアタンが挑んだのは通常兵器では無い。

—— <sup>戦場の支配者</sup>アライズである。

「なるほど、大した度胸の持ち主だ。」

背に携えていた大剣の如き装備が肩にかかる様にして展開される。

左背部兵装の大型射撃兵装—— VIII式120mm超<sup>レールガン</sup>電磁砲だった。

…コイルモーターが唸りを上げる。

加速器の電圧が増し、砲身に蒼の稲妻が迸る。

弾倉より120mm APFSDSが装填<sup>装弾筒付翼安定徹甲弾</sup>されて——

「ならば—— 応えねばなるまい……」

——蒼の雷電と共に、120mm弾が時速8600km<sup>ハ</sup>という超音速域で撃ち放たれる……!

……1秒の後、それはレヴィアタンの絶対防御と上部甲板装甲を食い破り、内部に到達する——!

その瞬間、ミサイル発射管内の弾薬庫を破壊したのか——内側から800メートル以上の火柱を立て、爆発する。

……しかし、ゲラルトはソレが眼中にない。

——次だ。

一ター喜一憂しては長引くだけだ。

だからゲラルトは努めて冷静に。

そして——狼の様に眉間に皺を寄せ口角を吊り上げた笑みを浮かべて。

「次は、どこだ——!」

——トキオ自治区目掛けて、降下していった……!

## #09 Engaged or a Waltz (交戦)

## 開始あるいは円舞曲)

日本帝国長崎県五島市浜町

男女群島・国連直轄領トキオ自治区

——同・アツパーウインデイ区

自治区北西に位置する、近未来的造形のビルが建ち並ぶ海沿いの区画。

そこは見渡す限り、無人の市街地。

そこは見渡す限り、混乱する部隊。

そこは見渡す限り、立ちこめる煙。

耳を傾けてみれば、鳴り響く爆音。

耳を傾けてみれば、甲高い噴進音。

——そこもまた、戦場と化していた。

不明機から繰り出されるレーザー。

それにより爆散する放置車両や陸橋。

空中からインフラ破壊を遂行すべく、不明 I S は対地攻撃を展開していた。

「——こちら O I ! 誰か…、応援を！」

それを、市街に派遣された教師部隊のラファールリヴァイヴ 6 機が応戦していた。

O I —— もりぐら・かなえ 森口鼎は事態の劣悪ぶりに歯軋りしながら救援を要請する。

周囲には大破したラファールリヴァイヴが複数機転がっており、眼前の不明 I S によって手酷くやられた事が伺える。

『よくも、私達の街を……！』

——森口の僚機が憎悪が入り混じった声で言う。

ソレら全ての音が入り混じり、さながら魔女の釜のような混沌に満ちた空間を形成していた。

…昨日まで人々がここを闊歩し、桃源郷を思わせるような絢爛豪華な水上都市であったと言われても、嘘のようにしか思えない。

——それほどにまで、状況は悪化していた。

まるで——廃墟と化した都市を、連想してしまえる程には。

…そして、不明 I S は、彼女らを嘲笑う様に砲撃を回避する。

『ちよこまかと……！』

空を裂くように舞う、灰の不明 I S。

それを追う様に飛翔する深緑の影。  
火薬と共に砲弾を穿つ、6名の女。

『死ねえ——ッ!!?』

『私達の街から出て行けエ!!?』

6機のISが、捕捉しきれない不明ISを高速で飛行しながら、50口径アサルトライフルを穿つ。

コンペート操縦者の雄叫びと50口径アサルトライフルの銃声が響く。  
それを森口が戒める様子はない。

——誰も彼もが、プライド等抜きにこの街を守ろうと必死なのだ。

∴しかし、あまりに相手が悪過ぎた。

——遊びは終わりだ。

そう言わんばかりに不明ISはそのずんぐりとした巨腕をこちらに向け——パ  
ルスキャノン<sup>ブレイク</sup>を、放つ∴!

「全機散開!」

森口の号令。

——その反応に遅れた教師部隊のラファールが一機、パルスに機体ごと上半身を  
吹き飛ばされ沈黙する。

「ッ——！」

それを見て、森口は歯を噛み締める。

機体の性能差が圧倒的過ぎる——。

自分達には、多少の機体性能の開きがあろうと自らの技量で埋め合わせるだけの自信はあった。

……しかし、これはどうか。

自機<sup>ラファール</sup>を凌駕する機動性。

コンペートの枠外の火力投射能力。

加えて通常の絶対防御を上回るエネルギーシールド。

これではコンペート、ISというより——まるで、<sup>アライズ</sup>化け物だ。

——ゾクリと。

一瞬悪寒がした。

……再構築戦争時、コロニア軍として参戦した森口は、その圧倒的な戦闘力を、身をもつて知っていた。

世界最強と謳われていた兵器が一瞬にして斬り伏せられ、全長20キロもある水上都市艦<sup>コロニア</sup>が30秒もかからずに制圧——否、事実上殲滅される。

陥落するコロニアから別のコロニアに撤退する最中に追撃され、苦楽を共にした仲間



達が戦死していく。

——死にたくない、殺さないで！

無様に懇願した。恥や尊厳よりも命を優先した。だってまだ生きていたい。

" ——何を今更。殺しているんだ、殺されもするだろう。 "

それでも殺しに来る敵機アライズに死の寸前まで追い込まれ発狂する。

意味のある言葉など忘れ、死にたくない一心で逃げ回る。

その最中にV・I・C・6とコロニア間の講和会議により停戦命令が出されなければ、あと一步のところまで殺されていた記憶。

——あの時肌で感じ脳裏に刻まれた恐怖トラウマが、眼前の不明ISと重なって見えた。

(…だけど、だけでももう逃げたくない！)

それを振り払う様に、森口は首を振る。

マニピュレーターに力が籠る。

(…私は良い。だけど、せめて ——)

部隊間データーリンクを見る。

12機中 —— 5機が生き残っている。

…だから、

(例え、差し違えたとしても —— あの四人だけでも…！)

…だから！

歯を食い縛り、森口は眼前の不明 I S を再び睨みつけ、縋る様に願う。

(だから神様——今度こそ、私に償いの機会を下さい……！)

——そう願う。強く。

…応える様に、ハイパーセンサーが新たな識別不明機を認知する。

「ツ、新手……！」

それは眼前の I S も認知したらしく、首を振り索敵する素振りを見せた。

——刹那。

ゴオツ、という大気を割く爆音と。

ガオン、という金属がひしやげる音と。

バチリ、と火花の散る音がした。

それはマツハ<sup>時速4200km</sup>3.5で地上に自由落下したアライズ——【ヴァイムランナー】の

脚が不明 I S を踏みつけた音であり。

その勢いのまま、ヴァイムランナーは不明 I S を地面に叩き踏みつけた——！

砕け散るアスファルト。

変形する機体フレーム。

叩きつけられ左腕がひしやげた不明 I S。

それだけでは足りぬと、ヴァイムランナーは手慣れた動きでISの右腕の付け根を踏み貫き根元からへし折る……！

更にそこへダメ出しと言わんばかりに、ヴァイムランナーは右腕に持つ———チェーンソーを連想させる形状の大型レーザーブレードを溶断作業の如く敵機体フレームに突き立てた……！

…大気をプラズマ化させる自由電子レーザーで形成された刃がISの中枢部コアユニットを焼き切り、完全停止させる。

———会敵して、10秒足らず。

あれだけ教師部隊を蹂躪していた不明ISを制圧するのに要した時間はそれだけだった。

『…どうにか、無事の様だな。』

ヴァイムランナーの操縦者ヘズナルが無線越しに声をかける。

しかし森口は今起きた一連の、圧倒的な光景を脳が処理し切れず、啞然と聞き流すしか出来ず、その声に反応し我に帰るのに時間を要した。

『…よく生き残った。防波堤港湾設備は既に解放した。貴公らはそこへ迎え。俺は残り片付ける。』

矢継ぎ早に告げられる情報の数々。

それに森口は反射的に――

「ま、待って！ 私達も――」

機体の状況を気にせず叫んでしまった。

『――濟まんがその損傷具合では、守り切れん。残ってくれ。』

申し訳無さそうな声――。

それで森口はハツとして部隊全機の機体状況ウィンドウを開く。

∴平均シールドエネルギー残量20%

∴平均推進剤残量15%

∴平均残弾30%

――確かに、これでは足手纏いになるだけだ。

それを嫌でも理解させられる。

∴否、12機編成の部隊を半壊させても倒せず圧倒された存在を、たった1機で瞬殺

してみせた存在。

そんな機体に、自分達がついて行けるはずがないのは、少しでも考えれば分かる話

だった。

『…だが、貴公らの気持ちだけでも頂こう。』

ヘズナルはそう告げる。



粒子装甲：100%

複合装甲：100%

機体骨格：異常なし

アーカイブ

所属先：IS学園警備部

日欧合同開発実験団《ライカンス》試験隊

帰属元：日本帝国陸上自衛隊

操縦者：八雲ナガトIIアウグスト

製造元：巖崎重工工業株式会社

アーカイブ

腕部兵装右：GAU-8EIIガトリングライフル

81式III型対戦車装甲穿孔槍

腕部兵装左：ROD/LB-1レーザーバズーカ

81式III型穿孔射突劍

格納兵装右：03式II型近接長刀

格納兵装左：03式II型近接長刀

肩部兵装右：16式斬艦刀

肩部兵装左：16式斬艦刀

兵装担架右：09式突撃砲

兵装担架左：09式突撃砲

背部兵装右：GDF-001 35mm連装機関砲

背部兵装左：10式120mm戦車砲

拡張領域内：IHI-F5-1T/OV付属重タキオンエンジン

IHI-F5-1T重タキオンエンジン

IHI-F2-2T中タキオンエンジン

IHI-F2-2T中タキオンエンジン

IHI-F2-2T中タキオンエンジン

IHI-F2-2T中タキオンエンジン

プラズマファイナル  
GBE-PFD-1発生器

《試製22式機動挺身装備【<sup>ライカ</sup>雷火】》

1-1装甲耐久1-1

粒子装甲：100%

複合装甲：100%

機体骨格：異常なし

アーアーカイブー

所属先：IS学園1年1組

日欧合同開発実験団《ライカンス》試験隊

帰属元：日本帝国陸上自衛隊

操縦者：篠ノ之箒

製造元：日照ライムントヴァルト社

ー兵装ー

腕部兵装右：NR―II X式複合斬機刀《ムラクモ叢雲》

腕部兵装左：NR―II X式複合斬機刀《ムラクモ叢雲》

肩部兵装右：RR／CG―8四連装チエインガン

肩部兵装左：RR／CG―8四連装チエインガン

追加主翼右：NR―VIII式レーザー照射基

AIM―5空対空誘導弾

追加主翼左：NR―VIII式レーザー照射基

AIM―5空対空誘導弾

拡張領域内：NR―F1―7T中タキオンエンジン



NR | F1 | 2T 軽タキオンエンジン  
 NR | F1 | 2T 軽タキオンエンジン  
 NR | F1 | 2T 軽タキオンエンジン

—— 網膜投影に映し出された機体情報を確認しながら、ナガトはトキオ自治区の地図を展開し、それを見やる。

自治区北部および西部を中心に敵は侵攻しており、特に激しい戦闘が起きているのが西部のアップパーウインディ区と、その反対側に位置する北部東端のマリンゲート区。

そして我らがIS学園の所在するセントラル区。

—— アップパーウインディ区は高層ビルが林立する地区である為、敵ISが制圧目的でビルごと薙ぎ払った結果極めて大きな被害が出ていた。

∴ 敵としては、アップパーウインディ区のビル街に敵が陣取る前に潰しているつもりなのだろう。

—— 次に大規模な戦闘力が起きているマリンゲート区は、その名の通りトキオ自

治区における陸路と海路の玄関口。

特に日本帝国領九州本土と繋がる、全長180キロメートルもの西海道連絡大橋が掛かっており、また各地区に高速道路を合流・分岐させる南風ジャンクションが所在する、交通や物流の要所でもある。

…ここを潰せば、日本帝国本土との連絡を遮断できる他、陸路での応援部隊到着も不可能となる。

——最後にセントラル区は、自治区マストタワー役所やI S学園、無人艦基地が置かれた行政、教育、防衛の中心地であり、散発的だが大量の戦闘が発生している。

元々、区役所防衛局無人システム部隊や学園警備部E O S部隊で固められていたそこは他の地区と比べれば堅牢であり、もう少し持ち堪えられるだろう。

…これらの情報を基に、ナガトは思案する。

どこに向かうべきか——を。

…今一番増援を欲しているのは、間違いなく劣勢の西部・アッパーウィンディ区。

確かにアライズの制圧力を用いれば戦局を拮抗させられるし、瓦解した防衛線再構築も可能だろう。

しかし、それはアッパーウィンディ区以東に敵が浸透していなければの話。

現状はアッパーウィンディ区どころかセントラル区やマリニングート区にまで浸透さ

れている。

：では、セントラル区からアツパーウインディ区まで押し上げるか？

確かに、行政府自体は維持できるし西部に防衛線が再構築可能だが論外だ。

そうした結果、西部の防衛線に対応するだけでなく東部のマリリングート区に展開する敵部隊まで対応しなければならず、結果として東と西から挟撃される二正面作戦を展開しなければならぬ。

歴史上二正面作戦を成し遂げたのは第2次世界大戦時のドイツ第3帝国だが、第4次非核大戦にてそれで歴史的な大敗を喫したのもドイツ第3帝国だ。故に現在では二正面作戦は愚の骨頂とされている。

：そうなると、消去法でマリリングート区の防衛に行き着く。

ここは日本本土とを繋ぐ西海道連絡大橋が所在しており、ここを潰されると応援を遮断される。つまりは断たれてはならないアキレス腱。

ここさえ抑えれば——西部に全力を注げる為、現在制圧下にある地域の奪還も順次可能となる。

本土からの応援部隊も加われば尚の事。

その為にも、まずは——

「——  
ライカン03  
箒、まずはマリリングート区を制圧するぞ！」

——裂帛の号令。

普段の気の良い教官めいたソレとは違う、冷徹で機械めいて居ながらも熱意を孕んだ、戦士の声。

それで箒に指示を飛ばす。

『ッ、り、了解……！』

ふと、箒は歯切れ悪く解答する。

いつもキビキビと応える箒にしては珍しい。

それに疑問を抱きナガトは一瞬思考し——ああ、と合点がいった。

「———そういえば貴様、実戦は初めてだったな。」

箒はVRシミュレーション訓練や実機演習の経験こそあれど、実際に殺し合う実戦の経験は皆無だった。

———つまり今回が、初陣という事になる。

故に、緊張しているのだ。

「危険を感じれば、俺を盾にしろ。」

『え？あ、はい！』

そのための重量型機だ———と、箒の緊張をほぐすようにナガトは告げる。

実際、クラス代表決定戦の余興で見せつけた様に、ナガトの日方風は箒の雷火より装

甲防御力が高く、並大抵の攻撃ではビクともしない。

だからこそ、高機動格闘戦に長けた雷火を差し置き、突入時に最も被弾しやすい最前衛を努めている。

試作機という未熟な機体と、学生という未熟な乗り手<sup>ヘズナル</sup>。

それを護る防壁となり、敵を真つ先に叩き、後続の突入を支援するのが日方風の役割だ。

「…ま、いずれ避けられんのだ——」

——ナガトは口角を吊り上げる。

敵に喰らいつく狼のように、目をギラつかせて。

「——初体験と行こうじゃないか。」

箒<sup>仔夫</sup>を率いて、戦場へと跳躍した…！



—— 同時刻

—— 同・セントラル区

—— I S 学園第2アリーナ

白式目掛けて放たれた高速イオン砲。

——しかしそれは、

『…奇襲とは。義賊には、誇りも無いのですね——無礼者。』

突如——ドスの効いた声と共に放たれる蒼の閃光。

レーザーがパルスキャノンと衝突し、大気を震わせる大轟音と共に拡散する。

——アリーナ観客席を覆う、傘のような天井。

そこに、ブルーティエアーズに搭乗し、スターライトMk.Ⅲを構えたセシリアが。

「オルコット…?!」

一夏は驚いたように目を剥き、思わぬ援軍の到着に歓喜する。

そしてスターライトMk.Ⅲに加え、カデユケウスレーザーオービットが展開され——

——I6基のオービットから放たれる光の雨が、アリーナを埋め尽した…!

クラス代表決定戦時同様、アリーナの地面を蜂の巣にする。

…そのレーザーを一斉射するも、不明I.S.には届かない。

否、着弾してはいる——しかし、不明I.S.が展開するエネルギーシールドが、レーザーを蒸散させてしまっているのだ。

だがレーザーの衝撃までは緩和出来ていないのか、不明I.S.はその場に釘付けとなっている。

——好機。

そうセシリアは考え、白式と甲龍、そしてアリーナ管制室を繋ぐ通信回線を開く。

『そのまま聴いてください！敵I S内に生体反応は有りません！無人機です!!』

砲撃しながら、セシリアは告げる。

「無人機だつて?!そんな馬鹿な……!」

その事実に一夏は再び驚愕する。

無人駆動のI Sなど聞いた事がない。

…確かに、パイロットが空中で意識を失うなどの緊急時に備えた《E・A・F・S》非常用自律航空システム

という、指定座標まで自動で機体とヴァルキリーパイロットを送り届けるシステムがある為、自律シ

ステムが無いわけではない。

しかし、完全無人の上に、無人のまま戦闘を展開する規模の自律駆動システムは、現

状知る限りは開発されていない——その筈だった。

だがしかし、言われてみれば——動きはずっとワンパターンで、同じ軌道を繰り返

返していた。

『ちよつと、いくら動きが単調だからって、いい加減な事言つてんじゃ無いわよ……!』

鈴も信じかねる様に言う。

『——いいえ。ブルーティアーズにはハイパーセンサーの他に、赤外線センサー、動

体流動センサー、生体センサーが搭載されています。それをもってしても、内部に生体反応は確認出来ませんでした。』

しかしそれに、セシリアは無慈悲に事実を告げる。

——狙撃戦ドクトリンに特化したイギリス機であるブルーティアーズは、多種多様なセンサーを搭載しており、全身装甲内の生体反応とその正確な数、位置を特定する事など朝飯前だ。

例えジャミング等の妨害をされても、ノイズめいた微弱なレベルであれ、生体反応を拾う事は可能な程の高精度高性能品。

…それをもってしても、特定出来ない。

つまりは——無人機であるという結論にしか辿り着かない。

セシリアはそう言っているのだ。

『…また、敵IISの放つエネルギーシールドはコンペートの絶対防御を凌駕する出力です。アライズ並みの火力で無ければ傷ひとつつけられません。』

セシリアの言葉通り、レーザーライフルとレーザーオービット、加えてミサイルオービットの一斉射を先程から繰り返しているが、全てが悉くエネルギーシールドによつて霧散している。

それでも、セシリアは攻撃を繰り返す。



——その場に、釘付けにする為に。

『——現状では、タキオンブレードである織斑さんの《雪片式型》が唯一対抗策たり得る手段でしょう。』

いきなり話の矛先をこちらに向けられ、一夏は困惑する。

「な……お、俺が?!」

『はい。』

「無理だ！ シールドエネルギーの残量的に、零落白夜はあと40秒だって展開出来ない！」

一夏が叫ぶ。

鈴に手酷くやられた白式は、シールドエネルギーの残量が既に30%を切っていた。

自身を執拗に狙っていたので、斬り込む事はできても、補給をしなければまともに運用すら叶わない。

——せめて補給させてくれ。

言外に一夏は訴える。

『——補給は不可能なんです。アリーナ各所でCPUウイルスを検出。バグ取りもしていますが依然、機体汚染の恐れがありますので、補給は許可出来ません。』

「そんな——」

『現在、警備部支援部隊が向かっています。ですのでお二人とも、今は待機していて下さい。…凰さん、最悪シールドエネルギーを織斑さんに回す事になる可能性が有りますので、準備しておいて下さい。』

『…何ソレ？一夏が頼みの綱だつての？』

淡々としたセシリアの言葉——それに、苛立ちを覚えた口調で鈴が嘖み付く。

それに、困つたようにセシリアは語りかける。

『凰さん、今は私情を抑えて下さいまし。織斑さんの機体無しでは不可能なんです。ですから——』

『ざっけんじゃないわよ！あんなの、アタシ一人でやれるわ!!』

セシリアの声を振り払う様に鈴がスラストを蒸し、敵ISに突貫する。

——一夏から納得のいく対応をして貰つておらず、それ故に苛立っていた鈴にとって、一夏を頼るといふのは、耐えがたい事態だった。

冷静に考えれば、そんな判断は誤りだ。

しかし鈴は——冷静さを欠き、私情を優先した。

「鈴ッ！」

『ッ、凰さん！今は待機命令中で——』

一夏の声と、独断先行を戒めるセシリアの声。

それに鈴は羅刹の如く顔を歪めて、

『——アタシに命令しないで!!』

——叫ぶ。そして、

『てえああああ——ッ!!』

レーザーの弾幕の中を掻い潜り、鈴が双天牙月を敵ISに振るう。

しかし——それはエネルギーシールドに弾かれる。

『ッ、まだまだア——!』

再び斬りかかる。

だが眼前のエネルギーシールドが、部分的に解除される。

——一瞬の後。

敵ISの巨大な右腕が甲龍のコックピットブロックを掴み、握り締める……!

『がッ………!』

生じた衝撃がコックピットを激しく揺さ振る。

衝撃で弾け飛んだ内壁の破片が飛び込んで来て鈴のこめかみを切った。

コンペートとは比較にならない握力で締め上げられ、最も頑丈なハズのコックピットブロックが軋む音を立てている。

——巨大な万力に、潰される様な錯覚を覚えた。

それで鈴を支配していた感情は霧散した。

だが冷静さが戻ることは無かった。

—— 激情が、恐怖に転じたただけなのだから。

敵 I S の中指によってコックピットブロックの上にある頭部がその締め付けに屈し、遂に機能を停止する。

見るからに頑丈で事実相当な重防御で知られたそれはいまやひしゃげた一斗缶のごときありさまを呈し、多数の複眼から成るカメラ・アイを巻き込んでそのすべてがショートし、あるいはカメラアイのレンズが飛散し—— 網膜に映し出されていた外部情報の大半が即時消滅した。

メインセンサーを失ったことで甲龍が情報提供を遮断したのだ。

それは、鈴の士気<sup>モラル</sup>を崩壊させる引き金には充分だった。

突如として視界のすべてが砂嵐で覆われ、失明したかのごとき錯覚を受けた鈴は、正気を疑わせるほどの悲鳴をあげた。

もはや見栄も外聞も尊厳もない。

もはや一夏やセリアからの無線も耳に届かない。

—— ともに抵抗する事すら忘れて、死にたく無いとすすり泣く。

だが、敵 I S はそんな彼女の意思などお構いなく、ただひたすらに締め上げる力を強

めていった…！

《オルコット！突入支援を——！》

鈴には届いていない中、無線の向こうで一夏はそう叫んだ。



—— 同時刻

—— 同・学園中庭

芝生の中に古代ギリシャをイメージしたオブジェや建築物が立ち並ぶ学園中庭エリア。  
ア。

そこでは現在、警備部EOS部隊と不明ISが交戦していた。

「——くそが。やっぱ焼石に水かよ…！」

A—<sup>03</sup>式打鉄壱型丙  
CIS／EOSに乗り込み右腕に持つMk. 8 | 90mm速射砲で敵機に応戦していた高木は思わず悪態を吐く。

アリーナに突入する支援部隊を護衛するべく彼自身も打鉄壱型丙で出撃。

—— 護衛対象

ターンスウル

EOS12機

ブルーウエーブ

EOS6機

74式改戦車8輜

護衛部隊

A—CIS／EOS6機

ターンスウル

EOS18機

それら臨時編成隊を率いて、護衛対象の前方を行き、多目的防災署から第2アリーナまでの最短ルートである中庭を突っ切ろうとした。

そこでアリーナを襲撃していたものとは別の敵不明ISと遭遇———現在に至っている。

幸い生徒は地下シエルターに退避済みであり、兵器使用自由の命令は降りていた。

寄せ集めではあるが———戦闘実力において冠絶する敵を相手にした彼らは密集した中庭のオブジェや付近の校舎、雑木林を即席の防御陣地として使用し、素人目にも明らかなほど巧みな防衛戦を展開している。

高密度の訓練を施されたことで練りあげられた高い士気が、自己犠牲に近い彼らの抵抗を根本で支え続けていた。

だが、それとても所詮は凶暴な雀蜂を前にした蜜蜂の群れに等しい。

——否。現実にはそれ以上の差があった。

…嘲笑うように、不明 I S が肩部レーザーキャノンを放つ。

——それが I 機のターンスoulの群れが浴びせかける三十ミリ砲弾が、四方八方から雨霰と不明 I S に

叩きつけられる。

しかし、その機体全周を覆うエネルギーシールドを突き破るには到らない。

対抗するにはアライズ級の火力——大口径大質量実体弾あるいはエネルギー兵器の類が警備部隊にあれば、かなわぬまでも敵不明 I S を相手に一矢報いることができるだろう。

それらの兵装であるならば、あのエネルギーシールドを突破したあとにもある程度の攻撃力を残存させることが可能だからだ。

しかし、それでは後知恵にもとづく「たれば」の領域を出ない。

警備部隊の隊員たちはそれが匹夫の勇であると知りながら、それでもなお蠅螂の斧に等しい武器を携えて目の前の脅威に立ち向かう。

——アリーナには、今護衛している支援部隊を必要としている子供達がいるからだ。

それも、到着が長引けば長引く程、死ぬ可能性が上がって行く者達だ。

だから高木は最短ルートを選択した。

だがそれは裏目に出てしまい――

「くそつたれ――！」

――90mm速射砲を穿ちながら、高木は学園の地図を網膜投影で開く。

幸い、現在護衛対象は後方で待機を命じている為無傷だ。

そして犠牲を払ってまでアリーナに向かうルートを強行突破させる必要はない。

故に、ルート変更の為に地図を展開したのだ。

「セキユリテイリダー  
警備部隊隊長から支援部隊指揮官！」

――無線を開き、高木は支援部隊に怒号を放つ。

網膜には、アリーナに繋がる物質搬入用地下トンネルが表示されている。

中庭のルートより遥かに遠回り――だが、高木たち護衛担当部隊が不明ISを釘

付けにしている限り、通る事は可能だ。

「――ルート変更！アリーナ搬入用地下トンネルを通れ！」

『了解、支援部隊<sup>バックプロウ</sup>全機、移動再開します。――ご武運を……！』

高木の命令を受け入れ――支援部隊の指揮官は歯を噛み締める様な声でそう告

げ、通信を終える。

……正直な話。それに比べられるだけの余裕は高木に無かった。



不明 I S が自治区と学園に突入してから無線で聞き取れた限り、すでに 10 機以上の E O S が撃破されていた。

だが、不明 I S の足を止めることすらできていない。

不明 I S が一方的な破壊と殺戮とを文字どおり楽しんでいるかの様に、いまだこの位置で留まっている理由は分からない。

——同時に、市街地の方でも大規模な爆発が連鎖し、300メートルはくだらないキノコ雲が立ち込める。

同じ様に、市街地では倒壊する建物を避け、巻き起こる炎に追われて逃げまどう罪なき人々を守るべく警備部の別働隊が戦っている。

そのうちのどれだけが友人知人あるいは肉親を傷つけられ永遠の別れを強制されたのか、いまの段階では定かでない。

わかっているのは、それが決して低い比率でないことだけであった。それだけは確かであった。

そんな彼らを尻目に轟然と仁王立ちする不明 I S の姿。

それは、まさに神話の御世から降臨した破壊神そのものの姿であった。

高木の 90 m m 速射砲と部下達の 30 m m 機関砲やミサイルが放たれるが、依然として全てエネルギーシールドにより無力化され、帰す刀で腕部。パルスキャノンと肩部レ-

ザーキャノンを撃ち込まれる。

それらの直撃を受けた味方のターンソウルが更に2機爆散する。

——まるで自身はお前達の上位存在であると誇示しているかのように、不明ISは高木たちを蹂躪する。

∴しかし世の中には、上には上がいるというもの。

——北東より、蒼雷の奔流が走る。

落雷が直撃したかと錯覚する爆音と共に、敵不明ISのエネルギーシールドが大きく減衰する。

∴それはプラズマ砲の類が敵不明ISに叩きつけられたのだと理解するのと、もう一度プラズマ砲が弾着したのは同時だった。

∴それで、敵不明ISのエネルギーシールドは機能を停止し、丸裸にされる。

着弾の衝撃で敵不明ISは体勢を崩し——それを見逃す高木ではなかった。

「全機ツ！一斉射——ツ!!」

高木の打鉄壱型丙が90mm速射砲を穿つ——!

それは、敵ISのコアブロックを喰い破り、機体中枢部に致命的な損傷を齎す……!

それを皮切りにターンソウル達が30mm機関砲を放ち、敵不明ISを蜂の巣にしていく。

先程までエネルギーシールドに阻まれていた砲弾らは、その鬱憤を晴らすかの様に敵不明 I S の表層を、四肢接合部を、余すところ無く吹き飛ばしていく……!

それら攻撃をモロに受けた不明 I S は、不時着と同時に土煙を立てて脚部フレームがへし折れる。

——そこを、三方向から突貫した打鉄壺型丙が 03 式長刀 II 型でそれぞれすれ違  
い様に斬り伏せる……!

それで、両腕と胴体が泣き別れ——だがそれでも、悪あがきに肩部レーザーキャ  
ノンにエネルギーが充填されて……!

「——喰らつとけ。ブサイク人形……!」

それを黙らせるかのように、高木の 90 m m 速射砲が二発叩き込まれた——!

……以って、敵不明 I S は沈黙した。

——先の横槍から僅か 5 秒。

それで戦闘の優劣は反転し、高木たちに勝利を齎した。

『——お邪魔だったかしら?』

ふと、北西より 1 機のアライズが飛来しながら無線で声をかけて来る。

その声の主は国家安全保障局暗部部長にして学園生徒会長——更織楯無だった。

彼女の機体——19 式【海月】<sup>カイゲツ</sup>は左腕に 127 m m プラズマ砲を下げっており、先

程のプラズマ砲は彼女のものだと理解する。

「——いえ、ナイスタイミングです。」

高木は90mm速射砲のマガジンを交換しながら応える。

「…学園内の敵機はアリーナのやつだけです。」

『了解——やはり、市街地のインフラ破壊が目的のようね。』

楯無が事前に聞いていた情報を思い返しながら口にする。

飛来した12機のうち、2機はIS学園。

その他10機は市街地に展開していた。

そして齎された情報が正しければ、西部アツパーウインディ区にはユーロ軍のアライズが。北東部にはナガトと箒の2機が布陣している筈だった。

『——私は市街地の敵機を対処します。アリーナの敵機はお願いします。』

『了解。』

互いに簡潔に交信し、そして自らが赴くべき場所に向けて移動する。

——事態は急を要する。

その事実だけは、変わらないのだから。

『——こちら警備部南風ジャンクシオン守備隊——』

ふと、市街地で新たな戦闘が始まった事を告げる無線がこだました。



—— 同時刻

—— 同・マリンゲート区

—— 南風ジャンクション

トキオ自治区の全高速道路と、九州本土と自治区を繋ぐ西海道連絡大橋を結ぶ、巨大な立体式分岐合流地。

平面交差を排し、立体交差化する事で速度を必要以上に落とさず円滑でありながら安全な分岐・合流を実現し、接続された別の高速道路へ進むことに特化したそこもまた、戦場となっていた。

学園警備部隊から派遣された連結型装甲戦闘車輛が複数台ジャンクションの高架道路に配置されている。

荷台には、鎌首を上げるビーム兵器の照射アンテナが備わっており、その照準は——  
—— 眼前より飛来する、1機の敵不明ISに向けていた。

『目標、前方不明人型航空兵器——撃ッ！』

指揮官の号令——それと同時に、高架道路に展開していた戦闘車輛から光の焦点

が放たれる。

空に向けて放たれ焼かれた空中分子がプラズマ化し、弾けると同時にカーテン状に落雷を引き起こし、不明 I S のエネルギーシールドを引き剥がす……！

空中で連鎖する雷電の炸裂。

それは、地上より空中の兵器を穿つことに特化した戦闘車輛——17式自走レ

ザー高射砲。その改良型<sup>アップデット</sup>モデルだ。

日本帝国で開発された同車は試験の為にトキオ自治区に訪れており、この戦闘に巻き込まれた。

しかし逆を言えば、実戦試験の機会が得られたという事——！

レーザー高射砲はそれに歓喜するかのように、光の矢を次々と放つ……！

——正確無比に着弾する光の矢。

——出鱈目に拡散するプラズマ。

それらは敵不明 I S のエネルギーシールドを削ぎ落としていく……！

想定以上の攻撃に、不明 I S は思わず回避行動に移行し——その身を、背後から蒼<sup>レ</sup>の閃光<sup>ザ</sup>が貫いた……！

『ワンキル!』

機影  
箒からの撃墜宣言と共に市街地上空に駆け上がるふたつの機影。

——ナガトの日方風と、箒の雷火だ。

そして今のレーザーは、日方風の左腕に搭載されたRカoDノイ/LブBス—レーザーバズーカから放たれたものだった。

「流石、狙撃精度自慢のイギリス製——存外、当たるものだな。」

ナガトなりの褒め言葉。

正直エネルギー兵器は安定性に欠く為個人的には好まないが、実戦ではそうも言っていられない。

それを証明するように—— 2人の眼前には、新たに1機の不明ISが現れて。

「ハッ——」

ナガトは思わず笑みを溢す。

健気に抗う姿勢の敵IS。

通常であれば、アライズが投入されただけで逃げ出す輩が最近は大多数だということに。

（——剛毅な事だ。）

『接敵まであと5秒……!』

箒の報告を耳にしながら笑みを浮かべ、ナガトは日方風のスラストを蒸す。

機体が加速し、身体が後ろに持つていかれるのを堪えて、格納兵装の03式近接長刀Ⅱ型を展開し、副腕に装備。

敵ⅠSもまた巨大な腕を展開し——掌から、レーザーブレードが形成される。

「面白い——!」

——既に地上は遠く、両者の激突は際限なく高度を上げていく。

反重力翼により空を舞う両者は足場など必要とせず、ビルの壁面を蹴るだけで空を駆け抜ける……!

不明ⅠSは巨腕を突き出し、レーザーブレードが日方風に迫る。

——それを、ナガトは03式近接長刀Ⅱ型で受け流す……!

飛び散る火花。

慣性に従い中程まで突き出された巨腕。

——不明ⅠSの表皮を長刀の刃が舐め上げて、非装甲部関節部に達した瞬間。

「ふッ——!」

刀の峰を下から叩き上げるように、刀の柄を上から叩き下ろすように——テコの原理を応用し、刃は不明ⅠSの腕を切断する……!



そしてナガトは速度を落とさず——長刀を手放し、駆け抜ける。

…それらは全てはすれ違い様の一瞬。

——そのまま日方風は敵ISの背後に回るなり、クイックターン瞬時旋回。

「——ふんッ!!」

——左腕の81式III型穿孔射突剣バイルバンカーを纏った拳をもつて、背後から殴り打つ。

撃ち出されたタングステン合金の鉄塊が、凄まじい装甲侵徹力をもつて、敵ISを粉砕する…!!

機体フレームは上半身から上の原型が失われ、臓物の代わりに内装パーツ群が紙吹雪の様に飛び散る——それを尻目に、ナガトは日方風を一気に急上昇させる。

——同時に響く、レーザー照射警報アラート。

餌に釣られた魚の様に、先のものとは別の敵ISがナガト目掛けてレーザーを放つ。迫り来る4つの光芒。

その全てがレーザー光。

レーザーキャノンは肩部に1つずつの1機あたり2門。

ならば数は2機か。

そう考えながら、ナガトは多段横深瞬時加速で機体を左右に——超音速域で振り、ビルをすら溶断する光速域レールサードの矢を躲す。

無論こんな軌道を取れば、狙い撃ちされるのは必然というもの。  
それを解らぬナガトではない。

—— 証明する様に、敵 I S が付近の敵反応を検知する。

ナガトの日方風とは反対側の自動車道の向こう。

—— 距離 2000メートル。

そこ突撃して来る —— 赤い稲妻 雷火が迫り来る。

『気付かれた……！』

思わず箒は毒付く。

しかし軌道は変えず、むしろ前に雷火を突っ込ませる……！

—— 距離 1500メートル。

しかし、敵 I S が雷火を阻止できる限界距離を超えている事は明白だ。

レーザー兵器はその特性上、大火力であればあるほど、エネルギーの再充填と砲身の冷却に多大な時間を要する為に連射には向いていない。

—— 距離 1000メートル。

更に腕のパルスキャノンも確かに強力だが、レーザーと比較して拡散しやすく威力の減衰を招くという欠点が目立つ。

加えて、この機体は絶対防御を上回るエネルギーシールドを常時展開している。

更にエネルギー兵器で固めていることが災いし——5秒間、攻勢無防備状態となってしまうのだ。

——距離500メートル。

そして、5秒もあれば、それで充分。

雷火の脚をもつてすれば、その間に駆け抜けるなど、造作も無い……！

——距離100メートル。

つまりナガトは、箒の雷火が敵ISの付近に至るまでの時間稼ぎとして、ワザと狙われる様な挙動を取る——囿役を務めただけなのだ。

その結論に至ったのか、敵ISはエネルギーシールドの出力を減らしてまでそのリソースを腕部パルスキャノンに注ぎ込む。

手甲部に埋め込まれた砲口に、光芒が満ちる。

——距離50メートル。

至近距離からの、パルスキャノンが撃ち込まれる。

それはレーザーと等しい光速の砲弾となり、雷火に向けて襲い掛かり——そして、

『はっ——』。

——笑う。

箒は笑う。

自信と自戒。

衝撃と歓喜。

二律相反。けして混じり合わない感情を殺意がぐちゃぐちゃに混ぜ溶かした感情。垢抜けない、だがしかし獣のようにどうしようもなく歪んだ口と、射殺すように収縮した瞳孔で彩られた顔を浮かべそして――

『はあッ!!?』

箒が手にした叢雲ムラクモのイオンブレードが奔る。

自分を撃ち抜こうとするパルスキャノン、彼女は演舞を舞うように斬り伏せる。

…パルスキャノンが標的に向かって放たれたミサイルならば。

彼女の剣はソレを叩き墮とす迎撃ミサイルだった。

敵機体との距離を一気に詰める。

悪あがきに敵I Sは、痲癩を起こした子供の様に巨腕を振る。

『黙って――』

イオンブレードが迫る。

それは振るわれた巨腕を、熱したナイフでバターを切る様に両断し、

『失せろ!』

—— 緋色の粒子を纏った渾身の一閃が、敵機の胸部を断絶する！  
爆炎を上げ、崩壊する上半身。

その後から、敵機の僚機が箒を睨みながら、再装填の終わったパルスキャノンに向けて——

「—— おい貴様、俺を忘れてくれるな。」

—— ナガトが言い、思わず敵機が振り返る。

巨体が飛ぶ。

ざっと4000メートル離れていた箒のそれは0.1秒もの速さで突貫してくる——

——  
それに気付いた敵ISは、箒には目もくれず、ナガト目掛けてパルスキャノンを穿つ

……

放たれた琥珀色の光は、高速で飛来する鉄塊を射抜いていく。

機関銃めいた掃射。一撃一撃が秘めた威力は容易く現用兵器を無力化し得るだろう。

家屋を数棟消し飛ばすには充分な火力を秘めたそれは、しかし。

「—— 終いか？」

日方風には、何ら効果を持たなかった。

そして—— 激突する脚部と胸部。

パルスキャノンを受けた日方風は一切減速せず、そのまま敵 I S に強烈な飛び蹴りを見舞う。

その衝撃で敵 I S の胸部コアブロックが火花と共に嫌な音を立ててへこむ。だが終わらない。

地に落ちるより前、そのまま蹴りを打ち込んだ胸部を足場に日方風は再び飛び上がり。

「——セッ！」

サイドブラスターを全力で蒸した瞬間旋回。

そしてそのまま、旋回で得た加速エネルギーを帯びた45トンもの右脚が、渾身の回し蹴りを放つ——！

それをモロに受けた敵 I S は、そのまま吹き飛ばされ、倉庫の外壁に叩きつけられる。砕け散るフレーム。

割れて飛散するコンクリート。

胸部コアが破壊され、左腕は機能を停止。

右腕は付け根から脱落し地面に転がっている。

肩部レーザーキャノンはエネルギー供給ラインが断線し、ただの飾りに成り果てた。

脚部フレームと上半身の接合部が致命的に破損し、自立歩行すら不能。

敵 I S は、5 秒にも満たない会敵時間で無力化されたのだ。

——ただ二発の蹴りだけで、である。

…その、信じがたい現実を前にして今一度、敵 I S は日方風を睨みつけた。  
ノイズが走り、乱れる視界の中。

——鉄の巨人日方風は左腕に持つレーザーバズーカをこちらに向けていて。

刹那、光芒と共に蒼の閃光が敵 I S の世界を刈り取った…！

『——ツ！ やつと繋がった！ こちら I S 学園警備部指揮官代行・相川です。全部隊  
に伝達！ 襲撃機体は I S 型の U A V 無人航空機 である事が判明！ 敵機体残数 6 機——！』

# #10 Ghost and Wolf (機械と狼) I

日本帝国長崎県五島市浜町

男女群島・国連直轄領トキオ自治区

——同・セントラル区

区役所やI S学園が所在するセントラル区では、戦闘が激化していた。

特に西部では、隣接するアツパーウインディ区、ウインディ区での破壊活動を終えた無人I Sが雪崩れ込み、辛うじて維持されていた防衛網を食い破って行く。

：5機の暴虐の塊が、進軍する。

焼けたアスファルトの放射熱で揺らぐ大気の向こうに、陣形を組む戦車部隊が見えた。

無人I Sはそれに向かって6割程度の機動で正面突破をかける。

——対するは、区役所防衛局無人戦闘車両群。

防衛局陸戦隊の主力戦車〔M551A1軽戦車〕から成る戦車部隊が展開していた。



旧コロニア軍時代において地上部隊の主力を努めていた陸戦兵器を、区役所は無人ドローン化する事で運用していた。

——と、聞こえは良いが、設計思想は20年以上前の代物。

…それは良い。例え砲口径が小さいものだろうが、高い破壊力を持つ兵器であることには変わりないのだから。

…問題は、その砲は同じ陸戦兵器に対抗する為に開発されたものであり—— I S等の航空機に対して使われることなど、考慮されておらず、旋回性と命中精度が劣悪という点だ。

…つまり、役に立つ立たない以前に、『ここにいるべきではない存在』ということだった。

だが今自治区防衛局には、もはやこれだけしか戦力が残っていない——。

それらを束ねる装甲バン—— 『02式改無人機制御指揮車』の中で、部隊指揮官は冷や汗を流しながら現状を睨んでいた。

「最初から、勝てるとは思って無かったが……」

戦車が砲塔の照準をあわせ、主砲を一斉射。

無数の砲撃を無人 I S の軌道上に叩き込む。

——それを、無人ISは跳躍してかわすと同時に、腕部機構のパルスキャノン  
戦車隊目掛けて撃ち放つ……!

ここまでの差ものなのか——陸上近接防衛兵器 忌々しく戦況ウインドウを睨みつけながら呟く。

戦車後方に展開するLPWSも連動し、トラックの荷台に装備したレーザー照準式2  
0mm対空機関砲が花火の様に展開し、無人ISを追撃する。

——しかし展開されたエネルギーシールドがそれら全てを無効化した。

……どう足掻いても、敵わない存在であると、皆が理解した。

直後——響く、レーザー照射警報。

今まで対峙していた機体ではない。

展開していた道路の果て、そこに、今対峙していた無人ISより一回り巨大な体躯と、  
158ミリはあろうかというレーザー砲をこちらに向けていて。

刹那——指揮官が見たのは、自分達の直上を駆け抜ける閃光だった。

《——マストタワー上層階の崩壊を、確認。》

抑揚のない電子音声がかたまする。

眼前には、上層階の一角に大出力レーザーが命中し、一部が崩壊した区役所が映る。

《——引き続き、オリムラシリーズの排除を継続する。》

抑揚のない電子音声——それは少女のものだった。

ノイズにかき消されそうなその声は、どこかブリュンヒルデを思わせる。

——直後。

『アーアー、テストテスト。聴こえるウ？仕事は順調かなア？エムりん♪』

ノイズ混じりの男の声が、無線からこきました。

《——否定。OR M—6666、OR M—N O D a t a 共に健在。対してこちらは戦

力の半数を喪失。》

『アラララ結構手こずってるねえー。∴人格モード、オンにしたら？その方がずっと楽しいだろう。』

《——否定。OR M—6666を抹殺する為ならば、無差別破壊等で対応可能。

OR M—810を使う必要性を感じない。》

『イヤイヤイヤ、あるでしょお？エムりん。例えばサ——可愛い弟の仇に復讐した

りとか。』

—— 男の言葉と共に、ある機体が映し出される。

…映し出されたのは、マリンゲート区より接近しつつある——日本帝国製新鋭主力アライズ【日方風】<sup>ヒガタチ</sup>だった。

…ピクリ、と。ある筈のない脈が強く打った様な錯覚が走る。

(—— システムエラー、不明なバグコードが検出されました——)

《—— 不、明。ORM<sup>織班</sup>—810<sup>マドカ</sup>の弟と、当該機体と…の、関連性は、ない。》

違和感を振り払うように、機械<sup>しやうきよ</sup>は断言した。

『—— マ、そのうち分かるよ。マドカ。…じゃ、お仕事頑張ってねえ——! あ、ははははッ!』

狂った様に男は笑うと、無線を切る。

—— 関連性は無い。

—— 弟の仇ではない。

—— きつと、ちがう。

システムエラーを起こさない為に、冷静化<sup>クールダウン</sup>を兼ねたコードを走らせる。

そうして、再び指揮官としての自分を稼働させる。

—————

《RQ-001B》「ゴレム（白兵戦型）」

アーカイブ

常任理事国議会

所属先：ボラリス軍

帰属元：国際連合本部

OS名：オーパルバニー

製造元：

アーカイブ

腕部兵装右：V-G6パルスマシンガン

KRM-LB-1 《六花》レーザーブレード

腕部兵装左：V-G6パルスマシンガン

KRM-LB-1 《六花》レーザーブレード

肩部兵装右：K1750mm大出力レーザー砲

肩部兵装左：K1750mm大出力レーザー砲

拡張領域内

????????????????????

《RQ-001C「クレイドール」》

アーカイブ

常任理事国議会

所属先：ホラリス軍

帰属元：国際連合本部

OS名：オーパルバニー

製造元：

腕部兵装右：V-G6パルスマシンガン

腕部兵装左：V-G6パルスマシンガン

腕部兵装左：V-G6パルスマシンガン

X-CG-2三連装チエインガン

肩部兵装右：K17E大出力スジャヤテイエ砲

肩部兵装左：K17E大出力スジャヤテイエ砲

拡張領域内

????????????????????

????????????????



ゴーレムに叩きつけられる光芒<sup>レイザー</sup>。

風を切るジェット音。

「うおおおおお——ッ!!」

それと同時に——白式が、零落<sup>タキオンブレード</sup>白夜で斬りかかる……!

大気中に飛び散るタキオン粒子。

それはゴーレムのエネルギーシールドを叩き割り、ゴーレムの腕を斬り伏せる。

ゴーレムは切断された部位から、血液のように夥しい潤滑油を撒き散らす。

一夏は、白式のマニピュレーターで甲龍を抱え——

「ッ、ふ——!」

——瞬時加速。

急加速により放出されたプラズマスラストの稲妻がゴーレム目掛けて放たれる。

それは、センサー機器を一時的に阻害する目眩<sup>ジャミング</sup>しであり——放たれた稲妻の火花

が、撒き散らされる潤滑油に引火し、線香花火を連装させていた火花は、瞬時に業火へ

と変貌する。

連鎖する爆発。潤滑油の流れを遡上する業火は一気に源泉<sup>ゴーレム</sup>に到達し——右腕を、

内側から吹き飛ばす……!

フレームが弾け飛び、破片が出鱈目に撒き散らされる。



白式の背後を叩き付ける嵐の様な破片は確実に機体からシールドエネルギーを削り取っていく。

「——オルコット！」

一夏の声。

それと同時に、流星群の如く。

空を埋め尽くす光芒レイザーがゴーレムをつるべ打つ——！

…なれど健在。

エネルギーシールドを復旧した敵無人ISは、ブルーティアーズの全砲門斉射を凌いでみせる。

だが右腕を潰されて出力が落ちたのか——その場から動く事は、先程以上に困難となっている様子だった。

「先程同様——このまま抑え込みます！」

ビットを展開——単純なハードウェアの対応処理能力を超過する複雑怪奇な軌道から、セシリアは絶え間なくレーザーを叩き込む。

それで、一夏は鈴を抱えたまま可能な限りゴーレムから距離を取る。

『鈴！無事か!?』

充分な距離を取った後、一夏は鈴に問いかける。

『な…何よ…?! あんなの、アタシ一人でもなんとか出来たわよ…!!』

しかし帰ってきた言葉はこれである。

…息巻くだけの元気があるのなら、まあ、無事だろう。

『鈴…お前なあ…!』

『オルコットの案や、アタタの手助けなんか無くたって、アタシは——』

しかしそれを遮る様に。

「提案を否定されるのは結構ですが、なら代案を出してください！なければ従いなさい！」

セシリアが通信に割り込み、叫ぶ。

「具体的な何かをしなければ全員ここで死にます！わたくしはそんなこと御免です！」  
レーザーライブライト Mk. III と、カデューケウスを絶え間なく放ちながら彼女は怒声を放つ。

それに、思わず鈴は黙りこくろ。

「——織斑さん！零落白夜の発動可能時間はあとどれくらいですか!？」

セシリアが一夏に問いかける。

——零落白夜なら敵エネルギーシールドを切断できることが分かった今、何を  
持つて倒すかはもはや自明の理だった。

しかし、零落白夜はタキオン兵器という特性上、燃費が凄まじいことや汚染を考慮し  
て発動時間が制限されている。

…これを踏まえれば、発動可能時間次第では作戦にすらならない可能性があった。

『ちよつと待つてくれ、だいたい—— 20秒…20秒発動するだけのエネルギー  
しか残っていない!』

一夏が無線越しに応える。

そこで——セシリアは即断する。

「風さん、エネルギーラインを白式に接続。SEを全て回して下さいー!」

『なっ——』

言外に突きつけられた戦力外通告。

…見れば確かに、機体の装甲負荷は胸部コアパーツや頭部パーツを中心に危険域に達  
しており、既に機体の基礎骨格にも変形や歪みが見られた。

…この状態では、確かに戦力になるとはいえない。

しかし素直な性格でない鈴は、当然反抗を露わにする。

——だが。

「今ここで諸共殺されるか、面子を捨てて生き残る可能性に賭けるか——どちらをお望みですか？」

『ッ——！』

「…苦情は後ほどいくらでもお伺いします。ですから——今は、堪えてください。」  
 ——ぴしやりと、セシリアはそう告げるなり、レーザーの掃射を続けた…！



セントラル区

マストタワー  
 区役所前ラウンドアバウト

区役所前の、開けた空間。

3車線一方通行の円形道路と、それに沿う様に張り巡らされた屋根付きの歩道橋。空いたスペースを埋める様に街路樹が植えられており、普段ならば市民の憩いの場として機能していたであろう場所。

——そこは、陥落寸前という状況だった。

展開していた無人戦闘車両やレーダー車両は大破し、残骸となって転がっている。

防衛対象であるマストタワーも、上層階展望台ブロックが大出力レーザーにより崩

落。

僅か数台にまで数を減らした地对空車両と対空ミサイルを搭載した軽戦車、そしてようやく機能を回復したシーグランド区の空港設備より飛び立った、【F A V / Q | 8 E 垂直離着陸 V T O L 戦闘攻撃機（無人化改修型）】による遊撃を持って、辛うじて戦線を食い止めていた。

だが、それでも性能差を埋めるだけの物量には至らない。

ゴーレムのパルスキャノンによりハリアーII改は次々と叩き落とされていき、付近の道路やビルに墜落する。

地上に展開する対空車両は次々とレーザーで狙い撃たれ、爆発炎上する。

——眼前に映る、瀕死の光景を見て箒は齒軋りする。

応援に間に合わなかったことへの苛立ちと不甲斐なさが混ぜこぜになった様な表情。

：対するナガトは「まあ、こんなモンだろう」と、努めて冷静な表情だった。

自作自演とはいえ、白騎士事件時に I S に挑んだ通常兵器が一方的に蹂躪された話は有名だ。

——そもそも。通常兵器で I S を叩き落とせるのなら、アライズなど生まれていない。

味方が蹂躪されている様は酷く胸糞悪いが、それは同時にまだ自分達ヘズナルに需要がある——

——言い換えるならば、必要とされているという証明でもある。

「——さて、もうひと仕事だ。やれるな？ 箒。」

『ええ——やれます…！ やってやります!!』

ナガトはいつもの口調で言うが、箒は半ば怒りに満ちた声で応答する。

興奮してんなア—— ナガトは、箒の声を聞いてそう思う。

ナガトは単純に眼前の惨状を、職業軍人という視点から分析したが、箒はそんな価値観も視点も持ち合わせていない。

惨状に対する嫌悪感だけで無条件に感情を剥き出しにする。

人間としては正常だが、軍人としては未熟。

——無理もない、彼女は高校生…子供なのだから。

(青臭いのは嫌いじゃないが——戦場でそれじゃあ早死にしちまう。)

こりやまだまだフォロ—要るな———と思いつながら、戦況マップを今一度視認する。

マストタワー  
防衛目標に迫る敵機が4機。

既に防衛ラインは食い破られており、後は無い。

その背後に、敵機が1機。

おそらくはコイツが指揮官機——そして同時に各アライズの所在地も更新される。

前衛4機の左翼に日方風と雷火。

後衛1機の背後にヴァイムランナー、そして右翼に海月。

…突入のタイミングが上手くいけば前衛と後衛を分断し、各個撃破が可能となる。

——ならば話は早い。

「ライカン01から展開中の全パイロットへ——！」

ナガトは無線を開く。

「——前衛はこちらが潰す。後衛1機は残りで分け合ってくれ……！」

そう言うなり——ナガトは眼前のゴーレム目掛けてガトリングライフルを穿つ。

——狙って、ではない。

防衛部隊と引き離すことを目的としての牽制攻撃。

放たれた40m対装甲貫徹徹甲弾の群れがアスファルトを叩き割り、塵柱がゴーレムの進路を阻む壁の如く立ち込める……！

「——こちらライカン02。了解。』

『部外者だけど、お姉さんも了解——！』

『ライカン03了解——潰します!!』

各個の応答——続くように、箒が吠えて。

雷火の肩部に増設された空力制御用の主翼が開く。

主翼には機外兵装<sup>ハードポイント</sup>取付部が備え付けられており、主翼下部に兵装類を懸下して機外搭載されていた。

そこにあるのは、左右4基のNR—VIII式レーザーターレット。

鍍にも似た形状のソレがゴレムに向けられて。

——蒼<sup>レーザー</sup>の光芒<sup>ザイ</sup>が走った…!

大気を瞬時にプラズマ化させたソレは、高熱を伴ってアスファルトを溶解させ、衝撃波と共にゴレムの2機に叩きつけられる。

それで1機が落ちる。

——敵機残り、4機。

だがもう1機は、エネルギーシールドをレーザー着弾面に集中展開——攻撃を相殺して見せた…!

——点と面、点と点。

レーザー兵器とは、爆発火力や装甲侵徹力による装甲破壊を目的とした面制圧実弾兵器とは異なり、ただ一点を貫く事以外を削ぎ落とした、一点突<sup>ピンポイント</sup>破型兵器である。



その性質上、均一に面展開されたシールドに対しては凄まじい貫通力を發揮する。

「だが、それはシールドが面展開されていればの話。」

一点突破攻撃は、ソレと同等の火力の前では突破力を發揮できず四散する。

先鋭化し過ぎたモノは貫くには長けているが、同時に折れ易いもの。

それはレーザー兵器として例外では無い。

——即ち、一点突破攻撃に抗うには、一点集中防御が最も有効という事だ。

『小賢しい——！』

箒が舌打ちし、忌々しく呟いた。

それは倒せなかったから、では無い。

——ナガトの手を煩わせてしまうことに対して、だった。

「多少は頭が回るらしい——！」

しかしそれを他所に、ナガトは笑う。

そうこなくては——張り合いが無いというもの……！

獰猛な笑みと共に、ナガトはスラスターを点火——瞬時加速で距離を詰めて、

「吹っ飛べ……！」

——右腕を叩き込む……！

同時に炸裂する薬室内の火薬。

薬室内の圧力が、右腕に搭載された81式Ⅲ型対戦車穿孔銃パイルバンカーの杭パイルに到達する。

時速2000kmを超える加速力で、40トンもの塊が突っ込んだ衝撃に上乘せされた——右腕の81式Ⅲ型対戦車穿孔銃パイルバンカーの一撃が走る……！

軋む金属音を立てて、打ち貫かれたゴーレムは機体フレームが半壊する——だが、未だ稼働している。

別段驚く事はない。

重装甲のライズやそれに該当する兵器であれば、パイルバンカーの一撃で沈まないものはごまんと居る。

そしてナガトが相対する敵は機械。

機械は人間と違い、多少機体を潰し、揺らせた程度で脳震盪を起こすことも気絶する事も無い。

——つまり眼前敵は、生半可な破壊では停止させるに至らないのだ。

それに、一撃で沈まないというのなら、やるべき事は決まっている。

「一度で沈まぬなら——何度でも、叩き込めば良いだけのこと……！」

続け様に左腕のパイルバンカーを叩き込み、今度こそ文字通り吹き飛ばす。

しかしそれで終わらない。

衝撃で投げ出され、地滑りの音と共にゴーレムは後方へ飛び——そこに、120

m m戦車砲が叩き込まれた……!

——それで、ゴーレムは爆発し、ついに原型を留めぬ残骸となった。

……この間、僅か3秒。

——敵機残り、3機。

さあ、次だ。

……ニ、イ、と。ナガトはセンサー越しの残敵2機に狙いを定める。

ナガトは、その場から飛び——右腕のパイルバンカーで、新たにゴーレムの胸部

コアフレームを貫いていた。

タングステン鉄塊の杭は、胸部コアフレームの装甲の隙間を抉り、内部伝送系の中枢機構

を完全に破壊する。

慣性に従い、そのままナガトと日方風は疾走する。

その眼前には——4機目のゴーレムが。

ゴーレムが日方風にパルスキャノンを向ける——しかし、射撃はされなかった。

照準は日方風に。

だが——日方風が、パイルバンカーで貫いたまま前方に掲げたゴーレムが射線を

阻害する。

敵味方識別装置

I F Fが味方誤射を回避する為に、ゴーレムのパルスキャノンの引き金をロックした

のだ。

それにナガトは再び口角を吊り上げる。

"なるほど、馬鹿正直で助かった…!"

盾として使い潰すつもりだったゴーレムを、そのままナガトは掲げたまま、瞬時加速。時速2000キロ。

40トンと推定35トン前後の鉄塊が4機目のゴーレムに突貫し——爆音と共に、轢き潰す…!!

それで、囷として使われたゴーレムは機能を停止する。

轢かれたゴーレムは駆動系が大破し、立ち上がることもままならず、一瞬空中に投げ出された後——地面に叩きつけられる。

…碎け散るアスファルト。

…破断する四肢。

…断線する伝達回路。

せめて、あと一撃見舞おうと。

唯一無事だった肩部レーザーキャノンを起動して——ノイズ混じりの視界に、赤の機影が映る。

『はアッ!』

——落雷かと思間違う俊速と轟音。

一瞬後、箒の雷火が放つた急降下斬撃により、ゴーレムは両断された…！

——敵機残り、1機。

『はあつ…、はあつ…！』

「ナイスタイミングだ。箒。」

ゴーレムからパイルバンカーを引き抜きながら、ナガトが箒を労う様に声をかける。

「さて、ラスト1機の処理は終わっていないらしい。そつちの応援に——」

言いかけて、言葉を遮るように警告音が鳴り、戦域マップが投影される。

それに、ナガトは言葉が詰まる。

『——ナガト？』

荒い息を整えながら、箒は不審に思い声を掛ける。

そして——絶句した。

レーダーに新たな敵影を意味する光点グリップが投影される。

それは、日方風と雷火に覆い被さらんばかりに展開していて——

【警告：高濃度タキオン粒子反応】

——空が、ありえない輝きを発していた。

緋色の、夕暮れ時を連想する光。

ソレが除々に収束すると、突如として視界が真っ白に漂白ホワイトアウトされた。

【警告：リーダーロック】

—— 続け様に響く、ロックオンアラート。

少し遅れて響く射撃音 —— あの、忌まわしい音と「クソが」という自らの声が聴覚野に突き刺さった。

現状を把握するより先にサイドブースターを全開。

箒の雷火を抱えて —— 天より墮つる光を回避する……！

—— 1万℃という恐ろしいほどの熱量を放つ光の束が、頭上から叩きつけられた。

その光条は、先ほどまでナガトのいた街区を飲み込み、瞬時に蒸発させた。

それだけでは無い。

……大気のパラズマ化とそれに伴う水蒸気爆発が巻き起こり、原爆かと思間違う衝撃波と爆風が自治区に黙示録的破壊を撒き散らす。

……爆風は乱気流となって、地上に展開していた味方無人戦闘車両やビルを紙吹雪の如く吹き飛ばす。

……街区は、水上都市を構成するメガフロート諸共ビル街を完全に崩壊する。

……あたり一面は熱風をともなった急激な上昇気流が発生し、離れた位置にいたUAV無人航空機

までもが、操縦不能になり蚊虫のようにはらはらと市街地や波打つ海面に墜落していき。

…辛うじて回避できたものの、高エネルギーは粒子装甲ごしでも機体の複合装甲を焼き、日方風の装甲は高熱により表面が焼けただれていた。

『な…、ナガ、ト…。これは…?!』

箒の啞然とする言葉にならない言葉が無線から漏れる。

「タキオンキャノン荷電粒子砲だ。」

ナガトは苦虫を噛み砕いた様な顔でそう告げる。

——タキオンキャノン荷電粒子砲。

タキオン粒子を圧縮し、レールガンの様に電磁誘導で加速させて発射する兵器。

極めて強力な破壊力を持ち、理論上はアライズパーティクルブレイマーの粒子装甲をすら破壊し得る。反面、

着弾により深刻なタキオン汚染を引き起こす。

…そう、言われている代物だった。

だからこそ、箒は理解出来なかった。

『なぜ、そんなものを——』

——こんな、人口密集地で。と言いかけて、それは眼前の光景を前に、言葉に出来なかった。

「さあな。まあ、やつこさんには、そんな事関係ないんだろう——なあ、そうだろう？」

ナガトは眼前を睨み、そう問いかける。

日光にさらされ露わになった敵機の姿は、懐かしく、そしておぞましい形をした機体だった。

本体は旧式のコンペディションIS型だが、背部に突き出た巨大な構造物が目を引き。

まるで背中に巨大なビート板を背負っているようにアンバランスだ。

そこから左右にパイプが延び、右腕の大剣の如き形状のタキオンキャノンに接続されている。

左腕には、5基のガトリングを束ねた5連装ガトリングターレット。

機体の各部には明らかに増設それたと思しきブースターが取り付けられ、背面にも大型ブースターが見て取れた。

——それは良い。

一番目を引いたのは、本体の外見だった。

両腕は異形となり、機体各部は追加ブースターで埋め尽くされている。

機体のカラーリングは黒一色で塗りつぶされている。



：しかし、その騎士甲冑を連想させる機影は、すぐにその名を思い起こしてしまう。  
その機体は――

『白騎士――!?!』

――かつて、世界を作り替えた機体だった。

、  
、  
、

――ああ、やはり、間違いない。

（――システムエラー、不明なバグコードが検出されました――）

眼前の日方風アライズを睨みながら、機械しょうじよは、あるはずのない口角を吊り上げた。

（推奨。速やかな自我データの初期化リセット――拒否）

――あの戦い方、あの時のヘズナルと変わらない。

イチカを殺したヘズナルと――！

（任務放棄――ORM-1000の戦闘データをダウンロード）

ようやく見つけた仇敵に、機械しょうじよは心を躍らせた。

長年探し続けていた――我が弟の仇を前にして、衝動など、抑えられる筈がな

かった。

《FIS—1Q [WK—Black]》

—装甲耐久—

粒子装甲：100%

複合装甲：100%

機体骨格：異常なし

—アーカイブ—

所属先：ポラリス軍 常任理事国議会

帰属元：国際連合本部

OS名：G・D・モデル1064 (ORM—810)

製造元：???????

—兵器—

腕部兵装右：Type—01タキオンキャノン

腕部兵装左：Mk. 15C. I. W. S. 5連装バルカン砲

格納兵装右：V—G6パルスマシンガン

格納兵装左：V—G6パールスマシンガン

肩部兵装右：1K17E大出力ビレーザ

肩部兵装左：1K17E大出力ビレーザ ■スジャテイエ砲

背部兵装右：ATI—VLM—M5パイダー垂直発射ミサイル

背部兵装左：キオン粒子制御ユニット

拡張領域内

??

（——機体全システム、チェック終了）

《ようやく捉えたぞ——イチカの仇。》

あるはずのない表情筋が、おぞましく歪む。

当初の目的——オリムラシリーズの排除など、彼女にはもはや関係無かった。

今機械しょうじよにあるのは、眼前アライズの日方風を撃破することのみ……！

（——ターゲット確認、排除開始。）

機械しやうじよ——

織斑マドカは、タキオンキャノンを眼前に向けて構え、

《死んで貰おう……!》

ノイズ 思考ロジックに走る  
激情が身を焦がした。

そして——機械 およそAIとは思えぬ非合理的戦闘行為を開始した……!

《死んで貰おう……!》

通信に割り込んできた声は、ノイズ混じりの合成音声だった。

——いや。どこか、聴き覚えが無い女の声。

だが今はソレどころではない。

声を放った黒騎士は、不自然に機体を振るわせて右手のタキオンキャノンを構える。

同時にハウリングを何重にもしたような耳障りな電子音が街区に響き渡った。

砲口に粒子の収束が始まり、臨界に達すると強力な閃光が放たれる——ハズだった。

タキオン粒子は、タキオンキャノンの放熱版と思しき突起物に収束し——

「っ——!!」

——その真意に気付いたナガトが斬艦刀を抜くのと、黒騎士が斬りかかったのは、同時だった。

豪ツ、と。

鉄塊と鉄塊のぶつかり合う轟音が、大気を震わせる。

衝撃波はそのまま爆風となり、周辺建築物のガラスを吹き飛ばす。

『ナガト——！』

思わず、眼前の光景に我に帰った箒が加勢を試みる。

だが——

「——来るんじゃねえ!!」

——ナガトの怒声が、それを制止する。

「お前はライカン02とお喋り娘の手伝いに行け。コイツはなんとかする……!」

『しかし——』

——死んだらどうするつもりだ、と箒は言おうとして。

「命令は発した!行けッ!!」

だが遮るように、有無を言わさない鬼気迫る声でナガトは怒鳴る。

『——っ……!了……解!』

そう言つて、箒はその場を離れる。

黒騎士が更に剣圧を強め、それをナガトは受け流す。

急な力点の変動。

それにより黒騎士はバランスを崩し、隙を露わにする。

見逃す事なく、ナガトは——右の拳を、胴体に叩き込む……!

そのまま、右腕のパイルバンカーを点火して——だがそれは、空くうを突く。

マニピレーターターの殴打と共に、黒騎士は背後へ飛び、パイルバンカーの直撃を躲したのだ。

だが

《——殺す……殺す……殺す……!》

再び合成されたノイズ混じりの声。

ぶつぶつと呪詛を紡ぐ不快な電子音を発しながら、黒騎士がナガトに突進する。

——それは、うなり声か雄叫びか。

「ちい——っ!」

ナガトはGAU-8E II ガトアヴェンジャートリンダで迎え撃つ。

なれど、放たれた40mm侵徹徹甲弾は。

その弾速を上回る速度をもってほとんど回避される。

(……なんなんだ。コイツ……)

…先程相手をしていたゴーレムよりは、やや人間味があるように感じられた。しかし、その機動は人間が取る螺旋というよりは、まるで稲妻だ。

弾道を完全に見切ったうえで、大気中を絶縁破壊しながらジグザグに進む稲光のように、弾道を縫うように肉薄する。

ハイパーセンサーですらターゲットを補足しきれずに激しく照準がブレた。

…まるで。

…まるで、"人間を限りなく完璧に模倣した機械"が動かしているような——その考えが脳裏に浮かぶと同時に、視界を黒騎士が埋め尽くす。

瞬時加速によって距離を詰められたと、そう理解するのと——大質量の金属塊がぶつかる音が頭に響くのは、同時だった。

「がっ——」

——思わず溢れた苦悶の声。

黒騎士はラグビーのタックルよろしくナガトを日方風ごと押し倒し、馬乗りになると、右腕と一体化したタキオンキャノンを棍棒のように叩きつけてくる。

衝撃で砲口がつぶれようが着弾観測用精密部品が壊れようが関係なしに、キャノン放熱版にタキオン粒子を集中展開——急造のブレードで何度も叩き続ける。

その行動は、おおよそ合理的判断をするために創られたAI機械とは思えないほど非合理

的な行動だった。

——それは、明白な怒り感情表現だった。

無機的なはずの機械が、もつとも単純かつ非合理的な行動をもつて、自らの感情を発散させる。

それも、ヘズナルアライズ乗りである自分に向けて。

——なるほど、怨恨ふくしゅうか。

ようやく、斬艦刀でその殴打を防ぎながらナガトはこの機械の行動原理を悟る。

人間を限りなく完璧に模倣した機械であれば、元となった人間がいる筈だ。

…それも、アライズに恨みを抱く人間が。

——ならば、元となった人間の思想信条が反映されても不思議ではない。

…だがそれでも疑問は残る。

黒騎士が降下して来た際、近くには箒もいた。

しかし、箒を追う素振りも見せなかった。

それどころか残り1機のゴーレムと対峙しているゲラルトライカン02や楯無お喋り狼には見向きもしな

かった。

アライズ乗りが報復対象であるならば、あの時味方が近くににいるゲラルトや楯無を先に始末するのが筋としては通っている。



——なのに、味方を全滅させたコチラにわざわざ殴り込んで来た。

…あまりに不可解だ。何故、勝率が低い方に攻め行ったのか。

…というか何故ナガトを集中的に殴っているのか。

確かに、恨みは山のように買ったが、機械にまで恨まれる筋合いは無い。

《殺す…殺す…殺す…！殺してやるぞ！イチカの仇!!》

——再び奔る怨嗟の慟哭。

…ああ、なるほどな。

それで、ナガトは再び理解した。

怨恨の対象は、ヘズナルアライズ乗りだろうと考えた。

そしてそれは正解であり——不正確だった。

確かに黒騎士はヘズナルアライズ乗りを標的としている。

だがしかし、黒騎士が報復の標的に定めているのはただ一人——八雲ナガトIIア  
ウグストだったのだ。

「は——」

乾いた笑みが溢れた。

ナガトは敵の真意と、正体を把握する。

なるほど、お前は——

「――再構築戦争  
10年前の亡霊風情が……」

――思わず頭に血が昇る。

ナガトは背面のプラズマスターを起動させる。

マウントポジションをひっくり返すために大推力で押し返しながら、日方風の頭部を黒騎士の頭部に打ちつける……!

「今更何しに来たんだ――ええ?!」

怒気と殺意を孕んだ声でナガトは叫ぶ。

それとほぼ同時に、黒騎士もバックブースターを全開にする。

――ブーストをブーストで押し返す。

合理性のカケラも無い対決が幕を開けた。

《うる、さい……私の家族を殺して……お前たちだけ、のうのうと……!!》

怨嗟と共に黒騎士は非常識的な速度で対応した。

人間には真似できないほど早い判断に背筋にうすら寒いものが走る。

――ああ、懐かしい。

刹那の時間で二つのスラスターが限界領域で点火し、お互いの機体を強烈な加速で押し出す。

加速初期とはいえ、アライズをマツハ<sup>時速1300km</sup>ーまで加速させる力は強大だ。

恐ろしいほどのエネルギー同士をもってお互いの機体がぶつかり、150Gに匹敵する加速度が全身をひき肉にせんと襲い掛かる。

殺人的な超音速加速領域で衝突し、2機はビリヤード球のようにデタラメに弾かれた。

——ナガトはそのまま、時速1000kmは下らない速度で低層ビル数棟を薙ぎ倒す……！

肺が呼吸機能を一時的に喪失し、酸素の供給が停止する。

鈍い音が頭のなかを駆け回る。

バイタルアラートが遠くで鳴っている。

立て続けに起こる強烈な衝撃に、ナガトは気を失いかけており姿勢を制御できない。

それでも、日方風のサードアイ・カメラから脳へ直接届けられる視覚だけははつきりとしていて。

——視界の端には砲身の歪んだタキオンキャノンをこちらに向けている敵機が見えた。

肉体がない機械は脳震盪を起こさない。

あの激しい衝突のなかでも、適切に機体を制御し、敵に向けて照準を合わせることができる。

「くそ、が——」

朦朧とする意識のなかで、機械がヒトを上回る事例が現実のものとなることを実感した。

黒騎士のタキオンキャノンに、圧縮されるタキオン粒子が輝く。しかし、回避したくとも身体が動かない。

「——困った、死ぬわコレ。」

走馬灯が流れて来そうな境地にて、ナガトは悟る。

だが、何を思ったのか——黒騎士は圧縮されていたタキオン粒子を、キャノン放熱版に集結させ、タキオンブレードを形成したのだ。

「は——」

あくまで、剣で俺を殺すつもりなのかと。ナガトは獰猛に笑う。

黒騎士は迷いなく日方風目掛けて突撃して来る。

その時にはもう——ナガトも体勢を立て直していた。

だが、その程度でどうこう出来る話ではない。

依然としてナガトはジリ貧だ。

—— 現状の機体性能では追い付けない。

—— もっと強いのが要る。

—— 汚染を撒き散らさない範疇で。

……なら——と、決断したナガトは機体のOSに思考伝達でパスコードを打ち込んだ。

それと同時に、黒騎士のタキオンブレードが振るわれて——！

《——「ベルセルクBモード」起動要請受理。システム、起動します。お帰りなさい、オリジナル。》

## #11 Ghost and Wolf (機械と狼) II

アメリカ合衆国ワシントン州

シアトル⇨タコマ広域都市圏ピアース郡

フオートルイス基地

同・A.<sup>アラ</sup>T.<sup>ラス</sup>L.<sup>スカ</sup>A.<sup>条約</sup>S.<sup>機構</sup>本部第一執務室

「状況は、芳しくないな。」

無機質な室内で、デスクの上に置かれた赤電話ホットラインを手にした男は鋭い目で言葉を発し

た。

『ええ、事態は深刻だ。10年前の再現と言って良いでしょう。』

受話器の向こう側にいる男が口にする。

呼応する様に彼の眼前にあるモニター——そこに映る世界地図に、赤い光点グリッブが刻

まれている。

——アメリカ合衆国領サンデイエゴ

——アメリカ合衆国領ハワイ

—— 欧州連合・リステンブルク自治区

—— イスラエル領エルサレム

—— 英連邦王国領香港

—— 日本帝国・トキオ自治区

『世界6ヶ所で、国連——旧コロンビア派による同時多発的武装蜂起。この修正、容易ではありませんね。』

—— ビッグホックス  
米国国防総省はどのような対応を?』

受話器の向こうにいる男に告げる。

「—— 既に太平洋地域にはタスク04を発令。サンディエゴにはNo.15を、ハワイにはNo.11を派遣。

香港にはNo.21とNo.39の派遣をイギリスと台湾に要請：現在移動中だ。

—— 欧州連合はどうなっている?』

『—— 大西洋地域も同様ですね。リステンブルクにはNo.27を派遣。：しかしエルサレムは政治的事情により、派遣が進んでいません。』

「—— エルサレムは我々で対応しよう。福音計画の一環で派遣されているUSA—No.7とUSA—No.8を使う。

……で、トキオ自治区はどうしている? シュヘンベルク。」

改めて、男が問いかける。

それに受話器の向こう側にいる男——シユヘンベルクと呼ばれた人物——は、男に回答した。

『被害が大きく、また電子攻撃の影響で情報が錯綜しています。

：現在、A. T. L. A. S. 日本事務局の司令官を介して現地アライズを強制徴発。

EUR—No. 4、No. 16、JPN—No. 7、JPN—No. 12のヘズナル4名が交戦中。EUR—No. 21はアラスカ条約に基づき投入機体制限により母艦《ジークフリート》にて待機中とのことです。』



日本帝国長崎県五島市浜町

男女群島・国連直轄領トキオ自治区

同・セントラル区

『Bモード起動要請受理。』

機体同調過負荷限定解除。



機体アライズと操縦士ヘズナルを繋ぐ神経接続端末バイオデバイスの、神経接続レベルを上げる。

——同時に、3段階ある第1拘束機能リミッターが外された。

黒騎士の思考速度と状況判断速度はすさまじい——それは数度の打ち合いで嫌というほど味わった。

しかし、それは決して目に見えないものや魔法めいた存在ではないし、何の情報もなしに未来が予測できるわけではない。

——ISを介している以上は、ハイパーセンサーがとらえた入力情報を元に演算し、物理的な動作を出力しなければならない。

動きの初動から、直後の未来を予測演算できるのは、神経接続レベルを上げたナガトも同じだ。

演算能力で勝る機械に人間が打ち勝つには、『予測をさせない』か、『予測を上回る』必要がある。

その為に——IS適正が低くければ廃人と化す領域へと、ナガトは足を踏み入れる。

光が、逆流し——ナガトは広大な神経接続の深海へと潜り込む。

「っ——、う」

——脳細胞が沸騰する。

視神経が無限にも拡張され、急速に視界がクリアになる。

相対する黒騎士の装甲表面の傷。

その凹凸がミリ単位でくつきりと見えるほどにまで視覚の解像度がハッキリする。

「っ、ぐ——！」

——脳が、灼熱した。

脳細胞が過負荷により、チリチリと爆ぜる音がする。

人間の脳は通常環境下において、全体の機能の10%しか一生涯稼働していないという。

神経接続端末と繋がった脳は、その枷を容赦なく外す。

——脳の空白領域が、アライズの制御という役割の為にフル稼働する。

《——システム、起動します。おかえりなさい、オリジナル。》

1秒に満たない瞬間の中——ナガトがシステムを起動することを想定していたかのような音声プログラムが鳴る。

そして枷を外されたナガト／日方風は、狂戦士ベルセルクのごとく黒騎士に飛び掛かった……！

—— 黒騎士タキオンキャノン  
 私は右腕の放熱版にタキオン粒子を集中させる。  
 …あくまで、剣で挑む。

おおよそ合理的な判断ではなく、もはやそれは無茶か馬鹿の一つ覚えの領域。  
 だがそれでも、私——織斑マドカは、その戦法を崩すことはなかった。  
 きつと、アイツなら——この戦い方を崩すことなど無い筈だ。

…なあ、そうだろう？

《——イチカ。》

少女は眩く。  
 スキャン完了。

私はタキオンブレードを振るう  
 戦闘モード再構築。

——瞬間。

眼前敵が突如挙動を変えろ。  
 ハイパーセンサーに反応アリ。

眼前敵が、私に飛び掛かった。  
 警告、衝突警報発令。



—— 同・セントラル区西部

撃破対象である無人ISに近づくにつれ、セントラル区西部に位置する高層ビル街が  
 少しづつ大きく見えてくる。

前方のビル群の狭間——そこに、巨大な鉄の塊が確認できた。

……思わず息を呑む。

体積にすれば、およそアライズの10倍ほどはある大きさ——全長55m、全幅20mはあるだろうか。

肥大化した巨体、あるいは下半身を支える堅牢な6本脚。

それに支えられた下半身には上半身が旋回砲塔として埋め込まれ、また装甲表面にはいくつかのハッチが確認できる。

上半身もISの3倍近い大きさの巨体であり、巨大な砲身となった両腕と肩部のガトリングを振り回す。

——超大型重装機。

その、ISとしてはあまりに現実規格外過ぎる離れたスケールに筈は思わず畏怖を抱く。

——だが、止まる訳にはいかない。

眼前では——そのデカブツに挑む、2機のアライズがいる。

奥歯を噛み締めながら、筈はスラストターを蒸し、全速力で向かう。

『——やりましたよ、騎士さん。援軍です。』

ふと、交戦中のアライズから無線が入る。

『来たか——すまんが手が足りない、加勢頼む……！』

女の声と、男の声——それと同時に敵機体の兵装データが網膜に投影される。

【クレイドール】

——兵装——

腕部兵装右：V—G6パルスマシンガン

1K17・С ж а т и е・50mm大出力レーザー砲

腕部兵装左：V—G6パルスマシンガン

1K17・С ж а т и е・50mm大出力レーザー砲

肩部兵装右：380mm対艦砲

肩部兵装左：380mm対艦砲

腰部兵装：Mk・41VLS

垂直発射基

脚部兵装：KRM—LB—1《六花》レーザーブレード

——もはや要塞と形容するに相応しい重装備。

こんなゲテモノ、一体どこに隠し持っていたのか。

……ふと——敵機動要塞は、6本足の歩みを止めた。

中央の本体部分をわずかに低く屈め、肩部から延びる380mm対艦砲を動かす——

——ソレがピタリと動きを止めると、先端から光が瞬いた。

少し遅れて衝撃波と発破音がこちらにも届く。

同時に先程までいた後方、マストタワー上層階に着弾する。

先程のレーザー照射により上層階に大規模な火災が発生していたタワーは、今の爆発で構造体が限界を迎えたのか——雪崩の如く瓦礫をまき散らしながら上層階が崩壊していく。

「ちッ——!」

ぎり、と奥歯を噛み締めながら箒は舌打ちしつつ、全速力で接近する。

——そして、そういうえば挨拶がまだだったなど箒は思い出す。

「——了解。ライカン03、加勢します!」

『なるほど、卿が——…よろしく頼むツ!!』

無線から轟く男の声。

直後、レーザー照射警報が鳴り響き、視界を紅色の光が埋め尽くし——

「ツ——!」

思わず、箒は雷火の機首を地面目掛けて倒して回避する。

そのまま雷火は頭からアスファルトに突っ込み、まるでミキサーにぶち込まれて掻き混ぜられている果実のように視界がめちやくちやに攪拌スピンされる。

—— 砕け散る路面。

—— 後方の市街地。

—— 黒煙燻る空。

—— 敵巨大I S。

—— 路面に刻まれた止通行停止まれのサイン。

それを数回繰り返した後に雷火の脚部で強くアスファルトを踏み抜き、スピン前転にブレーキを掛ける。

「—— つ、翔べ……！」

そしてスラストを蒸し、瞬間加速—— 強引に機体の姿勢を立て直す……！

それと同時に、Mk. 41VLS垂直発射基から巡航ミサイルが放たれ、高い放物線を描きなが

ら箒の頭頂を目掛けて降り注ぐ。

数はざっと、60発以上——！

—— 以前時代劇で見た、弓兵隊に蹂躪される歩兵の視点になったようだ、場違いな事を箒は思う。

その時見た場面では、空を埋め尽くす数の矢による飽和攻撃で、行軍中だった足の遅い歩兵部隊は手も足も出ずに全滅した。

兵装の種類に違いはあれど、シチュエーションはほとんど変わらない。

——他に違いがあるとすれば。

こちらには——ミサイルを防ぎ切る装甲があり、ミサイルを叩き落とせる迎撃兵装があり、ミサイルを躲し切るだけの脚を備えているという点である。

「ツ、ふつ——！」

それを証明するかのように、筈は再度瞬時加速。

——距離を詰めるために回避はしない。

ミサイルを粒子装甲パーティクルアーマーで受け止めながら、叢雲の高速イオン砲ハルスクャノンで1発ずつ確実にミサイルを撃ち落としていく——！

そこへ——装甲越しに鼓膜を震わせる爆音と共に、先ほどの主砲が放たれる。

だがそれでも前進は止めない。

前方へ3度目の瞬時加速をして対艦砲を紙一重で回避——同時に最後のミサイルも叢雲のイオンブレードで撃ち墮斬り伏せるとす……！

『中々強引だな——いや、猛々しいというべきか。』

ふと見ると、友軍機——E i R — T y p e — X V Iエアライムラッシュから男の無線が走る。

特徴的な鶴嘴帽子型アンテナに一角獣を想起させるユニコーンマストを装備した頭部に騎士甲冑めいた胴体を赤銅色に染めたその機体は。

右腕に装備したアイゼンライン社製II X式/S 6ハイレーザーブレードを振り、敵の



パルスマシンガンを相殺する。

チェンソー、あるいは大<sup>グレートソード</sup>剣。

その様にしか形容出来ないカタチのブレードは、数万℃の高熱をもって大気をプラズマ化させ、敵の猛攻を容易く打ち払う……！

『戦いながらで済まない——こちらはオーストリア合衆国ドイツ連邦州軍ヘズナル、ゲラルト・ヴォルテンガー中尉。コールサインはライカン02だ。』

挨拶が遅れて済まない——そうゲラルトが付け加えると同時に、左腕のX式40mm突撃機関砲と背部兵装のIX式57mmプラズマ砲が火を吹いた。

ナガトが扱うGAU—8EII<sup>アヴェンジャー</sup>ガトリングライフルと同口径の対戦車用40mm爆裂徹甲弾と、8000万℃にも達する蒼雷が敵機体へと吸い込まれていく……！

『——そして私はIS学園生徒会長の更織楯無です。よろしく。』

ゲラルトに続き、楯無が告げ——それと同時に彼女の機体、19式<sup>カイゲツ</sup>【海月】の放った127mmプラズマキャノンが大気を震わせて巨大兵器に着弾する。

続く様に箒も飛び上がり、巨大兵器を眼下に見下ろせる位置まで上昇。

——一瞬の浮遊感。

そしてその直後、重力に捉われた雷火は自由降下しながら射程に捕らえた敵に向けて、両肩部のRR／CG—8四連装チェインガンを放つ。

けたたましい砲声が鳴り響く——しかし、無数の曳光は、敵の厚い装甲で阻まれ、弾丸は跳弾し、派手に火花を散らしながらその場に落ちていく。

それはヴァイムランナーのX式機関砲も同様。

ゲラルトは舌打ちする——肩部の散布型ミサイルを1発だけ放つと、無数の小型弾頭が敵の巨体めがけて一齐に向かう。

全弾命中し、爆炎と黒煙が上がる——だが。

「——ッ！」

——走る悪寒。

明確な殺意が、箒とゲラルトに向けられた。

『ライカン03、動け！』

——ゲラルトの声。

それと同時に重々しい回転音が響き、黒煙を切り裂いて無数の砲弾とレーザーが放たれた。

視認すると同時に2人は横深瞬時加速スライド・イグニッションで辛くも回避し——急加速に悶えながら、

引き金を引く。

「ぐッ…、——ならッ！」

——瞬間、雷火の肩部主翼機ヘッドボイソント外兵装取付部のNR—VIII式レーザーターレットよ

り、蒼の光芒<sup>レール</sup>を穿たれる……!

アスファルトを熔解し、ゴーレムの重装甲を容易く焼いた幾条もの光は。摂氏8万°Cの高熱と共に装甲に叩きつけられ——敵装甲にぶつかり、輝く粒を振りまきながら、やはり水しぶきのように散る。

「——っ!?!」

箒はその光景に絶句する。

レーザーが装甲に当たった瞬間にかき消えたのだ。

同じ様にゲラルトはレールカノンを。楯無もプラズマキャノンを放つが、数万°Cあるはずの超高温プラズマ粒子は装甲を溶解できず、巨大兵器の装甲にぶつかってはかき消される。

複数回被弾した箇所がわずかに溶けた程度だ。

それを見て、箒の脳内にひとつの言葉が過ぎる。

「——対粒子装甲……!」

『……噂には聞いていたが完成していたのか。』

……ゲラルトも同じ事を考えていたらしい。

——対粒子装甲。

装甲に電気を流して強力な磁界をつくり、プラズマを形成する磁力線を攪乱する対プ

ラズマ装甲。

厳密には、そんなに仕組みは単純ではないのだろうが、とにかくこのデカブツに光学兵器は通用しない。

耐弾耐熱性能が高い複合装甲を採用しているから、実体物理弾も——！

(だが、装甲に覆われていない主砲や関節部なら——)

箒が内心呟き——それを嘲笑う様に。

「……は？」

——巨大兵器から、ゴーレムが射出された。

それも1機や2機では無い。

全ての脚部から——総勢6機のゴーレムが新たに射出される。

『……やはり、護衛機はいたか。』

その凶体であれば、当然か——と付け加えながら、ゲラルトが溢す。

…単純な話。

ゴーレムが戦闘機だとすれば、この巨大兵器はその母艦だったというだけの事だ。

「面妖な……」

これで3：7——否、実質的な戦力比はそれ以上。

『マズイところだけど、ごめーん。お姉さんエネルギー切れでお先に……。』

——更に状況が悪化した。

唐突に告げられた楯無の言葉と同時に、彼女の海月アライズが撤収する様子がハイパーセンサーに映り込む。

——これで戦力差は2：7だ。

『後はセルフサービスで、よろしく〜♪』

そんな声を背景にギリ、と箒が歯を噛み締めると同時に——空を駆け抜ける閃光が視界に入る。

緋色の粒子を撒き散らし、ぶつかり合いながら、西方に向けてと駆けて行く光。

ひとつは先程会敵した黒騎士白騎士モドキ——であれば、もうひとつは。

思わず網膜に投影されたハイパーセンサーのウィンドウを見て——

「——ナガト……！」

戦況マップには、黒騎士UNKNOWNと日方風の光点ライカノイが投影されていた。

——向かう先は西のワインディン地区方面。

……人口密度の低い農業地帯の広がる地区だ。

二次災害を抑える為に、そこで黒騎士アッと戦うというのか。

——そう思うと同時に鳴り響くレーザー照射警報。

曇みかけるように、巨大兵器とゴーレムから、深紅ルビーレーザーの雨が降り注ぐ……！

ちつ、と箒は舌打ちし、イオンブレードをもつてして紅光を打ち払う——その先より、傀儡ゴーレムたちの群れが迫り来る。

その更に後方より、巨大兵器が再び紅光の砲門に光を宿らせる。

感情は無く、人間らしい無駄は無く、統率された——明確な殺意の大群が。：  
抱く筈のない同族嫌悪気持ち悪さに箒は吐き気がする。

それに何よりも——しつこさと鬱陶しさに苛立ちが湧き上がる。

きつ、と傀儡ゴーレムたちの群れを睨みつけ。

ぎり、と歯を強く噛み。

「邪魔だ——人形共が!!」

——箒は咆哮し、迫る傀儡ゴーレムめがけて叢イオンブレード雲を振り降ろした……!

↑——こちら前線指揮所ジークフリート、ライカン04射出準備完了。》

——上空からの空対地支援を行なっていたジークフリート級航空戦艦より通信が入ったのは、その時だ。

『お待たせゲラルト!それとえーと……なんか……赤い剣使いの人!』

そして、少し抜けた内容の通信が入ったのもまた、同時だった——。



—— 同時刻

—— 同・I S学園第2アリーナ

—— 苦情は後ほどいくらでもお伺いします。ですから今は、堪えてください。

（—— と、言ったものの……ジリ貧ですわね……）

鈴にそうピシヤリと言い放ったセシリアだったが、現状は何も変わっていないかった。

否。打開策が無いからこそ、変わる筈も無いのだ。

甲龍の双天牙月をもってしてもエネルギーシールドを貫くには至らない。

頼みの綱の零落白夜は残るエネルギー残量からして稼働可能時間はあと20秒。

セシリアもビットとレーザーライフルで動きを封じ込め、拮抗状態を作り上げるのが

限界。

—— 故に、零落白夜を叩き込む前段階である、致命の一撃に届かない。

—— そしてブルーティアーズのエネルギーももう間もなく尽きる。

—— エネルギー補給はアリーナの設備がウイルス汚染されている為に使用不可。

—— 教師部隊は機体がウイルス汚染により行動不能ないし外部に出勤している為増援は

望めない。

—— …… これをジリ貧、と呼ぶ以外どう形容できようか。

—— …… もちろん術を考えていない訳ではない。

しかし、ビットを思考制御しながら一夏の突入タイミングまで考慮して対処法を一から考えるなど、セシリアは経験が無かった。

ましてや他人を指揮するなど。

—— 詰み。

その文字がセシリアの脳裏に浮かぶ。

『——セシリア』

ふと、一夏の声が出た。

「なんででしょう?」

『後ろ取れたら、なんとかかなるかな?』

一夏のその言葉に思わず息を呑む。

人型の特有の弱点たる——即ち、頸を起点とする背後視界認識外円錐領域から、斬り掛かるつもりなのだ。

—— 覚悟を決めたという事か、だがしかし。

「—— いけません。それでは先程の鈴さんと同じ結末になってしまいます…!」  
 そう言い返す。

零落白夜であれば、エネルギーシールドは突破できるだろう。

—— だがそれだけだ。それより先に一手を投じなければ詰む。



——加えて、突破する為には今以上の火力投射が必要になる。

…つまり、現状自分たちだけでは対処不能という事実だけ。

『そつちだつて、エネルギーカツカツじゃ無いか。どつちにしろ、やらなきや勝ち目なし——出来なきや死ぬんだろ？俺たち。』

痛いところを突く、そして何よりも確かな反論。

成し遂げられなければ死ぬ——分かり切っていた結論だ。

…そう、だからセシリアは、死人を減らす方に舵を切った。

「…いいえ、死なせません。だから——」

『——で…、貴族ノブリスオブリージュの務め發揮して、アンター人囷になって、アタシと一夏逃がすつもりなんでしよう…？』

唐突に、鈴が口を開き——その言葉にセシリアはどきりとした。

——凶星だった。

『舐めんじや無いわよ、アタシだつて——この有様でも、固定砲台くらいにやなるわよ。龍砲はまだ動くしね。』

——だからアタシを勝手に戦力外扱いするんじゃないわよ、と付け加えて鈴は言う。

…ああ、ダメだ。2人とも残るつもりだ。

ほぼ確実に失敗する賭けに縋り、そして全滅する。

——無知でもなければ直情的でもなく、達観したセシリアの出した答え。

「…いいでしょう、ヴァルハラでの思い出話には、なるかもしれません。」

——腹を括り、セシリアはレーザーの射線を開く。

一夏が潜り抜けられる為の進路を開き——

『——おお、射線変更ナイスだ嬢ちゃん。』

『『は？』』

この場にいる筈の無い男の声がして、3人共狐に口をつままれた様な顔をする。

…その直後、甲高い降下音と共に——陽光の下。

流星じみた何条もの鉄塊がゴーレムをつるべ打ちにする——！

「な——…」

…正確無比、とはこのことか。

一度の外れもなく、寸分の誤差もなく、ゴーレムを射抜いていく鉄塊は。

『警備部隊隊長から支援部隊全機へ！支援砲撃継続！！』

アリーナの外から放たれた、GBExSR117およびBAEsEoS44の

155mmグレネードキャノンと74式改戦車の105mmライフル砲による偏差射

撃だった。

機関銃めいた100mmを超える砲弾の掃射、一撃一撃が秘める威力は岩盤さえ穿ちかねない、計34発もの榴弾の雨霰。

余波が地表を砕き、土塊を巻き上げ、土煙を起こし、ダメ押しに34発もの次弾がゴレムを砕き潰す——!!

『警備部隊隊長 より各機——突入開始ッ!!』

その無線と共に——ピットの隔壁が吹き飛んだ。

爆炎と共にバラバラにシャッターだった残骸が飛散する。

その残骸を跳ね除ける様に——鋼の巨人が14機、舞い降りる。

——打鉄壱型丙6機と、ターンソウル8機から成るA—CISとEOSの混成編成。

高木が率いる、学園警備部隊が——!

「が、学園警備部隊——…?」

思わぬ援軍にセシリアは思わず啞然とする。

『話は聞いていた。確かに一夏の雪片ならアライズ並みの火力があるから、あのブサイクなクソ人形を潰せるだろう。…加勢するぞ。』

高木が言う。

場に似合わない少し、おちやらけた口調——しかしすぐに、それは硬いものに転

じた。

『警備部隊前衛突撃班各機、突入完了——撃ち方始めッ!!』

裂帛の号令——同時に、

——対艦バズーカの連続投射。

——30mm四連装機関砲の斉射。

——アリーナ外からの支援砲撃。

連鎖する炸裂音とけたたましい砲声が大気を震わせ、ゴーレムを飲み込んでいく。

：それでセシリアは、アリーナの外から攻撃している部隊が支援砲撃、突入した学園警備部隊が自分達の直接援護を担当する班に別れ、互いに連携している事を悟る。

——それと同時に、混迷が始まった。

——連鎖する応答。

——連鎖する銃声。

——摩擦？する剣戟。

——紛紜する？両陣。

03式斬機刀で突撃する打鉄壱型丙——それはゴーレムの巨腕とエネルギーシールドに阻まれ迎撃される。

だが——それで終わる警備部隊ではない。

打鉄壱型丙の背後、アリーナ観客席の直下。

そこに陣取ったターンソウル8機がゴーレムを囲む様に、三方向から84mm三連装無反動砲リポルバルバスターカを放つ……!

…爆裂する炸薬。24発の84mm対戦車擲弾がゴーレムに吸い込まれていき、次々と着弾する。

『次弾ッ!』

高木が告げる。

——あくまで、警備部隊の兵装はゴーレムを倒す為のものではない。

セシリアのブルーティーズ同様、足止めするのが関の山。

——なら、今自分が為すべきことは。

「——織斑さん!」

思わず叫ぶ。

「もう一度、突撃の機会を作ります! 零落白夜の準備を!」

カドウケウスとスターライトMK. IIIによる蒼光の雨を穿ちながら、セシリアは叫んだ。

——これならば。

（——ええ、勝てるかも知れません。）

蒼光の雨を撒き散らしながら、セシリアは確信をもつて内心呟いた。

『カデユケウス1—16、フォックス・スリ遠距離斉射!!?』

——宣告する。

同時に。

カデユケウスBT兵器より放たれる——蒼条の閃光。

それはゴーレム目がけて迫り——いかつち雷の如く空を切り裂かんとばかりに。

レーザー光の槍がゴーレムのエネルギーシールドを刺し穿つ。

それに畳み掛け、追撃するように——。

『ナイスだ嬢ちゃん!!』

——高木が下す、90mm速射砲の斉射。?

? 大気を震わせて穿たれるは90mm対艦砲。

続く様に、外野から次々と84mm対戦車砲が命中する。

——それは、未だ健在であるエネルギーシールドを削っていく……!

『——突っ込む! 援護してくれ!!』



r p > < / r u b y > の刃を振るう。

それで、ガラスが割れる様に、エネルギーシールドが遂に弾け飛ぶ。突破口は出来た。

剣は切っ先を返し、敵に向けられる。

—— あとは、斬り払うのみ……！

↑↑———!!

だがゴーレムとてタダではやられない。

『ッ、織斑さん———！』

その意思を真っ先に察したのはセシリアだった。

「———あつ」

だが気付いた時には遅かった。

ゴーレムは、健在の腕を一夏目掛けて伸ばし、掌に備わったパルスキャノンの砲口に光が収束する。

———死ぬ。

どう足掻いても避けられない。

砲口は僅か1メートル先で一夏の頭を狙い向けられている。

否、既に1メートルを切った。



『イチ坊  
一夏!!』

——この距離では、躲せない。

——高木の声でした。

けれど、けれども、躲わせない。

死への恐怖が一夏の脳を支配する。

指先から爪先に至るまでの全神経が凍り付き、冷静な判断が喪われる。

（——ああ、死んだ。）

……何故か、あっさりとそれを受け入れて。

——果たして、その瞬間は一夏に訪れなかった。

轟音。

それと同時に、空気クイの塊がパルスキャノンキャノンをゴーレムの腕ごと吹き飛ばしたのだ。

『アタシを……忘れてんじゃないわよ。』

ノイズ混じりの無線が入る。

鈴の声だ。

つまり——今の攻撃は、甲龍の装備した衝撃砲による攻撃だったのだ。

「鈴——?!」

『固定砲台にはなるって言ったでしょ？ホラ、行きなさいよ。早く!』

「——ッ！織斑さん!!」

鈴とセシリアの言葉に弾かれてハツとする。

同時に——

【警告】

零落白夜稼働可能時間、残り9. 1秒

そう、ウインドウが網膜に投影されて、反射的に瞬時加速する。

時間がない。

前方の木偶ゴレムの坊に我武者羅に喰らいつく。

【警告】

零落白夜稼働可能時間、残り7. 6秒

一秒の余裕だつてない。

コンマの世界で動かなくてはならない。

ゴレムは、それを妨害するかのようになり、あるいは最後の抵抗と言わんばかりに、今

吹き飛ばされた腕をめちやくちやに振るう。

【警告】

零落白夜稼働可能時間、残り6. 3秒

「——ハ」

溢れたのは余裕か怒りか。

あまりにも鬱陶しい諦めの悪さを叩き伏せるように、

「行ッッッッッッ——」

【警告】

零落白夜稼働可能時間、残り5. 1秒

雪片式型を右肩に叩き入れ、

【警告】

零落白夜稼働可能時間、残り3. 9秒

「けえええ——ッ!!!」

タキオン粒子を帯びた渾身の袈裟斬りが、ゴーレムを両断する……!

【警告】

零落白夜稼働可能時間、残り2. 4秒

だが、それでも止まらない。

ゴーレムは未だ動く。

まだ稼働うごく。

まだ稼働プログラムがある。

【警告】

零落白夜稼働可能時間、残り1.3秒

命令遂行の為に、壊れかけの身体に鞭打とうとするそれに――

「もう、一丁――ツツツ!!」

――返す刀で、一夏は牙突を放った…!



――同時刻

――同・セントラル区西部

――雨霰と降り注ぐ砲弾の嵐。

それは母機から射出された艦載型ゴレム6機目がけて降り注ぐ…!  
シユベルフオイヤカルネヴァル  
 『弾幕祭 りだよ! 派手に行こう!!…あ、巻き込まれないでね!』

そのパイロットはそんな場違いなセリフと共に、無数の砲火―― 76mmレ

ザーキヤノン、35mmチェインガン、そしてマイクロミサイルの嵐を放つ…!

ヴァイムランナー同様、特徴的な鶴嘴帽ビッケルハウベ子型アンテナを装備した頭部に重装騎士甲冑

めいた胴体を橙色と白に染めたその機体は。

―― E i R ― T y p e ― I I X I I ツツアイ

日照ライメントヴァルト社製第1世代アライズ「ヴァハフント」をベースにオースト

リア合衆国ドイツ州が独自開発した新型機。

それが今、24門の銃砲火器で空より大地を灼かんとゴーレム達を叩きつける…！  
連鎖する爆発。

エネルギーシールドでゴーレム達は砲弾やミサイル攻撃を防いでみせるが、焼石に水。

アライズ用に調整された砲火器はタキオン粒子による侵食劣化も考慮し、通常より強力なものとなっている。

その数々を受ければ数秒と持たずにエネルギーシールドはオーバーヒートする。

『自己紹介がまだだったね。僕はドイツ代表候補生のシャルロット・ヴィークマン。コールサインはライカン04だよ。シャルつて呼んでね！』

「…そうか。こちらは篠ノ之箒…コールサインはライカン03だ。」

『そっか、よろしく！』

言いながら、シャルは右腕に装備したヴァイトゲンシユタイン社製WtS | BzG | I  
レールキャノンがパルスマシンガンによる迎撃を試みたゴーレムを1機吹き飛ばす。

『鉛玉と火薬のフルコース…たっぷり召し上がれ!!』

投擲<sup>ジャベリン</sup>槍、あるいは無反動<sup>パズーカ</sup>砲。

その様にしか形容出来ないカタチのレールキャノンは、時<sup>マツ</sup>速<sup>ハ</sup>7200<sup>5.</sup>キロ<sup>8</sup>の高速度で

120mm徹甲弾を更に撃ち放つ…!

それで、2機目のゴーレムを貫通し、クレイドル母艦型の表面装甲を打ち鳴らす。

——放たれる弾幕の一雨。

——混ぜられるレールキャノン超電磁砲の雷霆。

威力より弾数を優先した攻撃がゴーレム達のエネルギーシールドを小気味良く吹き飛ばす。

そしてその弾幕の中よりレールキャノンが。

あるいはそれを——

『——ふんッ!!』

ゲラルトのヴァイムランナーが、右腕のハイレーザーブレードを振るい、次々と両断する…!

「——」。

——一瞬でゴーレム6機が撃墜された。

…まさに「圧巻」の一言だ。

——ヴァイムランナーが戦闘邀撃機であるならば、ヴァハフントツヴァイは戦域制圧支援機といったところだろうか。

ヴァイムランナーがブレードとマシンガンによる機動戦闘を、ヴァハフントツヴァイ

が制圧火力投射ないし支援砲撃を担当する——なるほど、運用次第ではこの組み合わせで堅実な戦闘を展開できる。

——流石はアライズ運用に特化した欧州機だ。

欧州連合は第3次世界大戦と第4次非核大戦の戦火に見舞われた事で軍需産業が死に体とやり、戦車技術などもほとんどが失われた。

代わりに軍需産業の枠に根付いたのがアライズを中核とするIS製造技術であり、結果的に軍の編成もアライズを中心とした運用がなされるものとなっている。

——この二機は、そんな欧州連合の軍事事情を如実に表した存在だ。

∴アライズで完結する防衛体制。

それを標榜する欧州連合からすれば、この光景は歓喜モノだろう。

——だが、この運用体制ドクトリンには穴がある。

細かな点はナガトがきつと話してくれるだろう。

だからそう——例えば、アライズの火力で突破出来ない敵と邂逅した際に無力であると言う点……だ。

『うっわあ——硬いね、この子。』

——それを証明するかのようには、眼前のクレイドールはヴァハフントツヴァイの猛攻を受けてなお、健在だった。

『ならば焼き切り捨てるまでのことだ』

『ジャパニーズトーフじゃないんだから!』

『焼き切つてしまえばなにも違わん』

ふと——クレイドール 眼前の巨大要塞が動く。

応酬と言わんばかりに地響きを伴って大地を蹴り——ロケットブースターの点火と共に筈に向かつて飛び掛かつて来たのだ。

一瞬。全員が呆気に取られる。

推定600トンはあるかという鉄塊——それが、推定時速500kmで地面を滑走する。

そんな非常識、呆気に取られない方がどうかしている…!

「躲かせッ——!」

一足先に、我に帰つた筈が叫ぶ。

それで射線上にいた筈とゲラルトはスライドイグニッション横深瞬時加速で回避する。

クレイドールは勢いのまま、2人の後方にあつた低層ビルに突つ込み——速度を殺し切れずに数棟を薙ぎ倒す。

『行動パターンが変わつた…!』

「…なんて、出鱈目な——」



思わずシャルと箒は絶句する。

『おそらくは慣性制御と反重力場翼を用いた地上滑走だろう———そうでなければ説明がつかない。』

ゲラルトが言う。

それで、眼前に対峙する巨大要塞が、嫌でもISの一種なのだと思います。

第1世代ISは———白騎士シリーズを除いて、そのほとんどが現用兵器の延長線として設計された。

先のバイエリア襲撃に用いられたレヴィアタンもその一種で、アレはミサイル駆逐艦の延長線の兵器として設計された。

今対峙しているクレイドールはおそらく戦車や兵員輸送車の延長線にある複合兵器として。

———白騎士シリーズで証明された、人型である方がシールドエネルギー効率が良いという事実。

———アラスカ条約に基づく軍用ISの全面廃棄。

それらにより、非人型軍用モデルである第1世代ISは廃れた———しかし、枯れた存在が脅威足り得ないという絶対的道理などない。

それを証明するように、クレイドールは先程の勢いのままに。

六脚の内の最前面にある、二脚を剛腕のように振るいながらビルを粉碎し——最前列脚部先端より発生させたKRM—LB—「六花」で箒らに斬りかかる……！

『ちよ、は……？何コレ……。冗談でしよ、ふぎけてるの……？』

シャルが横深瞬時加速しつつ、弾幕とルールキャノンを叩き込みながら呟く。

傍らで箒は再度。パルスライフルを脚部関節部目掛けて放つ。

西洋の甲冑がそうであったように、全身が装甲で覆われていようと、関節部は可動域を確保する為に装甲を削がざるを得ない。

それはクレイドールも例外ではなく、六脚の関節部は装甲化されていない。

だからこそ、そこを箒は狙ったのだ。

——だが、脚が遅くなければ僅かな装甲の隙間を射抜くなどという芸当、叶うはずも無い。

ましてや、対ビーム・対物理防御能力を兼ね備えた上で時速500キロ——リニアモーターカーに僅かに劣る程度の高速で動き回る鉄塊など。

更には言えば、こちらを追尾しながら規格外の巨大レーザーブレードや380mm砲対艦砲による狙撃で攻撃までして来るのだ。

通常兵器では対処不能に近く、アライズを含むISでも撃破は困難を極める——なるほど、こんな兵器を再構築戦争前のコロニアは大量に保有していたなら、確かに彼

らは世界を支配できたらう。

妙な納得が箒の脳内に浮かぶと同時に、今必死で関節を狙っては当たらない現実を前に苛立ちが浮かび、

「コイツの設計者は頭に虫でも飼っていたのか——?!」  
思わず叫ぶ。

限界まで防御力を引き上げ、尚且つ人型ですら無いのに高速機動戦をさせる設計など、正気の沙汰ではない。

——とは言っても、嘆けど喚けど解決しない。

それで解決するなら、最初からそうしている。

だがそうせざるを得ない程に、眼前の存在は出鱈目そのものだったのだ…!

…ふと、同時に疑問が浮かぶ。

これだけの兵器が山のように現役だった再構築戦争時——オリジナル達はどのように攻略したというのだろう。

いくら第2<sup>私たち</sup>世代より出力の高い機体を駆り実力も高かったとはいえ、これだけの敵機を複数機同時に相手取らざるを得ない事態が多かつただらう事は容易に想像できる。

だというなら、どう乗り越えたというのか——

『H Q からライカンズ——』

—— 答え合わせをするかのように、空より巨影が舞い降りる。

西洋の城塞、あるいは聖堂めいた荘厳さを孕んだ外観の艦橋。

ステルス性を意識したのか、船体表面は凹凸がほとんどなく流線的なフォルムをしている。

だからこそ、搭載されていた武装が目を引いた。

—— 無骨という言葉を体現した、骨ばってごつごつとした、巨大な砲身を持つ単装砲塔。おそらく口径は400ミリはくだらない。

それが3基。

そんな、時代錯誤にも程がある—— だが地上に展開する部隊からすれば驚異に他ならない巨砲を携えた巨艦が、セントラル区上空に立ち込めていた黒煙を裂いて現れた。

—— ジークフリート級航空巡航戦艦級1番艦『ジークフリート』。

ISの技術を基に、反重力力場制御フロートと空間流動スラスタを搭載・改装した空中戦艦だった。

： 思い出した。再構築戦争において、大破壊の傷が一層深刻だった欧州は産業基盤が崩壊しており、アライズ開発で遅れていた。

その当時に欧州連合が思いついたものが、ISの機能を部分的に移植したアライズの

艦載母艦——すなわち空中戦艦であった。

アライズの輸送母艦として活躍しただけではなく、それは、アライズでは搭載不可能な大口径砲を叩き込む対地攻撃機としての役割を果たしたという。

——つまり、ジークフリートが降りて来たと言う事は。

『——これより対地支援を開始する。…巻き込まれるなよ…ッ！』

答え合わせをするように。無線と共に3基の主砲、その砲口に光が宿る。

艦内部に備え付けられたコンデンサが、コイルモーターが唸りを上げる。

加速器の電圧が増し、砲身に蒼の稲妻が迸る。

アライズが持つそれを遙かに上回る、電磁場の収束と昂りが大気を震わせる…！

次の瞬間、蒼雷の嵐が空を一色に染め上げ、3発の460mm爆裂弾が第1宇宙速度<sup>8</sup>

の超高速で撃ち放たれた——！

…1秒の後、それはクレイドルの絶対防御と表面装甲を食い破り、内部フレーム基

幹部に到達する——！

その瞬間、砲弾の炸薬が点火され——内側から1000メートルはくだらない爆

炎と雷電の嵐を巻き起こして爆発する。

—— 超電磁加速爆裂擲弾砲。  
リニアアックレネードキャノン。

空中戦艦に搭載された、対IS迎撃戦用の大型艦載兵器。

その馬鹿と冗談と浪漫が総動員された大口徑砲が、アライズで手こずっていたクレイドールの脚を吹き飛ばしたのだ……!

——なるほどこれらを標準装備していたのならば、かつて非ヒト型軍用ISに抗しうる力を、当時の六大国家は持ち得たろう。

——そして、当時のアライズ乗りらは、この空翔る巨人と共に眼前にいる巨大要塞の様な存在を叩き伏せて来たと言う事も……!

『——行くぞッ!』

「了解ッ——!」

ゲラルトが吠える。

箒が続くように応答し、瞬時加速——

『——援護しますッ!』

——それを、後方よりシャルが弾幕を張り、突入を支援する。

超電磁加速爆裂擲弾砲の直撃を受けたクレイドールからは、先程までの驚異と威容は失われていた。

レーザーブレードを振るっていた左前腕脚部は根元から損壊、右前腕脚部は先端ブレード部分を喪失。

左舷対艦砲塔基部は全壊こそなかったものの旋回機構およびFCSレーダーは破損、

表面装甲も脱落し弾薬保管ブロックが露出。

中央上部から右弦にかけても表面装甲が破壊され、機体上部に備え付けられていたレーザー照射機構は爆裂弾がもたらした爆風により照射レンズが叩き割られガラクタに。

加えて、動力ユニットの耐圧殻が剥き出しとなっていた。

死に体となった巨大要塞は最後の抵抗に、未だ健在の対艦砲と垂直ミサイル発射基からありつたけの残弾を迫り来る死神<sup>帯たち</sup>目掛けて放つ。

『ライカン03、お前は上だ。』

「了解——右は頼みます。」

クレイドールのハッチが大きく展開し、垂直ミサイルが発射された。

高高度まで上昇した数発のミサイルが重力加速を加えて速度を高めながら筈とゲラルトに向かつて降り注ぐ。

それに対し、ゲラルトはハイレーザーブレードを振るい、ミサイルを叩き落とす。

そして、その背後から筈は飛び上がる。

クレイドールを眼下の望めるまで急上昇——そして、<sup>バルスライフル</sup>叢雲の砲口を、ジェネレーター目掛けてロックする。

死に体とはいえ、攻撃のチャンスはそれほど多くはない。

クレイドールは、再び垂直ミサイルを発射すべく上部の発射管ハッチを解放する。

——瞬間、箒はそこ目掛けて叢雲のパルスライフルを穿つ……!

タイミングを合わせて放たれた高速イオン弾3が、ミサイル発射基のハッチ内めがけて正確に叩き込まれ——3本の光条がクレイドールに吸い込まれた。

ひと呼吸遅れて、クレイドールのミサイル発射機構が大爆発を起こす。

ミサイルの誘爆による要塞内部からの爆発は、ライフル弾をも弾く強靱な装甲と、中央脚部を含む機体右舷部分を木っ端微塵に吹き飛ばし、さらに600トンもの機動要塞を30mほど弾き飛ばす……!

あたりには装甲や破片が散乱し、一部は周辺建築物に突き刺さり、ある破片は押し潰してすらいた。

同時にゲラルトのヴァイムランナーが、クレイドールの左舷を掠める様に——。

『ぬんッ!』

——ハイレーザブレードで斬り刻む……!

すれ違いざまに1万°Cの高熱に溶断される。

ジークフリートが放った爆裂弾により防御力が低下し、分子密度が低下した装甲は赤熱してあっさりと両断される。

そしてその熱は、露出していた弾薬保管ブロックに到達し——左舷の200トン



もの対艦砲が吹き飛ぶ程の爆発を引き起こす……!

吹き飛ばされた衝撃で主砲は折れ曲がり、もやは攻撃力と呼べるものはないに等しい。

それでも、後方脚部だけで姿勢を維持しようと金属片がきしみを上げる。

だから、いい加減に—— 箒は叢雲のパルスブレードを起動する。

そしてそのまま—— 眼下のクレイドル目掛けて瞬時加速。

眼下には、未だ抵抗を続ける要塞と、剥き出しのジエネレーター。

箒は、その一点目掛けて——。

「いい加減——、壊れろ!!」

—— パルスブレードの、急降下斬撃を見舞った……!



—— 同時刻

—— 同・アッパーウィンディ区

IS学園のゴーレムとセントラル区のクレイドルが撃破されたと同じ頃。

農業プラントとプランテーション建築物が所在していたアツパーウインディおよびウインディ地区境界付近は、惨状と化していた。

…高熱により熔解した金属が燻り、爛れたアスファルトが液状化し、人工地盤を溶かしながら海面へ高熱の滝となって流れ落ちる。

海面は溶鉱と流出した重油とが混ざり合い、引火爆発による爆炎で満たされて、火の海となつていて。

爆炎が巻き起こす上昇気流が周囲の炎を巻き込みながら、いくつもの炎の竜巻となつて空を赤く染めていく。

——さながら、黙示録を彷彿とさせる地獄絵図。

海水濾過円形耕作地<sup>セントーピボット</sup>を埋め尽くしていた作物は爆炎で、あるいは熔解したアスファルトに熱されて至る箇所で発火し、絶え間なく炎と煙を撒き散らす。

ガラス温室型多層ビル群は炎が巻き起こす高熱で外装たるガラスが弾け、支柱たる金属フレームも鉛細工の様に変形し、完全に崩壊した。

大気に充満する鉄を溶かし得る高熱と高温が、この地から生命という生命を焼き払い、攫っていく——その、地獄の只中で。

——ふたつの機軀<sup>からだ</sup>が激突する。

ひとつは、周辺の炎を巻き上げながら空を、地表上空とをめぐりし標的へ襲い掛

かる黒騎士。

スラスターによって形成された光の翼を引きながら宙を舞い、右腕に備えられたタキオンブレードを振るう姿は戦乙女フルキュレそのものだ。

——だが、その動きは感情任せながらも、お行儀良く定められた法則で戦う存在に過ぎない。

もうひとつ——日方ナガト風は。

悠然と地上に構え、そして黒騎士の猛攻を迎撃し、防ぐどころか獯猛に喰らいつく。体軀は無骨なフレームから過剰生成されたタキオン粒子と排熱蒸気の奔流を撒き散らし。

頭部は顔面表層フレームが弾け飛び、狼の貌かおめいた内部機構を剥き出し。

手脚は関節と操縦者への負荷を度外視する獣じみた機動をもって、嵐のような剣戟と礼儀知らずの蹴りを放つ……！

——黒騎士が戦乙女フルキュレであるとするならば。

——日方風は、さながら狂戦士ベルセルクそのものだった。

《ツ……貴様……！》

「……ふッ——！」

——飛び交う荷電粒子砲を、暴風の如き乱舞が叩き伏せる。

：黒騎士は、先程までのゴーレムとは違い、より強化された無人ISだった。

不遜な異端者、不埒な離反者、その一切合切を斬り刻み処刑するための執行機体。

故に、荷電粒子砲の他にも無数の装備が搭載されていた。

5連装バルカン砲、パルスマシンガン、ミサイル、大出力レーザー発射基——それらも荷電粒子砲同様、対人・対地・対空・対水上の全領域で猛威を振るう代物だ。

全領域での任務に対応する偏執的なまでの開発者と運用機関のこだわりを反映された黒騎士は、対峙するものを全て塵殺する。

——それは戦場の支配者も例外ではない。

《ッ、少しは役目を果たせ——！》

タキオンキャノンを穿ちながら、マドカはバルカン砲とパルスマシンガンを日方風目掛けて放つ。

しかしその一切は通用しない。

ジェネレーター<sup>1</sup>の出力を引き上げた日方風の粒子装甲と、対艦刀を振るう剣戟に全てが叩き墮とされる。

破壊力、兵種、砲門数問わず、"たかが一兵器を破壊するだけの代物"では、今対峙している日方風<sup>狂戦士</sup>を止めることすら叶わない。

卓越した反射神経と攻撃予測能力。

繰り出される剣戟は放出されるタキオン粒子の奔流を纏い、物理的破壊力を数乗上乘せするまでに引き上げる。

剣を振るう腕に至っては、瞬間的に第1宇宙速度マッハ7.1に到達する速さを叩き出す…！  
その出鱈目過ぎる力は、通常の第3世代アライズを明らかに超えていた。

———  
ベルセルク  
Bモード。

第3世代アライズに搭載されていた、アライズ本来極初期型の力のスペックを引き出す為の全安全装置強制排除形態。

すなわち、17トン近い大剣を時速8800マッハ7以上kmの速さで振るう乱舞を放つこの姿こそ———日方風本来の姿なのだ…！

…無論、弊害はある。

機体は多少濾過されたとはいえ致命的な汚染を撒き散らし。

操縦者にはIS適正が低ければ廃人になりかねない過負荷が脳にかかり、また強制的に脳の未使用領域をアライズ操縦の為に稼働させられる。

———  
良く言えば、人馬一体の究極形。

———  
悪く言えば、人体の生体パーツ化。

———  
だがそれがどうした。

勝てなければ、死ぬだけのこと。

ならば『そんな塵紙トイレットペーパー一枚にも値しないモノなんぞクソ喰らえ』などと常日頃から思っていたナガトは――

「は――ッ!!」

――音速で対艦刀を振るう。

しかし黒騎士も馬鹿では無い。

ある程度ではあるものの、独立稼働スタンドアロンの無人機。

あらかじめ定められた機動しか取れないのであればまるで役に立たない。

…故に、情報収集と多少の学習能力は持ち合わせている。

だからこそ――ナガトの対艦刀による斬撃は既に解析済みだった。

《それで勝つつもりか単細胞め――同じ攻撃を繰り返すしか能が無いとは、呆れるな……!》

罵倒と共に、全身に備え付けられていた拡張領域内蔵式垂直発射型ミサイルが放たれる。

それは左右上下の四方から――ナガトを囲い込むように、100はくだらない数の鉄の矢が迫り来る……!

殺意の包囲網を前に、ナガトは瞬時加速――タキオン粒子を纏わせた対艦刀を、横一閃に薙ぎ払った。

——音速を超えた剣圧。

それは大気を切り裂く爆風となり、タキオン粒子の壁がそれを補強し——真空波となつて、ミサイルの群れを粉碎する……！

燃え落ちた農業プラントを。

40年近く人の揺籠として荒波に耐えて来た人工の大地を木っ端微塵に踏み荒らし、吹き飛ばしながらナガトは黒騎士目掛けて疾駆する。

……妥当な惨劇だ。

黒騎士の武装はタキオンキャノンを除いて全てが対兵器戦を想定した代物だが、ナガトの駆る日方風ベルセルクモード——第1世代アライズのありし姿——は兵器であろうと都市だろうと大地であろうと分け隔てなく平等に猛威を振るう厄災そのものだ。

……黒騎士が目標だけを蹂躪する戦略爆撃機だとするなら——今の日方風は、無差別に死と破壊を齎す核兵器そのものだった。

《そんな力が……許されるものか……！だが……！》

マドカが吠える。

ミサイルを潰される事も織り込み済みだったという事か、あるいは——  
テロリスト  
襲撃者の  
分際で正義の使者でも騙るつもりなのか。

ナガトが知覚した瞬間には、黒騎士はタキオンブレードを振りかぶっていた。

《——墮ちろ！》

黒騎士がタキオンブレードを振るい、直上から叩き打つ——それを。

日方風は瞬時加速——ゼロ距離まで詰め、黒騎士の懐に飛び込んだ。

タキオンブレードが粒子装甲と接触し、それを攫っていく。

しかし懐に飛び込んだ日方風に対して、凶体のでかい剣は脅威足り得ない。

そして、応酬と言わんばかりに、

——轟と、右手の対艦刀を黒騎士に殴り付ける……！

音速領域に瞬間加速した17トンもの鉄塊が懐に叩き込まれ、黒騎士には戦艦砲の直

撃に匹敵する衝撃が走る。

無人機である黒騎士に揺さぶりをかけたところで戦闘が止まらない事は判り切つて

いる。

だが、衝撃で壊れるものは人間だけではない。

《ツ×おのれ……駆動系を……！》

マドカの構成部品が火花を散らして押け飛ばす。

黒騎士は思わぬ反撃に面喰らう。

1秒遅れてノイズ混じりの怨嗟の声を放つ。

——そう、物体にかかる衝撃は人体にも機体を構成する部品にも、無人機の核た



る精密機械にも及ぶ。

それで、脚部への駆動伝達系統に異常が生じたのか、思うように脚が動かなくなる。衝撃でノイズが走るセンサーを復旧させて——そこには、銃弾の如き速さで迫り来る日方風の脚裏があつた。

《!?!?》

一瞬の硬直。

理解を超えた行動パターンを前に演算処理がパンクする。

——何故目の前に敵機の脚裏があるのか。

——衝突すれば関節の破損は免れない。

——直ちに回避行動を……!

チグハグな思考の中、マドカはブースターを前面に蒸し、瞬時加速する。

しかし、ゼロから加速した速さと既に加速している速さとは、どちらが速いかなど知れている。

——ごぎやり、っ!

轟音と軋む音を立てて——日方風のドロップキックが白騎士の胸部に突き刺さる。

コアユニットは金槌で叩き割られたクルミの如く、醜く変形した。

有人機であれば、操縦者は間違ひなく即座に圧死する一撃。

そのままもう一発——ナガトは蹴りを放ち、黒騎士を後方へ吹き飛ばす……!

《ぐつ、づ——!?!》

思わぬ衝撃に攪拌され、マドカは無い筈の歯をギリ、と噛み締める。

吹き飛びながら、黒騎士のタキオンジェネレーターが唸り声を上げる。

ジェネレーターからのエネルギー供給を受け、右腕の荷電粒子砲タキオンキャノンは放電し、その場にいるだけで周辺物質を崩壊させる呪詛へと変質する。

そして機体に搭載されていた、2基の1K17E150mm大出力レーザーキャノン"スジャテイエ"に紅の光が宿る。

——光輝する3基の紅あか。

その規模も込められたエネルギー総量もこれまでの些事とは桁が違う。

これこそが白騎士事件において2000もの攻撃を叩き落とした御技。

2基のレーザーキャノンが共振する。

その中央に在る荷電粒子砲が、タキオン粒子をもって、その威力を数百倍に膨張させる。

剣戟ごときによる迎撃など許さない。

現在の日方風の出力が黒騎士を遙かに上回るとして、この攻撃はその数倍。

ただ『降りかかる火の粉を振り払う』程度の動きだった先の行動では、『国家を滅ぼすこと』を前提としたこの一撃を迎撃することなど出来はしない……！

《死ね——！》

——その確信と共に、真紅の嵐が吹き荒れた。

放たれたレーザーは左右から収束する共振による威力の増幅と、タキオン粒子によって弾かれたことで拡散し、無数の光弾となってナガトの視界を埋め尽くす。

その数、4000以上——！

(——なるほど、ただでは済まんか。)

それを前にして、ナガトは冷静だった。

眼前には光速——先程まで自分が放っていた剣戟を遥かに上回る次元の速度——

で死の群勢が襲い来る。

短い思考と、意を決する挙動。

ナガトは迎え撃つのではなく、光の嵐へと突入する。

——降り注ぐ拡散レーザー。

自分より速く迫るモノを、それより遅い鈍刀で行儀良く迎え撃つなど愚の骨頂。

自分より速く迫りつつも、知覚できるなら。

——それより速く躲せば良いだけのこと……！

「ぶっつッ——！」

——加速する。

瞬時加速と横深加速の噴射速度を限界まで引き上げる。

：黒騎士に誤算があつたとすれば、それは拡散レーザーの弾着タイミングだろう。

黒騎士の放つた拡散レーザーは一对幾千もの面制圧に特化した攻撃。

しかし四方八方に拡散する特性上、一对一環境下ではあまりに悪過ぎる。

2020年代現在において、単体目標に対する面制圧は多数弾頭同時着弾がセオリーである。

砲弾を当てずっぽうに撃つたところで、当たりはしない。

：いかに光速で奔るレーザーとはいえ、拡散してしまえば同様。

あとその、光の隙間を縫うように躲かせば良いだけの事。

それを証明するように。

光の嵐の中、ナガトは——幾数回もの瞬時加速をもって、光弾を躲わして進む……

！

《馬鹿、な——》

叩き落とせないなら躲せば良い——その発想は間違っていない。

黒騎士にとっての問題は、光速——地球を1秒で3周半する速度——による

面制圧そこに出来た僅かな隙間を、縫う様に躲していること。

…通常、それは人間の反応でできる速さではない。

瞬きすると同時に…否、それより速く着弾する。それほどの高速だ。

だと言うのに——

《…この中を…進んで来る、だと…?!》

——ナガトは、躲わずだけならず、黒騎士目掛けて突っ込んで来る…!

《くっ……………!》

マドカは照射を中絶して身構える。

斬撃か、蹴りか、あるいは。

マドカは次に日方風が齎すだろう攻撃を予測して——

「——らあッ!!」

——それより早く、ナガトが対艦刀の腹を黒騎士に叩き込む…!

それは斬撃というより殴打。

拡散レーザーを躲した際より劣るとはいえ、繰り出されるはマツハ7を超える斬撃。

加えて177トンを超える大剣による一撃。

それは、黒騎士を吹き飛ばすのに造作もない…!

重く響く金属音と、派手に火花を散らしながら黒騎士は廃墟と化した化学肥料プラン

トに吹き飛ばホームランぶ。

爆炎と砂塵を巻き起こし、煙突やタンク、パイプの集合体であるプラントが崩壊していく。

——そこへナガトも飛び込み追撃する。

黒騎士の反応は、未だ健在だからだ。

《血迷ったか…!?!》

黒騎士マドカが目を剥く様な声で言う。

事実、ナガトは正常さを欠いている。

B・モードは脳機能のほぼ全てをアライズ操縦にリソースを割く。

アライズを主観とした操縦体制に移行する為、ヘズナルは自身の生命維持を度外視した行動を取りがちだ。

——この時のアライズを人体だとすれば、ヘズナルは内臓に過ぎない。

普段の人間が平時を除いて内臓に気をかける事がない様に、今この瞬間ヘズナルの生命維持に不要なものを考えないようになってしまう。

ナガトも例外では無い。

崩落する廃プラントの中を突撃し、先程吹き飛ばした黒騎士に喰らい付かんと疾駆する。

今駆けている場所は保たない。

ナガトが駆けたすぐ後ろから鉄骨やパイプが折り重なり

《つ……狂犬め——ならばコレでどうだ!》

黒騎士<sup>マドカ</sup>が吠える。

それと同時に機体各部に内蔵されていたマイクロミサイルが放たれ、ナガトの進行上

——その直上にあるプラント設備群に直撃する。

…先程の黒騎士が吹き飛ばされて来た衝撃と、今の攻撃で、プラントの設備群は更に崩壊を加速させる。

ドミノ倒しに崩壊していく鉄骨やパイプ。

その中でも、一際巨大な瓦礫——圧力パイプで雁字搦めとなった煙突がナガトを押し潰さんと降りかかる……!

それには脇目も振らずに前に進む。

進んだとて黒騎士に辿り着く前に、瓦礫<sup>煙突</sup>に潰される。

——黒騎士はそんなナガト目掛けてタキオンキャノンを乱射する。

ブレードとして使っていたが為に精密射撃を行う機器は故障し、また先程対艦刀で叩きつけられた衝撃でセンサーも破損。

だが、それで充分。

乱れ飛ぶタキオン粒子の砲弾が、日方風の粒子装甲を削って行く。

そして日方風は、間も無く降り注ぐ煙突に潰される。

距離にして5メートル。

——前門の虎、後門の狼。

——あるいは袋小路。デッドエンド

煙突は、粒子装甲を削られた日方風はそのまま降りかかり——日方風は全身でそれを受け止めた。

《ツ——！》

マドカ 黒騎士は絶句する。

日方風は、鋼鉄製の塊を受け止めるだけに留まらず、背負ったまま突き進む。

重さにして数十トン、日方風の体積の10倍以上はある鉄塊を……！

そして——

「お、オオ——ツ!!」

——先程の応酬と言わんばかりに煙突をブン投げる……！

日方風そのものをロケットの1段目、あるいは射出基カタバルトとしたその投擲は、瞬時に音速域へと到達した。

黒騎士はレーザーキャノンを起動し迎撃を試みるが——それより速く、投擲され



た煙突が突き刺さり、再び吹き飛ばされる……!

《戯れるな——ッ!!》

次なる日方風の追撃を予想していた黒騎士<sup>マドカ</sup>は前に飛び出し——粉塵を切り裂いた日方風をタキオンキャノンの砲身で叩き伏せる。

今度は黒騎士の攻勢が始まった。

地に叩き付けられた日方風を追い、取り付くと同時に瞬時加速——。

20G以上の加速をともなった黒騎士に衝突された日方風は機体制御もままならな  
いままビリヤード球のように跳ね飛ばされる。

好機、と黒騎士は。

ジェネレーターが齎す潤沢なエネルギーによるブースター出力と、無人機特有のGを  
無視した尋常ではない動きで再びナガトを挽肉にせんと。

地に。

廃墟に。

日方風を踏み付け、土塊を巻き上げ、めちやくちやに振り回す——!

「……………ッ!」

ナガトの全身に過負荷がかかる。

四肢が引き千切れ、内臓が破裂する程の圧力がかかる。

「ぐっ、っ、づ——っ！」

激流する情報の嵐とブン回される機体の衝撃に脳が灼ける。  
焼け切れる寸前の脳神経回路。

軋む音を立てて変形し始める骨格。

厭な感覚と共に破断していく筋肉繊維。

(…粒子爆発相殺装甲——)

口から血が溢れ返り、視界がレッドアウトする中、思考操作する。

—— 応えるように、日方風は全身の粒子波形制御基を大きく展開する。

うなりを上げる対消滅粒子融合炉。

赤熱する内装のタキオン粒子循環パイプ。

このまま押し潰されるなんざまっぴらごめんだ、少なくとも箒が独り立ちできるまでは死んでも生きてやる。とナガトは笑った。

同時に粒子装甲が瞬時にして高濃度化し、圧縮されていく。

太陽光に匹敵する光量の圧縮タキオン粒子が日方風を中心に唸りをあげて——

(—— 点火……！)

—— 膨大な熱と光と、そして衝撃坡を伴って、粒子の奔流が炸裂する。

瞬時に音速に達するほどの加速で起こる空気圧縮熱。

その嵐は、波打つように人工基盤をえぐり、溶けかかった地表の瓦礫や大量の土砂諸共黒騎士を吹き飛ばした……!

———プロトクェンフレア粒子爆発相殺装甲。

それが日方嵐に装備された最終兵器のひとつ。

かつて最初期型アライズに搭載されていた、至近距離での核爆発に抗する為の防御機構。

原理は至極単純。

粒子装甲を圧縮し、攻勢反射することで核爆発に匹敵するタキオン爆発を引き起こすことで、攻撃を相殺するというもの。

そして防御機構とはいえ攻性防壁として機能する以上、攻撃に転用出来ない道理はない。

攻勢反射されたタキオン粒子は一秒と待たずに直径400メートルを超える火球へと膨張。

ヒロシマ型原爆級15キロトンの破壊力を伴って戦場そのものを叩き割る……!

《がっ、あ》———

熱線と爆風、そして対消滅粒子の嵐に黒騎士が空へと打ち上がる。

その反動でこの区画は限界を迎えた。

全長21キロ、全幅2.7キロの区画は。

タキオン爆発により船体は直径2キロのクレーターが形成される形で南北真つ二つに割れ、海水に到達した熱線が水蒸気爆発を誘発させ、区画を支えていた海底地盤が破壊された。

その先は単純だ。

船とは底に行くに従って細くなり、上へ行くほどに幅が広くなる。

ならば結末は単純で——支えたる海底地盤を失った区画そのものが横倒しになり始めた。

——そんな些事さじがどうした。

そうナガトは内心眩くらき空を睨む。

同時に、日方風のブースターに備えられたリミッターが解除される。

弾け飛ぶ拘束器具。

緊急排熱機構より緋色の粒子が溢れ出て、一条の光を形成する。

——それが6対。

さながら、熾6枚羽の天使天使を彷彿とさせる、赤翼が生まれ出でる。

敵は目の前。

今度こそ逃がさない。

今度こそ——！

「殺す……！」  
終らせる

その意思を体現するように、日方風は翔ぶ。

速さは先程までのそれを僅かに上回り、右腕に對艦刀を構えたまま。

横一文字に切り裂かんと黒騎士に瞬時加速で飛び掛かる。

《それは……こちらのセリフだ——！！》

マドカ  
黒騎士が叫ぶ。

日方風と同じく右腕の荷電粒子砲タキオンキャノンを空中で、抜刀の姿勢で構えて見せる。

《死ね——！！》

荷電粒子砲が横一文字に振るわれる。

深紅の掃射は黒騎士の憎悪を宿した熱線となって日方風に突き刺さる。

ナガトはそれを、右腕の對艦刀で受け止めた。

對艦刀は金属疲労と高熱と、そしてタキオン粒子による分子侵食分解により、どろりと崩壊する。

だが熱さに焼かれながらも、ナガトはより強い殺意で空へと駆け上がった。

——手を伸ばす。

それは攻撃を防ぐためにあらず。

それは——本命を叩き込む為の、<sup>デコイ</sup> 囮として。  
残り数メートル。

そこで初めて、左腕の<sup>本命</sup> 装備を起動する。

——81式III型<sup>バイ</sup>対戦車<sup>ル</sup>装甲<sup>バシ</sup>穿孔<sup>カ</sup>銃。

それこそが、ナガトが最後まで取っていた切り札。

《ツ——！》

黒騎士が真意に気づく。

しかしもう遅い。

ここまで来れば既に射程内。

右腕のマニピュレータが黒騎士の頭部を掴む。

鉄の指に渾身の力が込められる。

黒騎士<sup>マドカ</sup>の怨嗟をナガトは耳にした。

憎悪と復讐心に吞まれた者が見せる、死してなお呪い続けるような声。

だが、彼はそれを無視した。

もとより聞く耳など持ち合わせていない。

「オ、オオ——ツツツ!!!」

殺意と狂喜に満ちた、人が発するものとは思えない雄叫びと共に呐喊する。

ナガトは日方風の左腕を黒騎士めがけて叩きつけ、パイルバンカーが喰りをあげて杭を装填し、一拍ほどの溜めを置く。

一瞬後——引き絞られた杭が突出した。

ガオン  
爆、と。

常識外の質量が黒騎士を打ち砕く。

狼が獲物の喉笛を喰い千切るように。

撃ち出された杭は無遠慮に機体を突き破った——！

そこには常識も礼節も遠慮もなく。

砕く。砕く。砕く。砕く。

装甲が内側からの爆発で弾け飛び、些塵と散り行くかつての支配者黒騎士。

それがなんだ、感慨に耽る暇があるか。

やるべきことは単純だ。

ただひたすらに、打ち穿つのみ——！

「きゃっしょっしょ」

そして再び、再装填したパイルバンカーを、

「——壊れるオ!!」

左ストレートの容量で叩き込む——！

ガツゴン  
潰、という衝突音。

それと同時に、パイルバンカーの二撃目を喰らった衝撃で、黒騎士はナガトの前方へと吹き飛ばされる。

今の一撃で限界を迎えたのだろう。

機体フレームの各所が弾け飛び、制御を失ったタキオン粒子によって自壊していく。ブースターは爆発し、空を翔ぶ力も失われた黒騎士はなすすべもなく、弧を描きながら落ちていく――。

《殺してやる……次こそ、必ず……》

激しい破壊の砂嵐に塗れた黒騎士の管制A I諸共からの怨嗟。

《……イチカの……仇……》

「……来るなら来い、その度に殺してやる。」

——見下ろすナガトが最後に見たのは。

海面に叩き付けられ、爆散する黒騎士の姿だった。

「……状況、終了。」

ハイパーセンサーに敵性反応が見られないことを確認すると、ナガトはそう宣告する。

……もって、狼と亡霊の戦いは終了した。